

2023（令和5）年度 人間発達環境学研究科  
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

## はじめに

本年次報告書は、人間発達環境学研究科における令和5(2023)年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した集積となっている。

令和5年度は、新型コロナウイルス感染もようやく収束し、これまで本研究科が取り組んできた多様な活動を継続・発展させるため、研究科として解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、教員らが専攻をこえて協働できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な学生の積極的獲得の必要性などの観点からの取り組み・検討をさらに進めた。また、学域制（教員組織と教育研究組織の分離）や教員人事のポイント制のもとで、教員の新規採用および昇任について人事計画を進め、教育研究組織の活性化による機能強化につとめた。

第4期中期目標・中期計画期間に向けて、神戸大学として各種評価指標の目標値を設定し、部局にも応分の目標設定を求められ、この評価の中で本研究科の強みを見つける作業も必要となった。また、令和4年度から神戸大学が採択された国立大学改革・研究基盤強化推進事業「異分野共創研究教育グローバル拠点」にも参画し、その中心的なデジタルバイオ＆ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに運営している。また、高大接続卓越グローバル人材育成センターに本研究科の教員が関わり、“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム（ROOT プログラム）を中心的に運営し、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている。

こうした中でも、本研究科がこれまで唱えてきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティを守り、さらに発展させていく必要性を感じている。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、他部局との協力のもと、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めて行く施策がさらに重要になると考える。

（人間発達環境学研究科長　近藤徳彦）

**2023(令和 5)年度**  
**人間発達環境学研究科 年次報告書 目次**

はじめに

目次

1. 令和5年度の取り組みの概要	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.1.1. 神戸大学機能強化改革	1
1.2. 部局としての取り組み	2
1.2.1. 戦略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」	2
1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織	3
1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標(KPI: Key Performance Indicator)	4
2. 学部・大学院運営	4
2.1. 学部・大学院運営組織	4
2.2. 管理運営	5
2.2.1. 学域人事委員会	5
2.2.2. 研究科運営委員会	7
2.2.3. 教員活動評価委員会	10
2.2.4. 中期計画推進委員会	10
2.2.5. 自己評価委員会	11
2.2.6. 安全衛生委員会	12
2.3. 予算	13
2.3.1. 予算に関する特記事項	13
2.3.2. 予算関係の審議等の状況	13
2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)	14
2.4. 広報及び情報公開	14
2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等	14
2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・ラボ	15
2.4.3. ホームカミングデイ	16
2.5. 環境設備	17
2.5.1. 教育・学習環境の整備	17
2.5.2. 交流ルーム・アゴラ	19
2.6. 教員研修	19
2.6.1. FD	19
2.6.2. 初任者研修	19
3. 入試	20
3.1. 一般選抜入試	20
3.1.1. 入学試験委員会	20

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題	21
4. 国際交流活動	22
4.1. 学術交流協定	22
4.2. 留学生	23
4.3. ダブルディグリー	24
4.4. Innovative Asia	24
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	25
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	25
4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」	26
4.8. スタディツアーア	26
5. 教育	26
5.1. 教育課程	26
5.1.1. 今年度の特徴	26
5.1.2. 研究科, 専攻共通科目	27
5.1.3. 教職教育	27
5.1.4. ESD サブコース	27
5.1.5. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	28
5.2. 各専攻講座の教育	29
5.2.1. 人間発達専攻	29
5.2.2. 人間環境学専攻	49
6. 進路	52
6.1. キャリア形成支援	52
6.1.1. キャリアサポートセンター	52
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	54
6.2. 卒業・修了後の進路	55
7. 研究	55
7.1. 今年度の特長	55
7.1.1. 研究動向	55
7.1.2. 学生の受賞	57
7.2. 学術 Weeks	59
7.2.1. 学術 Weeks の各事業・セミナー	59
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	65
7.4. 高度教員養成プログラム	70
7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究	71
7.6. 研究推進	72
7.6.1. 研究倫理審査委員会	72
7.6.2. 紀要編集委員会	72
7.7. 各専攻の研究	72

7.7.1. 人間発達専攻	72
7.7.2. 人間環境学専攻	134
8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動	153
8.1. 産官学共同プロジェクト	153
8.2. 地域連携プロジェクト	159
9. 社会的活動・震災復興支援	160
9.1. 災害地への支援活動	160
10. 附属施設	161
10.1. 発達支援インスティテュート	161
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会	161
10.1.2. 心理教育相談室	162
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	163
10.1.4. のびやかスペースあーち	169
10.1.5. サイエンスショップ	175
10.1.6. 教育連携推進室	179
10.1.7. アクティブエイジング研究センター	185
10.2. 実習観察園の運営利用状況	188

## 1. 令和5年度の取り組みの概要

### 1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

#### 1.1.1. 神戸大学機能強化改革

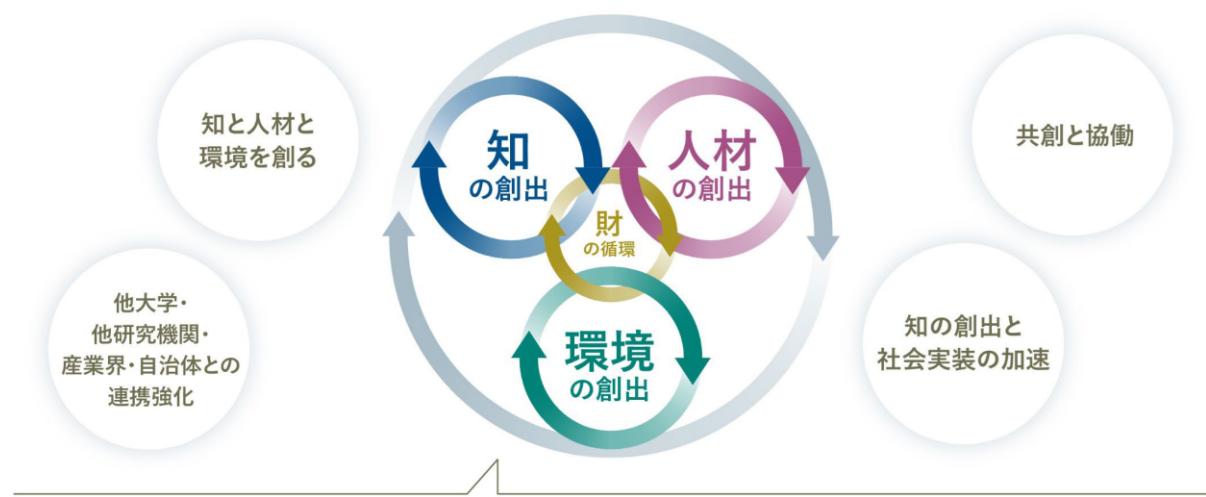
##### (1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

R4年度から第4期中期目標・中期計画が始まった(R9年度まで)。平成27年6月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の3つの重点支援の枠組みの重点支援の内、神戸大学は③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を中心とする国立大学」を選択し、第4期からは規模や組織体制の観点からさらに2つのグループに細分化され、グループ⑤となり現在に至っている。

神戸大学は、「学理と実際の調和」を建学の理念とし、「真摯・自由・協同」の学風のもと、真理の探究と社会実装を旨として学問の継承と発展に寄与し、人々の智と徳を高め、もって社会の基盤を築き、産業・経済を活発にするとともに、様々な社会的課題解決に貢献してきた。この伝統を継承するとともに人文・人間科学系、社会科学系、自然科学系、生命医学系諸分野における強みを社会に活かし、「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」として進化・発展し続けることを神戸大学長期ビジョンとしている(図参照、KU VISION 2030)。

## 「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」を目指して

真理探究の基礎科学研究、地域社会と共に創する応用科学研究の推進・連携により  
新たな知と人を創り、社会に貢献する異分野共創研究教育グローバル拠点をめざす



### 異分野共創研究教育 グローバル拠点へ

イノベーションエコシステムの確立  
接続可能な自律的研究教育経営体

## (2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 28 年 5 月 19 日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上、組織間の教員配置の最適化、柔軟な改組の実現、教員数及び若手ポストの増加をねらいとし、教員の教育研究組織からの分離、ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

平成 28 年 10 月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され、当研究科教員の全員が人間発達学域の所属となった。また、同時に教員人事委員会が設置され、教授人事の審査、及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして、平成 29 年 4 月にポイント制が正式導入され、現在に至っている。

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

### 1.2. 部局としての取り組み

#### 1.2.1. 戰略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」

神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」に向けた取り組みとして、国立大学改革・研究基盤強化推進事業が令和4年10月から採択され、これを中心に神戸大学ではビジョン実現が推進されている。中心的なデジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに立ち上げ、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている（図参照、KU VISION 2030）。



この推進のため、先端的異分野共創研究プロジェクト、『異分野共創による資源循環イノベーション』と『神戸市デジタルツインによる防災減災・社会経済シミュレーション分析：世界初「地震シナリオの網羅的シミュレーション」による異分野共創先端研究』が推進されており、いずれのプロジェクトに本研究科に教員が参加している。また、本学のフラッグシップ研究の候補となり得る異分野共創研究ユニットの創出及び育成が行われており、『環境DNA研究の総合化ユニット』、『ゼニゴケ産業利用（機能性野菜と有用物質生産）のためのプラットフォーム開発』にも本研究科の教員が参画し（前者のユニットは本研究科教員がユニットリーダーである）、研究科のプレゼンスを高めるとともに、神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」の推進に大きく貢献している。

さらに、異分野共創研究教育グローバル拠点のもとに推進された高等学術研究院テニュアトラック教員制に2名（A制度1名、B制度1名）の教員が採択され、また、高等学術研究院の卓越教授として一人が選ばれ、神戸大学の改革・研究基盤強化推進を支援している。

### 1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織

人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の5専攻から成る研究科として平成19年4月に設置された。その後、平成25年4月に、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の4専攻をまとめ人間発達専攻とし、人間発達専攻と人間環境学専攻の2専攻体制で教育・研究を行っている。

平成26年4月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等に取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成29年および2020年度には外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は発展・深化を続けており、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、より多くの教員が専攻を越えて協働できるための枠組みつくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性などである。

人間発達環境学研究科では、国際人間科学部の最初の卒業生が入学してくるのを機に、人間発達専攻内の4つの系講座（こころ系、表現系、からだ系、教育系）および人間環境学専攻の2つの講座（環境基礎講座、環境形成講座）をそれぞれに1講座にまとめ、各専攻を1講座で編成し、それまでの講座を教育研究分野に移行する組織再編が令和3年度に行われた。この組織再編により研究・教育活動に

おける連携をさらに進める体制ができ、それを具体化するための施策が、今後さらに必要となる。

### 1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標 (KPI: Key Performance Indicator)

第4期中期目標期間では大学指標に基づき、各部局にも指標が設定され（部局独自指標、意欲度指標含む）、これをもとに部局運営を実施することとなった。令和5年度の各指標の評価は達成できていない指標が多くあった。特に、WoS論文、国際共同研究に関する国際共著論文数の目標達成が十分でなかった。一方、外部資金獲得額や共同研究・受託研究費は目標を上回っていた。次年度以降、国際共同研究推進のための研究科での支援方法、また、独自指標の著書数の達成率低下の原因の検討が必要である。

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

## 2. 学部・大学院運営

### 2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び発達科学部は、以下の組織で運営している。

＜教授会等＞

人間発達環境学域会議、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会、神戸大学発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際、大学院に関する組織については、その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し、学部に関する組織については、「発達科学部」とした。

＜管理運営＞

学域人事委員会、教員活動評価委員会、研究科運営委員会、予算委員会、学舎検討委員会、中期計画推進委員会、自己評価委員会、交流ルーム運営委員会、安全衛生委員会、ハラスメント防止委員会、専攻運営会議

＜研究＞

研究推進委員会、研究紀要編集委員会、研究倫理審査委員会

＜教務・学生＞

教務委員会、学生委員会

＜入試＞

入学試験委員会、学生委員会（編入学入学者の募集及び選考に関わる事務）、オープンらぼワーキンググループ

＜国際交流＞

国際交流委員会、学術 WEEKS ワーキンググループ

＜広報＞

情報メディア委員会、研究科案内作成ワーキンググループ

＜附属施設等＞

図書委員会、実習觀察園運営委員会、キャリアサポートセンター運営委員会、発達支援インスティテ

ユート運営委員会、心理教育相談室運営委員会、ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会、のびやかスペースあーち運営委員会、サイエンスショップ運営委員会、教育連携推進室運営委員会、アクティブエイジング研究センター運営委員会

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

## 2.2. 管理運営

### 2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は、教員の採用及び昇任等、ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して、学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は、学域長、副学域長、人間発達環境学研究科専攻長、国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）に、その他委員会が必要と認めた者として発達科学部学科長を加えた体制であり、令和5年度の委員は近藤徳彦学域長（委員長）、吉田圭吾副学域長、佐藤春実副学域長、木下孝司人間発達専攻長、近江戸伸子人間環境学専攻長、岸本吉弘国際人間科学部発達コミュニティ学科長、太田和宏国際人間科学部環境共生学科長、山下晃一国際人間科学部子ども教育学科長、並びに長ヶ原誠発達科学部人間行動学科長の9名である。また、春名正基事務部長、豊嶋江梨子総務係長も出席した。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については、以下に記す。

検討事項	
第1回（4月3日）	<ol style="list-style-type: none"><li>委員会が必要と認める委員について</li><li>令和5年度人間発達環境学域人事方針について</li><li>ポイントについて</li><li>教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について</li><li>教授昇任人事に係る学域教員人事方針申請書について</li><li>高等学術研究院テニュアトラック教員（B制度）の推薦について</li><li>外部資金による雇用する特命教員の任期更新について</li><li>（その他）<ul style="list-style-type: none"><li>クロスマーチントメント制について</li><li>人事選考委員会で用意する業績閲覧用資料（現物）について</li><li>准教授等採用人事の基準について</li></ul></li></ol>
第2回（4月28日）	<ol style="list-style-type: none"><li>教授昇任人事について</li><li>准教授等採用人事について</li><li>教授昇任人事に係る学域教員人事方針申請書について</li><li>今後の人事及びポイントについて</li></ol>
第3回（6月2日）	<ol style="list-style-type: none"><li>教授昇任人事について</li><li>教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について</li><li>准教授、講師または助教採用人事について</li><li>（その他）</li></ol>

	<p>・今後の人事について</p>
第4回（7月7日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教授昇任人事について</li> <li>2. 准教授の採用人事について</li> <li>3. 准教授等採用人事に係る人事選考委員会の設置について</li> <li>4. 状況の採用人事（クロスアポイントメント制）について</li> <li>5. テニュアの付与について（テニュア審査）</li> <li>6. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の人事について</li> </ul> </li> </ol>
第5回（9月1日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 特命助教の採用人事について</li> <li>2. テニュア審査の報告について</li> <li>3. 准教授、講師又は助教の採用人事に係る人事選考委員会の設置について</li> <li>4. 教員選考調書の様式における記載項目の見直しについて</li> <li>5. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の人事及びポイントについて</li> </ul> </li> </ol>
第6回（10月13日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教授昇任人事について</li> <li>2. 外部資金により雇用する特命教員の任期更新について</li> <li>3. 教授昇任候補者について</li> <li>4. 高等学術研究院卓越准教授・教授の推薦について</li> <li>5. 専攻長・学科長の再任等について</li> <li>6. 各種委員会委員について</li> <li>7. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の人事及びポイントについて</li> </ul> </li> </ol>
第7回（10月27日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 准教授又は講師の採用人事（人間発達専攻）について</li> <li>2. 教授昇任候補者について</li> <li>3. 高等学術研究院卓越准教授・教授の推薦について</li> <li>4. 若手夢実現支援制度～Bridging the gap～の募集について</li> <li>5. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>・人事方針のポイント表について</li> </ul> </li> </ol>
第8回（12月1日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. GSP オフィス教員の任期更新について</li> <li>2. 教員の退職について</li> <li>3. 准教授または講師採用人事について</li> <li>4. 採用人事計画について</li> <li>5. 教授昇任候補者について</li> </ol>
第9回（1月5日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 准教授等の採用人事について</li> <li>2. 教授昇任_採用人事の進め方について</li> <li>3. 教授昇任について</li> <li>4. 採用人事について</li> </ol>

	5. テニュア付与について（テニュア審査） 6. 外部資金により雇用する特命教員の任期更新について 7. 学振の特別研究員から特命助教に採用された者の任期更新について
第 10 回（2 月 2 日）	1. 准教授、講師または助教採用人事について 2. 教授昇任について 3. 高等学術研究院卓越准教授について 4. 助教の昇任計画について 5. 附属学校部からの教員の配置要望について
臨時：2 月 9 日	1. 教授昇任について
第 11 回（3 月 1 日）	1. 高等学術研究院卓越教員制度を利用した准教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 准教授又は講師採用人事に係る人事選考委員会の設置について 3. 教授昇任候補者について 4. 高等学術研究院テニュアトラック教員（B 制度）の推薦について 5. 新規採用教員のメンター教員について 6. みらい開拓人材育成センターへの教員の配置要望について
臨時：3 月 28 日	1. 有期雇用契約における「10 年特例」について

（学域人事委員会委員長 近藤徳彦）

### 2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長（2 名）、発達科学部学科長（4 名）の 9 名体制で、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は、以下のとおりである。

検討事項	
第 1 回（4 月 3 日）	1. 委員会が必要と認める委員 2. 研究科運営課題 3. 予備審査委員会委員候補者について 4. 國際人間科学部関係 5. 学内・部局内プロジェクト等 6. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>・将来検討委員会</li> <li>・オープンらぼワーキンググループ</li> <li>・令和 5 年度科研（新規のみ）・特別研究員採択数</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学振特別研究員 DC の申請支援の取り組みについて</li> <li>・各種委員会委員の選出方法について</li> </ul>
第 2 回（4 月 28 日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2022（令和 4）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」報告書について</li> <li>2. 博士課程の特例修了について</li> <li>3. 若手教員に対する研究支援について</li> <li>4. 先端的異分野共創研究プロジェクトについて</li> <li>5. グローバルリサーチ演習 1・2 について</li> <li>6. 各種委員会委員の任期について</li> <li>7. ハラスメントについて</li> <li>8. 国際人間科学部関係</li> <li>9. 120 年史について</li> <li>10. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>・バス停でのマナーについて</li> <li>・教授会での業績配布について</li> </ul> </li> </ol>
第 3 回（6 月 2 日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2021（令和 3）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」報告書について</li> <li>2. 将来検討委員会について</li> <li>3. 部局間連携プログラムについて</li> <li>4. 学長・若手教員との懇談会について</li> <li>5. 共創の場について</li> <li>6. 高大連携について</li> <li>7. 研究科施設の活用について</li> <li>8. ハラスメント（研究科の防止対策）について</li> <li>9. 部局における中期計画の KPI の達成状況に関する自己評価書の確認結果について</li> </ol>
第 4 回（7 月 7 日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2023 年度人間発達環境学研究科「研究推進経費」の選考結果について</li> <li>2. 東京工業高等専門学校からの学生の受入（インターンシップ）について</li> <li>3. 120 年史編集委員会の立上げについて</li> <li>4. 学長理事との懇談会について</li> <li>5. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科における客員協力研究員及び称号付与に関する内規案について</li> <li>6. 部局間連携プログラムについて</li> <li>7. 国際人間科学部関係（カリキュラム：コア科目、展開科目）</li> <li>8. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和 6 年度サバティカル</li> </ul> </li> </ol>

第5回（9月1日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人間発達環境学研究科戦略的スペースに関する申し合せについて</li> <li>2. 海外からの研究者の受入れについて</li> <li>3. 将来検討委員会について</li> <li>4. 120年史編集委員会について</li> <li>5. 附属中等教育学校との連携授業について</li> <li>6. 長期海外出張者の承認手続きについて</li> <li>7. 教育における社会貢献（リカレント教育）推進助成金事業について</li> </ol>
第6回（10月13日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 予備審査委員会委員候補者について</li> <li>2. 博士論文参考論文について</li> <li>3. 博士論文審査委員（名誉教授等）について</li> <li>4. 研究科運営委員会等の構成員について</li> <li>5. 将来検討委員会について</li> <li>6. 食堂改修・G棟改修等について</li> <li>7. 研究倫理（申請書他）について</li> <li>8. バイアウト制度の利用について</li> <li>9. 総合知ワークショップ（10/6）について</li> <li>10. 社会教育主事講習について</li> <li>11. 各教育研究分野におけるハラスメント対策について</li> </ol>
第7回（10月27日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 令和5年度予算編成（食堂改修）について</li> <li>2. 寄附講座（設置準備委員会）について</li> <li>3. 特別助教の部屋（博士課程学生の共同室）について</li> <li>4. 計量管理規定について</li> <li>5. 高大連携（明石城西高校）について</li> <li>6. 國際人間科学部（GSP）について</li> </ol>
第8回（12月1日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究科内の委員会委員について</li> <li>2. R6事業計画について</li> <li>3. 現況分析に関する報告書について</li> <li>4. 國際人間科学部関係</li> </ol>
第9回（1月5日）	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発達支援インスティテュートについて</li> <li>2. 附属との連携について</li> <li>3. 大学の世界展開力強化事業（ASEAN）について</li> <li>4. 幹部職員セミナーについて</li> <li>5. 部屋（F棟1階会議室）の貸出について</li> <li>6. 専攻長及び委員会委員の任期について</li> <li>7. 令和7年度博士課程前期課程入試の出願書類（英語版）について</li> </ol>

	8. 博士学位論文審査委員会委員候補者について 9. 将来検討委員会の検討内容について 10. 博士後期課程審査基準(学術論文)について
第 10 回 (2 月 2 日)	1. 学内ヒアリングについて 2. 研究費の重点配分について 3. Wos 論文について 4. ノーリツとの共同研究について 5. G 棟及び食堂の改修について 6. 鶴甲小学校募金活動について 7. 鶴甲自治会（鶴甲未来企画）について 8. 博士課程後期課程の定員と合格者数について 9. 大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業について 10. 國際人間科学部関係
第 11 回 (3 月 1 日)	1. 施設開放について 2. ハラスマントについて 3. 発達支援インスティテュートにかかる内規について 4. 企業との共同研究について（ノーリツ） 5. 國際人間科学部関係 6. ESD プラットフォーム WILL について 7. 大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業について 8. (その他) • R6. 4. 1 付け改正予定内規等について

(研究科運営委員会委員長 近藤徳彦)

### 2.2.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて 10 年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第 3 条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に、その他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長及び国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた 9 名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後「意見の申出」はなかった。

教員活動評価委員会は、6 月 2 日、7 月 28 日、8 月 4 日に開催した。

(教員活動評価委員会委員長 近藤徳彦)

### 2.2.4. 中期計画推進委員会

令和 5 年度は、研究科長（委員長・近藤徳彦）、副研究科長（吉田圭吾、佐藤春実）、研究推進委員会委員長（近藤徳彦）、教務委員会委員長（大串健一）、学生委員会委員長（江原靖人）、国際交流委

員会委員長（加藤佳子）、入学試験委員会委員長（吉田圭吾）、キャリアサポートセンター長（澤宗則）、情報メディア委員会委員長（宮田任寿）、自己評価委員会委員長（坂本美紀）、事務部長（春名正基）の構成員に加え、総務係長（豊嶋江梨子）が出席し、今年度より研究科運営委員会との合同会議を開催した（計11回）。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「中期目標・中期計画管理表」における令和5年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

## 2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、副研究科長（吉田圭吾、佐藤春美）、委員長（坂本美紀）、副委員長（田畠智博）、委員（大田美佐子、木村哲也、北野幸子、蘆田弘樹）、事務課長の9名の構成員ならびに総務係長（豊嶋江梨子）が出席した。4回の委員会（メール会議1回を含む）の開催によって、以下の事項について取り組んだ。

### (1) ファカルティ・ディベロップメント

#### ・授業のピアレビュー

大学院の授業を対象にピアレビューを実施している。各専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換が行われ、授業1科目を対象に教員1名が参加した。次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアリューレポートとして報告された。

#### ・ファカルティ・ディベロップメント講演会

大学教員としての能力開発を目的として、5回のファカルティ・ディベロップメントを実施した。参加者の延べ人数は、414名（教員390・職員等24）であった。今年度のテーマは、科研費の獲得に向けたもの、高大連携に関するもの、利益相反マネジメントに関するもの、ハラスメントの防止に関するものであった。

### (2) Voice Box（「学生の声」投稿箱）への対応

本年度投稿はなかった。

### (3) 各種アンケートの実施と検討

学部、研究科前期課程について、学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振り返りアンケート、卒業・修了時アンケートを実施し、結果の分析を行った。また来年度に向け、研究科独自の質問項目を設定するかどうかについて検討を行った。

### (4) 教育の内部質保証に関する自己点検・評価

令和4年度「教育の内部質保証に関する自己点検・評価」に関する一次点検・評価を行い、報告書を作成した。

### (5) 令和5年度「年次報告書」「現況分析に関する報告書」の担当

令和5年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約した「年次報告書」の執筆依頼をする

とともに、「現況分析に関する報告書」の一部を取りまとめた。

(自己評価委員会委員長 坂本美紀)

## 2.2.6. 安全衛生委員会

### 1) 令和5年度委員

委員長（秋元忍），委員（稻原美苗，平芳裕子，谷篤史，湯浅正洋），春野正基（事務部長），豊嶋江梨子（総務係長），浅野志織（総務係準事務員），山中康弘（会計係長），篠原千亜紀（人間科学図書館情報サービス係長）

### 2) 委員会の開催

対面にて4回開催した（5月17日，9月12日，11月30日，2月27日）。

### 3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

### 4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し，各委員が担当場所の点検報告を行った。

### 5) 本年度の実施事項

- ・衛生管理者による巡視の実施とその対応について
  - ・E棟の衛生管理者巡視を9月20日に実施した。要改善点は個別に改善を依頼した。
  - ・改善確認のための再巡視を10月17日に行った。
  - ・結果について，教授会（10月20日）と全学安全衛生委員会（10月26日）で報告した。
- ・防災管理点検結果への対応について
  - ・9月22日に実施された防災管理点検の結果，棚等の転倒防止措置がされていない部屋があった，との指摘があったため，教授会で該当する部屋を報告した。
  - ・11月30日，指摘箇所の確認を行い，要改善点は個別に改善を依頼した。
- ・化学物質リスクアセスメントの実施について
  - ・化学物質リスクアセスメントの実施依頼，説明会を行った（谷委員担当）。
- ・物品購入について
  - ・「化学物質の危険性・有害性に関する情報伝達の強化」にかかる，GHSピクトグラムのシールを購入し，教員に周知した（谷先生担当）。
- ・安全管理マニュアルの更新について
  - ・アクティブライフ，環境自然科学，生活共生科学各プログラムの安全管理マニュアルを更新した。

- ・定期点検箇所の見直しについて
  - 防災管理点検の結果、転倒防止措置について改善が必要な部屋が多く見られたことから、研究室の定期的な巡視の実施について、検討を行った。結果、次年度より、毎月の点検の対象に研究室を追加する、という方針が委員会で承認された。

## 6) 課題

- ・転倒、落下防止措置についての注意喚起を継続する。
- ・化学物質の管理徹底についての注意喚起を継続する。
- ・研究室巡視の具体的な実施方法（いつ、誰が、何人で行うのか、など）を検討する。

（安全衛生委員会委員長 秋元忍）

## 2.3. 予算

### 2.3.1. 予算に関する特記事項

#### (1) 令和4年度（2022）決算について

収入決算額は2億1,655万784円、支出決算額は2億1,521万5,262円となり、収入決算額との差額133万5,000円は令和5年度へ繰り越しした。また、学生・教職員への福利厚生サービスの拡充のため学内資金の預り・貸付制度を利用して食堂リノベーション事業費として1,000万円を令和5年度に繰り越しました。

#### (2) 令和5年度（2023）当初予算配分再編成（5月）について

学生当経費について5月1日現在の学部生（発達科学部）及び大学院生の員数確定及び博士実験系の申請に基づき再編成を行った。

#### (3) 令和5年度（2023）当初予算配分再編成（10月）について

学生当経費の研究生の人数が確定したことによる再編成を行った。10月時点の余剰金はESDサブコース、附属施設経費、委員会経費の追加配分および研究費の重点配分に充てた。また、食堂リノベーション事業費として1,000万円を追加することとなった。

#### (5) 令和6年度（2024）当初予算配分について

収入予算額は対前年度比で2,093万5,107円の減となった。支出予算額は管理経費を対前年度比で891万4,000円の減とし、教育経費、研究経費、附属施設経費、委員会経費については前年度同額とした。

（予算委員会委員長 阪本雄二）

### 2.3.2. 予算関係の審議等の状況

#### (1) 令和4年度（2022）決算について

令和5年5月15日の予算委員会で審議し、令和5年5月19日の教授会において審議・承認された。

#### (2) 令和5年度（2023）当初予算配分再編成（5月）について

令和5年5月15日の予算委員会で審議し、令和5年5月19日の教授会において審議・承認された。

(3) 令和5年度（2023）当初予算配分再編成（10月）について

令和5年10月16日の予算委員会で審議し、令和5年11月17日の教授会において審議・承認された。

(5) 令和6年度（2024）当初予算配分について

令和6年3月11日の予算委員会で審議し、令和6年3月19日の教授会において審議・承認された。

（予算委員会委員長 阪本雄二）

### 2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編（特に「11-3-1～5」参照）に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

令和5年度科学研究費補助金の獲得は、59件（新規：23件）、総額128,000千円であった。内訳は、学術変革領域研究(A)公募研究：2件（新規：2件）、基盤研究(A)：2件（新規：1件）、基盤研究(B)：17件（新規：6件）、基盤研究(C)：18件（新規：6件）、挑戦的研究（開拓）：1件（新規：1件）、挑戦的研究（萌芽）：8件（新規：3件）、若手研究：7件（新規3件）、研究活動スタート支援：2件（新規：1件）、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）：2件、となっている。新規1件の基盤研究(A)をはじめ基盤研究(B)(C)の採択数の堅調な増加が特徴的である。

今後、研究推進委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費補助金の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員について、令和5年度はDC1 6名（新規：2名）、DC2 6名（新規：3名）、PD3名（新規：1名）、RPD2名（新規：1名）が採用された。DC1およびDC2で例年に較べて多数が採択された。10年以上にわたって毎年開催している学生委員会主催の申請に係る説明会に加えて、学術研究推進機構学術研究推進室（URA室）の支援を得て、計画調書（申請書）の書き方セミナーや推敲のためのワークショップの開催により、申請数の増加につながった。

受託研究について、令和5年度は11件、総額6,774万円（令和4年度14件、総額8,049万円）、共同研究については、15件、総額2,827万円（令和4年度11件、総額852万円）となった。

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

## 2.4. 広報及び情報公開

### 2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内（パンフレット）

2025年4月入学者向け研究科案内（研究科案内2025）を作成した（発行は2024年4月1日）。研究科案内2025は24ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト（<http://www.h.kobe-u.ac.jp>）は、2021年度に最新のCMS（コンテンツ管理システム）用に作成したデザインテンプレートを導入し、全面改裝を行っている。研究科案内の情報に基づいた最新情報や入試情報を掲載した。また、研究科における様々なニュースや在学生向けの教

務情報や学生生活に関わる情報を掲載した。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

#### 2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

平成 28 年度に始まった人間発達環境学研究科主催の「オープン・らぼ」は、「オープンらぼ ウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼ ウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うというものである。

令和 5 年度に関しては、新型コロナウイルスが 5 月 8 日付で 5 類に分類されたことを受けて、対面が可能となったが、体調の問題や、遠隔を用いて遠方の学生にも門戸を開く利便性から、遠隔を用いたいという要望を教員に申し出れば、遠隔でも可能という方法を用いた。オープンらぼ春シーズンは、申込み受付期間を 5 月 22 日から 6 月 9 日、また、面談期間を 6 月 12 日から 7 月 7 日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は 82 名（昨年度は 128 名）、人間環境学専攻での面談者は 15 名（昨年度は 9 名）、計 97 名（昨年度 137 名）であった。

令和 4 年度から始めたオープンらぼ秋シーズンは、申し込み受付期間を 10 月 24 日から 11 月 01 日、また、面談期間を 11 月 13 日から 12 月 8 日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は 33 名、人間環境学専攻での面談者は 9 名、計 42 名であった。

表 人間発達環境学研究科オープンらぼ面談数（専攻・教育研究分野毎）

年度	2019	2020	2021	2022	2022秋	2023	2023秋
人間発達専攻							
心理系	56名	61名	42名	65名	3名	51名	9名
(臨床心理)		(49名)	(36名)	(54名)		(38名)	(5名)
表現系	18名	13名	18名	23名	5名	11名	10名
行動系	7名	5名	2名	2名	4名	3名	4名
教育系	13名	3名	15名	38名	5名	17名	5名
計	94名	82名	77名	128名	18名	82名	33名
人間環境学専攻							
自然環境	2名	4名	5名	0名	2名	7名	4名
数理情報	1名	1名	0名	1名	0名	2名	1名
生活環境	0名	2名	1名	6名	0名	1名	0名
社会環境	2名	0名	1名	2名	1名	5名	4名
計	5名	7名	7名	9名	3名	15名	9名
合計	99名	89名	84名	137名	21名	97名	42名

今年の春シーズンは、2022 年が突出していたが、それまでの例年程度に戻った。人間環境学専攻は、例年よりも増加しており、昨年度から始めた SNS (X (旧 Twitter), Instagram, YouTube) の効果が出始めていると判断した。特に人間環境学専攻は X に院生・教員の国際誌査読付論文の採択情報や、院生・教員の受賞情報を積極的に公開し、オープンらぼの増加につながったと思われる。今年の秋シーズンは、昨年度に比べたら、人間発達専攻が 18 名から 33 名に、人間環境学専攻が 3 名から 9

名に増加した。もともと人間環境学専攻の前期課程入試の状況に合わせて始めたオープンらぼ秋シーズンだったことからすると、まだ数は不十分であるが、このまま広報活動を続けていけば、数の増加が見込まれることが予測され、人間環境学専攻の前期課程入試の合格者減少問題を解決していく方策として、期待される。

「オープン・らぼ」開催の目的は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験生を増加させる点にある。人間発達専攻では、面談者が多い。面談者が増えることは、本専攻の発展を反映・促進するとみられる。一方、人間環境学専攻では、面談者数は、増加したとはいえ、未だ十分とはいえない。この専攻の存在と特徴をより広く発信していく必要が指摘される。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 吉田圭吾)

#### 2.4.3. ホームカミングデイ

##### (1) 2023年度第17回（国際人間科学部：旧発達科学部、教育学部）ホームカミングデイの開催

ホームカミングデイは、昨年同様、本年度のホームカミングデイ（学部企画）は対面及びネット中継併用で行われた。また、昨年の報告書でも記載したとおり、神戸大学発達科学部鶴甲会との共催で行われた。

##### (2) 学部企画

今年度の参加者は39名で、内訳は卒業生8名、名誉教授17名、現役教員5名、現役職員4名、現役学生1名、保護者4名であった。

###### 1) 学内探検ツアー

高田実行委員長の案内で玄関での記念撮影に始まり、C棟（音楽棟）、F棟、プール、体育館、A棟（エレベーターで最上階へ）を回り学内探検ツアーを行った。C棟や体育館では教員免許取得のために苦労した日々を思い出すことが出来たとの声があり、参加者同士の思い出話で盛り上がった。また、A棟最上階へはほとんどの卒業生が在学中に、名誉教授も在職中に来られたことは無く、ここから見る神戸の風景が、多くの参加者の気持ちを癒やした。

###### 2) 学部長、紫陽会会长、鶴甲会会长の挨拶の挨拶

学部長挨拶では、近藤副学部長より紫陽会からの学部支援金に対するお礼に始まり、国際人間科学部の現状の説明があった。蔭山紫陽会会长からは新任のご挨拶と参加者への御礼と、紫陽会の活動の現状と今後の方針について説明があった。岡田鶴甲会会长からは、鶴甲会の説明と今回共催した経緯について説明があった。

###### 3) 紫陽会賞授賞式

今年は、陸上競技部4年生「山科真之介さん」が受賞され、表彰式が行われた。山科さんは2023年に行われた日本学生個人選手権で400mハードルで2位に入賞されるなど数々の好記録を出された。

###### 4) 記念講演、学部研究科報告、および学部学生報告

今年の卒業生企画は、記念講演として福本浩幸氏（2004年卒）（株式会社てりとり一 代表取締役）「生き残る！寝ても覚めてもファンづくり」、が行われた。飲食店経営における人づくり、ファンづくり、コロナ禍での苦労話などを語っていただいた。また、共催団体鶴甲会からは田結庄良昭氏に（神戸大学名誉教授：旧発達科学部人間環境学科 教員）「南海トラフ地震が生ずれば兵庫県は大きな被害」

が行われた。将来確実におこるであろう地震に対してどう備えるのかその被害予想と対策についてお話しいただいた。

近藤副学部長からは研究科・学部の現状をご報告いただき、最後に紫陽会を受賞した山科さんからお礼と大学で取り組んでいる研究と陸上競技についての説明報告があった。

今年度は第2部として、生協食堂にて懇親会も行われ、参加者の交流がより一層深まった。

### 5) 今後の課題と反省

今年度参加申込が昨年までの返信はがきで答える方法からネット上で申し込む方式に変更された影響か卒業生の参加が減少した。

神戸大学発達科学部鶴甲会との共催で、旧教員の参加が多かったが、その情報を伝え、旧教員と会いたいと思っていただけた事で卒業生参加者を増やそうとしたが、旧教員参加者情報伝達手段がネットでしか無く、広く広報できなかった。

(第17回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長 高田義弘)

## 2.5. 環境設備

### 2.5.1. 教育・学習環境の整備

#### (1)各種施設・設備

教育・学習環境を充実させるため、以下の施工を行った。

- ・講義棟（B）のトイレ表示案内の改修
- ・講義棟（B）の床面剥離ワックス清掃
- ・食堂施設におけるネットワーク回線の充実

(事務課長 春名正基)

#### (2)キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線 LAN は、2021年度に、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN 用のアクセスポイントを合計 13箇所（A棟に1台、B棟に5台、C棟に1台、F棟に5台、G棟に1台）を増設しており、本年度は学生食堂にアクセスポイントの設置を計画中である。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織（コースなど）単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、部局内の3箇所に設置されている電子掲示板の運用も行なっている。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

#### (3)図書館運営・整備

昨年度までに引き続き、本年度においても、全学の附属図書館運営委員会はオンライン会議、人間科学図書館図書委員会はオンライン会議とメール回議であった。

人間科学図書館の予算収入は、昨年度から 74,000 円増額の、7,414,000 円であった。学生用図書の選定結果については、図書予算は外国雑誌予算増の影響により 5% 減となったが、選定冊数全体は

増加した（957 冊→1,142 冊）。推薦図書の選定数が増加した（515 冊→581 冊）ほか、教科書は高等学校の改訂年であったため収集対象点数が多くなった（145 冊→261 冊）。貸出統計による評価（選定区分ごと）については、前年に続き貸出率は例年と同水準となった。アカウントサービスからの貸出更新が回数無制限で可能になったため回転率が高い傾向が続いている（回転率：コロナ前の 3 年間平均 140%→197%）。教科書について、購入対象が高等学校（新指導要領の 1 年生用）であったため種類が多く、科目別の利用頻度にばらつきが出て、貸出統計の数値が低くなつたと思われる。貸出統計による評価（分類ごと）については、心理学、社会、教育、数学、医学、音楽、体育は既存の推薦図書全体のうち構成比率の比較的高いものであり、利用率も高い。貸出統計による評価（利用者区分ごと）については、大学院生の回転率が 96.52%，学部学生の回転率が 82.58% と高い。蔵書構成率と購入構成率による評価については、各分野とも蔵書構成率と購入構成率は近似しており、例年通り万遍なく購入されている。全体としては、現在も開館時間短縮が続き、入館者数はコロナ前の水準に戻っていないが、貸出率・回転率の数字は高くなつておる、学生の希望に沿う資料、学修に必要な資料は整備できていると考えられる。

今後の課題は、次の 3 点にまとめられる。(1) 教員推薦図書の募集方法は、例年通り 1 回目は学科への配分に基づいて学科毎に集約し、2 回目はその残額により教員毎の募集とした。教員毎に募集した場合は多数の推薦があり、授業との連携や、資料提供までの期間を短縮できる利点がある一方、特定分野への偏りがみられる場合がある。選書における教員の負担を減らしつつ網羅的に収集していくため、今後も学科ごとの配分額や募集方法を見直していく必要がある。(2) 電子図書の募集には推薦が出なかつたため、前年までの教員推薦図書で利用が多いものや参考図書等電子図書の利便性が高いと思われるもの中に 13 点購入した。今後も利用状況を参考に、電子図書を拡充していきたい。(3) 利用促進策として新着図書の展示、季節ごとのテーマ展示を継続しており、展示図書はよく利用されている。今後は電子図書を含めて、さらに利用者への提案機会を増やしていきたい。

また、本年度は、2025 年契約に向けて外国雑誌購読の全面的な見直しを検討するために、各教育研究分野を対象に、学生用外国雑誌の購読希望調査を実施した。調査の背景は、次の 3 点であった。(1) 今年度、人間科学図書館の学生用図書費により 13 タイトル（共同購入含む）の外国雑誌を購読し、予算は 253 万円で図書費全体の約 35% を占めている。(2) 全学的に図書館予算が大幅に削減されている中、外国雑誌は恒常的な価格上昇が続いており、現在の 13 タイトルの外国雑誌講読維持は困難である。(3) 2018 年以降、現在講読している外国雑誌の見直しを行つていなかつたため、入れ換える希望もあると想定される。これらの背景を踏まえて、次の 3 点について、各教育研究分野の意見徵集を行つた。(1) 継続講読中の外国雑誌のうち、各教育研究分野に関する雑誌について、講読を維持する必要のある雑誌はどれか。(2) 上記（1）について、講読を維持する必要のあると回答した雑誌が人間科学図書館の学生用図書費で全額負担できない場合、各教育研究分野からの一部予算負担をしてよいいか。(3) 上記（1）について、講読を維持しないでよいと回答した雑誌がある場合、別の雑誌の講読希望があるか。各教育研究分野の意見を踏まえて、次年度の図書委員会に対して、外国雑誌購読の方針案や購入案を提案した。

（図書委員会委員長 山口悦司）

## 2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年は新型コロナウィルスは五類になり、大学生活は通常になったものの、交流ルームは感染対策を万全にして、平日 12 時～16 時まで運営し、食事と飲み物を提供した。特にゴールデンウィーク前のアトリエ KOKI 「JUNGLE 展」と 9 月末からの「層なり」というふたつの展覧会を開催し、どちらも好評を得た。詳細は下に記す。

### 体制

今年度は、2 名のスタッフ（非常勤職員）および、知的障害のあるスタッフ 3 名で運営を行い、常時 2 名体制を敷くことができた。

### 活動状況

- ・今年のオープンキャンパス（8月 10 日）では、スタッフ 5 名と学生アルバイト 4 名、ボランティア 1 名で、飲料と食事を提供した。
- ・スタッフと実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達を行った。

### 展示

- ・2023 年 2 月 7 日から開催していた展覧会を 2023 年 4 月 26 日までの期間で会期を延期して開催した。博物館学芸員資格の学内実習として連携し、パラアーティストとして受賞作品も多く、広く活躍する木下晃希さんの作品を「アトリエ KOKI 展 - JUNGLE -」として展示することができた。
- ・2023 年 9 月 19 日から 2024 年 9 月 23 日までの期間で、博物館学芸員資格の学内実習として連携し、神戸大学附属特別支援学校の生徒たちの美術作品を展覧会「層(かさ)なり」として展示することができた。創作のプロセスを楽しんでもらうために、映像で紹介するなどの新しい試みも行った。

（交流ルーム運営委員会委員 大田美佐子）

## 2.6. 教員研修

### 2.6.1. FD

研究科 FD 記録、及び神戸大学 HP 大学教育推進機構「FD 活動」FD カレンダーより抜粋した FD について、以下に記す。

- (1) 7 月 21 日 科研費計画調書の項目に沿った書き方のポイント等について
- (2) 10 月 20 日 高大接続卓越グローバル人材育成センターにおける取り組みについて
- (3) 11 月 17 日 利益相反マネジメントについて
- (4) 12 月 15 日 ハラスメントの防止に向けて

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

### 2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して、情報セキュリティに関する研修会を開催している。今年度、2023 年 4 月に 2 名に対して研修会を開催した。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

### 3. 入試

#### 3.1. 一般選抜入試

##### 3.1.1. 入学試験委員会

本研究科が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長、副研究科長、専攻長、学生委員会委員長の計 6 名で構成し、令和 5 年度委員長を吉田圭吾副研究科長が務めた。なお、学部の入学試験は国際人間科学部入学試験委員会の所掌下にある。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

・第 1 回（4 月 18 日）

(1) 令和 6 年度大学院募集要項について

(2) 令和 6 年度入学者に係る入学試験日程について

(3) 令和 5 年度入学者状況について

・第 2 回（4 月 28 日 - 5 月 2 日）（持ち回り審議）

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程入試の募集要項・出願書類等の Web ページ掲載について

・第 3 回（5 月 22 日 - 5 月 31 日）（持ち回り審議）

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程入試における受験上の特別配慮および英語外部試験の換算について

・第 4 回（6 月 27 日 - 7 月 5 日）（持ち回り審議）

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程入試における受験上の特別配慮について（2 件）

・第 5 回（7 月 11 日）

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程推薦入学試験合格者の判定について

(2) 令和 6 年度博士課程前期課程入試における受験上の特別配慮について令和 6 年度博士課程前期課程学生募集にかかる個別の入学資格（出願資格事前）審査について

(3) 博士課程前期課程推薦入学試験の出願資格について

(4) 入試方法およびアドミッションポリシーの変更について

・第 6 回（9 月 4 日）

(1) 令和 6 年度博士課程後期課程（第 I 期）入学試験合格者の判定について

・第 7 回（9 月 25 日）

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について

(2) 令和 6 年度博士課程前期課程入試（第 2 次募集）募集要項について

・第 8 回（10 月 26 日 - 11 月 10 日）（持ち回り審議）

(1) 令和 6 年度大学院入試の入試情報の開示基準について

・第 9 回 (12 月 4 日 - 12 月 12 日) (持ち回り審議)

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程入試 (第 3 次募集) 募集要項について

・第 10 回 (12 月 18 日) (持ち回り審議)

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程入試 (第 3 次募集) 募集要項公開時期について

・第 11 回 (1 月 17 日)

(1) 令和 6 年度博士課程前期課程入学試験 (第 2 次募集) 合格者の判定について

(2) 令和 6 年度博士課程前期課程 1 年履修コース入学試験合格者の判定について

(3) 令和 7 年度博士課程前期課程人間環境学専攻推薦入学試験募集要項について

・第 12 回 (3 月 4 日)

(1) 令和 6 年度博士課程後期課程人間発達専攻、人間環境学専攻 (第Ⅱ期)

入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

(2) 令和 6 年度博士課程前期課程入学試験 (第 3 次募集) 合格者の判定について

(入学試験委員会委員長 吉田圭吾)

### 3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は、関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成 28 年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され、合否判定に有效地に活用された。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成 28 年度より人間発達専攻では 52 名から 51 名に、人間環境学専攻では 40 名から 36 名に削減され、研究科全体の定員は、92 名から 5 名減の 87 名となった。人間環境学専攻では、令和 4 年度入学試験より推薦入学試験が導入された (募集人員 18 名)。

博士課程前期課程の令和 6 年度入学試験結果は、人間発達専攻では、募集人員 51 名に対し、志願者数 80 名 (志願倍率 1.57 倍)、合格者数 50 名であった。人間環境学専攻では、まず推薦入学試験については、募集人員 18 名に対し、志願者数 18 名 (志願倍率 1 倍)、合格者数 17 名、それ以外の入学試験については、募集人員 18 名、志願者数 21 名 (志願倍率 1.17 倍)、合格者数 13 名であった。人間環境学専攻では、合格者数が定員に達しなかったため、募集人員を若干名とする第二次募集を実施した。その結果、志願者数 8 名、合格者数 4 名であった。同専攻では、第二次募集を実施しても、合格者の総計が 34 名で、入学定員に達しなかったため、募集人員を若干名とする第三次募集を実施した。その結果、志願者数 3 名、合格者数 0 名であった。外数としている人間発達専攻 (一年履修コース) の入学定員 4 名に対し、志願者数 4 名、合格者数 3 名であった。これらの入試の結果、研究科全体では、定員 91 名に対し、志願者数 130 名 (志願倍率 1.43 倍)、合格者数 91 人となった。博士課程後期課程については、人間発達専攻では、入学定員 11 名に対し、志願

者数 21 名（志願倍率 1.91 倍），合格者数 15 名，人間環境学専攻では，定員 6 名に対し，志願者数 10 名（志願倍率 1.67 倍），合格者数 9 名であった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体に関しては，定員 17 名に対し，志願者数 31 名（志願倍率 1.82 倍），合格者数 24 名となっている。

人間環境学専攻では，博士前期課程に関し，今年度は正規の入試で定員を満たさず，その結果行った第二次募集でも定員を満たすことができず，第三次募集を実施した。第三次募集では，3 名の受験生のうち 2 名が欠席，1 名が不合格となり，令和 5 年度も定員を満たすことは出来なかった。今後，日本全体が少子化の大きな波を受けることが予測される中で，受験者の確保は，いっそう重要な課題となっている。受験者を増やすために，(1) 同専攻については，2020 年度から英語での受験を可能とし，さらに，(2) 両専攻とも，2021 年度入試から社会人特別枠における英語の配点割合を下げ，専門科目を重視した採点を行うことで，社会人受験生の増加を図った。これに加え，(3) 人間環境学専攻に関し，令和 4 年度から推薦選入試を導入した。さらに，(4) 研究科の広報活動を充実し，受験生に研究科をアピールするために，令和 4 年 11 月から，SNS の公式アカウント（X（旧 Twitter），Instagram，YouTube）を開設した。X（旧 Twitter）は，研究科の教員や院生の研究成果である投稿論文や受賞のニュース，YouTube では研究科の様々な特徴（発達支援インスティチュート，サイエンスカフェ，カフェアゴラ，アクティブエイジングセンター，心理教育相談室等）の広報，Instagram は受験生に向けて院生が研究や大学院生活の公開をすることにした。(5) さらに令和 6 年度入試からは，募集要項の英文化を行ない，外国人受験生の増加を図った。(6) さらに外国人受験生の確保のために，令和 7 年度入試からは，出願書類（願書等）の英語版の作成及びダウンロードを可能にする検討を始めた。これらの一連の制度改革がどの程度の効果をあげるのかをみていく必要がある。大学院受験生の確保のあり方を引き続き検討していきたい。

入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長 吉田圭吾）

#### 4. 国際交流活動

新型コロナウィルス感染症拡大の影響も緩和し，航空便の回復なども進んできた。しかし円安などの影響もあり，海外渡航等については新型コロナウィルス感染症拡大以前の状況にまでは回復が戻らなかった。しかし ICT を活用した遠隔での交流は進んでおり，こうした技術を活用した交流が期待できた。

##### 4.1. 学術交流協定

###### (1) 新規

- ・ドレスデン工科大学教師教育研究センター（部局間学術交流協定及び部局間学生交流実施細則）
- ・サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学（大学間学術交流協定（タイプ 2））

###### (2) 更新

- ・リール大学（大学間学術交流協定（タイプ 1）及び全学学生交流実施細則）
- ・ヤゲウォ大学（大学間学術交流協定（タイプ 1）及び全学学生交流実施細則）
- ・ダルムシュタット工科大学（部局間学生交流実施細則）

- ・シレジア大学自然科学研究科 (Erasmus+ IIA)
- ・タリン大学 (Erasmus+ IIA)

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

#### 4.2. 留学生

(1) 本年度、本研究科で学んだ留学生は80名、概要（性別・国籍別・学年別・専攻・国費/私費別）は次表の通りである。

		前期	後期	計
性別	女性	28	33	61
	男性	8	11	19
	計	36	44	80

		前期	後期	計
国籍	中国	33	38	71
	韓国	2	2	4
	台湾	0	1	1
	コロンビア	0	2	2
	キューバ	1	1	2
	計	36	44	80

		前期	後期	計
学年	D3	6	6	12
	D2	1	1	2
	D1	5	5	10
	M2	9	9	18
	M1	11	11	22
	大学院特別聴講学生	0	2	2
	教育研修生(大学院特別研究生)	0	1	1
	大学院研究生	4	9	13
計		36	44	80

	前期	後期	計

専攻	人間発達	21	25	46
	人間環境学	15	19	34
	計	36	44	80

		前期	後期	計
国費/私費	国費	2	2	4
	私費	34	42	76
	計	36	44	80

#### (2) チューター制度

留学生の渡日直後の生活条件の整備、諸手続き遂行、また論文作成において補助を要するものに對して、チューターを配して学生生活への円滑な適応、および論文執筆における支援を図った。

#### (3) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において、過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ、学生を対象に閲覧を継続している。

#### (4) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し、就活セミナーやイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

#### (5) 来年度に向けて

引き続き学生の派遣、受け入れも活発化しつつある。たとえば Erasmus+による交流についても、専門性のマッチングを確認しつつ、積極的に促進したい。円安や経済状況の相違により渡航費用が、高額になっているなどの課題もあるが、その一方で、新型コロナウィルス感染症拡大に対応したコミュニケーション手段の変革により、オンラインによる交流も進んでいる。引き続き ICT ツールを活用するなどの工夫を行い、国際交流のさらなる活性化をめざしたい。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

### 4.3. ダブルディグリー

ダブルディグリー・プログラムの新規開拓は、引き続き困難な状況が続いているが、可能性について模索を続けたい。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

### 4.4. Innovative Asia

新規受入について、2019 年度以降は申請していない。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

#### 4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

##### (1) 国際交流運営資金

- ・学生の国際学会発表への援助事業助成

2023年8月：人間発達専攻 1名 トルコ共和国 ESERA (European Science Education Research Association) 2023

2023年9月：人間環境学専攻 2名 50th Textile Research Symposium

2023年9月：人間環境学専攻 2名 “Plant Chromosome Biology” - Meeting

##### (2) 紫陽会グローバル人材育成資金

期日	担当教員氏名	授業科目等	渡航先・学生等
2023年8月27日 ～9月3日	赤木 和重	特別研究IV	フィンランド・学生1名

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

#### 4.6. 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2023年度				
2023/3/1～ 2024/4/3	Tomas Michon	ベルギー	Vrije Universiteit Amsterdam	近藤 徳彦
2023/6/1～ 2024/3/31	Khalif BENZID	アルジェリア	-	谷 篤史
2023/6/12～ 2023/8/19	Benjamin Blanchette	カナダ	Université de Sherbrooke	エスカラ エマソン ガウ
2023/7/10～ 2023/8/30	James Noboru Imamura	アメリカ 合衆国	University of Oregon • Professor	伊藤 真之
2023/12/19～ 2024/12/18	JUNJIE WANG (王 俊杰)	中国	華南師範大学・ Distinguished Research Fellow	源 利文
2023/3/22～ 2024/7/31	Kim Jung Sung (金貞成)	大韓民国	Department of Forest Science, College of Agriculture, Life & Environment Sciences, Chungbuk National University	近江戸 伸子

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

#### 4.7. 「英語による授業の実践-ESD 研究」

グローバル化に対応して英語で行われる授業を増やしていくことが期待されてきた。多様な国籍の学生が、ESD（持続可能な開発のための教育）をテーマに互いの専門性・当事者性をクロスさせることをねらいとして、2008年から大学院にESDサブコースが開設され、その授業科目のうち、「ESD研究1・2(ESD study 1・2)」は、完全に英語によるコミュニケーションだけで実施・運営されている。

本研究科の教員3名（太田和宏、稻原美苗、松岡広路）がチームとなって運営・コーディネートされ、毎回、履修生が英語でショートスピーチを行いながら、英語でグループディスカッションを行う。一切日本語は使われない。2023年度の履修生は15名で、人間発達専攻10名、人間環境学専攻4名、工学研究科1名、うち留学生5名であった。

主なテーマは「How to think of the relationships with SDGs」で、参加者各自の問題意識・研究テーマ・方法論と持続可能な開発に関連する問題との関係が議論された。参加者からは「自分の専門の意義を英語で話す機会を得て有意義であった」「国際性を意識することができた」「持続可能な開発と自分の専門を接続させることができた」などの感想を得た。

夜間ということもあって履修院生数がやや少なかったが、持続可能な開発に関連する研究をしている院生の数は、この程度ではないはずである。次年度は、研究科内外により本授業の存在をアピールし、履修院生の拡大とともに、ESDおよび英語による授業の大切さを広めていく予定である。

(人間発達専攻 松岡広路)

#### 4.8. スタディツアー

##### (1) 韓国で多様性と共生を体感するスタディツアー

インクルーシブな大学づくりで先頭に立つ韓国ナザレ大学の学生から韓国語を学び、その学生と一緒に知的・発達障害者の劇団「ラハプ」の活動に参加し、アートを通したインクルーシブな社会づくりの現場を体験するプログラムを実施した。期間は、8月20日～8月29日。人間発達環境学研究科からは、院生3名が参加し、事前学習も含めて熱心に深い学びの機会となった。

(人間発達専攻 津田英二)

### 5. 教育

#### 5.1. 教育課程

##### 5.1.1. 今年度の特徴

令和5年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

##### (1) 研究指導計画書

令和3年度から実施している研究指導計画書の提出時期及び提出先について再検討を行ったが、これまで通りとすることにした。

##### (2) 他研究科と連携した教育プログラムの構築

理学研究科化学専攻との連携で互いの大学院と学部の授業を履修できる「環境・化学プログラム教育コース」を実施・運営しており、理学の知識と環境に関する知識を与え合うことで、社会において多様な問題解決に対応できる人材育成を可能にしている。さらに、令和6年度から保健学研究科と

の連携で互いの大学院の授業を履修できる「ウェルビーイング教育プログラム（発達・保健）コース」を実施・運営し、健康・発達・環境の領域から生涯にわたる Well-being を掲げ、少子高齢化社会での深刻な課題解決に資する専門的能力を習得した人材の育成を行う予定である。

(3) 成績評価基準の確認

秀・優の割合など、成績評価基準についての確認を行った。

(教務委員会委員長 大串健一)

### 5.1.2. 研究科、専攻共通科目

(1) グローバルリサーチ演習Ⅰ・Ⅱ

大学院学生の国際的な研究活動に対しては、研究会の開催や出席に対して経済的な支援が得られる機会を提供するなど、従来から積極的に奨励して来たところであるが、新たに専攻横断型の「グローバルリサーチ演習Ⅰ」（前期課程）と「グローバルリサーチ演習Ⅱ」（後期課程）という授業科目を開設し、国際的な研究活動の集積が所定の条件を満足する場合に単位を付与することとした。

研究の専門性を高め、その成果を広く国内外に発信する高度な実践能力を身につけることを目標として、指導教員による指導のもと海外および国内での学会・研究会への参加・発表やスタディツアーなどへの参加を積み重ねた上で、学術 WEEKS などの国際的な研究会や活動の企画を行うことを通じて実践能力を習得することを目指す。

(教務委員会委員長 大串健一)

(2) ヒューマン・コミュニティ創成研究

例年どおりさまざまな領域で研究を志す院生が受講し、知を横断する対話の創出に力点を置く授業を行った。受講生各人の研究関心に関わる意味あるテーマについて熱心な対話を展開することができた。コーディネイターは稻原美苗准教授と津田が務めた。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究 主担当 津田英二)

### 5.1.3. 教職教育

(1) 教育実習

令和 5 年度の教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園 7 名、小学校 40 名、中等教育 48 名、特別支援学校 16 名であった。令和 6 年 2 月 15 日に附属校園との実習反省会（国際人間科学部）を行い、令和 5 年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

(2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が 89 名、専修免許状が 15 名であった。

(教務委員会委員長 大串健一)

### 5.1.4. ESD サブコース

ESD（Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育）をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型の全学の教育コースとして、2008 年度より開講されている。2015 年度より国際教養教育院に ESD 教育部会が設置されたものの、中核的運営は人間発達環境学研

究科が担っている。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、松岡広路（人間環境学専攻教授）で、実務的には、総合コーディネーターの鴨谷真（学術研究員）と松岡によって、「ESD コース」は運営されている。

今年度も、コロナウィルスの影響を少なからず受けたものの、「ESD 基礎」「ESD 論 A・B」「ESD ボランティア論」「ESD 生涯学習論 A・B」「ESD 実践論」および「ESD 演習 I・II」を開講した。全学のESD 関係教員の協力を得て、オンラインによる授業、ワークショップを中心とした授業を行った。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのヒューマン・ネットワークである。とりわけ、同センターが事務局を担う RCE 兵庫-神戸の ESD 実践者らにゲストスピーカーとして登壇してもらい、現場の臨場感をできるだけ学生が触れる能够性を工夫した。基礎科目群と各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で学びの総合化・交流を行う、という学びのシーケンスをもつ ESD コースは、新しいサービス・ラーニング（学校と社会サービスの連結した学習スタイル）のモデルである。

参加部局が全部局に広がり、全学部参加のコースとして本格的に動き始めてきた。SDGs（持続可能な開発目標）の推進が多領域において求められているなか、その推進を担う人材づくりの方法は、神戸大学の教育の中心的な柱の一つになることが期待されよう。それに応えられるコースを運営・維持するためには、本研究科及びヒューマン・コミュニティ創成研究センターの積極的な支援が欠かせない。次年度以後も、本研究科およびヒューマン・コミュニティ創成センターの存在意義のひとつみなされるよう、関係者一同、協力し合いながらコース運営を進めていく所存である。

(ESD サブコース運営委員会委員 松岡広路)

### 5.1.5. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

#### (1) ゲストスピーカー

令和 5 年度は、前期（第 1, 2Q）6 件、後期（第 3, 4Q）3 件の計 9 件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

#### (2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や、学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の待遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をステューデント・アシスタント（SA—時給 1010 円）、大学院生をティーチング・アシスタント（TA—前期課程：時給 1200 円、後期課程：1400 円）、同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント（STA—時給 1500 円）とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した。実施報告書（学生用・教員用）からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA 0 名 TA 1 名 STA 0 名 計 1 名

後期 SA 0 名 TA 1 名 STA 0 名 計 1 名

(教務委員会委員長 大串健一)

## 5.2. 各専攻講座の教育

### 5.2.1. 人間発達専攻

#### (1) 運営

各教員は、4つの教育研究分野（心理系、表現系、行動系、教育系）に所属している。専攻の運営は、基本的に各教育研究分野を中心に行われている。運営にあたっては、専攻長と各教育研究分野代表により構成された人間発達専攻運営会議を組織し、年間13回の運営会議のほか、適宜臨時の会議やメール審議により、専攻に関わる重要案件（人事、予算、入試等）の審議等を行った。教員人事は、学域人事委員会が策定した方針に基づきつつ、専攻運営会議では、今後の採用人事方針について議論を重ねた。また、人間の発達を軸にした本専攻の理念についても意見交換を進め、専攻としてのミッションを確認した。

#### (2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを従来通り各教育研究分野に振り分けた。共通経費は設定していない。専攻所有の大型プリンタ運用経費については、専攻共通必修科目としての人間発達関研究等が廃止されたため、徴収していない。このプリンタの消耗品に関する予算確保ができず、運用のあり方は継続審議となっている。

#### (3) 入学試験

博士課程前期課程入試について、一定の受験者を確保できている。合格者のうち他大学院への進学などの理由で辞退した者もいて、定員を若干下回る入学者となった。さらに本専攻の各分野の魅力を発信しつつ、特に学部からの進学者を増やす努力をしていきたい。後期課程入試では、進学者、入学者ともに優秀な志願者が多く、定員を上回る合格者となった。本専攻博士後期課程では、コンスタントに学位取得者を出しており、今後も専攻の理念を実現すべく研究者養成を進めていきたい。

#### (4) 教育

以下、教育研究分野別に内容を学生の実績を中心に列挙する。

#### ●心理系

心理系では、心理学を総合した観点から、心身の発達や健康、その促進・阻害要因の探究と複雑な相互関係の把握に努め、広い視野と深い専門性をもって人間発達の様相を追究している。また臨床心理士・公認心理師の養成も行っており、心理臨床の専門職として高度な知識とスキルを獲得することをめざし教育を開催している。このような教育体制を受け、学生の研究発表についても、国内で優れた学会発表や学術論文に関する報告がされた他、国際学会でも複数の発表が行われた。

#### (1) 学生の論文

## 査読付き論文

西恭平・吉田圭吾 (印刷中) 思春期における、自傷行為をする友人との関わりと捉え方の変容プロセス 心理臨床学研究

古村真帆 (2023) 児童はクラスメートに実施される個別支援をどのように捉えるのか —学級適応感および場面差に着目して—, 教育心理学研究, 71 (4), 印刷中

古村真帆 (2023) 通常の学級に在籍する発達障害のある児童に個別支援を実施する際の実践上の工夫 : 小学校教師への半構造化面接から, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 17(1), 53-62.

呉文慧 (2024) 特別支援学校教師はどのように自閉症のある生徒に関わっているのか : 教師の実践知に対する現象学的探求 床実践の現象学 6(1) 1-16 2024年1月 査読有り

鈴木田英里 (印刷中). 発達障害児及び知的発達症児をもつ家族を対象とした『家族の強みを活かす家族レジリエンス促進プログラム』の予備的検討 神戸大学発達・臨床心理学研究

谷口 あや・山根 隆宏・野上 慶子・清原 舞子・安達 友紀・伊藤 俊樹・河崎 佳子・吉田 圭吾 (印刷中). 新型コロナウイルス流行初期から緊急事態宣言解除後の遠隔心理支援実態調査. 心理臨床学研究 41

野上 慶子・山根 隆宏 (印刷中). Maternal Anxiety and Overprotection Effects Anxiety in Japanese Children with Developmental Disorders and Typical Development. LD研究, 33(1)

谷口 あや・野上 慶子・山根 隆宏 (2023). 父母の養育スタイルと幼児の自己制御および問題行動の関連 : 父母ペアデータを用いた検討. 発達心理学研究, 34(4), 368-379.

野上 慶子・谷口 あや・山根 隆宏 (2023). 発達障害児の不安症状軽減のための家族認知行動療法の有効性と母親の介入前の不安症状との関連 : 混合研究法による検討. 発達心理学研究, 34(3), 194-207.

奥村紗・加藤佳子 (印刷中). 新型コロナウイルス感染症流行時の感染予防行動に関する心的プロセスの検討 発達・臨床心理学研究.

原 瑞穂(2023). Y大学における大学生のためのキャリアデザインと汎用能力の尺度開発の試み キャリア・カウンセリング研究, 25(1), 9-19.

勝間田冬華・吉田圭吾 (印刷中) いじめ体験の原因帰属の検討—体験立場別の自由記述による分析から—

## 査読無し論文

### (2) 学生の学会発表

#### 国際会議

Tetsuko Kato(2023) Perception and Process of Lived Experience of Play for STEM Undergraduates Using Mutual Squiggle and Story-Making, European Conference on Developmental Psychology (ECDP), Turku, Finland

Kunihiro Ikuta(2023) Acceptance of Disability in Students with Mild Intellectual Disabilities from the Perspective of Special Needs School Teachers. European Conference on Developmental Psychology (ECDP) , poster presentation, 2023, August.

Kunihiro Ikuta(2024) A quantitative study of disability acceptance among students with intellectual disabilities from the perspective of special needs schoolteachers. BPS-JSDP joint online workshop; Exchange of “young” researchers between the UK and Japan, The35th Annual Meeting for the Japan Society of Developmental Psychology, 2024, March.

Suzukida, E. (2023). Examination the construct validity of the Family Resilience Scale for Families of Children with Developmental Disabilities. European Conference on Developmental Psychology (ECDP) 2023, August 31, Finland.

Nogami, K. & Yamane, T. (2023). Online Parent-mediated Family Cognitive Therapy for Anxiety Symptoms in Children with Developmental Disorders in Japan. European Conference on Developmental Psychology (ECDP) 2023, August 31, Finland.

Liu, J. (2023). Investigation on the impact of social support and children’ s behavior on Parenting stress among Chinese residents in Japan. European Conference on Developmental Psychology (ECDP) 2023, August 31, Finland.

Liu, J. (2023). The process leading to the identification and treatment of developmental Disorders in Chinese children living in Japan. The 62th Annual Convention of the Taiwan Psychological Association 2023, October 22<sup>nd</sup>, Taiwan.

#### 国内学会

西恭平(2023) 大学生における自傷行為へのイメージ尺度作成の試み 第 25 回日本学校心理学会 2023 年 9 月

西恭平・吉田圭吾(2024) 中学における自傷行為の理解と支援プログラム原案の検討 第 35 回日本

## 発達心理学会（2024年3月開催予定）

生田邦紘（2023）軽度知的障害の障害受容における親子の変容プロセス. 日本発達心理学会第34回大会, ポスター発表, 2023年3月.

生田邦紘（2023）知的障害における障害受容の困難に関する定量的研究:特別支援学校教師への質問紙調査. 日本特別ニーズ教育学会中間集会, 口頭発表, 2023年6月.

生田邦紘（2023）軽度知的障害のある学生の学びをナラティブで捉える. シンポジウム企画・話題提供, 質的研究法を学びほぐす: 障害児・者教育の視座から, 日本質的心理学会第20回大会, 2023年10月.

古村真帆・生田邦紘・赤木和重（2024）オルタナティブスクールにおけるASD児の自己と社会性の発達—縦断的な調査を通して—, 日本発達心理学会第35回大会, 2024年3月

佐野孝・古村真帆・桃田茉子（2023）集団場面の傷病発生時における傷病者以外の児童に対する対応例の検討—教員を対象としたインタビュー予備調査の内容から—, 日本学校保健学会第69回学術大会, 2023年11月

古村真帆（2023）児童は級友に実施される個別支援をどのように捉えるのか—ニュートラルな捉え方である「中性的無関心」に着目して—, 日本心理学会第87回大会, 2023年9月

古村真帆（2023）特別な教育的ニーズのある児童と学級集団づくり, 心理科学研究会春の研究集会, 2023年4月

吳文慧（2024）ハイデガーの解釈学的現象学に基づく自閉スペクトラム症と関わる特別支援学校教師の実践知の探求——世界, 道具, 気分に着目して 第159回臨床実践の現象学研究会 2024年1月

吳文慧（2023）ASDのある子どもに対する特別支援教育実践の現象学の可能性：ハイデガーに着目して 日本国際学会・社会科学会 第40回大会 2023年12月  
じて

田中稜（2023）公立小学校通常学級担任を対象とした合理的配慮の実施経験の実態調査-モディフィケーションに着目して- 2023年度日本特別ニーズ教育学会中間集会, 2023年6月

矢谷徳行（2023）理科探究学習における特別支援学級在籍児の授業参加一斉授業と比較して 2023年度日本特別ニーズ教育学会, 2023年10月

横田慧（2024）話し言葉のない自閉症幼児の要求行動の発達的基盤とその形成 日本発達心理学会第35回大会、2024年3月

横田慧(2024)前言語期の自閉症幼児における要求行動の発達心理科学研究会近畿地区例会大会、2024年3月

加藤佳子・竹中 汀・佐藤なぎ・金子直暉・喜多 凜・奥村沙矢・原瑞 穂・杉本和浩(2023). 日本語版楽しき尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 日本心理学会第 87 回大会, ポスター発表, 2023 年 9 月, 神戸国際会議場・神戸国際展示場

渡邊志保・井原駿・田中秀樹・古谷真樹 (2023) White lie をつく過程における心理・生理的ストレス 第 41 回日本生理心理学会, 2023 年 5 月

古谷真樹・三好典沙・佐藤幸治 (2023) 大学生における急性の心理的ストレスが睡眠の質に及ぼす影響 - クロモグラニンと自律神経活動を交えた研究 - 一般社団法人日本健康心理学会第 36 回大会, 2023 年 12 月

勝間田 冬華・吉田 圭吾(2023) いじめ体験の原因帰属に関する予備的検討 日本心理学会第 87 回大会 2023 年 9 月

### (3) 特別研究員、外部資金獲得など

氏名：古村真帆

研究課題：中学校で実施される合理的配慮に対する生徒及び教師の捉え方の検討

助成団体：上野一彦基金若手研究奨励プロジェクト

期間：2023 年 4 月 – 2026 年 3 月

氏名：古村真帆

研究課題：特別な教育的ニーズのある児童及び個別支援への同学級児童の捉え方 と集団づくりの検討

研究団体：日本学術振興会 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援

研究期間：2023 年 8 月 – 2025 年 3 月

氏名：古村真帆

研究課題：教師はどのような児童の言動を「発達障害の特性」と捉えるか –社会モデルの視点による検討–

助成金：公益信託 福原心理教育研究振興基金

研究期間：2023 年 8 月 – 2024 年 8 月

氏名：生田邦紘

研究課題：軽度知的障害のある青年の「ふつう」志向性について：障害受容論への新展開

助成金：日本学術振興会・特別研究員奨励費（DC1）

研究期間：2022年度—2024年度

鈴木田英里「発達障害児をもつ家族の強みを活かした支援—家族レジリエンスを促進するには？」日本学術振興会特別研究員（DC2）科学研究費助成事業特別研究員奨励費 2023年4月—2025年3月

野上 慶子・山根 隆宏 「家族認知行動療法（FCBT）家庭版プログラムの開発および効果の検証」

神戸大学GAP ファンドプログラム“うりぼーFund” 国立大学改革・研究基盤強化推進補助金 2023年5月—2024年3月

西恭平 「自傷行為への態度測定、及び学校現場での自傷予防プログラムの検討」 国立研究開発法人科学技術振興機構 次世代研究者挑戦的研究プログラム研究奨励費 2022年4月～2024年3月予定

(西恭平 「友人の存在を考慮した、中学校における自傷行為理解と支援のためのプログラム開発」日本学術振興会 特別研究員（DC2）2024年4月～2026年3月予定)

#### (4) 学生の受賞

なし

### ●表現系

表現系の教育では例年と比べて大きな変化はないが、3名の助教が戦力としてすっかり定着し、ゼミを受け持ち、修士論文審査会、修士論文中間発表会など、様々な場面で院生たちに新たな刺激となり、それが良い効果をもたらしつつあることが実感される。

#### (1) 学生の論文

青井郁美・野中哲士（2024）座位獲得以前の乳児の自発的な手の動きを契機とした養育者の言動：育児記録における検討。生態心理学研究, 16(1).

青井郁美・野中哲士（印刷中）入園直後の0歳児クラスの保育場面において保育士はいかにモノを利用するのか。認知科学

青井郁美・野中哲士（印刷中）0歳児クラスの乳児の物との関わり方はいかに変化するのか。保育学研究。

#### (2) 学生の学会発表

青井郁美・野中哲士（2024）。乳児が物に触れるこに付随して起こる保育士の関わり。日本発達心

理学会第 35 回大会, ポスター発表, 2024 年 3 月, 大阪国際交流センター

朝比奈茉穂・野中哲士 (2024). 保育園の 0 歳児クラスにおいて歌やリズムが果たす機能. 日本発達心理学会第 35 回大会, ポスター発表, 2024 年 3 月, 大阪国際交流センター

青井郁美・野中哲士 (2023). 保育士が利用するモノの価値—入園直後の 0 歳児クラスの観察における検討. 日本赤ちゃん学会第 23 回大会, ポスター発表, 2023 年 8 月, 千里ライフサイエンスセンター

森松慶子, 電子オルガン演奏における奏者の演奏体感と聴者の「共感」, 音楽の科学的研究会, 2023 年 5 月 21 日, 神戸大学

森松慶子, 電子オルガン演奏における奏者の演奏体感と聴者の「共感」II ~教育の現場と演奏の現場における事例の検討~, 日本電子キーボード音楽学会全国大会, 2023 年 9 月 3 日, オンライン(ZOOM 開催)

松井典子, オーストラリアの音楽教育システムに関する研究-Australian Music Examinations Board に着目して-, 日本音楽表現学会 第 21 回 (平安) 大会, 2023 年 6 月 18 日 (日), 京都女子大学

伊藤愛子, 認知症高齢者対象の看護実践における芸術表現の活用 : スコーピングレビュー, 第 54 回日本看護学会, 2023 年 12 月 9 日

橋澤慧, 音大生のメンタルヘルスに関する調査, 第 54 回日本音楽教育学会, 2023 年 10 月 14 日

三宅珠穂, 音楽教室の個人レッスンにおける自由即興演奏教育の研究 第 54 回日本音楽教育学会, 2023 年 10 月 14 日

岩井夏葵, 知的障害児対象の音楽科教育に関する研究 - 集団音楽活動における他者との関わりあいに焦点を当てて -, 第 54 回日本音楽教育学会, 2023 年 10 月 14 日

(3) 特別研究員, 外部資金獲得など

青井郁美 : 日本学術振興会特別研究員 DC2 (2023 年度～2024 年度)

朝比奈茉穂 : 異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム (2023 年度～2025 年度)

(4) 学生の受賞

なし

(5) その他の執筆

村松佑美 アニメーション作品『太郎さんの汽車』(1929) の音楽・音響制作。

「神戸発掘映画祭 2023・大学連携企画：サイレントアニメーション×現代のサウンド～時を超えた饗宴～」(2023年10月21日)にて上映。

(6) ゲストスピーカーの招へいなど

講師：Joy H. Calico (UCLA カリフォルニア大学ロサンゼルス校 教授)

講演題目「Blue Opera Studies: A Proposal」

講演日：2024年2月1日(木)

講師：長谷川留美子 (More Than Musical LTD. 代表. 香港在住のオペラプロデューサー)

講演題目「映画『ラ・ボエーム ニューヨーク愛の歌』はオペラか？」

講演日：2023年11月6日(月)

講師：大岡淳 (劇作家・演出家)

講演題目「21世紀の三文オペラを語る / ベルトルト・ブレヒト『三文オペラ』の魅力とは何か」

講演日：2023年6月6日(火)

講師：大熊ワタル/ こぐれみわぞう/ 関嶋種彦(音楽家)

講演題目「21世紀の三文オペラ (みわぞう sings 三文オペラ)を語り、演奏する」

講演日：2023年6月5日(月)

講師：沼田里衣 (大阪公立大学准教授・音楽療法士)

題目：「コミュニティ音楽療法の理論」「コミュニティ音楽療法の実践」

日程：2023年5月25日, 11月16日

実施授業：「ミュージックセラピー」「コミュニティと音楽」

講師：飯川雄大 (アーティスト)

題目：ワークショップ「Make Space! Use Space!」【学術Weeks2023】

日程：2024年2月11-12日

講師：いいむろなおき (マイム俳優・演出家)

題目：マイム入門

日程：2023年5月18日

実施授業：「舞踊表現特論 I -1」「身体表現論」合同 (担当：関典子)

講師：奥野亜衣 (バレエダンサー・講師)

題目：バレエ入門

日程：2023年6月29日

実施授業：「舞踊表現特論I-2」「身体表現論」合同（担当：関典子）

講師：Craig Stuart Sapp（スタンフォード大学）

題目：Humdrumによる楽譜情報の分析ワークショップ

日時：2023年11月20日～22日，15:10～16:40

実施授業：音楽音響制作ゼミ／音楽・音響デザイン特論演習2（担当：余田有希子）

### 学術Weeksシンポジウム

【企画名】音楽家のための Computational Musicology

【日程】2023年11月23日（木）14:00～16:00

【参加者】34名

【概要】本企画は、デジタルヒューマニティーズを念頭に、音楽実践者が実証的な研究に挑戦するためのアプローチ方法やその可能性について検討することを目的として開催した。基調講演として、スタンフォード大学より Craig Sapp 氏をお招きし、コンピュータによる音楽分析とデジタル楽譜情報に関する最新のツールの開発状況や、欧米における研究動向についてお話をいただいた。その後、音楽実践者による研究例として、鷺野彰子氏（福岡県立大学）と余田有希子（神戸大学）の講演を行った。鷺野氏は、演奏家としての視座から、ピアノロールの計量的解析による演奏分析について、余田は、作曲家としての視座から、サイレント映画伴奏譜の楽譜情報を用いた定量的な楽曲分析について紹介した。情報工学のバックグラウンドをもたない音楽実践者がどのようにデジタル技術を活用した研究を遂行していくのか、また音楽表現を数値化する上で生じうる矛盾や課題点について討議された。本企画には、関西、東海、九州各地から音楽実践者と情報工学の研究者が参加し、領域横断的な交流の場となった。

### ●行動系

行動系は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでおり、これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、大学院生それぞれの分野の学会での発表することのみならず、学内での各種発表会・研究会などの実質的な計画・準備・運営に参画し、積極的参加を推奨している。しかし、年度初頭の、新型コロナウイルス感染症の余波により、各種の学会大会や研究会、シンポジウム等への参加制限や、学内での実験調査や、学外調査での困難性も残る中、国内外での学会等で研究発表を行い、積極的な研究活動を展開している。今後の課題としては、国際誌への論文掲載成果と共に、国際学会での発表活動が望まれる。

## 5.2. 各専攻講座の教育

### 1. 学生の論文

#### 1) 査読付き論文

乾順紀, 長ヶ原誠, 篠田大輔 (2023) 日本語版 CSAPPA 尺度作成に関する研究: わが国的小学生への動機づけ・自信評価尺度としての適用可能性. 生涯スポーツ学研究. 20(1):11-21.

太田幸志, 原田和弘. (2023). 他者との運動実践と高齢者の運動継続との縦断的関連およびその心理的メカニズムの検証. 日本予防理学療法学会雑誌, 3: 39-50

Oriyama, K., Mukai, K., Harada, K., & Masumoto, K. (2024). Relationship Between Habitual Use and Degree of Emotion Regulation: Age Differences in Cognitive Reappraisal and Expressive Suppression. Experimental Aging Research, 1-14.

<https://doi.org/10.1080/0361073X.2024.2315917> (WoS 収録論文)

## 2) 査読無し論文

Kim Nahyun (2023). 高齢期における社会的つながる—社会参加活動の場における弱い紐帯の形成—, 2020 年度ジェロントロジー研究報告 15, 15-15.

## 2. 学生の学会発表

### 1) 国際会議

Kim Nahyun • Keiko Katagiri. Active use of online community reduces loneliness among older adults through weak time formation. GSA2023 (Gerontological Society of America)

Aoi Nishino, Marin Yamanaka, Xianyu Zhu, Benio Kibushi, The effect of Focusing on the Abductor Digiti Minimi Muscle in Towel Curl Exercise on Standing Balance, Scandinavian Sports Medicine Congress 2024, 2024. 02. 02.

Marin Yamanaka, Aoi Nishino, Xianyu Zhu, Benio Kibushi, Relationship between Straight Lift Accuracy and Lunge Grounding Characteristics in Badminton, Scandinavian Sports Medicine Congress 2024, 2024. 02. 01.

Kyoko Mukai, Koji Sato, Kei Oriyama, Kazuhiro Harada, Kouhei Masumoto (2023) Age difference in oxytocin and vasopressin's correlation with altruistic behavior. IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, 2023. 6, Yokohama

### 2) 国内学会

柳樂直人, 秋元忍, 「創設期の神戸ゴルフ俱楽部の活動を報じたイギリスの新聞・雑誌記事—1903 (明治 36) 年から 1904 (明治 37) 年の記事を対象として—」, 兵庫体育・スポーツ科学学会第 34 回大会, 神戸女子大学, 2023 年 5 月 27 日

Han, T., Miyazaki, A., Ding, T., Matsuda, T., & Ishihara, T. (2023). Association of sleep

habits with multimodal brain imaging data in young adults. The 46th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society.

Ding, T., Miyazaki, A., Han, T., Matsuda, T., & Ishihara, T. (2023). Multimodal imaging brain markers for the associations between physical fitness and cardiovascular risk markers with cognitive function in young adults. The 46th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society.

Hashimoto, S., Tamba, N., Hyodo, K., Takagishi, H., & Ishihara, T. (2023). The 46th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society.

Kim Nahyun, 片桐 恵子 高齢者SNS利用行動と孤独感の関係：—自己存在の認識の効果—  
日本老年社会学会第65回大会

Kim Nahyun, 片桐 恵子 オンラインコミュニティ上の弱い紐帶と孤独感 日本社会心理学会第64回大会

山崎朋香<sup>1</sup>, 片桐恵子 高齢者がボランティアをしない理由—ボランティア活動の阻害要因に着目して— 日本老年社会学会第65回大会

前角馨, 木伏紅緒, 木村哲也. “手部への軽い荷重負荷がトレッドミル歩行安定性に与える効果”. 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会. 2023.9.1. 同志社大学.

村田篤哉, 田上涼太, 小村薰, 前角馨, 木村哲也. “時間帯が静止立位バランスに与える影響”. 日本体力医学会第38回近畿地方会. 2024.3.2. 大阪工業大学.

小村薰, 田上涼太, 村田篤哉, 前角馨, 石原暢, 木村哲也. “静止立位時の記憶課題が体性感覚フィードバックに与える影響”. 日本体力医学会第38回近畿地方会. 2024.3.2. 大阪工業大学.

田上涼太, 村田篤哉, 小村薰, 前角馨, 木村哲也. “内外側方向の足圧中心調節における下腿部筋群協調活動の検討”. 日本体力医学会第38回近畿地方会. 2024.3.2. 大阪工業大学.

谷めぐみ・長ヶ原誠・松村雄樹・青山将己・松崎淳・乾順紀・三浦敬太・山下耕平 (2023) 子どもの運動・スポーツ推進方策と成人のスポーツ参画との関連～一般市民を対象とした検討～. 日本生涯スポーツ学会第25回学会大会 (口頭発表), 鹿屋体育大学, 2023.12.2-3.

船越和真・中川雅貴・野村圭佑・河村隆之介・三浦敬太・長ヶ原誠 (2023) 運動・スポーツの実施と加齢観に関する研究. 日本生涯スポーツ学会第25回学会大会 (ポスター発表), 鹿屋体育大学,

2023.12.2-3. 【ポスター発表賞 優秀賞】

太田幸志, 原田和弘. (2023). 他者との運動実践が高齢者の運動継続に及ぼす影響—基本属性および外向性との交互作用の検証—. 第25回日本運動疫学会学術総会. 口頭発表

太田幸志, 原田和弘. (2023). 他者との運動実践が高齢者の運動継続に及ぼす影響とその心理的メカニズムの検証. 第10回日本予防理学療法学会学術大会. 口頭発表

折山 桂, 向井 韶子, 原田 和弘, 増本 康平 (2023) 感情調整時の視覚的注意の年齢差. 日本心理学会第87回大会, 2023年9月15日

向井 韶子, 原田 和弘, 増本 康平 (2023) 高齢期の一般的信頼の性差に関する研究. 日本心理学會第87回大会, 2023年9月16日

### 3. 特別研究員, 外部資金獲得など

石原暢, 高岸治人, 寿秋露, 丹波夏希, 橋本紳之亮. 運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRS ハイパースキヤニング研究—. 公益財団法人明治安田厚生事業団第38回若手研究者のための健康科学研究助成.

Kim Nahyun 明治安田こころの健康財団 2023年度研究助成  
異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト（3年目）

木伏紅緒, 朱纓雨, 壱井達也. 筋・運動学シナジーを用いたアスリートの移動運動能力評価. 公益財団法人ヒロセ財団

### 4. 学生の受賞

受賞者 : Kim Nahyun, 片桐恵子

受賞名 : 優秀ポスター賞,

受賞演題 : 高齢者のSNS利用行動と孤独感—自己存在の認識の効果—, 日本老年社会学会

受賞者 : Kim Nahyun, 片桐恵子

受賞名 : 2023年6月第33回日本老年学総会合同ポスター（老年社会科学部門）優秀演題賞,

受賞演題 : 高齢者のSNS利用行動と孤独感—自己存在の認識の効果—, 日本老年学会

受賞者 : 西野葵

受賞名 : 2023年度優秀学生賞

機関 : 計測自動制御学会

受賞理由 : 在学期間中に査読付き国際学会大会 (Scandinavian Sports Medicine Congress2024)

において口頭発表を行ったため。

受賞者：小村薫

受賞名：2023 年度計測自動制御学会優秀学生賞

受賞者：船越和真・中川雅貴・野村圭佑・河村隆之介・三浦敬太・長ヶ原誠（2023）

受賞名：日本生涯スポーツ学会第 25 回学会大会ポスター発表 優秀賞

受賞演題：運動・スポーツの実施と加齢観に関する研究

## ●教育系

本年度は、新型コロナウイルス感染症に伴う制限が解除されたこともあり、大学院生の国内外の学術活動が積極的になされた。学会発表数は国際会議、国内学会を含め 35 本が見られ非常に旺盛である。論文発表も、査読付論文数 18 本等十分な成果がみられる。また、特別研究員、外部資金獲得も多数なされており、加えて受賞も 1 件あり、対外的にも高い評価が得られていると考えられる。来年度は一層高い研究的水準を備えた大学院教育の発展が期待される。

### (1) 学生の論文

査読付き論文（WoS 収録論文はその旨記入）

太田直樹、小学校低学年における「部分と全体の関係性」に関する実態－評価課題の開発と数の合成・分解や文章題課題との関連－、数学教育学会、数学教育学会誌 64(3・4), 11-22

赤川峰大（2023）．小学校段階における演繹的推論についての研究；児童の推移律に関する理解の実態に焦点をあてて、日本数学教育学会誌 105 卷, pp2-10.

金聯珠（2024）「韓国における教育課程編成に関する統制の変化とその課題－教育課程の自律化を中心の一」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 17 卷第 2 号, pp. 87-98, 査読有。

石谷宏行・長尾悠里・赤木和重（2024）「公立イエナプラン教育校の設立過程に見るインクルーシブ教育の可能性：福山市立常石ともに学園設立をめぐる議会・教育委員会の議事録・会議録の分析から」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 17 卷第 2 号, pp. 25-38, 査読有。

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稻垣成哲（2023. 6）「小学校理科授業における「里山管理ゲーム」の活用と評価」『科学教育研究』第 47 卷, 第 2 号, 90-105.

田中達也・山口悦司（2023. 7）「アーギュメント自己評価能力の向上を支援するための教授方略の開発と評価」『理科教育学研究』第 64 卷, 第 1 号, 3-12.

高橋あおい（2023.9）「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念を運営スタッフはどのように捉えていたのか」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第17巻、第1号、63-71。

田中達也・内海紗恵・大西鮎美・寺田努（2023.12）「児童主体の行動選択と動画活用型事後学習を含む新たな避難訓練プログラムの開発」日本科学教育学会『科学教育研究』第47巻、第4号、352-365.

口羽駿平・山口悦司・俣野源晃・坂本美紀（2023.12）「アーギュメント構成能力の持続性の検討：小学校の理科授業で育成された複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力を事例として」日本科学教育学会『科学教育研究』第47巻、第4号、374-382.

俣野源晃・山口悦司（2023.12）「アーギュメントにおける証拠の十分性に関する小学生の認識的理解の事例的検討」日本科学教育学会『科学教育研究』第47巻、第4号、392-400.

加藤優汰（2023）「梅根悟の東京文理大学卒業論文に見られる『教育改造への意志』」『研究論叢』第29号、pp.19-29。

枝廣直樹（2024）「フランスの作文教育—フレネ教育の作文集における「著者」の問題—」『教育科学論集』第27号、印刷中。

枝廣直樹（2024）「セレスタン・フレネによる協同的学校カードの変遷」『教育新世界』第72号、印刷中。

チョウシキ（印刷中）「児童虐待の社会的背景に関する実証研究—地域レベルにおけるリスクファクターに着目して—」『厚生の指標』、査読あり

星川佳加「初等中等教育におけるICTの位置づけと課題：文部科学省の政策を手掛かりに」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『教育科学論集』第26巻、2023年2月、pp.1-8。

松本圭朗「1930年代の北陸三県（富山県・石川県・福井県）における生活綴方をめぐる状況調査」『近畿大学生物理工学部紀要』(51) 13-28、2024年3月31日。

松本圭朗「今、あなたが見ているのはどんな風景ですか」『障害学研究』(19) 38-40、2023年12月25日。

友永達也（2023）「言語活動『聞き書き』で育む『戦略的判断力』—单元『聞き手が紡ぐ友語』の実践から—」『月刊国語教育研究616』日本国語教育学会。

## 査読無し論文

太田直樹, 「部分と全体の関係性」に関する研究の動向—数概念の発達に関わるアプローチー, 福山市立大学教育学部研究紀要, 第 12 号, 25-33

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・俣野源晃・瀧野哲 (2023. 6) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価:複数のステイクホルダーの意見に関する学習を支援するダイヤローグ型ビデオ教材に着目して」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 37 卷, 第 6 号, 59-62.

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・村山留美子・俣野源晃・瀧野哲 (2023. 12) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価: リスク重視傾向の変化過程の検討」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 38 卷, 第 2 号, 219-222.

田中達也・大西鮎美・寺田努 (2023. 12) 「現職教員の防災教育指導力の向上を目指した避難訓練ゲームフィケーションプログラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 38 卷, 第 2 号, 233-236.

俣野源晃 (印刷中) 「アーギュメントにおける証拠の認識的理解に焦点を当てた、複数の証拠の利用を促す授業実践例: 小学校第 4 学年「物の温度と体積」を例に」 日本理科教育学会『理科の教育』

加藤優汰 (2023) 「資料紹介 梅根悟著作目録未収資料『教育学概説』」『研究論叢』第 29 号, pp. 53-63。

星川佳加「教育実践における ICT の活用: 兵庫県 X 市における公立小学校 4 年生理科の実践事例」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『教育科学論集』第 26 卷, 2023 年 2 月, pp. 9-16。

星川佳加「ケアと対話に関する一考察: ネル・ノディングズとマルティン・ブーバーを手掛かりとして」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 17 卷第 1 号, 2023 年 9 月, pp. 1-9。

星川佳加, 井下べに, 高砂朋子, 代田盛一郎「学生の主体的活動を軸とした授業づくり: 2021 年度 A 短期大学における実践報告」神戸大学教育学会『研究論叢』第 29 号, 2023 年 6 月, pp. 67-75。

瀬川千裕, 星川佳加「教師に求められる力とは—道徳教育及び ICT 活用の変化に焦点を当てて—」神戸大学人間発達環境学研究科『教育科学論集』第 27 号, 2024 年 3 月, pp. 43-49。

友永達也 (2024) 「話し合いにおける瞬時の判断を鍛える」『教育科学 国語教育』1 月号, 明治図書。

伊藤理絵・友永達也・宮本誠一郎 (2024) 「TEM を活用した実践者と研究者による協働的な教材開発の検討」『常葉大学保育学部紀要』第 11 号。

## (2) 学生の学会発表

### 国際会議

Yoshinaga, Jun ; Hase, Ayano ;Shin, Yuichiro ;Ohyama, Masahiro ;Otsuka, Masayuki ;Mori, Yumi ; XU, Xiaoqing ‘Development of ”Let’s Launch Political Parties” Game for Citizenship Education :Toward Cultivating “Political Creativity” and Encouraging Proactive Participation in Politics’ , the 54<sup>th</sup> ISAGA(International Simulation and Gaming Association)Conference (La Rochelle Univ., France), poster session.

Tatsuya Tomonaga (2023) “Three Practices to Improve Learners’ Questioning Ability” , WALS(World Association of Lesson Studies)Conference2023Zwolle, Poster session.

### 国内学会

太田直樹 (2023) 数学絵本の意義に関する調査—教育学部生が読後に考えること—, 日本保育学会, 「日本保育学会第 76 回大会」, K297-K298

太田直樹・石川颯人 (2023) 統計教育における批判的思考を育む授業—実践でみられた児童の実態の報告—, 日本数学教育学会, 「第 105 回全国算数・数学教育研究大会発表要旨集（青森大会）」, 36

赤川峰大 (2023) . 小学校段階における三段論法の実態—中間命題の設定に焦点をあてて—, 日本数学教育学会, 第 56 回秋期研究大会発表集録, pp489-492.

金聯珠 (2023) 「自発的なカリキュラムの開発過程における授業と評価に関する教師の認識変化 —韓国の K 市 S 学校教師の事例を中心に—」教育目標・評価学会 第 34 回大会, 追手門学院大学, 2023 年 11 月 26 日

長尾悠里 (2023) 「学校からみる地域社会 —「子どものため」と地域の行先—」函館人文学会令和 5 年度年次大会, 北海道教育大学函館校, 2023 年 7 月 10 日

長尾悠里 (2023) 「小規模特認校からみえる教員と地域の関係」日本教育制度学会第 30 回大会, 筑波大学, 2023 年 11 月 12 日

松田華織 (2023) 「インドネシアにおける障がい児の初等教育就学の格差に関する分析」日本比較教育学会第 59 回大会, 上智大学, 2023 年 6 月 18 日

松田華織 (2023) 現代米国における「インクルーシブ教育」と「共通スタンダードテストに基づく教育改革」との相互矛盾と対応過程」日本教育行政学会第 59 回大会, 千葉大学, 2023 年 10 月 14 日

松田華織 (2023) 「卒論, 修論どうする? どう指導する?」日本教育行政学会 2023 年度ワークショップ (若手ネットワーク企画), オンライン開催, 2024 年 3 月 11 日

俣野源晃・山口悦司 (2023. 5) 「アーギュメントにおける十分な証拠の利用の向上を目指した小学校理科授業デザインの改善：証拠の十分性に関する認識的理解の深化に着目して」『日本理科教育学会九州支部大会発表論文集』第 49 卷, 21-22.

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・俣野源晃・瀧野哲 (2023. 5) 「科学技術の社会問題を題材とした小学生向け教育プログラムの評価：ゲノム編集の基礎知識・ステイクホルダーの意見文に関する教材に着目して」『日本理科教育学会九州支部大会発表論文集』第 49 卷, 25-26.

田中達也・堀本拓弥 (2023. 6) 「保育者を対象とした ICT 活用型避難訓練研修プログラムの開発」『防災教育学会第 4 回大会予稿集』上巻, 10-11.

田中達也 (2023. 9) 「教員志望大学生のアーギュメント指導力の向上を目指した教師教育プログラムの構想：アーギュメント自己評価能力に着目して」『日本科学教育学会第 47 回年会論文集』547-548.

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・村山留美子・俣野源晃・瀧野哲 (2023. 9) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価：意思決定における賛否の立場とリスク重視傾向に着目して」『日本科学教育学会第 47 回年会論文集』601-602.

田中達也 (2023. 9) 「防災・減災の視点をもった理科授業構想の提案」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 21 号, 199.

俣野源晃・山口悦司・阿部月歩・玉置実優 (2023. 9) 「証拠の認識的理解に着目した複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力の育成を目指した小学校理科授業デザイン改善の評価：アーギュメント構成能力の観点から」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 21 号, 352.

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・村山留美子・俣野 源晃・瀧野哲 (2023. 9) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価：意思決定の正当化に着目して」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 21 号, 424.

坂本美紀・山口悦司・山本智一・口羽駿平・原愛佳・近江戸伸子・村山留美子・俣野源晃・瀧野哲 (2023. 9) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価：学習後のリスク認知と思考態度」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 21 号, 425.

加藤優汰「戦後新教育期における梅根悟のカリキュラム論－愛知学芸大学愛知第一師範学校春日井附属小学校の実践に着目して－」教育史学会第 67 回大会（北海道大学：オンライン），2023 年 9 月 23 日。

蓑毛智樹「『文検修身科』受験者の研究—川島次郎の受験体験と修身教育論を中心に—」神戸大学教育学会 2023 年度総会（神戸大学），2023 年 7 月。

蓑毛智樹「『文検修身科』試験委員としての井上哲次郎の研究」教育史学会第 67 回大会（北海道大学：オンライン），2023 年 9 月。

枝廣直樹（2023）「セレスタン・フレネによる『興味の複合』の具体化—協同的学校カードの実践を中心に—」2023 年度世界新教育学会国際教育フォーラム（広島国際大学），2023 年 9 月。

増田莉子「中学校家庭科家族領域の高齢者学習に関する一考察」日本家政学会家族関係学部会 第 43 回 家族関係学セミナー（徳島文理大学），口頭発表

増田莉子「中学校家庭科における市民性教育を視点とした授業分析」日本教科教育学会第 49 回全国大会（弘前大学），ポスター発表

羽瀬彩乃・吉永潤・徐小晴「主権者教育における『政党旗揚げゲーム』の開発—『政治的創造力』の育成を目指して」第 72 回全国社会科教育学会（岡山大学），口頭発表，2023 年 11 月。

星川佳加「戸田唯巳の「学級というなかま」実践に関する一考察—1954 年 10 月頃の実践「いわれてつらいことは」に焦点をあてて—」日本教育方法学会第 59 回大会，2023 年 10 月。

星川佳加，大内田真理，井下べに「幼稚園教員養成・保育士養成課程における実習を軸とした教育実践：実習指導の取り組み」関西教育学会第 75 回大会，2023 年 11 月。

星川佳加，井下べに，大内田真理「幼稚園教員養成・保育士養成課程における実習を軸とした教育実践：音楽表現の取り組み」関西教育学会第 75 回大会，2023 年 11 月。

松本圭朗「Z 短期大学における「教育方法論」の実践報告」 大学評価学会第 21 回大会 2024 年 3 月 3 日。

松本圭朗「勝田守一の教科指導概念の史的展開に関する一考察」日本教育方法学会第 59 回大会 2023 年 10 月 15 日。

友永達也（2023）「インタビュー学習で見られた『話すこと・聞くこと』の判断—聞き書きプログラムに取り組む子どもたちの姿から—」『第 32 回夏季研究集会・K Z R（国語教育実践理論研究会）総会』口頭発表。

友永達也（2023）「コミュニケーションにおける戦略的判断力の発揮とその育成『聞き書きプロジェ

クト』に取り組む学習者の姿から』『第 145 回全国大学国語教育学会信州大会』口頭発表。

### (3) 特別研究員、外部資金獲得など

赤川峰大. 「証明」の萌芽としての「説明」の研究；児童実態の大規模調査とアプリを用いた学習プログラムの開発・実践を通して、公益財団法人博報堂教育財団第 17 回児童教育実践についての研究助成。 [研究期間：2022 年 4 月－2024 年 3 月]

赤川峰大. 小学校算数科における演繹的な説明構成力の研究；普遍例化に着目して、2023 年度奨励研究。 [研究期間：2023 年 4 月－2024 年 3 月]

松田華織 (2023) 「米国の個別の教育計画 (IEP) に関する研究 一共生社会構築との連関に注目して一」令和 5 年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択 (国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 次世代研究者挑戦的研究プログラム)

松田華織 (2024) 日本学術振興会特別研究員 (DC2) 採用内定、研究課題「現代米国における『学力向上』と『インクルーシブ教育』の共存可能性に関する研究」高橋あおい (2023) 日本学術振興会 特別研究員 (DC2)

高橋あおい (2023) 特別研究員奨励費「科学系博物館における幼児を対象とした学習支援を実現するための理念と展示運営の関係」(課題番号 22J12376)

青木良太 (2023) 神戸大学・次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING)

俣野源晃 (2023) 奨励研究「児童に適切なエビデンス選択能力を育成するための教員研修プログラムの開発」(課題番号 23H05048)

田中達也 (2023) 研究活動スタート支援「変革を起こすコンピテンシーを育成する防災教育の開発：探究型アーギュメントへの着目」(課題番号 23K18885)

蓑毛智樹 (2022) 日本学術振興会 2023 年度特別研究員 (DC2)，研究課題名 「『文検修身科』の研究—戦前期における教員の学びの歴史的検討—」

枝廣直樹 (2023) 異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト生、研究題目「子どもの主体性を重視する学校教育の研究—セレスタン・フレネの興味の複合から—」

井上太一「代替不可能に生きるための生涯学習論：障害福祉施設における就労支援の中斷に着目して」特別研究員奨励費

松本圭朗, 科研費研究活動スタート支援(勝田守一の教育学構想における教育方法論の検討),  
2022. 8. 31–2024. 3. 31.

友永達也(研究代表者), 科研費奨励研究, 2024 年度～2025 年度 (ICT を活用した音声言語の評価方法開発—AI による音声文字化と動画編集機能を中心に-)。

友永達也(研究代表者), 博報堂教育財団第 18 回児童教育実践についての研究助成, 2023 年度～2025 年度 (幼小を貫く『質問力育成カリキュラム (試案)』の開発と有効性の検証)。

#### (4) 学生の受賞

田中達也 (2023) 日本科学教育学会・若手活性化委員会・ベストプレゼンテーション賞受賞

#### (5) ゲストスピーカーの招へいなど

下吉美香 (2023) 初等理科教育論・ゲストスピーカー

川崎弘作 (2023) 学術講演会「理科教育と問題解決学習」講師

瀧川幸加 (2023) 2023 年度大学院前期課程における高度教員養成プログラム・高度教員セミナー「反転授業の特徴と設計のポイント」講師

教育原理（世界と日本の学校教育）及び初等道徳教育論ゲストスピーカー

アクセル・ゲールマン氏（ドレスデン工科大学・教師教育研究センター長）「ドイツの学校と教師教育—歴史的・今日的展開—」2023 年 11 月 21 日。

教育原理（世界と日本の学校教育）ゲストスピーカー

横山真歩氏（ペナン日本人学校教諭）「海外での教員生活について」2024 年 1 月 25 日。

井上太一「大学生発！みんなのマナビ、私のマナビ」（シンポジウム）『超福祉の学校』（渋谷ヒカリエ）NPO 法人ピープルデザイン研究所, 2023 年 10 月 29 日

Kersten Kenklies 「Word that Matter: Concepts in Comparative Education」2023 年 6 月 5 日  
17:00–18:30。

道田泰司（琉球大学教授）「児童生徒の疑問に基づいた授業はどのように行なうか」2023 年 7 月 21 日（金）17:00–18:30。

#### 学術 Weeks シンポジウム

「ライティング指導の挑戦：アカデミック・ライティングを超えて」（主催川地亜弥子），2023 年 11 月 19 日（日）13:30～16:30，オンライン。

「教師教育における書くことの展開と可能性：書くことを教える、教えることを書く」（主催川地亜弥子）2024年3月24日（日）10:00～12:00、オンライン。

（人間発達専攻長 木下孝司）

### 5.2.2. 人間環境学専攻

#### (1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と4教育研究分野の主任の計5名から構成される。今年度は、運営会議を4回、全体会議を3回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議決定した。

今年度は、学域方針に沿って、准教授人事の検討と選考に関連する人間環境学セミナーを2回開催し、研究ならびに教育内容の議論も行った。その結果として、2023年10月より准教授を2名採用した。

#### (2) 予算

各コースの学生の下記の所属人数に応じて配分した。（休学を0.5としてカウント）

表 博士課程前期課程ならびに後期課程の在席学生数

教育研究分野	博士課程前期課程	博士課程後期課程
環境自然科学	32.5	12
環境数理科学	2	1
生活共生科学	15	7
社会共生科学	9.5	2.5
計	59	22.5

#### (3) 入試

前期課程入試については推薦入試（7月、対面）、1次（9月、対面）、2次（12月、遠隔）、3次（3月、遠隔）を行った。推薦入試については、プレゼンテーション、口頭試問、書類審査、ならびに外国語科目試験を総合的に評価した。1次については、試験区分ごとに専門科目について筆記試験を行い、口頭試問、外国語科目試験とともに総合的に評価した。2次と3次については、試験区分ごとに専門科目について遠隔で口述試験を行い、外国語科目試験とともに総合的に評価した。

後期課程入試は1次（8月）、2次（2月）に行った。後期課程入試に関しては、「受験生のプレゼンテーションならびに質疑応答、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。本年度の1次2次とも対面入試を実施した。

博士前期課程は定員を充足することができなかった。

#### (4) 教育

大学院生は修士論文、博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、学生に対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。本年度は、原則的に指導は通常の対面方式に戻った。BEEFならびにZoomを併用することで、遠方のゲストスピーカーの依頼が可能となり、時間な

らびに空間も柔軟に効率的に学生指導できるなど、コロナ禍前より多角的に教育指導を行うことができた。

#### (5) 広報

博士課程前期受験検討者に対し、オープンラボの期間が設けられ、研究室ごとに受験相談を行った。春および秋シーズンのオープンラボウィークスの実績は合計で、自然 11 名、数理 3 名、生活 1 名、社会 9 名であった。

#### (6) 学外研究者を招いての国際講演・シンポジウム等

Exchange research program between TU-Dresden and Kobe University 2023

TUD Dresden research and Science education(ドレスデン工科大学での自然科学研究ならびに教育システム)

日程：2023 年 10 月 23 日（月）

場所：鶴甲第 2 キャンパス F 棟 151

学術交流協定を締結しているドイツ・ドレスデン工科大学理学研究科の大学院生の Nicola Schmidt 氏と Woorin Kim 氏をスピーカーに招いての国際学術セミナーを実施した。参加者 22 名 二国間交流事業セミナー

Exchange research program between Germany and Kobe 2023

DeLWine: Select wine quality from genome information (ゲノム情報で上質ワインを育成する)

日程：2023 年 11 月 16 日（木）

場所：鶴甲第 2 キャンパス F 棟 151

学術交流協定を締結しているドイツ・ドレスデン工科大学 Stefan Wanke 氏スピーカーに招いての国際学術セミナーを実施した。参加者 17 名 二国間交流事業セミナー

Exchange program between Poland and Kobe University 2023

The evolution of the Angiosperm genome from the cytogenetic point of view (被子細胞遺伝学的見地からの植物ゲノム進化)

日程：2023 年 6 月 6 日（火）

場所：鶴甲第 2 キャンパス F 棟 151

エラスムス+ならびに学術交流協定を結んでいるシレシア大学の Natalia Borowska-Zuchowska 氏をスピーカーに招いての国際学術セミナーを実施した。参加者 25 名 エラスムス+予算

Seminar on Ecosystem Service Accounting, Valuation and Conservation for Sustainable Development and Human Well-being

日程：2023 年 5 月 25 日（木）

場所：鶴甲第 2 キャンパス 大会議室

オランダの Wageningen University から Lars Hein 教授を招き、国内の主要研究者を集めた研究セミナーを実施した。参加者 50 名

## (7) 学生の受賞

在学中の大学生ならびに大学院生が以下のように受賞した。

受賞者：下舞陽菜（博士課程前期課程2年、指導教員：近江戸伸子）

賞の名称：Plant Chromosome Biology: Cytogenetics meeting 2023 Best poster award

受賞対象：Urban environments, chromosome formula and polyploidization in two *Commelina* species

受賞年月：令和5年9月15日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：高 嘉誠（博士課程後期課程1年、指導教員：佐藤春実）

賞の名称：令和5年度日本分光学会年次講演会若手ポスター賞

受賞対象：Study on Brill transition and crystalline properties of polyamide using multiple spectroscopic techniques

受賞年月：2023年10月5日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：丸山陽大（博士課程前期課程2年、指導教員：佐藤春実）

賞の名称：令和5年度日本分光学会年次講演会若手ポスター賞

受賞対象：テラヘルツ分光法と量子化学計算による ポリトリメチレンテレフタレートの高次構造解析

受賞年月：2023年10月5日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：畠山昌寛（博士課程前期課程2年、指導教員：佐藤春実）

賞の名称：極低温部門賞 神戸大学 研究基盤センター 若手フロンティア研究会

受賞対象：低波数領域の振動分光法による P(LLA-co-CL) 共重合体の高次構造の検討と海洋分解性の評価

受賞年月：2023年12月26日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：國政祐太（博士課程前期課程2年、指導教員：源利文）

賞の名称：日本陸水学会第87回大会最優秀ポスター発表賞

受賞対象：環境DNA分析を用いたニホンウナギのハビタット推定

受賞年月：令和5年10月14日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：楊 時宇（博士課程後期課程1年、指導教員：大野朋子）

賞の名称：2023年会優秀発表賞（富士電機賞）、最優秀発表賞

受賞対象：神戸市における市民農園の経年的分布変化とその周辺土地利用との関係性

受賞年月：令和 5 年 9 月 8 日

受賞理由：発表ポスターが最優秀と評価されたため

受賞者：多田 寿々香（学部 4 年，指導教員：大野朋子）

賞の名称：2023 年会優秀発表賞（富士電機賞），優秀発表賞

受賞対象：神戸市都心部における屋上緑化の実態から捉えた都市環境向上への提案

受賞年月：令和 5 年 9 月 8 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：草山 連（博士課程前期課程 2 年，指導教員：村山留美子）

賞の名称：2023 年度日本リスク学会 大会優秀発表賞（ポスター部門）

受賞対象：日本人の化学物質に対するフォビアに関する研究

受賞年月：令和 5 年 12 月 5 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

（人間環境学専攻長 近江戸伸子）

## 6. 進路

### 6.1. キャリア形成支援

#### 6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター（鶴 2CSC）は、発達科学部・国際人間科学部の学部生と人間発達環境学研究科の大学院生を対象に、学生のキャリア形成を実践的にサポートする活動を行った。これらは、就職活動及びキャリア形成支援、情報発信の 2 つに大別される。以下、それぞれの活動に関し詳述する。

##### （1）就職活動及びキャリア形成支援

例年通り、就職活動中の学生を対象に、下記の個別相談（カウンセリング）を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接
- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は 375 人であり、その内訳は、発達科学部：4 人、人間発達環境学研究科：117 人、国際人間科学部：229 人、海事科学部：8 人、理学部：5 人、法学部：4 人、文学部：3 人、農学部：1 人、理学研究科：1 人、人文学研究科：1 人、農学研究科：1 人、システム応用学研究科：1 人であった。（※ 2 月 22 日時点の人数です）

さらに、下記のセミナー・説明会を開催した。

- ・就職活動全般
- ・教員採用試験対策（公立、私立）

- ・自治体教育委員会による教員採用試験に関する説明会
- ・心理・福祉職、環境職、デザイン・クリエイティブ枠に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーのタイトルは、下記の一覧を参照されたい。セミナーの総数は 39、総参加人数は 678 人であった。(※セミナーの総数は開催予定分を含み、総参加人数は 2 月 22 日時点の実績)

上記に加え、今年度も、発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科の OBOG 訪問の仲介を実施した。

- ・OBOG 訪問受付件数：96

(※2 月 22 日時点の実績です)

また、昨年度と同様、「内定者獲得紹介システム」を運用した。本紹介システムは、鶴 2CSC の仲介により、就職先の内定獲得あるいは合格を果たした発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科に在学中の学生に対し、同じ就職先を志望する学生が直接会って、当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば、具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。

具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録人数：27
- ・内定先（企業か官公庁等）の数：66
- ・内定獲得者と下級生との面談回数：3

(※2 月 22 日時点の実績)

## (2) 情報発信

キャリア支援に関する各種情報の発信を行った。

- ・企業からの大学推薦の求人情報
- ・公立・私立の教育機関（幼稚園、保育園、小中高）からの求人情報
- ・心理・福祉系の外部機関からの求人情報
- ・他大学の大学院募集情報
- ・学内セミナー（当センター主催分と学内の他の支援組織の主催分の両方）の開催情報
- ・外部業者から入手した関連情報

上記の情報を、学生向け一斉メール（鶴 2CSC ニュース）、掲示板、Twitter 等の媒体を使って発信した。

### 【今年度開催したセミナー一覧】※オンラインまたは対面

1. 4 月 11 日（火）教員採用 「大阪府豊能地区教員採用選考試験説明会」
2. 4 月 12 日（水）就職活動支援 「就活スタートアップ講座 －企業編－」
3. 4 月 13 日（木）教員採用 「堺市教員採用選考試験説明会」
4. 4 月 18 日（火）就職活動支援 「インターンシップ対策講座 －準備編－」
5. 4 月 19 日（水）就職活動支援 「就活スタートアップ講座 －公務員・併願編－」
6. 4 月 20 日（水）教員採用 「神戸市教員採用選考試験説明会」
7. 4 月 21 日（金）キャリア支援 「初年次セミナー（環境共生学科 1 年）」
8. 4 月 24 日（月）教員採用 「私学教員スタートアップガイダンス」
9. 4 月 25 日（火）教員採用 「京都府教員採用選考試験説明会」

10. 4月 26日（水）教員採用 「兵庫県教員採用選考試験説明会」
11. 4月 27日（木）就職活動支援 「インターンシップ対策講座 ー自己分析編ー」
12. 4月 28日（金）キャリア支援 「初年次セミナー（発達コミュニティ学科1年）」
13. 5月 9日（火）就職活動支援 「インターンシップ対策講座 ー業界研究編ー」
14. 5月 16日（火）公務員「大阪府福祉専門職職場説明会」
15. 5月 23日（火）就職活動支援 「インターンシップ対策講座 ーES編ー」
16. 5月 30日（火）就職活動支援 「インターンシップ対策講座 ーSPI編ー」
17. 6月 8日（木）就職活動支援 「インターンシップ対策講座 ー面接編ー」
18. 6月 13日（火）就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
19. 6月 22日（木）就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
20. 6月 28日（水）就職活動支援 「グループディスカッション対策講座」
21. 6月 29日（木）公務員 「心理・福祉系公務員セミナー」
22. 7月 4日（火）公務員 「行政職公務員セミナー」
23. 10月 4日（水）就職活動支援 「本選考に向けたインターンシップ振り返り講座」
24. 10月 6日（金）就職活動支援 「後期スタートアップ講座」
25. 10月 13日（金）就職活動支援 「ES ブラッシュアップ講座」
26. 10月 17日（火）就職活動支援 「秋の業界・仕事研究講座①」
27. 10月 19日（木）就職活動支援 「秋の業界・仕事研究講座②」
28. 10月 20日（金）就職活動支援 「秋の業界・仕事研究講座③」
29. 11月 6日（月）公務員 「神戸市福祉職説明会」
30. 11月 9日（木）公務員 「元家庭裁判所調査官による心理・福祉系公務員セミナー」
31. 11月 14日（火）公務員 「行政職公務員セミナー」
32. 11月 16日（木）就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
33. 11月 21日（火）就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
34. 12月 5日（火）教員採用 「神戸市教員採用選考説明会」
35. 12月 7日（木）教員採用 「私立教員セミナー」
36. 12月 13日（水）教員採用 「大阪府教員採用選考説明会」
37. 12月 14日（木）教員採用 「京都府教員採用選考説明会」
38. 12月 18日（月）教員採用 「兵庫県教員採用選考説明会」
39. 1月 30日（火）公務員 「神戸市役所 デザイン・クリエイティブ枠 採用説明会」
40. 3月 14日（木）公務員 「兵庫県環境科学職採用説明会」

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

### 6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催の「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを令和5年4月5日（水）に対面（大会議室）及びZoomによるWeb開催を併用するハイブリッド方式で実施した。

青木茂樹研究科長より特別研究員制度の概要についての説明、佐藤春実教授より審査委員経験を踏まえた申請書作成などに関するアドバイスがなされた。さらに、人間発達環境学研究科で採用された

特別研究員 2 名により、採用に至る経験談や申請や審査に関わる留意点などの紹介がなされた。

対面での参加者は 22 名、オンラインでの参加者は 6 名、合計 28 名で、多くの参加者があった。なお、令和 5 年度特別研究員 DC 採用者は、新規で 5 名 (DC1 が 2 名、DC2 が 3 名) であった。DC 採用者の内 3 名は全員昨年度の本セミナーの参加者であった。昨年と同様に今回も好評であった。

#### ○「学振特別研究員への応募のススメ」

- ・日時:令和 5 年 4 月 5 日(水)11:00~12:30 対面 (大会議室) とオンライン (zoom) 開催の併用
  - 1 ) 特別研究員制度の概要と本研究科の現状 (青木茂樹 教授)
  - 2 ) 審査・選考の実際-審査経験者の立場から (佐藤春実 教授)
  - 3 ) 申請の実際-応募者の立場から(1) (人間環境学専攻大学院生)
  - 4 ) 申請の実際-応募者の立場から(2) (人間発達専攻大学院生)

(学生委員会委員長 江原靖人)

## 6.2. 卒業・修了後の進路

令和 5 年度の発達科学部卒業生・国際人間科学部卒業生の就職状況は、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者数や進学者数ほぼ例年通りであった。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、特に研究職の場合は公募による就職が主となるため年度ごとに様相が異なるが、常勤の大学教員および学振特別研究員 (PD, RPD) が 5 名、公務員 1 名など、専門性を活かしたキャリア選択を実現しており、就職状況は概ね良好であった。進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(学生委員会委員長 江原靖人)

## 7. 研究

### 7.1. 今年度の特長

#### 7.1.1. 研究動向

##### (1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去 6 年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。令和 5 年度の活動 (KUID をもとに調査) は、「論文」339 件、「著書」45 件となっておりここ数年の値と同等である。「研究発表等」については新型コロナウイルスの影響により低い数字が続いているが、例年に近い数字に戻ってきている。

	平成 30 年度	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
論文	310	319	326	396	365	339
著書数	79	53	63	45	53	45
研究発表等	474	440	282	349	372	428

##### (2) 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本(社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係、社会的結束力)の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究(人間発達環境学研究科の機能強化に資する研究)をより一層推進することを目的として、領域横断的型プロジェクト研究や文理融合型プロジェクト研究、国際共同研究に重点配分するとともに、若手教員による積極的な申請を奨励した。

令和5年度に研究推進委員会にて選定した共同研究は、以下のとおりである。

- ① 研究課題：しょうがエキスを用いた口腔内刺激による唾液分泌促進効果の検証

研究代表者：湯浅正洋

共同研究者：木伏紅緒

決定額：500千円

- ② 研究課題：位置測位システムを活用したリスク・マネジメントに関する実践的研究～子どもの報告・教師のみとりの内容と保健データの比較～

研究代表者：岡部恭幸

共同研究者：北野幸子、渡邊隆信

決定額：500千円

- ③ 研究課題 Well-being に資する社会関係資本を構築する「場」の異分野共創的検討：神戸市および近隣地域の構築環境を対象として

研究代表者：打田篤彦

共同研究者：片桐恵子、原田和弘、増本康平、丑丸敦史、源利文、内山渝太、佐藤真行

決定額：700千円

- ④ 研究課題：適応的スキル発達をめぐる異分野共創研究

研究代表者：野中哲士

共同研究者：林創、木村哲也、山本健太、石原暢、木伏紅緒、清水大地、岡野真裕

決定額：700千円

- ⑤ 研究課題：市民の住環境と生態系ディスサービスへの応答の解明—スズメバチ駆除依頼件数、個体群密度、地理情報を用いた多変量解析—

研究代表者：佐賀達矢

共同研究者：内山渝太

決定額：600千円

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

### 7.1.2. 学生の受賞

令和5年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

#### 【人間発達専攻】

受賞者 : Kim Nahyun, 片桐恵子

受賞名 : 優秀ポスター賞,

受賞演題 : 高齢者の SNS 利用行動と孤独感—自己存在の認識の効果—, 日本老年社会学会

受賞者 : Kim Nahyun, 片桐恵子

受賞名 : 2023年6月第33回日本老年学総会合同ポスター（老年社会科学部門）優秀演題賞,

受賞演題 : 高齢者の SNS 利用行動と孤独感—自己存在の認識の効果—, 日本老年学会

受賞者 : 西野葵

受賞名 : 2023年度優秀学生賞

機関 : 計測自動制御学会

受賞理由 : 在学期間に査読付き国際学会大会 (Scandinavian Sports Medicine Congress2024)において口頭発表を行ったため。

受賞者 : 小村薫

受賞名 : 2023年度計測自動制御学会優秀学生賞

受賞者 : 舟越和真・中川雅貴・野村圭佑・河村隆之介・三浦敬太・長ヶ原誠 (2023)

受賞名 : 日本生涯スポーツ学会第25回学会大会ポスター発表 優秀賞

受賞演題 : 運動・スポーツの実施と加齢観に関する研究

受賞者 : 田中達也

受賞名 : (2023) 日本科学教育学会・若手活性化委員会・ベストプレゼンテーション賞受賞

#### 【人間環境学専攻】

受賞者 : 下舞陽菜 (博士課程前期課程2年, 指導教員: 近江戸伸子)

賞の名称 : Plant Chromosome Biology: Cytogenetics meeting 2023 Best poster award

受賞対象 : Urban environments, chromosome formula and polyploidization in two *Commelina* species

受賞年月 : 令和5年9月15日

受賞理由 : 発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者 : 高嘉誠 (博士課程後期課程1年, 指導教員: 佐藤春実)

賞の名称 : 令和5年度日本分光学会年次講演会若手ポスター賞

受賞対象 : Study on Brill transition and crystalline properties of polyamide using multiple

spectroscopic techniques

受賞年月：2023 年 10 月 5 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：丸山陽大（博士課程前期課程 2 年，指導教員：佐藤春実）

賞の名称：令和 5 年度日本分光学会年次講演会若手ポスター賞

受賞対象：テラヘルツ分光法と量子化学計算による ポリトリメチレンテレフタレートの高次構造解析

受賞年月：2023 年 10 月 5 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：畠山昌寛（博士課程前期課程 2 年，指導教員：佐藤春実）

賞の名称：極低温部門賞 神戸大学 研究基盤センター 若手フロンティア研究会

受賞対象：低波数領域の振動分光法による P(LLA-co-CL) 共重合体の高次構造の検討と海洋分解性の評価

受賞年月：2023 年 12 月 26 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：國政祐太（博士課程前期課程 2 年，指導教員：源利文）

賞の名称：日本陸水学会第 87 回大会最優秀ポスター発表賞

受賞対象：環境 DNA 分析を用いたニホンウナギのハビタット推定

受賞年月：令和 5 年 10 月 14 日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：楊 時宇（博士課程後期課程 1 年，指導教員：大野朋子）

賞の名称：2023 年会優秀発表賞（富士電機賞），最優秀発表賞

受賞対象：神戸市における市民農園の経年的分布変化とその周辺土地利用との関係性

受賞年月：令和 5 年 9 月 8 日

受賞理由：発表ポスターが最優秀と評価されたため

受賞者：多田 寿々香（学部 4 年，指導教員：大野朋子）

賞の名称：2023 年会優秀発表賞（富士電機賞），優秀発表賞

受賞対象：神戸市都心部における屋上緑化の実態から捉えた都市環境向上への提案

受賞年月：令和 5 年 9 月 8 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：草山 連（博士課程前期課程 2 年，指導教員：村山留美子）

賞の名称：2023 年度日本リスク学会 大会優秀発表賞（ポスター部門）

受賞対象：日本人の化学物質に対するフォビアに関する研究

受賞年月：令和5年12月5日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

(学生委員会委員長 江原靖人)

## 7.2. 学術 Weeks

学術 WEEKS は「国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資すること」を目的とした本研究科独自の取り組みである。毎年、秋期を中心として海外・国内から多くの研究者を招聘し、研究集会等の学術交流を行っている。多様な研究領域を擁する本研究科の特色が存分に生かされた取り組みであり、良質な領域横断的プログラムが提供されてきた。多くの大学院生・学部生にとって、様々な分野の国際交流を通して、自分の研究を見つめ直し、研究会の企画、運営、発表などの多くのスキルを習得するための有益な機会となっている。

本年度は、5月初旬に新型コロナウィルスの感染症が5類感染症に移行されたこともあり、対面で企画が開催できるようになった。企画内容としては、教育、音楽、美術、造詣等の領域を中心に、国内外の研究者・実践家との連携を通じて、人間発達をめぐる最先端の課題について大学院生、学生を交えた活発な議論や意見交換がなされるシンポジウム形式での試み、多文化的、文化伝承的な視点から芸術の新たな可能性を模索する試みなど、グローバルな視点での取り組みが活発に展開された。新型コロナウィルスのパンデミックを経て、再び人間発達研究を活発化させる機運を予感させるものであった。個別の企画内容に関しては以下の例を参照されたい。

(学術 WEEKS2023WG 主査 田畠智博)

### 7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー

(1) Exchange program between Dresden and Kobe University 2023 “TUD Dresden research and Science education” (ドレスデン工科大学での自然科学研究ならびに教育システム)

【日 程】2023年10月23日（月）10:40-12:10

【参加者】22名（学生 19名、教員 3名）

#### 【概 要】

学術交流協定を締結しているドレスデン工科大学 (TUD) はエクセレンス・イニシアティブ指定校（ドイツ政府の認定した世界のトップクラスの水準を備えた指定大学）である。Nicola Schmidt 氏からはドイツの大学院の高等教育システムについて、Woorin Kim 氏は大韓民国から TUD の大学院に留学しているので、東アジアからドイツ国への大学院留学について、ご自身の経験を話していただいた。特に、海外での大学院教育に興味のある学生にとっては、ワークライフバランス、ドイツ、TUD で学べることが明確になった。

(人間環境学専攻 近江戸伸子)

(2) フィールドワーク遺伝資源植物調査

【日 程】2023年10月28日（土）-30日（月）

【参加者】5名（ドイツTUD大学院生 2名、学生 2名、教員 1名）

【概要】

島根県松江市で2か所、奥出雲市2か所、出雲市大社町、出雲市海岸部の各地点でツユクサならびにケツユクサの分布状況について調査した。調査地では、京都、大阪、兵庫とは異なりケツユクサの存在は見られなかった。また海岸部では塩害の影響受けて枯れが促進されていた。この調査結果は本研究科大学院生の国際論文発表に資する。

（人間環境学専攻 近江戸伸子）

(3) Exchange program between Dresden and Kobe University 2023 "DeIWine: Select wine quality from genome information" (ゲノム情報で上質ワインを育成する)

【日程】2023年11月16日（木）15:40-16:40

【参加者】17名（学生 15名、教員 2名）

【概要】

TUDのStefan Wanke教授は顕花植物の遺伝資源についてのゲノム研究の第一人者である。本学術セミナーでは、ヨーロッパで需要の多い嗜好品のワインについて、品質を制御する複合形質に着目し、ゲノム情報の利用で有効に選抜する戦略を紹介した。ワイン生産のために病原菌に強いブドウ品種は、殺菌剤の使用を大幅に減らす可能性がある。EUがグリーン・ディール構想の中では、ドイツのブドウ生産における農薬使用の50%削減目標に貢献することを目標にしている。病原菌に耐性のあるブドウ品種の選抜のみならず、この20年間にわたって問題になってきたワインの品質低下の回復も必要となる。この品質のボトルネックを回避するためには、複合的な要素から構成されるブドウの熟成形質とワインの品質の両者に関する遺伝子領域予測モデルの開発が、良品質育種プロセスを加速させるために不可欠である。その研究について紹介し、その後参加者の学生から多くの質問があり、議論が有意義であった。

（人間環境学専攻 近江戸伸子）

(4) 日本とオーストリアにおける心理職養成課程学びの文化比較

【日程】2023年11月14日（火）13:20~14:50

【参加者】14名

【概要】

グラーツ大学の心理学部からの留学生Paul Pietschさんを招き、学術Weeks 2023を行った。グラーツはオーストリアの人口第二の都市であり、グラーツ大学は世界遺産に登録されているグラーツの市街—歴史地区に近い場所に位置する。オーストリアでは心理学における著名な研究者を輩出しているが、グラーツではゲシュタルト心理学グラーツ学派などの活躍も記されており、歴史的にも心理学における功績の大きい地域である。こうした背景を持つオーストリアにおける心理職養成課程の学びについて調べ、神戸大学とグラーツ大学の教育課程に注目し文化比較を行い、心理職養成のための学びについて検討した。

具体的には、公認師心理師受験資格取得のためのカリキュラムとオーストリアにおけるpsychologistの資格取得のためのカリキュラムを比較し、その文化差を検討することを通して、

心理職養成課程の特徴について議論し深めていった。

本邦では2015年（平成27年），公認心理師法が公布された。これにより国民の心の健康の保持増進に寄与することを目的に，国家資格として公認心理師の資格が定められた。公認心理師の資格を得るためにには，国家試験に合格し登録する必要がある。この受験資格を得るための方法にはいくつかのルートがある。そのうち4年制大学および大学院において定められた科目を系統的に履修し資格を取得するルートでの学びは，psychologistの資格取得にかかわるカリキュラムに対応することが明らかとなった。

次に学習内容について，神戸大学で公認心理師の受験資格を取得する学生のカリキュラムと，グラーツ大学でPsychologistの称号を得るためのカリキュラムを比較検討した。心理学に関する基礎的な科目の内容は，両校で概ね類似していた。しかし心理学を学ぶ時間は，グラーツ大学でより多かった。一方，神戸大学では心理学以外の科目を学ぶ時間が多く，それぞれのカリキュラムの特徴を見出すことができた。

オーストリアでPsychologistの称号を得た者のうち，精神病理学，健康行動，健康増進，健康心理学と臨床心理学の分野における心理的介入などの実践的な心理学に関する科目の単位を習得している者は，Clinical Psychologist, Health Psychologistの資格取得のための過程に進むことができる。こうした医療や公衆衛生領域に注目した心理職の専門的な学びの位置づけは，本邦における心理職の国家資格にかかわり，今後の展望となる可能性がある。

今回検討した文化差は，心理職の現状と今後の方向性を検討する上でも示唆的な情報となると考えた。

（人間発達専攻 加藤佳子）

#### （5）ライティング指導の挑戦：アカデミック・ライティングを超えて

【日 程】2023年11月19日（日）13:30～16:30

【参加者】33名

##### 【概 要】

ライティング（書くこと）とその指導の人間にとっての意味を深める目的で，大学でのライティング研究者・指導者，作家，日本の作文教育研究者が登壇し，アメリカのライティング指導研究者が指定討論を行った。ライティング指導は，書き方に関するテクニカルな指導にとどまらず，自分の人生や書きたいことを見つめて書く中で，今を生き，未来を生きることへ繋がっていくものである。ライティング指導＝「レポート・小論文」（アカデミックな文章）の技術指導，という狭い見方を超え，ライティング指導のもつ可能性や限界を探った。登壇者は以下の通り。話題提供者：谷美奈（帝塚山大学教授），寒竹泉美（作家）川地亜弥子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授）。指定討論：森本和寿（大阪教育大学）。司会：石田智敬（神戸大学大学院人間発達環境学研究科特命助教（学振PD））。

（人間発達専攻 川地亜弥子）

#### （6）音楽文化のトランスポーダーをめぐって Vol.7 「わたしの好きな歌 - 岡原真弓，萩京子の「ソング」を歌う」

【日 程】2023年11月20日（月）18:00～20:00

【参加者】53名（学生 29名 一般 24名）

【概 要】

音楽文化史ゼミでは、2014年から研究科の学術WEEKSで「音楽文化のトランスポーダー」と題して、ジャンルや文化圏、時代などを越境し、新たな問いを投げかける音楽文化の豊かさと可能性を、実際の舞台上演を通して紹介し、アフタートークではアートによる「文化的記憶」のありかたを問う機会を設けてきた。

Vol.7となる今回は、オペラシアターこんにゃく座の音楽監督で作曲家の萩京子さんと、歌手で俳優の岡原真弓さんをお招きし、ブレヒトやブレヒト以外の詞によるソングの世界、萩さんをはじめヴァイオルンやアイスラー、林光が作曲した「ソング」の世界を13曲とアンコール1曲をみんなで体験した。アフタートークでは、約100年前、ベンケルザンクやブレヒトから展開してきた「ソング」の歴史的背景を踏まえて、作曲家萩京子さん、歌手岡原真弓さんにとっての「ソング」の存在について伺った。また、オペラの「アリア」のように歌い手の「主観」ではなく、誰もが「主体」的に関わることが可能な「ソング」は、楽譜を通して「共に歌う」ことで、その存在意義が高まること、などが話し合われた。学生や学外の聴衆からのフィードバックでは、オペラの日本的な展開についてあらためて関心を持ったという意見があったほか、研究科の試みとして学術と舞台芸術を往来するこのような機会を持つ重要性などが称賛された。



（人間発達専攻 大田美佐子）

(7) 音楽家のための Computational Musicology

【日 程】2023年11月23日（木）14:00～16:00

【参加者】34名

【概 要】

本企画は、デジタルヒューマニティーズを念頭に、音楽実践者が実証的な研究に挑戦するためのアプローチ方法やその可能性について検討することを目的として開催した。基調講演として、

スタンフォード大学より Craig Sapp 氏をお招きし、コンピューターによる音楽分析とデジタル楽譜情報に関する最新のツールの開発状況や、欧米における研究動向についてお話をいただいた。その後、音楽実践者による研究例として、鷺野彰子氏（福岡県立大学）と余田有希子（神戸大学）の講演を行った。鷺野氏は、演奏家としての視座から、ピアノロールの計量的解析による演奏分析について、余田は、作曲家としての視座から、サイレント映画伴奏譜の楽譜情報を用いた定量的な楽曲分析について紹介した。情報工学のバックグラウンドをもたない音楽実践者がどのようにデジタル技術を活用した研究を遂行していくのか、また音楽表現を数値化する上で生じうる矛盾や課題点について討議された。本企画には、関西、東海、九州各地から音楽実践者と情報工学の研究者が参加し、領域横断的な交流の場となった。

（人間発達専攻 余田有希子）

(8) [サイエンスショップ] 高校生・私の科学研究発表会 2023

【日 程】2023年11月23日（木・祝）10:00～17:00

【参加者】225名

【概 要】

知識基盤社会の市民として、また社会の持続可能な発展への寄与に向けて、科学的な思考や探求・研究的能力を高めることの重要性が高まっており、近年、高等学校の教育でも探究活動が重視されている。このような背景のもと、高校生の科学研究活動の成果発表の場をつくり、大学の研究者、学生等の参加者も含めた議論・交流を通じて、高校生の研究活動への意欲・関心を高め、研究活動の発展に寄与することを目的として上記の企画を実施した。神戸大学百年記念館を会場とし、兵庫県、大阪府、岡山県、鳥取県、徳島県から、18校の高校生197名、高校教員29名他が参加して、口頭20件、ポスター40件の研究発表が行われた。なお、このイベントは、兵庫県生物学会との共同で開催した。生物学以外の分野で最も優れた研究発表に対して、サイエンスショップから優秀賞を授与した。

（人間環境学専攻 伊藤真之）

(9) “踊り”から見る身体の可能性

【日 程】2023年11月25日（土）10:30～15:30

【参加者】12名

【概 要】

ヒップホップダンサーである柴崎加奈子氏を講師、コンテンポラリーダンサー・舞踊学の研究者である関典子氏を指定討論者として招き、身体の拡張可能性を探求する2種類のダンスワークショップと議論を行った。1つ目は、身体による音の遊び方・捉え方を体験するワークショップである。ここでは、参加者は音の質感を感じる感覚やその質感に合わせて動く多様な方法を知り、その感覚・方法を拡張して自身の身体での音の遊び方を探求した。2つ目は、身体とイメージとの相互作用を体験するワークショップである。参加者は、○△×などの単純な記号についてのイメージを膨らませると共に、そこから連想される身体の動きを考えた。さらにその動きを共有し合うことで、お互いの動き・イメージの拡張可能性を探求し合った。以上2つのワークショップ

を通して、参加者は音の質感やイメージ連想の身体による拡張・探求可能性を体験的に知っていた。その上で、最後に指定討論者を中心とした意見・感想の共有を行い、身体の持つ多様な可能性について互いに考え、刺激し合うためのディスカッションを行った。

(人間発達専攻 清水大地)

(10) 環境と調和するスキルの可能性を探る VOL. 1 教育・臨床の現場の課題解決を目指して

【日 程】12月1日（金）15:00～18:00

【参加者】約40名

【話題提供者】「成人自閉スペクトラム症者の記憶研究からみる適応的スキルへの応用可能性」

　　山本 健太（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

　　「身体活動と認知スキル」

　　石原 暢（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

　　「スキルとわたし」発達障害当事者

【指定討論者】林 創（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

【概 要】動的な環境と自在に切り結ぶ人間的知能／技能は、しばしば「スキル」と呼ばれます。本企画は、柔軟に環境に適応する「スキル」を糸口として、教育、心理、スポーツ、芸術、臨床といった異分野を横断し、現代社会の課題との接点をさぐるシリーズの第一弾である。発達障害の当事者が登壇するとともに、本研究科の気鋭の研究者が話題提供および指定討論を行い、学生を含めた活発なディスカッションが行われた。

(人間発達専攻 野中哲士)

(11) 環境と調和するスキルの可能性を探る VOL. 2 運動・スポーツスキルの先端研究

【日 程】1月26日（金）13:30～16:30

【参加者】約50名

【話題提供者】「集団スポーツの動きを機械学習で評価する」藤井 慶輔（名古屋大学）

　　「歩行能力とその障害に対する新たな取り組み」山縣 桃子（関西医大）

　　「筋活動パターンからみる個人の運動スキル」木伏 紅緒（神戸大学）

【指定討論者】清水 大地、野中 哲士（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

【概 要】本企画は、動的な環境と自在に切り結ぶ「スキル」を糸口として異分野を横断し、現代社会の課題との接点をさぐるシリーズの第二弾である。スポーツ、運動スキル研究の第一線の研究者が集い、最新の研究成果を発表し、指定討論者および学生を含めた活発なディスカッションが行われた。

(人間発達専攻 野中哲士)

(12) 環境と調和するスキルの可能性を探る VOL. 3 ダンス・音楽における協調／非協調

【日 程】3月1日（金）13:30～16:30

【参加者】約50名

【話題提供者】『日本伝統音楽における合奏スキル』鎌田 紗弓（東京文化財研究所）

『MRI でみるダンス・音楽演奏の協調スキル』宮田 紘平（東京大学）

『ダンスパフォーマンスにおける演者一観客協調システム』清水 大地（神戸大学）

【指定討論者】岡野 真裕、野中 哲士（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

【概 要】本企画は、動的な環境と自在に切り結ぶ「スキル」を糸口として異分野を横断し、現代社会の課題との接点をさぐるシリーズの第三弾である。邦楽からダンスまで、パフォーマンス研究の第一線の研究者が集い、最新の研究成果を発表し、指定討論者および学生を含めた活発なディスカッションが行われた。

（人間発達専攻 野中哲士）

(13) 美術家・飯川雄大によるワークショップ「Make Space! Use Space!」

【日 程】2月 11 日（日）、12 日（月）10:00～16:00

【参加者】12名

【概 要】現代美術作家飯川雄大氏を招き、参加者が日常的な空間を普段とはまったく異なる視点でとらえ、作品を制作するワークショップを行った。普段は目的のための動線を辿るだけの校内が、動線から解放されて自由に歩き回ることによって、新たな様相を帯びていくことを参加者は体感した。作品を制作したあと、飯川氏と参加者全員で作品を観てまわり、参加者同士で経験を共有した。

（人間発達専攻 野中哲士）

(14) 教師教育における書くことの展開と可能性：書くことを教える、教えることを書く

【日 程】2024年 3月 24 日（日）10:00～12:00

【参加者】48名

【概 要】

高等教育におけるライティングの評価を中心に議論した学術 Weeks 「ライティング（書くことの）評価はどうあるべきか——『ルーブリック評価』の批判的検討——（2022 年度）」、ライティングとその指導の人間にとつての意味を深めた学術 Weeks 「ライティング指導の挑戦——アカデミック・ライティングを超えて——（2023 年度）」に続くものである。専門職としての教師の力量形成における「書くこと」「実践を綴ること」の意味と可能性を考究した。日本、アメリカ、スペイン・カタルーニャの 3 カ国の事例を取り上げ、国際比較の視点から教師教育における書くことの可能性に迫った。登壇者は以下の通り。話題提供者：遠藤貴広（福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域教師教育講座・准教授）、若松大輔（弘前大学大学院教育学研究科・助教）、川地亜弥子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科・准教授）。指定討論：松下佳代（京都大学大学院教育学研究科・教授）。司会：石田智敬（神戸大学大学院人間発達環境学研究科・特命助教、日本学術振興会特別研究員 PD）

（人間発達専攻 川地亜弥子）

### 7.3. 研究科支援プロジェクト研究

(1) しょうがエキスを用いた口腔内刺激による唾液分泌促進効果の検証

## 1. 研究目的の概要

高齢者における口腔乾燥症は、う蝕、歯周病、味覚異常、誤嚥性肺炎などの原因になる恐れが指摘されており、この予防・改善方法が提案されている。この予防・改善方法の1つに、基本五味による口腔内刺激が知られている。本研究では、補助味である辛味による口腔内刺激が基本五味と同様に唾液分泌促進作用を有するとの仮説をもとに、しょうがエキスを用いた口腔内刺激によって、唾液分泌が促進するか否かを検証した。

## 2. 研究組織

- ① 代表者：湯浅正洋（人間環境学専攻）食環境科学
- ② 共同研究者：木伏紅緒（人間発達専攻） 身体運動制御、ニューロメカニクス

## 3. 研究実績の概要

- ① 蒸留水および唾液分泌作用を有する呈味物質水溶液（グルタミン酸ナトリウム、クエン酸など）による口腔内刺激時と比べ、しょうがエキス刺激時の唾液分泌量は高値を示した。また、しょうがエキスは刺激直後が最も唾液分泌量を増加させた。
- ② 上記の検討により、しょうがエキスによる口腔内刺激は唾液分泌促進作用を有し、その作用には即効性があることが確認された。今後はしょうがエキスによる唾液分泌作用のメカニズムを解明するための検討を実施予定である。

## 4. 研究成果発表

研究成果は、論文にまとめて適切な査読付き学術誌に投稿する予定である。また、上記の成果については日本家政学会第76回大会（2024年5月開催）で発表予定である。

## 5. 研究費の申請

研究成果をもとに、外部資金申請予定（2024年4月応募予定）である。

（担当 湯浅正洋）

## (2) 位置測位システムを活用したリスク・マネジメントに関する実践的研究

～子どもの報告・教師のみとの内容と保健データの比較～

### 1. 研究の概要

申請者らは、令和元年から3年にわたり、文部科学省の研究事業「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究：ICTや先端技術の活用などを通じた幼児教育の充実の在り方に関する調査研究」に従事してきており、令和4年度も継続的日本課題に取り組んできた。同研究では、位置測位システムを開発し、園の各室内にロケーターを設置し、発信機による子どもと教師の滞在場所、滞在時間、動線、速度・加速度を収集が可能となる設備を設置した。4年間にわたる試行的活用の結果、登園から降園までの園生活における園児の動きを、すべての園児についてリモートで収集することが可能となった。

令和元年からの3年間で環境整備と試行的データの収集解析をすすめ、令和4年度はそれ

に加え、室内の総合的なデータ収集解析を進めた。令和4年度は、教師が不在な場面におけるケガ等の保健対応場面の解析や、教師が把握し得ないトイレ利用や手洗い等の実態のデータを収集し解析に取り組んだ。昨年度のデータから、子どもによる報告内容や教師の予測した内容と実際の位置測位データとの差があることが分かった。よって、本年度は子どもの報告内容や教師のみとりの内容と実際の保健対応の位置測位データを比較し、客観的データによる実態の正確な把握の必要性について検討する。

## 2. 研究組織

### 具体的役割

- ① 代表者：岡部恭幸（人間発達専攻）
- ② 共同研究者：北野幸子（人間発達専攻、附属学校部長）  
：渡邊隆信（人間発達専攻、附属幼稚園長）

## 3. 研究実績の概要

文科事業研究によりロケーターの設置や解析方法の開発を試行的に進めてきたが、令和4年度は総合的で精度の高い室内データの解析が可能となる位置測位システムの再構築を行った。よって、今年度は、ヒヤリハットの生じやすい場所や状況の把握をした令和4年度の成果に加えて、ケガや事故等について子どもが語った報告内容と、その場にいなかった教師のみとりとの内容と、実際に位置測位システムにより明らかになったデータとの比較を行い、より正確な実態を把握し、聞き取りにおける誤解や見通しの違い等の困難さの実態を明らかにした。これらから、把握しにくい実態や見通しの違いが起こりやすいのがや事故の実態が明らかになり、そのデータは、汎用可能で、社会的に寄与する成果となることがわかった。

## 4. 研究成果発表

本研究の一部を令和6年3月24日に、附属幼稚園で乳幼児教育セミナー10でシンポジウムを主催し、報告した。シンポジウムでは登壇者が研究成果を発表し、フロアの参加者と意見交換を行なった。

（担当 岡部恭幸）

(3) Well-being に資する社会関係資本を構築する「場」の異分野共創的検討：神戸市および近隣地域の構築環境を対象として

## 1. 研究目的の概要

本研究では、well-being に資する構造を人々と周辺環境との相互作用の中に求め、特に社会関係資本 (social capital) および都市の構築環境 (built environment) に着目して学際的に探索した。人々に関するデータは社会調査や公的な統計資料を用い、環境に関しては生態系の測定、地理情報システム (GIS) データの活用、そして大規模な画像データの機械学習による定量化を行い、多変量解析のモデルを検証した。

## 2. 研究組織

- ① 代表者 打田篤彦（人間発達専攻）社会心理学  
② 共同研究者 片桐恵子（人間発達専攻）社会心理学、社会老年学  
原田和弘（人間発達専攻）老年行動学、健康スポーツ論  
増本康平（人間発達専攻）高齢者心理学、実験心理学、認知心理学  
丑丸敦史（人間環境学専攻）植物生態学、生物多様性科学  
源 利文（人間環境学専攻）水域生態学、環境生理学  
内山倫太（人間環境学専攻）都市地域環境学、地理情報科学  
佐藤真行（人間環境学専攻）環境経済学、環境政策論

## 3. 研究実績の概要

都市部での調査分析の結果、上空からの視点で植物の緑を計量した緑被率に比べ、歩行者に近い視点から植物の緑を計量した緑視率の方が、住民の構成や都市計画との関連が広い可能性が示唆された。また、住民どうしの交流の多さには道路面積比率が負の説明力を持ち、そして防犯上の懸念の高さには長屋の比率が負の説明力を持つといった、地域の社会関係と構築環境との関係性が示唆された。

## 4. 研究成果発表

- ① 2023年9月28日開催の日本大学大学院法学研究科経済政策特殊講義I（稻葉陽二担当）の公開授業において、招待講演として本研究の経過報告を行った。また、2024年3月4日開催の第3期第12回官民連携まちづくり研究会（事務局：要藤正任（京都大学経営管理大学院特定教授））において、招待講演として本研究の経過報告を行った。  
② 調査分析結果については、論文として取りまとめて国際学術誌に投稿し、現在査読結果を待っている。また、結果の一部について、2024年7月にチェコ・プラハで開催される国際学会33rd International Congress of Psychologyでの発表の申請が採択され、発表予定である。

## 5. 研究費の申請

本研究課題に関する研究内容で科研費（若手研究）へ応募し、採択された。

(担当 打田篤彦)

### (4) 適応的スキル発達をめぐる異分野共創研究

#### 1. 研究目的の概要

本プロジェクトは、変化する環境と柔軟に切り結ぶ人間の「スキル」の原理を深く探求し、心理学、認知科学、発達科学、教育科学、人工知能、リハビリテーション科学、身体運動科学といった異分野の連携を通して社会の課題解決に向けた研究成果を創出することを目的とするものである。

#### 2. 研究組織

- ① 代表者：野中哲士（人間発達専攻）
- ② 共同研究者：林創（人間発達専攻）
  - 共同研究者：木村哲也（人間発達専攻）
  - 共同研究者：石原暢（人間発達専攻）
  - 共同研究者：山本健太（人間発達専攻）
  - 共同研究者：木伏紅緒（人間発達専攻）
  - 共同研究者：岡野真裕（人間発達専攻）
  - 共同研究者：清水大地（人間発達専攻）

### 3. 研究実績の概要

本年度は、教育・臨床の現場の課題解決、身体運動・スポーツスキルの先端研究、ダンス・音楽における協調スキルの研究という3つの分野において研究を行った。本年度は、障害物のある状況での歩行運動において足先の軌道をコントロールする関節協調と視覚的探索の共存方略の研究をWoS誌*Journal of Biomechanics*に、ピアニストがピアノを演奏するときの独特的な関節動作の協調パターンがどのように創発するのかをシミュレーションによって再現した研究をWoS誌*Bioinspiration and Biomimetics*に公刊するなどの成果があった。

### 4. 研究成果発表

動的な環境と自在に切り結ぶ「スキル」を糸口として異分野を横断し、現代社会の課題との接点をさぐる連続シンポジウムシリーズを開催した。各研究分野の第一線の研究者を招き、最新の研究成果をめぐって、指定討論者および学生を含めた活発なディスカッションを行った。

(担当 野中哲士)

## (5) 市民の住環境と生態系ディスサービスへの応答の解明—スズメバチ駆除依頼件数、個体群密度、地理情報を用いた多変量解析—

### 1. 研究目的の概要

本研究では、生態系ディスサービスとして人々に刺傷被害をもたらすスズメバチとアシナガバチに着目し、地理的・自然的環境とスズメバチ類の各種の個体群密度、市民の蜂の巣駆除依頼件数との関係を明らかにする。自然共生社会を目指す上で、蜂と人との関係の現状、特に内陸部や山麓部を開発し、市街化区域の3分の1がニュータウンである神戸市での実態を理解することは都市計画や緑地整備を行う上で重要な知見になると考えられた。神戸市では令和3年度末まで市民の蜂駆除費用の全額を12年間にわたって助成しており、ほぼ全ての駆除依頼を神戸市が受け付けてきたと考えられ、本研究によって生態系ディスサービスに対する市民の反応の住環境による差異を明らかにすることが期待できる。

### 2. 研究組織

①代表者：佐賀達矢（人間環境学専攻）昆虫生態学、環境教育

②共同研究者：内山 愉太（人間環境学専攻）都市地域環境学、地理情報科学

### 3. 研究実績の概要

- ① 調査分析の結果、スズメバチの駆除件数はやや郊外側の地域で多く、それらと比較してアシナガバチの駆除件数はやや都市側、都市側の地域で多いことが明らかとなった。
- ② スズメバチの種別に見ると、キイロスズメバチとオオスズメバチは郊外でも駆除件数が多かったが、それらと比較してコガタスズメバチは郊外での駆除件数が少ないことが明らかとなった。この結果がそもそも蜂の営巣密度によるものか、住民の蜂の駆除意識の差によるものかについて調査を行う地域を選定し、手法について議論した。

### 4. 研究成果発表

- ① 蜂の生態に関する研究成果を国際学術誌に発表した。Saga, T., Kanai, M., Shimada, M. et al. Adaptive significance of early reproduction in *Vespa shidai* social wasps. *Insect. Soc.* (2024). <https://doi.org/10.1007/s00040-024-00953-8>
- ② 住環境と蜂駆除に関する研究成果も論文として取りまとめ、国際学術誌に投稿する予定である。

### 5. 研究費の申請

本研究課題に関連する研究内容で、ホクト生物化学振興財団奨励研究、ひょうご科学技術協会学術研究助成に採択された。

(担当 佐賀達矢)

## 7.4. 高度教員養成プログラム

2013年以降、開発研究部門において高度教員養成プログラムを企画・運営している。本プログラムは、グローバル化する知識基盤社会において、教育実践のアクション・リサーチを含む理論を踏まえた実践的研究に主導的に携わり、かつ、国際的にも通用する高度な教育能力および研究能力を備えた教員養成を行うことを目的とし、本学附属学校部と連携しながら実施した。

参加者は人間発達環境学研究科博士課程前期課程の大学院生であり、教員専修免許取得予定(済み)の受講希望者5名が、国内外を代表する研究者による教員を目指す大学院生等を対象とした高度教員セミナー（詳細 <https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/584>）を受講し、報告会において自らのアクション・リサーチの研究成果を報告・共有し、本学研究科と附属学校部による修了証を得た。

### 高度教員養成プログラムセミナーの内容

#### 第1回

テーマ：高度教員養成プログラムへ参加するために

講 師：本学教員、本学附属学校部担当者

日 時：2023年6月16日（金）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）

## 第 2 回

テーマ：児童生徒の疑問に基づいた授業はどのように行なうか

講 師：道田泰司（琉球大学・教授）

日 時：2023 年 7 月 21 日（金）17:00～18:30

会 場：遠隔（Zoom）

## 第 3 回

テーマ：授業で話し合うことの価値についての検討－授業内での認知の変容課程の分析を通して－

講 師：下村岳人（島根大学・講師）

日 時：2023 年 10 月 20 日（金）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）

## 第 4 回

テーマ：「書くこと」がかたちづくる「わたし」－綴り方教育の歴史と課題－

講 師：山田直之（関西大学・准教授）

日 時：2023 年 11 月 8 日（水）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）

## 第 5 回

テーマ：反転授業の特徴と設計のポイント

講 師：平田仁胤（岡山大学・准教授）

日 時：2023 年 12 月 15 日（金）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）

## 第 6 回

テーマ：リサーチ報告会

講 師：國土将平（中京大学・教授）

日 時：2024 年 1 月 19 日（金）17:00～18:30

会 場：F255（対面開催）

（教育連携推進室長 北野幸子）

## 7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行なう研究に対し、人間発達環境学研究科の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、附属中等教育学校生徒が参加したプログラムとして、「根源を問い合わせ革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム（ROOT プログラム）」といった人間発達環境学研究科が実施するグローバルな課題に関するプログラム等が挙げられる。さらに、附属中等教育学校のインターンシップ学習「KU トライやる」に対して、人間発達環境学研究科の教員が協力し、附属中等教

育学校生徒を受け入れた。

また、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む「課題研究」に、人間発達環境学研究科のSS研究アドバイザーなど複数の教員が、研究の進め方や分析のしかたについての助言などを行ったり、プログラムを実施した。また、優秀者発表会においても講評を行った。附属中等教育学校で開催された「授業研究会」及び「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）報告会」において、人間発達環境学研究科の教員が多数指導助言を行った。また、このことは、JSEC（高校生・高専生科学技術チャレンジ）で優秀賞を受賞するなどの成果に繋がるきっかけとなった。

（神戸大学附属中等教育学校 SS研究アドバイザー 林創）

## 7.6. 研究推進

### 7.6.1. 研究倫理審査委員会

本年度は139件の申請があり、76件が承認、53件が条件付承認、10件が変更の勧告であった。なお、昨年度の申請件数は140件であった。昨年度と同様の申請件数であった。

また、今年度は、より適切・迅速に審査を行うために、研究倫理審査申請書の改訂作業を行った。

（研究倫理審査委員会委員長 赤木和重）

### 7.6.2. 紀要編集委員会

昨年度までに引き続き、本年度においても、委員会会議はオンライン会議とメール回議であった。

「神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要」第17巻第1号と第2号を編集・発行した。第1号（2023年9月30日発行）は、研究論文7編、研究報告2編であった。第2号（2024年3月31日発行）は、研究論文4編、研究報告2編であった。

（研究紀要編集委員会委員長 山口悦司）

## 7.7. 各専攻の研究

### 7.7.1. 人間発達専攻

#### ●心理系

##### (1) 国際共同研究

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：Schwerdtfeger Andreas (Graz university), Roswith Roth (Graz university), Rominger Christian (Graz university), Yamane Takahiro (Kobe university), Fruyashik Tomohiro (Kobe university)

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) （代表者：加藤佳子）

研究概要：心の支援を行う支援関係者の心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標を開発することを目的とする。

本専攻研究者：林 創

共同研究者 : Robin Banerjee (University of Sussex)

研究課題 : 子どもの社会的な心の国際比較に関する発達心理学的研究

研究資金 : 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(A)) (代表者 : 林 創)

研究概要 : 幼児期から児童期の子どもを対象に、社会性の発達について、普遍性と文化的独自性を検討することを目的とする。

本専攻研究者 : 古谷真樹

共同研究者 : Rosie Gibson (Massey University), Mirjam Münch (Massey University) Mikaela Carter (Massey University), Ramil Adhikari (Massey University), Harshi Shetty (Massey University), Kenji Hall (Kobe University)

研究課題 : Caring around the clock: Providing a framework for improving sleep health of family carers.

研究資金 : Lotteries Health Research projects (代表 : Rosie Gibson)

研究概要 : COVID-19 期間中における在宅介護者の睡眠と Well-being に対する社会的・身体的影響について検討し、よりよい支援方法を提案する。

本専攻研究者 : 安達 友紀

共同研究者 : Kiyoka Enomoto (Osaka University), Anupa Pathak (University of Sydney), Lisa C. Murphy (Independent), Mark P. Jensen (University of Washington), Melissa Day (University of Queensland), and Saurab Sharma (University of Sydney)

研究課題 : The Behavioral Inhibition System-Behavioral Approach/Activation System model of chronic pain: A scoping review

研究資金 : 該当なし

研究概要 : 慢性痛に対する行動抑制・行動接近モデルの適用についてスコピングレビューを行う。

## (2) 国内共同研究等

本専攻研究者 : 加藤佳子

共同研究者 : 黒川通典 (摂南大学), 黒川浩美 (大阪青山大学), 高橋路子 (神戸大学附属病院), 山本育子 (神戸大学附属病院), 三ヶ尻礼子 (神戸大学附属病院)

研究課題 : 行動科学を活用する食習慣改善支援ツールの開発

研究資金 : 科学研究費補助金・基盤研究 (C) (代表者 : 加藤佳子)

研究概要 : 食習慣改善を支援する専門職支援者を対象に、行動科学に基づいた食習慣改善支援に必要なスキルを明確化する。そしてその熟達度に応じたスキル獲得のためのツールを開発する

本専攻研究者 : 加藤佳子

共同研究者 : 高橋路子 (神戸大学附属病院), 山本育子 (神戸大学附属病院), 三ヶ尻礼子 (神戸大学附属病院)

研究課題 : 生物心理社会モデルに基づく相談・支援型食生活改善プログラム評価指標の開発

研究資金 : 科学研究費補助金・基盤研究 (C) (代表者 : 加藤佳子)

研究概要：食生活を改善するためには、要支援者のストレスや心情など心理社会的要因をくみ取った支援を行う必要がある。そこで病態栄養にもとづく食生活指導に、心理社会的要因に配慮した相談・支援型の食生活改善支援を融合することが期待される。したがって本研究では相談・支援型食生活改善プログラム評価指標および専門職支援者研修用プログラム評価指標を開発することとした。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：丸山祐丞（株式会社 テアラクソン）

研究課題：労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる Well-being Monitor に関する研究

研究資金：株式会社テアラクソンから出資

研究概要：大型商業施設の労働者を対象にモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being について探求する。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：村山留美子（本専攻），山口悦司（本専攻）

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）（代表：坂本美紀）

研究概要：教育心理学とリスク学などの学際的な研究として、指導法と評価法の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：山口悦司（本専攻），伊藤真之（本専攻），松河秀哉（東北大学），益川弘如（聖心女子大学）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：教育心理学と科学教育などの学際的な研究として、教師教育研究に取り組んでいる。

本専攻研究者：相澤直樹

共同研究者：渡邊隆信（神戸大学），津田英二（神戸大学），田中孝尚（神戸大学附属幼稚園）

研究課題：幼児期の表象作用の発達からロールシャッハ・テストの認知処理を探る

研究資金：なし

研究概要：附属幼稚園に通う幼児にロールシャッハ法を実施し、その発達的様相を探究する。

本専攻研究者：林 創

研究課題：社会性の発達を左右する認知バイアスに関する心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：林 創）

研究概要：子どもと大人を対象に、特に認知バイアスについて着目し、こうしたバイアスが社会性の発達において重要なことを実証的に明らかにする。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：原田新（岡山大学），江上弘晃（神戸大学附属特別支援学校）

研究課題：成人期知的障害者家族におけるウェルビーイングへの「働くこと」・余暇の態度の影響

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：本研究は知的障害者やその重要な他者（親、施設職員）を対象に、賃金労働に限らず広い意味で社会の一員として活動する「働くこと」及び余暇活動に対する態度に焦点を当て、混合研究法など多様なアプローチからウェルビーイングもたらす影響を解明する。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学），松本有貴（徳島文理大学）

研究課題：放課後等デイサービスにおける支援機能向上に資する複層的な支援リソースの開発と検証

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：石本雄真）

研究概要：放課後等デイサービスで実施可能かつ、発達障害児の不安の問題に介入できるプログラムを開発すること、および効果的な研修システムの開発とその効果検証を行うものである。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：ポーター倫子（北陸学院大学）

研究課題：二重 ABCX モデルを用いた自閉スペクトラム症児の母親のストレス適応の解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：ポーター倫子）

研究概要：二重 ABCX モデルを援用し、自閉スペクトラム症児をもつ母親のストレスと適応のメカニズムを日米比較から解明を行う。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：辻井正次（中京大学），内山登紀夫（福島学院大学），日詰正文（独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園），小林真理子（山梨英和大学），大塚晃（上智大学），岡田俊（国立精神・神経医療研究センター），中村和彦（弘前大学），本田秀夫（信州大学），上野修一（愛媛大学），伊藤大幸（お茶の水女子大学），浜田恵（中京大学），高柳伸哉（愛知東邦大学），明翫光宜（中京大学），村山恭朗（金沢大学）

研究課題：療育手帳の交付判定及び知的障害に関する専門的な支援等に資する知的能力・適応行動の評価手法の開発のための研究

研究資金：厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

研究概要：療育手帳の交付判定に必要な判定基準の統一化をおこない、交付判定に利用できる簡便な知的能力及び適応行動を評価できる指標を開発する。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：通常学級から特別支援学級・学校への転籍理由とプロセスの解明：小学校時期を対象に

共同研究者：下木なつみ（神戸大学附属特別支援学校）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：赤木和重）

**研究概要：** 小学校時期において、通常学級から特別支援学級・学校に転籍する理由やプロセスを、保護者・教員への質問紙調査および聞き取り調査を通して明らかにすることである。

**本専攻研究者：**赤木和重

**研究課題：**なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか：学力テストの影響に注目して（代表：赤木和重）

**共同研究者：**山下晃一、生田邦紘、松田華織（神戸大学）

**研究資金：**公益財団法人前川財団 家庭・地域教育助成 2023年度（代表：赤木和重）

**研究概要：**特別支援学級・特別支援学校の在籍率について、学力テストが影響していることを、学校基本調査などの統計資料を用いて明らかにする。

**本専攻研究者：**赤木和重

**研究課題：**日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムの創造と評価の研究

**共同研究者：**塩崎美穂（東洋英和女学院大学）、加藤繁美（東京家政大学）、川田学（北海道大学）

ほか

**研究資金：**科学研究費助成事業 基盤研究B（代表：塩崎美穂）

**研究概要：**日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムについて比較検討を行う。

**本専攻研究者：**赤木和重

**研究課題：**対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究

**共同研究者：**山田康彦（三重大学）、森脇建彦（武庫川女子大学）、根津知佳子（日本女子大学）ほか

**研究資金：**科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：山田康彦）

**研究概要：**教員養成課程の大学の授業カリキュラムについて、対話的事例シナリオを用いた実証的研究を通して明らかにする。

**専攻研究者：**古谷真樹

**共同研究者：**佐藤幸治（本専攻）、福田博也（環境学専攻）、近藤徳彦（本専攻）

**研究課題：**心理的ストレスによる不眠予測およびセルフモニタリングツールの開発とその効果検証

**研究資金：**科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表：古谷真樹）

**研究概要：**不眠と対応する代表的な生理指標とその基準を明確にし、不眠のスクリーニングツールの開発および効果検証を行う。

**専攻研究者：**古谷真樹

**共同研究者：**林光緒（広島大学）、田中秀樹（広島国際大学）、笹澤吉明（琉球大学）、樋口重和（九州大学）、山本隆一郎（江戸川大学）、田村典久（広島大学）、綾部直子（秋田大学）、高田律美（人間環境大学）

**研究課題：**睡眠改善の促進妨害要因の解析と集団特性に応じた新たな睡眠教育プログラムの構築

**研究資金：**科学研究費補助金・基盤研究(B)（代表：岡靖哲）

研究概要：国内多地域の調査データを比較・統合できる共通フォーマットに基づいてデータベースを構築し、睡眠改善を促進あるいは妨害する環境要因の解析から、集団特性に応じた睡眠改善プログラムのフォーミュラを構成し実証的に検討する。

本専攻研究者：安達友紀

研究課題：慢性神経障害性疼痛に対する痛み焦点化催眠と催眠認知療法の効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表：安達友紀）

研究概要：慢性神経障害性疼痛患者への催眠療法と催眠認知療法の効果を検証する

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：水野泰行（関西医科大学），吉野敦雄（広島大学），中村亨（大阪大学），藤野陽生（大阪大学），横山仁史（新潟大学），北川裕利（滋賀医科大学），福井聖（愛知医科大学），榎本聖香（大阪大学）

研究課題：行動抑制・行動賦活モデルに基づく慢性痛への催眠の作用機序の多面的検証による解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：安達友紀）

研究概要：慢性痛患者対象の遠隔・集団式催眠プログラムを実施し、質問紙・Ecological Momentary Assessment・インタビューにより、その有効性と作用機序を検証する

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：細越寛樹（関西大学），岩佐和典（大阪府立大学），伊藤正哉（国立精神・神経医療研究センター），高岸百合子（国立精神・神経医療研究センター），大江悠樹（杏林大学），横山仁史（新潟大学），柴田正彦（奈良学園大学），福森崇貴（徳島大学），平子雪乃（杏林大学），堀越勝（国立精神・神経医療研究センター）

研究課題：慢性痛に対する認知行動療法の無作為化比較試験による効果検証とその普及に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：細越寛樹）

研究概要：慢性疼痛に対する認知行動療法の有効性を無作為化比較試験により検証する

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：細越寛樹（関西大学），岩佐和典（大阪府立大学），福森崇貴（徳島大学），高岸百合子（国立精神・神経医療研究センター），大江悠樹（杏林大学），平子雪乃（杏林大学），榎本聖香（大阪大学），吉野敦雄（広島大学），横山仁史（新潟大学），柴田正彦（奈良学園大学）

研究課題：慢性痛に対する認知行動療法の無作為化比較試験およびその普及と集団版の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（代表：細越寛樹）

研究概要：本研究では対面・個人形式の慢性痛に対する認知行動療法(CBT-CP)の有効性を臨床試験で検証する。加えて、CBT-CP がどのように有効なのか、わが国ではどれだけ普及しているかも踏まえながら、医療現場で実際に使用可能な資材を開発する。

本専攻研究者：山本健太（代表者）

研究課題：成人自閉症者の現実場面における過去の記憶と未来思考の機能の解明

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（代表：山本健太）

研究概要：自閉スペクトラム症者の記憶/未来思考の特徴を明らかにし、新たな支援手法の第一歩を生み出すことを目的とする。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：倉田誠（東京医科大学）、佐野文哉（京都大学）、安井眞奈美（国際日本文化研究センター）、飯嶋秀治（九州大学）、新本万里子（国立民族学博物館）、佐本英規（筑波大学）、風間計博（京都大学）、紺谷あかり（明治学院大学）、四條真也（関東学院大学）

研究課題：生涯を通したヒトモノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究（A）（代表：倉田誠）

研究概要：オセアニアや日本の諸社会を対象として、主に障害者や女性に焦点をあて、人びとが生涯にわたって様々なモノとどのように関わり、そのような関わりが当該社会の生涯観の中でいかに考えられているかを検討する。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：稻垣成哲（立教大学）、増本康平（神戸大学）、楠房子（多摩美術大学）、小川義和（立正大学）、寺田努（神戸大学）、江草遼平（千葉商科大学）、石田弘明（兵庫県立大学）、岩崎誠司（国立科学博物館）、鳥居深雪（関西国際大学）

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバーシティの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）（代表：稻垣成哲）

研究概要：本研究の目的は、ニューロダイバーシティ（ND）の立場から科学系博物館における発達障害（ASD, LD, ADHD 等）のある来館者向けの展示学習保障ガイドラインの体系化とその展示手法の開発、さらには具体例としての実践モデルを提案することである。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：内山愉太（神戸大学）、喜屋武亨（琉球大学）、高倉実（琉球大学）、佐藤真行（神戸大学）、丑丸敦史（神戸大学）、原田和弘（神戸大学）、香坂玲（東京大学）

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：内山愉太）

研究概要：本研究では、日本全国の移動実態を推定したビッグデータ等を活用し、①生態系サービスの受給、②社会経済属性、③健康行動の3軸を統合的に分析する。健康行動については身体活動に着目する。生態系サービス受給の格差と効果を解析し、最終的に生態系管理と健康の統合的改善手法を提言する。

本専攻研究者：河崎佳子（研究統括責任者）

共同研究者：酒井邦嘉（東京大学）、武居渡（金沢大学）、特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

研究課題：手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

研究資金：日本財団助成事業

研究概況：脳科学、心理発達、言語獲得（日本手話・日本語）、学習能力（理解・思考）の4分野から、手話言語を獲得・習得して成長する聴覚障害児の真の言語力を適正に評価することを目指す。

### (3) 論文

#### 国際共著論文

Web of Science 収録誌掲載論文 \* (10%論文にはマークを付す)

Hayashi, H., Matsumoto, A., Wada, T., & Banerjee, R. (in press). Children's and adults' evaluations of self-enhancement and self-deprecation depend on the usual performance of the self-presenter. *Journal of Experimental Child Psychology*

Porter, N, Loveland, K. A, Honda, H, Yamane, T. (2024). What is a Good Mother of Children with Autism?: A Cross-Cultural Comparison Between the U.S. and Japan. *Journal of Autism and Developmental Disorder*.

Toshiki Ito, Junnichi Osada(2023)

Relationship between liking the personal robot ‘PaPeRo’ and personality traits in case of elderly people —personality traits and robot design— , *Journal of Science of Design* 7(1) 19–28 2023年5月 査読有り筆頭著者

#### 査読付き論文

谷 冬彦 (2024). 絶望感尺度の構造に関する研究（Ⅱ）－CTCMによる再検討－ 神戸大学発達・臨床心理学研究, 23, 1-5.

石井正幸・赤木和重 (印刷中). 協調運動の困難な知的障害児の全身運動における介入効果について：特別支援学校中学部生徒のサークットトレーニングを通じた協調運動の変化に着目して 特殊教育学研究

石谷宏行・長尾悠里・赤木和重 (印刷中). 公立イエナプラン教育校はいかにして設立されたのか：福山市立常石ともに学園設立をめぐる議会・教育委員会の議事録・会議録の分析から 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要

下木なつみ・江上弘晃・赤木和重 (印刷中). 特別支援学校高等部における3年間の陶工実践：教師主体から生徒主体への授業づくり 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要

奥村紗・加藤佳子 (印刷中). 新型コロナウイルス感染症流行時の感染予防行動に関わる心的プロセスの検討 発達・臨床心理学研究

谷口あや, 山根隆宏, 野上慶子, 清原舞子, 伊藤俊樹, 安達友紀, 河崎佳子, 吉田圭吾, 相澤直樹

## 新型コロナウイルス流行初期から緊急事態宣言解除後の遠隔心理支援実態調査（印刷中） 心理臨床学研究

伊藤俊樹，石川結美子，岡崎華佳，山下美桜(2023) ビールとノンアルコールビールの深層心理イメージの違いに関する検討 — コラージュ法を用いて — 日本マーケティング学会 カンファレンス・プロシードィングス 12 104-110 2023年11月

山村恭朗・浜田恵・明観光宜・高柳伸哉・山根隆宏・小林真理子・内山登紀夫・辻井正次（印刷中）。療育手帳の交付児者を対象としたウェクスラー式知能検査と田中ビネー知能検査／新版K式発達検査の関連。児童青年精神医学とその近接領域

谷口あや・野上慶子・山根隆宏（2023）。父母の養育スタイルと幼児の自己制御および問題行動の関連：父母ペアデータを用いた検討。日本発達心理学研究, 34, 368-379.

Nogami, K., & Yamane, T. (2024). Maternal Anxiety and Overprotection Effects Anxiety in Japanese Children with Developmental Disorders and Typical Development. Japanese Journal of Learning Disabilities, 33, 103-113..

野上慶子・谷口あや・山根隆宏（2023）。発達障害児の不安症状軽減のための家族認知行動療法の有効性と母親の介入前の不安症状との関連—混合研究法による検討。発達心理学研究, 34(3), 194-207.

明観光宜・伊藤大幸・鈴木勝昭・鈴木康之・高柳伸哉・村山恭朗・山根隆宏・小倉正義・水間宗幸・白石雅一・望月直人・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢朋美・高田晃治・曾我部哲也・辻井正次（2023）。無料低額宿泊所入所者の心理学的・精神医学的特徴の実態調査。臨床精神医学, 52(10), 1235-1245.

石本雄真・原田新・山根隆宏・日潟淳子・王松・田仲由佳（2023）。大学生の正課外活動経験の諸側面が汎用的技能に与える影響。日本教育工学会論文誌, 47(2), 185-195.

### 査読なし論文

赤木和重（2023）学級規範の「脱臼」としてのインクルーシブ教育：規範による／規範で遊ぶ 教育目標・評価学会紀要, 33, 33-40

赤木和重（2023）インクルーシブ教育における「通常学級の改革」の課題と展望：規範の弛緩および多様性を前提とした授業づくり SNEジャーナル, 29, 59-74.

伊藤俊樹，山上榮子，森谷寛之（2023）鼎談『講演を受けて、コラージュ療法におけるイメージ表現

について考える』 コラージュ療法学研究 14(1) 47-51 2023年10月 招待有り

伊藤俊樹 (2023) 『形ないものから形あるものへ』 一なぐり描き (Mess Painting) 法を通してイメージを探る コラージュ療法学研究 14(1) 41-46 2023年10月 招待有り

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・村山留美子・俣野源晃・瀧野哲(2023). 科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価:リスク重視傾向の変化過程の検討, 日本科学教育学会研究会研究報告, 38(2), 219-222.

古谷真樹 (2023) 未就学児の睡眠とその改善. 睡眠医療, 17(2), 177-182.

古谷真樹 (2023) 国際比較からみた日本の子どもの睡眠. 体育の科学, 73(7), 459-464.

古谷真樹 (2023) 未就学児の睡眠. jmedmook いま知りたい現代の睡眠障害, 85, 125-131.

#### (4) 著書

##### 共編著

長谷川真里・佐久間路子・林 創 (編著) 社会性の発達心理学 ナカニシヤ出版

伊藤俊樹 字幕監修, 伊藤俊樹 (担当:監修) BBC「メンタルヘルスとアート第1巻~第3巻」  
2024年1月

呉文慧・赤木和重 (印刷中) 竹沢清『子どもの真実に出会うとき』全障研出版部 について 田中耕治 (監修) 「シリーズ学級経営」 ミネルヴァ書房

##### 分担執筆

古谷真樹 (2023) 睡眠のライフサイクルと個人差, 日本睡眠環境学会 (監修) 日本睡眠環境学会睡眠教育委員会 (編集) 『睡眠環境学入門』全日本病院出版会, (pp59-69)

伊藤俊樹 (2023) 長期に渡るロボットとの接触体験がロボットイメージに与える影響について -コラージュを用いて-, コララージュ療法のすすめ 金剛出版

#### (5) シンポジウムの開催など

加藤佳子 学術 Weeks シンポジウム

日本とオーストリアにおける心理職養成課程学びの文化比較 (2023年11月14日 (火))

グラーツ大学の心理学部からの留学生 Paul Pietschさんを招き, 公認師心理師受験資格取得のためのカリキュラムとオーストリアにおける psychologist の資格取得のためのカリキュラムを比較し, その文化差を検討することを通して, 心理職養成課程の特徴について議論し深めていった。

野中哲士, 林創, 石原暢, 山本健太 学術 Weeks シンポジウム (2023年12月1日開催) 「環境と調

和するスキルの可能性を探る VOL. 1 教育・臨床の現場の課題解決を目指して」

河崎佳子 大阪府手話言語条例シンポジウム「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト～中間報告～」(2024年2月10日開催)をコーディネートした。2020～2025年度にわたる共同研究の中間報告を行い、脳科学、心理発達、言語獲得、学習能力等の分野にわたって議論を深めた。

◆翻訳

山根隆宏(訳) (2022). 第3章 ADHDはどうやって治療されますか? 辻井正次・鈴木勝昭(監訳) 子どもが楽しく元気になるためのADHD支援ガイドブックー親と教師が知っておきたい9つのヒント, 金剛出版.

◆総説・書評など

山本健太・増本康平・その他 (2023). 水中運動ひろば保護者調査. 令和4年度スポーツ庁障害者スポーツ推進プロジェクトふれあいスポーツチャレンジ事業成果報告書, pp49-51.

赤木和重(印刷中) ぼちぼち子育て:1日1ミリ楽をしよう みんなのねがい4月号,

赤木和重(印刷中) やわらかキョウイクアタマ(第24回・最終回)「キモイけど、キレイじゃない」学校へ 『教職研修』, 618, ××

赤木和重(2024) 風越の教室に入ってみた(第15回) おとしものツリー:モノに命を 『かぜの一と』

赤木和重(2024) やわらかキョウイクアタマ(第23回) インクルーシブ教育はノリが悪いんです… 『教職研修』, 617, 60.

赤木和重(2024) やわらかキョウイクアタマ(第22回)「わからない人、手をあげて!」『教職研修』, 616, 60.

赤木和重(2023) ことばとからだが結びつくと楽しいんだ 「はあとプリッジ」, 445, 3

赤木和重(2023) やわらかキョウイクアタマ(第21回) ルールメイキングとルールプレイング『教職研修』, 616, 60.

赤木和重(2023) 割る／折る／祈る 「障害者問題研究」, 51, 224-225.

赤木和重(2023) やわらかキョウイクアタマ(第20回) 教師の「違う顔」『教職研修』, 615, 60.

赤木和重(2023) やわらかキョウイクアタマ(第19回) ちゃんとしすぎ『教職研修』, 614, 62.

赤木和重 (2023) やわらかキヨウイクアタマ (第 18 回) おひざ座りゲーム『教職研修』, 613, 60.

赤木和重 (2023) やわらかキヨウイクアタマ (第 17 回) ヒーロー 『教職研修』, 612, 60.

赤木和重 (2023) 遊び心をちょっとだけ 『教職研修』, 611, 60.

赤木和重 (2023) イタリアの教室に入ってみた【最終回 (第 5 回)】イタリアと日本のフルインクルーシブ教育

赤木和重 (2023) イタリアの教室に入ってみた【第 4 回】置いてける者は置いてきな, 置いてけない者は取ってきな

赤木和重 (2023) やわらかキヨウイクアタマ (第 15 回) 「海外の教育」を教える難しさ : 傍観者的知性をこえていく 『教職研修』, 610, 60.

赤木和重 (2023) やわらかキヨウイクアタマ (第 14 回) 授業中のトイレ : イタリアのとある小学校の場合 『教職研修』, 609, 60.

(6) 受賞 なし

#### (7) 心理系講座の研究の総括と課題

教育, 発達, 健康, 発達支援などにおける心理に関する課題の解決に向けた研究が, 活発に行われた。これらの研究は人々の QOL(Quality of Life)の向上につながる貴重な研究である。そのため本講座で得られてきた研究成果は, 研究としてとどめ置かれることなく, きれめなく, 社会へつながっている。2023 年度も産官学共同プロジェクトや地域連携プロジェクトなどの形として, 心理系の研究が展開していることが報告された。地方公共団体や民間から多くのファンドの提供があり, 心理系への社会からの期待の高さがうかがわれる。また, 複数の国際共同研究の取り組みが報告され, 国際共著論文としてその成果が報告がされた点も評価される。

#### ●表現系

##### (1) 国際共同研究

研究代表者 : 野中哲士

共同研究者 : Fumiya Iida, 中嶋浩平, 永野光

研究資金 : 国際共同研究加速基金 国際共同研究(B)

研究課題 : 「探索器官としての手」の創発 : 能動的探索が生み出す情報の解明

研究概要 : 多様な環境に際して, 知覚すべき対象や形成すべき環境との関係に応じて, 課題特定的なかたちで「探索する手」の動作パターンが柔軟かつリアルタイムで創発する原理の理解に向けた共同

研究をケンブリッジ大学工学部 Bio-Inspired Robotics 研究室と行う。

研究代表者：野中哲士

共同研究者：John A. Endler (Deakin University, James Cook University), Reinoud Bootsma (Aix-Marseille University), Thelma Coyle (Aix Marseille University), Enora Gandon (University College London),

研究課題：土器の形態発生に関する研究

研究概要：土器の形態発生プロセスの文化間比較を行い PNAX Nexus 誌に国際共著論文を公刊した。

研究代表者（本専攻教員）：岡崎香奈

共同研究者：Elizabeth Coombes(イギリス) , Claudia Zanini (ブラジル) , Teresa Lesiuk(アメリカ), Jin Hyung Lee(韓国), Penny Warren(ニュージーランド), Francesca Rubbettino(イタリア), Juan Pedro Zambonini(アルゼンチン), Vivian Chan(香港), Baishali Mukherjee(インド)

研究課題：Moving Forward Together- Finding balance between being inclusive and upholding standards in music therapy education, training, and practice.

研究資金：個人研究費

研究概要：World Federation of Music Therapy(世界音楽療法連盟)の養成教育・資格認定委員として, Music Therapy Education and Training Guidelines 作成のワーキンググループを立ち上げ, アメリカ, イギリス, アルゼンチン, イタリア, ブラジル, インド, 韓国, 香港, ニュージーランドの音楽療法士計 10 名と研究プロジェクトを進め, カナダ・バンクーバーで開催された The 17th World Congress of Music Therapy (第 17 回世界音楽療法大会) にて口頭発表（オンライン）を行った (2023. 7. 29)。

研究代表者（本専攻教員）：岡崎香奈

研究課題：Development of Nordoff-Robbins Music Therapy Training in Asian countries

研究資金：個人研究費

研究概要：アジアにおけるノードフ・ロビンズ音楽療法の歴史と展開, および文化的社会的背景における現状や課題などについて, 韓国 Jeonju University の Department of Creative Arts Therapy, College of Medical Science の Dong Min Kim 助教授と研究プロジェクトを進め, The 17th World Congress of Music Therapy (第 17 回世界音楽療法大会) にてポスター発表を行った (2023. 7. 28-30)

研究代表者（本専攻教員）：余田有希子

共同研究者：Craig Stuart Sapp(スタンフォード大学)

研究課題：Photoplay Music analysis using symbolic information

研究資金：個人研究費

研究概要：音楽分析ソフトウェア Humdrum Toolkit の開発・研究を進めている Craig Stuart Sapp 氏とともに, サイレント映画期の伴奏譜集の収録楽曲を対象としたプログラム開発および関連ツールの日本語バージョンの作成を進めている。

研究代表者：河瀬諭（神戸学院大学）

共同研究者：岡野真裕（本専攻教員），Olivier Senn（Lucerne University, Switzerland）

研究課題：Experience of Groove Questionnaire: Japanese Translation and Validation

研究資金：個人研究費

研究概要：「音楽を聴いたとき身体を動かしたくなるような快い衝動」として定義される「グルーヴ」をどの程度感じたかについて尋ねる「グルーヴ体験質問紙」の日本語訳と標準化を進めている（リバイス中）。

研究代表者（本専攻教員）：清水大地

共同研究者：工藤和俊（東京大学教授），宮田紘平（東京大学助教），鎌田紗弓（東京文化財研究所研究員），高岡明（桜美林大学教授），Clayton Martin（Durham University, UK, Professor）

研究課題：日本伝統音楽合奏時に演者間に生じる巧みな間の検討

研究資金：個人研究費

研究概要：日本の伝統音楽である長唄等の合奏場面において、演者間にどのような協調・非協調の間合いの関係が生じているのかを、呼吸や運動の観点から量的・質的に検討する研究を進めている。2023年度では、実際に演奏者達を集めて合奏を行い、その際の運動・呼吸データを測定する予備実験を実施した。

## （2）国内共同研究等

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：なし

研究課題：オールオーヴァー絵画の萌芽期における研究—ジャクソン・ポロック「壁画」を中心に—

研究機関：2020年4月1日～2024年3月31日

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、アメリカ抽象表現主義の旗手であるジャクソン・ポロックの円熟期のオールオーヴァー絵画以前の萌芽期・形成期の作品を対象とする。なかでも1940年前半の代表作品「壁画」に着眼し、通史的・美学的な解釈に留まらず、技法・材料的な視点による分析を加え、その上で完成度の高い「再現制作」を試みることで制作プロセスを再現（追体験）することが大きな特徴である。国際的なパンデミックの影響から予定をしていた現地調査が困難な状況下であったが、2022年度、2023年度には2度のアメリカ渡航が実現し、現状は現地調査を終えた段階である。尚、本研究は1年間の延長を申請しており次年度において再現制作の実施及び最終の論文報告を予定している。

本専攻研究者：岸本吉弘

研究協力者：大島徹也（多摩美術大学教授），吉川民仁（武蔵野美術大学教授），小川佳夫（ロゾー絵画教室主宰）小池隆英（画家）

研究課題：現代美術（絵画）における抽象表現の可能性

研究資金：構成員の個人研究費及びロゾー絵画教室（民間企業）

研究概要：現代における本格的な抽象美術（絵画）の有り様や可能性を追求すべく、研究会「Studio 138」を 2019 年に結成した。これは表現者や美術評論家、美術史家等で構成される研究会で、岸本はその創立メンバーである。本年度は 3 回の研究会を東京・神楽坂のロゾー絵画教室において開催した。また年 1 度の研究冊子刊行、大島徹也氏監修の展覧会も開催した。

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：石川裕敏（大阪府内公立中学校教諭）、圓城寺繁誉（大阪府内公立高校教諭）、河合美和（大手前大学講師）、善住芳枝（親和学園教諭）、真木智子（画家）、渡辺信明（京都市立芸術大学教授）、コーディネーター：尾崎信一郎（鳥取県立美術館館長）

研究課題：ペインタリネスな抽象絵画の有様について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において大型作品の展示と同時に、トークイベントも併催し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試みを実施した。（2023 年 8 月～9 月開催。リーフレット「PEINTERLINESS 2023」も作成し、テキスト「AI はペインタリネスの夢を見るか？」を尾崎信一郎が執筆し、各画家たちも自身の創作論としてのエッセイを同誌に掲載した。）

本専攻研究者：大田美佐子（研究代表者）

研究課題：多文化共生時代の舞台芸術文化のダイナミクス — 亡命・占領・共生の視点から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表者：大田美佐子）

研究概要：20 世紀以降の音楽文化のグローバルな状況に着目し、1920 年代から 2020 年の一世纪にわたる長いスパンで、舞台芸術に及ぼした教育・鑑賞・批評・上演のダイナミクスを《三文オペラ》を例に実証的側面から調査し、日本の音楽劇にもたらしている社会派音楽劇の影響を「世界史的視座」から検証することを目的とする。2024 年 6 月に開催されるニューヨーク公共図書館における「Song, Stage & Screen」学会で口頭発表が採用された。

本専攻研究者：大田美佐子（研究分担者）

研究課題：「コロナ状況」下で育まれる芸能-危機への応答・身体性をめぐる交渉・社会との関係

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表者：吉田ゆか子）

研究概要：新型コロナウイルスに影響されながら過ごすこの「コロナ状況」は、世界の芸能（音楽、舞踊、演劇）の上演と伝承をどのように変えているのだろうか。疫病退散のために上演される芸能もあれば、オンライン上演で生まれる新しい表現もある。また芸能は不要不急とされがちで、その社会的意義が問い合わせられる契機も多かった。本研究は、日本を含む東アジアおよび東南アジアの具体的な事例を検討しながら、(日)コロナ状況の芸能への影響を明らかにするとともに、(月)コロナ状況のなかで変容する芸能の姿を地域・ジャンル横断的に検討することで、我々の芸能や芸能実践を行う身体についての理解を深めようとするものである。

本専攻研究者：大田美佐子（研究分担者）

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究B（代表者：津田英二）

本専攻研究者：野中哲士（研究代表者）

共同研究者：西尾千尋，山崎寛恵

研究課題：乳児の「探索する手」を起点とする発達カスケードの実証的理

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究B（代表者：野中哲士）

研究概要：乳児が環境を「探索する手」の自発的動作が起点となり，発達の諸相に影響が及ぶ「発達カスケード」現象の統合的な理解を目指す。

本専攻研究者：野中哲士（研究代表者）

共同研究者：林創，木村哲也，石原暢，山本健太，木伏紅緒，岡野真裕，清水大地

研究課題：適応的スキル発達をめぐる異分野共創先端研究

研究資金：人間発達環境学研究科研究推進支援経費

研究概要：変化する環境と柔軟に切り結ぶ人間の「スキル」の原理を深く探求し，異分野の連携を通して傑出した研究成果を創出する。

本専攻研究者：岡崎香奈（研究代表者）

研究課題：日本におけるノードフ・ロビンズ音楽療法士養成教育の実践と課題

研究資金：個人研究費

研究概要：即興を中心とした主要音楽療法アプローチでもある「ノードフ・ロビンズ音楽療法士」の養成に携わり，聖徳大学，札幌大谷大学，国立音楽大学，名古屋音楽大学，同志社女子大学などの大学教育者・音楽療法研究者と共に実践的な教育方法に関する研究を行った。

本専攻研究者：谷正人（研究代表者）

研究課題：文化環境との関わりからみた即興演奏技能の発達—イラン音楽を事例として

研究資金：科学研究費補助金基盤研究(C)（代表者：谷正人）2019年4月－2024年3月

研究概要：本研究課題は、イラン伝統音楽を対象として、演奏家コミュニティという集団的環境のなかで、個々人は即興演奏の技能をどのように発達させているのか——「集団が持つ多層的な社会的・文化的秩序」の網の目の中で、一個人がどのように他者との相互行為によって、即興演奏というコミュニケーション形態を発達させているのかを探るものである。

本専攻研究者：谷正人

補助金（22HP6001）2023年度 研究成果公開促進費（学術図書）

Traditional Iranian Music: Orality, Physicality and Improvisation

2022年4月－2024年3月

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

共同研究者：本橋弥生（京都芸術大学），井上雅人（武庫川女子大学），蘆田裕史（京都精華大学），安城寿子（阪南大学），小形道正（大妻女子大学），鈴木彩希（四天王寺短期大学），五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

研究課題：ファッションスタディーズの樹立に向けた日本の課題解決のための挑戦的研究

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究

研究概要：日本のファッションスタディーズにおける制度的問題，歴史的問題，ジェンダー的問題への取り組むことによって，分野の発展と若手の育成を目指す。

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

共同研究者：本橋弥生（京都芸術大学），蘆田裕史（京都精華大学），小形道正（大妻女子大学），鈴木彩希（四天王寺短期大学），五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

研究課題：ミュージアムにおけるファッション展の日本の展開に関する総合研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）

研究概要：日本のミュージアムにおけるファッション展の成立と現代における展開を明らかにする。

本専攻研究者：関典子（研究代表者）

共同研究者：鈴木晶（法政大学名誉教授），斎藤慶子（大阪公立大学特任講師），本橋弥生（京都芸術大学教授），山中透（作曲家／DJ），竹内祥訓（映像作家／VJ），佐藤一紀（ヴァイオリニスト／ピアニスト），三浦栄里子（ピアニスト／兵庫県立芸術文化センター），後藤俊星（薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタント／貞松・浜田バレエ団），鷺尾華子（衣裳家／HANA DESIGN ROOM），工藤聰（振付家／映像作家），金子彰宏（音響家／舞台監督／兵庫県立芸術文化センター），三浦あさ子（照明家），若林絵美（薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタント／Petit GRACE），福島尚子（高知県立美術館）

研究課題：「蘇るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションの同時代的／創造的探究」

研究資金：京都芸術大学 舞台芸術研究センター 共同利用・共同研究拠点／2023年度 劇場実験

研究概要：総勢 15 名の共同研究メンバー（研究者，アーティスト，舞台技術者）と共に「バレエ・リュス」と「薄井憲二バレエ・コレクション」について，複眼的に研究・創造する共同研究プロジェクト。2024 年 1 月 20 日，京都芸術劇場・春秋座にて「劇場実験」を開催（講演，実演，インスタレーション展示）。約 300 名が参加し，Chacott Web Magazine DANCE CUBE などにも掲載された。

本専攻研究者：関典子（研究分担者）

研究課題：被災地芸能の動態的保存と実践的拡張

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）（代表者：橋本裕之）

研究概要：2018 年より実施されている阪神虎舞の活動を参与観察し，伝承と拡張の観点にもとづく調査を実施。

本専攻研究者：余田有希子（研究分担者）

共同研究者：なし

研究課題：無声映画伴奏譜集にみられる楽曲構造の分析

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究

研究概要：無声映画伴奏譜集に収録された楽譜資料をもとに、情景・感情・アクションなどがどのように音楽構造に表出されるのか、楽譜分析ソフトウェアツールを用いながら、作品・作家単位ではなくマクロな視点から通底する要素を明らかにする。

本専攻研究者：余田有希子（研究代表者）、清水大地（研究分担者）

研究課題：創造性支援のための視覚一聴覚の結びつきに着目した映像音楽制作ワークショップの実施と定量的な効果検証

研究資金：個人研究費

研究概要：音楽制作ワークショップを実施し、創造性の促進を図り、さらにその効果・デザインの検証を行うことで、人々の創造性や豊かに生きる過程に繋がる教育を提案することを目的とする。今年度は、神戸大学付属中等教育学校において、計70名を対象に映像音楽制作のワークショップを実施した。（2023年7月5日、7月12日）

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：紅林亘（弘前大学教育推進機構）

研究課題：合奏の個性を形作る時間的協調ダイナミクスの解明

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：ヒトの動作の同期に関するタイミング調節特性の調査、タイミング調節特性に影響する因子の特定、バーチャルパートナー・Humanizerの開発を通じ、合奏における「息が合う」という感覚の正体、つまり名演の背後にある時間的協調ダイナミクスについて検討する。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：なし

研究課題：感覚運動同期研究のアップデート：パフォーマンスに特有な動作や環境の影響の検討

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：演奏家やダンサーのリズム感の基礎研究には、指タッピング課題が多く用いられてきた。しかし近年の研究の進展から、パフォーマンス特有な動作や環境を考慮した研究も必要な可能性が明らかになってきた。動作や環境の違いがパフォーマーの振る舞いにどう影響するかという、研究と現場をつなぐ研究は、まだ手薄なままになっている。本研究では楽器特性や運動器という身体的特性と、リズム刺激のグルーヴという外的環境が、リズム同期課題におけるタイミングのずれやそのばらつき、修正反応に与える影響について検討し、基礎研究をパフォーマーのためにカスタマイズする足がかりを得ることを試みる。

本専攻研究者：岡野真裕（研究分担者）

共同研究者：楠本未来（研究代表者）、饗庭絵里子（電気通信大学）、津崎実（京都市立芸術大学），

研究課題：声楽教育における個人に適切な呼吸法の究明——腹式呼吸と胸式呼吸

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究 (C)

研究概要：歌唱に適した呼吸は腹式呼吸であるとされることが多いが、腹式呼吸が体質に合わないとして、胸式呼吸を用いていると述べる歌手がプロの中にもいる。本研究では腹囲・胸囲の伸縮、姿勢のゆらぎ、声の同時計測を通して、行われている呼吸法の実態や、個々人に適した呼吸法をどのように見極めるか等について検討する。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：岡田猛（東京大学教授）

研究課題：知覚ベースの創造性促進のメカニズムの解明とその教育的応用

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：芸術家などの優れた創作者の創造活動に特徴的に見られる、豊かな知覚体験が創造性にもたらす影響とそのメカニズムを実験によって定量的に検討する。定量的な検討方法としては、伝統的な創造性測定の手法に加え、非線形力学の手法を応用・活用する。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：岡田猛（東京大学教授）

研究課題：アート体験によるビジネスパーソンのパフォーマンス向上に関する研究

研究資金：株式会社 SIGNING 共同研究費

研究概要：絵画・音楽・ダンスなどの芸術表現の持つ知覚や相互作用に働きかける特異的な特徴を活用した、創造性促進のための「表現ワークショップ」と「その定量的な効果検証方法」を開発し、ビジネスパーソンを対象に実際に実施・検証する。定量的な効果検証方法としては、伝統的な創造性測定の手法に加え、非線形力学の手法を応用・活用する。

本専攻研究者：清水大地（研究分担者）

共同研究者：新藤浩伸（研究代表者、東京大学准教授）、岡田猛（東京大学教授）、福留東士（東京大学教授）、高木紀久子（東京大学助教）

研究課題：大学における芸術教育プログラムおよびその効果検証方法の構築に向けた基礎的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：絵画・ダンス・音楽などの芸術表現において重要とされる知覚体験や感性・情動・身体体験などの観点を取り入れた大学教育の具体的な授業方法をデザインし、その授業を実施する。また、そこで生じた学生の体験・変化についても短期・中長期双方の視点から質的・量的双方の観点から検証する。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：O JUN（研究代表者、東京藝術大学名誉教授）、戸田将平（エキスパートダンサー）

研究課題：絵画とダンスとの融合による新たな芸術パフォーマンスの探索とその過程における個人の創造的熟達の探索過程の解明

研究資金：個人研究費、ミジマアートギャラリー

研究概要：絵画とダンスという異なる領域に位置付けられる表現を融合したパフォーマンスを生成し、実際に展覧会・パフォーマンスとして公的にその成果を披露する。また、その過程で各芸術家個人に生じうる感覚やスタイルの変化などを抽出し、創造的な熟達過程に対して他領域との協働がもたらす影響を具体的に検証する。

#### 民間共同研究

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：松本茂雄、森角香奈子、檍尾一郎、高橋紗恵子（ともに株式会社 USEN コンテンツプロデュース統括部）

研究課題：BGMのグルーヴ感と歩行パラメータの関係および音楽グルーヴの健康行動への利用可能性の検討

研究資金：株式会社 USEN 共同研究費

研究概要：ウォーキング時に聴取する音楽の持つ特性が各種歩行パラメータに与える影響について、行動実験により検討する。特に、歩行速度を速くしやすい曲想と遅くしやすい曲想があるという先行研究の追試と、その結果が「グルーヴ」と呼ばれる性質と関連するかについて検討する。

#### その他

本専攻研究者：田畠暁生（研究分担者）

共同研究者：北野圭介（研究代表者、立命館大学映像学部教授）、ほか

研究課題：日本におけるメディア社会の役割

研究資金：立命館大学学内予算

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部）、赤澤健太郎（立命館大学スポーツ健康科学部）

研究課題：ポップダンスにおける「ヒット」動作の運動制御

研究資金：立命館大学学内予算、COI 基盤形成費

研究概要：ポップダンスの基本技術である「ヒット」の運動制御についての理解を深めるため、上半身のヒット動作における筋肉の活動量と活動タイミングのばらつき、およびそれらの熟達差について明らかにする。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部）、高尾憲司（株式会社ブルーミング）

研究課題：長距離走選手のコンディショニングにおけるスマートウェア活用法の探索

研究資金：立命館大学学内予算、COI 基盤形成費

研究概要：着るだけで心拍などの生体信号を計測できる「スマートウェア」を利用して、主観的コンディショニング評価および睡眠中の心拍計測を行い、これらを長距離走選手のコンディショニングに活用する方法を検討する。

### (3) 論文

#### 国際共著論文

Nonaka, T., Gandon, E., Endler, J. A., Coyle, T., & Bootsma, R. J. (2024). Cultural attraction in pottery practice: Group-specific shape transformations by potters from three communities. PNAS Nexus, 3(2), pgae055. <https://doi.org/10.1093/pnasnexus/pgae055>

Wang, H., Nonaka, T., Abdulali, A., & Iida, F. (2023). Coordinating upper limbs for octave playing on the piano via neuro-musculoskeletal modeling. Bioinspiration & Biomimetics, 18(6), 066009. <https://doi.org/10.1088/1748-3190/acfa51>

Nonaka, T., Abdulali, A., Sirithunge, C., Gilday, K., & Iida, F. (2023). Soft robotic tactile perception of softer objects based on learning of spatiotemporal pressure patterns. In 2023 IEEE 6th international conference on soft robotics (RoboSoft). IEEE. <https://doi.org/10.1109/RoboSoft55895.2023.10121950>

Web of Science 収録誌掲載論文 \* (10%論文にはマークを付す)

Yamagata, M., Nagai, R., Morihiro, K., & Nonaka, T. (2023). Relation between the kinematic synergy controlling swing foot and visual exploration during obstacle crossing. Journal of Biomechanics, 157. <https://doi.org/10.1016/j.jbiomech.2023.111702>

Nonaka, T. (2023). Two notions of medium and their implications for intelligence. IOP Conference Series: Materials Science and Engineering, 1292, 012022. <https://iopscience.iop.org/article/10.1088/1757-899X/1292/1/012022/>

#### 査読付き論文

平芳裕子「ファッション展と民族衣装-20世紀前半のアメリカのミュージアムを中心に」『art/』(民族芸術学会誌) 2024年3月, pp. 32-45.

万野 真伸, 塩澤 成弘, 岡田 志麻, 豊吉 巧也, 岡野 真裕, 他「コンディショニングサポートシステムの開発と東京2020オリンピック/パラリンピックに向けた活用事例」『トレーニング科学』35巻1号, pp. 77-86, 2023年4月

清水大地・児玉謙太郎・岡崎俊太郎・藤原健 (in press). シンクロする人々：個人間の身体的同期に関する解析手法のレビュー. 『認知科学』, 31(2).

※2024年3月15日に公開予定

#### 査読無し論文

梅宮弘光「田尻町（宮城県）と小海町（長野県）の町役場円形庁舎にみる円形建築ブームの構図—円形建築の採用が連鎖的に生じる現象とその背景」『日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）2022年』pp. 375–376, 2023年8月

田畠暁生「地域情報化計画から DX 推進計画へ」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』Vol. 17, No. 1, 2023.

田畠暁生「地域情報化政策における包括連携協定：序説」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』Vol. 17, No. 2, 2024.

岸本吉弘（印刷中）「起点としてのストライプへ」『Studio 138』4号, 2024年4月刊行

大田美佐子, 「関西地域のオペラ活動 2022」（『日本のオペラ年鑑 2021』所収 p. 74–79）文化庁/ 学校法人東成学園/ 昭和音楽大学オペラ研究所, 2024年1月

岡崎香奈「音楽療法セッションにおけるピアノの奏で方を見直すこと—臨床的ピアノ技法の公開レッスンを振り返って—」臨床音楽療法, 日本臨床音楽療法学会誌 Vol. 16 : 1–14, 2023.

平芳裕子「鷺田清一以降のファッショニズム」『現代思想』vol. 51–5, 青土社, pp. 199–210, 2023.

余田有希子, 「サイレント期の映画伴奏用楽譜集にみられる“日本的な”音楽表象：日米の伴奏譜集の比較分析から」, 『音楽表現学』, Vol. 21, 129, 2023.

岡野真裕, 高尾憲司, 伊坂忠夫（印刷中）「長距離走選手のコンディショニングへのスマートウェア活用の試み」『立命館大学スポーツ健康科学総合研究所紀要』1号, 2024年3月刊行予定

岡野真裕, 高尾憲司, 伊坂忠夫（印刷中）「長距離走選手の身体コンディショニングにおける主観評価の個人差」『立命館大学スポーツ健康科学総合研究所紀要』1号, 2024年3月刊行予定

#### 招待論文

野中哲士, 知能へのエコロジカル・アプローチ. 『日本ロボット学会誌』, 41(7), 618–624, 2023.

野中哲士. 手の所作の発達—その環境と経験. 『臨床心理学』, 23(5), 501–506, 2023.

工藤和俊, 岡野真裕, 紅林亘「非線形力学系としての身体」, 『日本物理学会誌』78巻7号, pp. 390–398, 2023年7月

(4) 著書

単著

本専攻研究者：谷正人

・Traditional Iranian Music – Orality, Physicality and Improvisation 2024年2月  
Trans Pacific Press Co., Ltd.社 (研究成果公開促進費－学術図書)

共編著

分担執筆

岸本吉弘「レゴブロックと絵画」『PEINTERLINESS 2022』（ギャラリー白編集）ギャラリー白発行, p, 6, 2023.

Misako Ohta “Die Dreigroschenoper in Japan: The “Threepenny Fever” in its early days (pp. 185–208), 分担執筆 “The Works of Kurt Weill: Transformations and Reconfigurations in 20th-century Music” (Contemporary Composers, 5) 所収, 2023, Brepols Publishing (全278ページ).

Nonaka, T. Towards an Ecology of Evolving Skills. In T. Wynn, K. A. Overmann, & F. Coolidge (Eds.) Oxford Handbook of Cognitive Archaeology. Oxford University Press.  
<https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780192895950.013.8>, 2023.

Nonaka, T. Description of the world that agential systems fit into. In M. Mangalam, A. Hajnal, & D. G. Kelty-Stephen (Eds.) The Modern Legacy of Gibson’s Affordances for the Sciences of Organisms. Routledge, 2024.

平芳裕子「アメリカのメディアと既製服」「アメリカのファッショントレイン運動」『服の、先へ ファッションヒストリー編（上）』ブックエンド, 2023年9月, pp. 42–45, pp. 78–81.

平芳裕子「アメリカンファッティーズ」『服の、先へ ファッションヒストリー編（下）』ブックエンド, 2024年3月, pp. 148–151.

平芳裕子「ファッション・服飾」『ジェンダー事典』丸善出版社, 2024年1月, pp. 524–525.

清水大地・蓬田息吹・王詩シュン・岡田猛. 「「関わり合う」アート・ワークショップ：アート体験の可能性」『触発するアート・コミュニケーション』石黒千晶・横地早和子・岡田猛編, あいり出版, 89–104 頁, 2023.

古藤陽・清水大地・岡田猛. 「日常と結びつくアート鑑賞：アートを通して世界をみる」『触発するアート・コミュニケーション』石黒千晶・横地早和子・岡田猛編, あいり出版, 105–120 頁, 2023.

#### 翻訳

トム・ルツ著, 田畠暁生訳『無目的』青土社, 2023.

アンガス・フレッチャー著, 田畠暁生訳『ストーリーシンキングが世界を救う』青土社, 2024(予定).

ウォン・カーウァイ, ジョン・パワーズ著, 田畠暁生訳『ザ・シネマ・オブ・ウォン・カーウァイ』星海社, 2024(予定).

#### 総説・書評など

平芳裕子「出来事としてのファッショニ：クリスチャン・ディオール, 夢のクリュリエ展」『Fashion Talks…』No. 15, pp. 26–27, 2023.

関典子「バレエを描いたマンガ～山岸涼子作品 meets 薄井憲二バレエ・コレクション～」, 兵庫県立芸術文化センター, 「薄井憲二バレエ・コレクション」第31回企画展リーフレット, pp. 1–4, 2023.

関典子「レオン・バクストの衣裳～劇場実験〈蘇るバレエ・リュス〉特別展～」, 兵庫県立芸術文化センター, 「薄井憲二バレエ・コレクション」第32回企画展リーフレット, pp. 1–4, 2024.

関典子「《火の鳥》」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第94回常設展リーフレット, p. 1, 2023.

関典子「《ドン・ジュアン》」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第95回常設展リーフレット, p. 1, 2023.

関典子「エリック・サティ『本日休演』」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第96回常設展リーフレット, p. 1, 2023.

関典子「モンテネグロが描いたニジンスキイ～劇場実験〈蘇るバレエ・リュス〉特別展～」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第97回常設展リーフレット, p. 1, 2023.

清水大地、「身体的・芸術的視点から見た、創造性のプロセスと教育的応用」『先端教育』2023年4月号、42-43頁、2023.

### (5) 演奏会、展覧会、シンポジウムなど

学会名：第35回 日本発達心理学会

シンポジウムタイトル：発達心理学者は発達にどうアプローチするのか

開催日：2024年3月7日

演者等：柳岡開地（大阪教育大学）、畠野快（大阪公立大学）、平井真洋（名古屋大学）、野中哲士（神戸大学）

#### 学会（企画・開催）

第3回日本ダンス研究会

企画者・幹事：清水大地（神戸大学）・土田修平（お茶の水女子大学）・宮田紘平（東京大学）・河野由（国立スポーツ科学センター）

開催場所：東京大学

開催日：2023年11月4日（土）

参加者数：70名超

概要：

スポーツ科学・生理学・認知科学・心理学・工学・文化人類学など、多様な分野においてダンスの研究を行っている研究者が集まり、研究発表・議論を行った。学会では、動作解析ワークショップ・口頭発表・ポスター発表・全体シンポジウムを実施した。

ホームページ：

<https://jsds.info/2023/08/07/%e7%ac%ac3%e5%9b%9e%e6%97%a5%e6%9c%ac%e3%83%80%e3%83%b3%e3%82%b9%e7%a0%94%e7%a9%b6%e4%bc%9a/>

#### 演奏会・公演

本専攻研究者：谷正人

「イラン音楽の愉しみ方－「廻（めぐ）り」の理論から－」

白鶴美術館：5月21日（日） 14時～15時

演奏音源の提供

本専攻研究者：谷正人

2023年7月23日午後9時放送～NHKスペシャル「ディープオーシャンⅡ紅海」テーマ曲：久石譲作曲

関典子（ダンス）：「サイトウマコトの世界 vol. 10『クロニクル』」ソロパート振付・出演、構成・演出・振付：サイトウマコト、出演：佐々木大・森美香代・矢崎悠悟・関典子・斎藤綾子他、2023年10月20日～22日、デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）

関典子（ダンス）：『白鳥』振付・出演、映像：関征夫、演奏：関良子（ヴァイオリン）、ギャレス・ステファノ・ペリーリ（ピアノ）、「関隆志のこころ パルテノン神殿に生きる」、主催：大阪公立大学文学部・文学研究科、共催：宝塚大学、2024年3月16日、大阪公立大学田中記念館

余田有希子：映画『愚者ありき（A Fool There Was）』（1914）の音楽制作

監督：フランク・パウエル、出演：セダ・バラ、エドワード・ホセ

企画名：神戸発掘映画祭 2023

主催：神戸映像アーカイブ実行委員会

日程：2023年10月21日、22日

会場：神戸映画資料館

## 展覧会

出品者：岸本吉弘

共同出品者：石川裕敏、園城寺繁誉、河合美和、善住芳枝、真木智子、渡辺信明

展覧会タイトル：PEINTERLINESS 2023

展覧会場所：ギャラリー白（大阪）

展覧会期間：2022年8月28日～9月9日

資金：ギャラリー白企画

概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪）において大型作品の展示と同時に、トークイベントも併催し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試み（グループ展）を実施した（研究冊子であるリーフレットも刊行した）。

出品者：岸本吉弘

共同出品者：小川佳夫、小池隆英、酒井香奈、山口牧子、吉川民仁

展覧会タイトル：六人の抽象画家たち—“サイズ”と“スケール”

展覧会場所：ギャルリーパリ（神奈川）

展覧会期間：2023年10月24日～11月5日

資金：ギャルリーパリ及びStudio138企画

（多摩美術大学教授の大島徹也によるキュレーション）

概要：研究会Studio138に所属する抽象画家が集い、ギャルリーパリ（神奈川）において大型作品と同時に小作品も併せて展示する研究企画展示（グループ展）であり、出品作家による座談会も併催し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試みを実施した（展覧会カタログも刊行した）。

出品者：岸本吉弘

共同出品者：なし

展覧会タイトル：岸本吉弘 個展

展覧会場所：ギャラリー白+白 kuro（大阪）

展覧会期間：2023年11月13日～11月25日

資金：ギャラリー白企画

概要：大作である「鏡のない世界」中心とし、計12点の新作油彩画を展示了。期間中にトークイベントも併催した。（神戸新聞文化欄に関連記事が掲載、11月16日朝刊）

関典子（企画・監修）、「薄井憲二バレエ・コレクション」第31回企画展「バレエを描いたマンガ～山岸涼子作品 meets 薄井憲二バレエ・コレクション～」、2023年9月12日～10月15日

関典子（企画・監修）、「薄井憲二バレエ・コレクション」第32回企画展「レオン・バクストの衣裳～劇場実験〈蘇るバレエ・リュス〉特別展～」、2024年1月16日～3月10日、兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成）、「薄井憲二バレエ・コレクション」第94回常設展「《火の鳥》」2023年5月26日～6月29日、兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成）、「薄井憲二バレエ・コレクション」第95回常設展「《ドン・ジュアン》」2023年6月30日～7月30日、兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成）、「薄井憲二バレエ・コレクション」第96回常設展「エリック・サティ『本日休演』」、2023年8月2日～10月15日、兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成）、「薄井憲二バレエ・コレクション」第97回常設展「モンテネグロが描いたニジンスキ～劇場実験〈蘇るバレエ・リュス〉特別展～」、2023年12月14日～2024年3月10日、兵庫県立芸術文化センター

関典子（薄井憲二バレエ・コレクションより資料提供）、江東区森下文化センター秋の特別企画展「山岸涼子のバレエ・マンガでたどるバレエの美」、2023年9月10日～10月9日、森下文化センター展示ロビー

関典子（薄井憲二バレエ・コレクションより資料提供）、「マリー・ローランサンとモード」、2023年2月14日～4月9日、Bunkamura ザ・ミュージアム／2023年4月16日～6月11日、京都市京セラ美術館／2023年6月24日～9月3日、名古屋市美術館

関典子（薄井憲二バレエ・コレクションより資料提供）、「スペインのイメージ～版画を通じて写し伝わるすがた～」、2023年4月8日～6月11日、長崎県美術館／2023年7月4日～9月3日、国立西洋

## 美術館

関典子(薄井憲二バレエ・コレクションより資料提供),「マリー・ローランサン～時代をうつす眼～」,  
2023年12月9日～2024年3月3日, アーティゾン美術館

## シンポジウム

登壇者：岸本吉弘, 石川裕敏（大阪府内公立中学校教諭）, 圓城寺繁誉（大阪府内公立高校教諭）, 河合美和（大手前大学講師）, 善住芳枝（親和学園教諭）, 真木智子（画家）, 渡辺信明（京都市立芸術大学教授）, 司会：尾崎信一郎（鳥取県立美術館館長）

テーマ：AIはペインタリネスの夢を見るか？

開催場所：ギャラリー白（大阪）

開催日：8月28日

概要：昨今のAI表現とアナログ絵画表現を巡り、批評的、創作論的な立場よりトークイベントを開催した。尚、同企画は同ギャラリーで開催されたグループ展「PEINTERLINESS 2023」展の付帯企画である。

登壇者：岸本吉弘, 小川佳夫（ロゾー絵画教室主宰）, 小池隆英（画家）, 酒井香奈（絵画教室アトリエ・ミタカ講師）, 山口牧子（画家）, 吉川民仁（武蔵野美術大学教授）

司会：大島徹也（多摩美術大学）

テーマ：絵画における“サイズ”と“スケール”について

開催場所：ギャルリーパリ（神奈川）

開催日：10月29日

概要：絵画表現における“サイズ”と“スケール”という観点を巡り、批評的、創作論的な立場より座談会を開催した。尚、同企画は同ギャラリーで開催されたグループ展「六人の抽象画家たち—“サイズ”と“スケール”」展の付帯企画である。

登壇者：岸本吉弘, 林野雅人（大阪中之島美術館主任学芸員）

テーマ：垂直ストライプについて

開催場所：ギャラリー白（大阪）

開催日：11月13日

概要：絵画における垂直ストライプ表現を巡り、批評的、創作論的な立場よりトークイベントを開催した。尚、同企画は同ギャラリーで開催された個展「岸本吉弘展」展の付帯企画である。

音楽の科学研究会 第34回研究会（日本音響学会関西支部談話会）

司会人：岡野真裕（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）, 大澤智恵（武庫川女子大学）

開催場所：神戸大学大学院人間発達環境学研究科, Zoom（ハイブリッド開催）

開催日：2023年5月21日

表象文化論学会 2023 オンライン研究フォーラムシンポジウム「皮膚感覚と情報：メディア研究の最前線」

登壇者：平芳裕子（神戸大学），飯田麻結（東京大学），渡邊恵太（明治大学），水野勝仁（江南女子大学），コメンテーター：高村峰生（関西学院大学），司会：難波阿丹（聖徳大学）

開催日：2023年11月11日

「ファッション研究オンラインフォーラム：ファッション研究/ファッション教育のポジション」

企画：平芳裕子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

登壇者：平芳裕子（神戸大学）本橋弥生（京都芸術大学），井上雅人（武庫川女子大学），蘆田裕史（京都精華大学），安城寿子（阪南大学），小形道正（大妻女子大学），鈴木彩希（四天王寺短期大学），五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

開催日：2023年11月17日

京都芸術大学 舞台芸術研究センター 共同利用・共同研究拠点／2023年度 劇場実験

「蘇るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションの同時代的／創造的探究」

研究代表者：関典子（神戸大学准教授／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター）

出演者・共同研究者：鈴木晶（法政大学名誉教授），斎藤慶子（大阪公立大学特任講師），本橋弥生（京都芸術大学教授），山中透（作曲家/DJ），竹内祥訓（映像作家/VJ），佐藤一紀（ヴァイオリニスト／ピアニスト），三浦栄里子（ピアニスト／兵庫県立芸術文化センター），後藤俊星（薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタント／貞松・浜田バレエ団），鷺尾華子（衣裳家／HANA DESIGN ROOM），工藤聰（振付家／映像作家），金子彰宏（音響家／舞台監督／兵庫県立芸術文化センター），三浦あさ子（照明家），若林絵美（薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタント／Petit GRACE），福島尚子（高知県立美術館）

開催場所：京都芸術劇場 春秋座

開催日：2024年1月20日

登壇者：Craig Stuart Sapp（スタンフォード大学），鷺野彰子（福岡県立大学），余田有希子（神戸大学），司会：余田有希子（神戸大学）

企画名：音楽家のための Computational Musicology

開催場所：神戸大学鶴甲第二キャンパス C101 教室

開催日：2023年11月23日（木）

概要：学術 Weeks シンポジウムとして、デジタルヒューマニティーズを念頭に、音楽実践者が実証的な研究に挑戦するためのアプローチ方法やその可能性について検討することを目的として開催した。

シンポジウム/研究会（企画・開催）

日本認知科学会第40回大会オーガナイズドセッション

「人とAI・システムとの相互作用が織りなす創造性」

開催場所：はこだて未来大学

開催日：2023年9月7日（木）

参加者数：80名超

企画：清水大地（神戸大学）・石黒千晶（聖心女子大学）・清河幸子（東京大学）

招待講演者：土田修平（お茶の水女子大学），

話題提供者：樋割仁平（京都大学），村井源（はこだて未来大学），上芝智裕（中京大学）

指定討論者：清河幸子（東京大学）

電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会第72回定例研究会

「音楽におけるインタラクション」

開催場所：Zoom（オンライン会議システム上）

開催日：2023年12月16日（土）

参加者数：30名超

企画：清水大地（神戸大学）

招待講演者：鎌田紗弓（東京文化財研究所）

環境と調和するスキルの可能性を探るVol.3

「ダンス・音楽における協調と非協調」

開催場所：神戸大学（人間発達環境学研究科）

開催日：2024年3月1日（金）

参加者数：30名程度

企画：清水大地（神戸大学）・岡野真裕（神戸大学）・野中哲士（神戸大学）

招待講演者：鎌田紗弓（東京文化財研究所）・宮田紘平（東京大学）・清水大地（神戸大学）

指定討論者：岡野真裕（神戸大学）・野中哲士（神戸大学）

### 【招待講演・口頭発表】

岸本吉弘，グラフィカルな表現法による複雑現象の理解 連続セミナー 第14回「絵画における抽象性と身体性」，2023年4月11日，対面（神戸大学六甲台第2キャンパス）+遠隔ハイブリッド，主催：神戸大学大学院工学研究科 グラフィックスリテラシー教育研究センター 共催：日本図学会 関西支部 神戸大学 V.School 協賛：（公社）化学工学会 SIS部会 ダイナミックプロセス応用分科会

岸本吉弘，「ピカソーその表現の魅力」，2024年3月4日，対面，主催：神戸市シルバーカレッジ

発表者：大田美佐子（本専攻）

題目：「音楽文化研究にとってのアーカイブ／ヴァイル研究，トランスマネジメントな音楽文化研究にとってのアーカイブ」

発表日：2023年12月18日

発表学会：日本音楽学会 第58回 西日本支部研究例会（パネリスト：西村理（大阪音楽大学），上

田泰(京都大学), 沢知恵(ハシセン病療養所の音楽文化研究・シンガーソングライター))

会場：神戸大学

・発表者：大田美佐子(本専攻 -招待討論者)

題目：Mozart and internationality -and his open questions

発表日：2023年6月1日

発表学会：第158回 関西大学法学研究所 特別研究会「国際法とオペラ」(報告者: David Armitage (Harvard University), 招待討論者: 半澤朝彦, 大田美佐子(本専攻)) 実施言語は英語

会場：関西大学

・発表者：大田美佐子(本専攻)

題目：「クルト・ヴァイルの社会派音楽劇と社会的メディアとしての音楽劇」

発表日：2023年5月18日

発表学会：早稲田大学総合研究機構 オペラ／音楽劇研究所 第210回研究例会

会場：オンライン実施

Tetsushi Nonaka “Development of self in a populated environment”. International Conference on Embodied Cognitive Science (ECogS) 2023. 沖縄科学技術大学院大学. 2023年11月17日

野中哲士. 「制作論的転回？ 同じ川は二度入れない, 同じモノは二度作れない」. 第20回 日本質的心理学会. 2023年11月4日.

Tetsushi Nonaka “Soft robotics and embodied intelligence”. 6th IEEE-RAS International Conference on Soft Robotics (RoboSoft 2023). Marina Bay Sands, Singapore. 2023年4月3日

本専攻研究者：谷正人

日本音楽即興学会第15回大会基調講演：イラン音楽における即興

日程：2024年1月20日（土）

会場：八王子市学園都市センター

本専攻研究者：谷正人

ペルシャ音楽入門講座（オンライン）講師：2023年10月13日（金）～ 全5回 (株)Kimiya

関典子, 渡辺真弓, 植松侑子「With コロナでのこれから舞踊界」, 田毎の会第20回総会, 2023年5月21日, お茶の水女子大学

関典子「薄井憲二バレエ・コレクションの魅力～キュレーターとして、ダンサーとして～」, 江東区森下文化センター秋の特別企画展「山岸涼子のバレエ・マンガでたどるバレエの美」関連イベント「バ

レエ・コレクションから開かれる世界～見る・踊る・創る・語る～」，2023年10月8日，森下文化センター多目的ホール

鈴木晶（講演），関典子（コンテンポラリーダンス実演），若林絵美（バレエ実演），三浦栄里子（ピアノ演奏），佐藤一紀（ヴァイオリン演奏），『瀕死の白鳥』バレエ版・コンテンポラリーダンス版・振付解説・体験ワークショップ，江東区森下文化センター秋の特別企画展「山岸涼子のバレエ・マンガでたどるバレエの美」関連イベント「バレエ・コレクションから開かれる世界～見る・踊る・創る・語る～」，2023年10月8日，森下文化センター多目的ホール

関典子（神戸大学），ほんまなほ（大阪大学），大野彩子（シルバーウッド），古後奈緒子（大阪大学），「バレエの中の人形から人間を考える～VR発達障害体験会～」，大阪大学中之島芸術センター・大阪大学大学院人文学研究科・大阪大学総合学術博物館アート人材育成プログラム「中之島に馳を放つ」リサーチ・フレーム「アートとその分身～人間／人形の曖昧な境界～」，2023年11月11日，中之島芸術センター3Fアートスクエア

余田有希子「サイレント期の映画伴奏用楽譜集にみられる“日本的な”音楽表象：日米の伴奏譜集の比較分析から」，日本音楽表現学会第21回大会，2023年6月17日～18日，京都女子大学

岡野真裕，樋尾一郎，森角香奈子，松本茂雄「音楽リズムと同期しての歩行において楽曲のグループが歩容に及ぼす影響」，2023年12月10日 音楽の科学的研究会第35回研究会

岡野真裕「熟達化の心理学」，2023年11月22日 大阪樟蔭女子大学学芸学部授業「心理学の現場」

岡野真裕「研究紹介などーある走り屋の軌跡ー」，2023年10月24日 慶應義塾大学総合政策・環境情報学部授業「研究会B」

岡野真裕「同期研究の広がりー同期行動の社会心理学と物理学ー」，2023年6月17日 日本音楽知覚認知学会春季研究発表会内シンポジウム「日本音楽知覚認知学会の学際領域における研究動向とその魅力」

Daichi Shimizu, “Case study of an Expert Break Dancer as a Problem Finding Process”，ISSCI Symposium: The Roles of Case Studies in Creativity Research, 2. 23. 2024 (オンライン)，招待講演

清水大地「ダンスパフォーマンスにおける演者－観客協調システム」，『環境と調和するスキルの可能性を探る Vol. 3』，2024年3月1日，招待講演

Daichi Shimizu, & Takeshi Okada. “Visualization and quantification of the coordination of

rhythmic and back-and-forth movements among dancers depending on the competitive context” ,  
10th International Symposium on Recurrence Plot 2023, 8. 29. 2023, 口頭発表

Daichi Shimizu, Ibuki Yomogida, & Takeshi Okada. “Developing a STEAM Education program to facilitate students’ multi-faceted understanding of history” , MIC Conference 2023, 9. 11. 2023, 口頭発表

ワークショップ（企画・開催）

神戸大学附属中等教育学校音楽ワークショップ

開催場所：神戸大学附属中等教育学校

開催日：2023年7月5日（水），7月12日（水）

参加者数：各日35名程度，計70名程度（附属中等教育学校生）

企画者：清水大地（神戸大学）・余田有希子（神戸大学）・佐々木ひかる（神戸大学附属中等教育学校）

ポスター発表

Masahiro Okano, Ichiro Kashio, Kanako Morizumi, Shigeo Matsumoto 「Frequency Synchronization during Walking Attempting to Synchronize with Music: Effects of Groove, Beat Perception Ability, and Musical Sophistication」 , 2023年8月25日, The 17th International Conference on Music Perception and Cognition

(6)受賞

受賞者：関典子

受賞名：2023年度 お茶の水女子大学賞「第8回 小泉郁子賞」

受賞理由：業績「踊るキュレーターとしての舞踊芸術の多元的な普及活動」に対して。人文社会科学の諸分野において極めて顕著な研究業績を挙げたことが評価されたため。

受賞年月：2024年2月13日

受賞者：Naoko Oba, Akito Miura, Masahiro Okano, Haruka Seki, Nahoko Sato

受賞名：Social media competition

受賞理由：Australian Society for Performing Arts Healthcare 口頭発表「Effect of toe separator on pressure distribution in pointe shoe during single-legged toe hopping」のソーシャルメディアでの注目度が高かったため

受賞年月：2023年11月

(7) 表現系講座の研究の総括と課題

人間発達研究において表現にかかわる専門分野を相互にいかに連関させるかは、当系講座の長年に

わたる課題となってきた。教育においてはその相乗作用に一定の成果をあげているが、研究においてはそれぞれの専門性の深まりにともなって、そこに一律に適用できる評価指標を見出すことは難しい。当系講座の教員は各専門分野で顕著な研究活動を展開し、すでに高い評価を得ている。今後も、学術・文化全体の本質でもある多様性は担保しながら、「表現」を核にした学術研究分野としての組織的フィッティングの模索が課題となるだろう。関典子准教授は小泉郁子賞を受賞している。

## ●行動系

### 1. 国際共同研究

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Eric S. Drollette (University of North Carolina at Greensboro), Sebastian Ludyga (University of Basel), Charles H. Hillman (Northeastern University), Keita Kamijo (Chukyo University)

研究課題：一過性運動が認知機能に与える影響

研究概要：認知機能に対する一過性運動の効果およびその調整因子について、IPD メタ分析を用いて検討する。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：Soondool Chung, Vivian Lou, 竹内真純, 福沢愛

研究課題：高齢者のソーシャルサポート授受と ICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

研究概要：コロナ禍での活動や人との交流の制限は高齢者の心身に大きなストレスを与えており。しかしコロナ禍において従来のようなソーシャル・サポートを得ることは難しい。ICT を活用したソーシャル・サポートが代替として想定されるが、その現状や有効性は明らかではない。デジタル化が進み、日本に似た家族規範を持つ韓国と香港において、高齢者の ICT の利用と効果について精査し、日本での ICT 活用に有効な施策について提言する。

研究代表者：佐藤 幸治

共同研究者：Prof. Gary Wittert (The University of Adelaide, Aus)

研究課題：中高齢女性特有の疾患における新たな予防策の開発

研究資金：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究概要：肥満や糖尿病、高血圧のメタボリックシンドローム、骨粗鬆症等、特有の疾患が中高齢女性において、増加しており、新たな指標の炎症性サイトカインに着目し予防法を栄養及び運動の観点から明らかにする。

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：ワールドマスターズゲームズ開催のホスト活性化効果とレガシー創出に関わるモニタリング指標の開発

共同研究者 : Sergey Bubka, Kate Caithness, Manuela Di Centa, David Eades, Ugur Erderner, Sari Essayah, Tom Hollowell, Jens Holm, Poul-Erik Hoyer, Alexander McLin, Ser Miang Ng, Petra Sorling (International Masters Games Association)

研究資金 : International Masters Games Association R&D

研究概要 : 国際マスターズゲームズ協会管轄大会を対象とし、大会がホスト地域に及ぼす活性化効果と持続的影響を可視化するための調査指標とモニタリングシステムを開発する。

研究代表者 : 原田 和弘

共同研究者 : Dr. Robert Walker (University of Bristol, UK)

研究課題 : Determinants of exercise behavior among older adults

研究資金 : 日本学術振興会サマープログラム

研究概要 : 高齢者の運動行動は、どのような要因によって規定されるのかについて研究を進めている。

## 2. 国内共同研究など

### 1) 科研費による研究 (代表者)

研究代表者 : 石原 暉

研究課題 : 習慣的運動が子どもの社会性に与える影響 : 実行機能とオキシトシンの役割に着目して

研究資金 : 科学研究費補助金・若手研究

研究概要 : 習慣的運動が子どもの社会性に与える影響を、実行機能と唾液オキシトシンの役割に着目して明らかにする。

研究代表者 : 石原 暉

研究課題 : 幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明

研究資金 : 科学研究費補助金・学術変革領域研究(A)

研究概要 : 幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能と関わる背景にある脳の構造的・機能的变化を検討する。

研究代表者 : 片桐 恵子

共同研究者 : 勇上和史 菅原育子

研究課題 : ポストコロナ社会の高齢者就労と社会参画 : 人生 100 年時代における高齢期就労の課題

研究資金 : 基盤研究(B)

研究概要 : 高齢者就労が増加しているが、未だ研究は少ない。またコロナ禍において、高齢者の就労や他の生産的活動に対する態度や行動の変化、企業側の感染リスクの高い高齢就労者への対応の変化が生じているのか等現状は明らかでない。ポストコロナ社会において、高齢就労者が高い well-being を実現するような働き方を検討することを目的として、企業と従業員に対して高齢就労者施策や、高齢就労者の会社の就労条件への評価を調べる企業調査、高齢就労者の態度や well-being の変化を調べるパネル調査、既存の縦断研究データの二次分析により検討し、ポストコロナ社会における高齢就労

と well-being のモデルを構築する。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：平山洋介，安里知陽，増本康平，伊藤真之，稻原美苗，中村匡秀，原田和弘，木村哲也，佐藤幸治，石原暢，木伏紅緒，竹内真純，福沢愛，Kim Nahyun

研究課題；研究開発プロジェクト「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築」

研究資金：JST RISTEX 「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」

研究概要：現在の日本では高齢者夫婦のみや高齢単身世帯が 6 割を超える。海外と比べて別居子との交流が少ない上に、友人を頼らない傾向があり、孤立リスクが高い。特に退職後の男性は地域社会での知り合いに乏しく、地域デビューは難しく孤立するケースが多い。近年は賃貸住宅に居住する高齢者が増加傾向にあるが、特に賃貸住宅は住民の入れ替わりが激しく、孤立や孤独死のリスクが高い。このように都市の賃貸住宅に住む高齢者は孤立に陥りやすいリスクにさらされている。よって本プロジェクトの目標は、都市の賃貸住宅居住高齢者の豊かな交流を実現し、人生 100 年時代に備えたレディネス・レジリエンスを発達させることである。その実現に向け、身体・認知・心理面を縦断的に測定し、同時に IoT を活用したセンサーとバーチャル・エージェントとの会話による毎日の健康チェックを併用し、多指標マルチモーダルに健康と孤立・孤独との関連を明らかにする。さらに、孤立・孤独を生まない社会の実現のため、リアルとバーチャルが融合するコミュニティの創出、楽しい体験型イベントへの参加から地域のリーダーを育成売る仕組みづくり、大学リソースを活用した生涯教育（サードエイジ・ユニバーシティー）の実施、高齢者が自発的に情報を提供する仕組みを作り孤立を予想するモデルを考案、情報共有の有効性の科学的エビデンスの提供を行う。

研究代表者：木伏 紅緒

研究課題：心拍・運動リズム間位相同期が歩行安定性に及ぼす効果の解明と応用方法の検討

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：歩行動作では、運動リズムと心拍リズムが整数比となる、心拍・運動リズム間位相同期が生じる。位相同期は生理学的利点があると報告されているものの、運動学的な意義は不明である。そこで本研究課題では、心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

研究代表者：佐藤 幸治

共同研究者：藤田 聰

研究課題：糖尿病予防に向けた新規骨格筋糖代謝調節経路の解明

研究資金：基盤研究 C

研究概要：炎症性サイトカインの産生に関与する遺伝子を骨格筋内で欠損させることによりインスリン感受性が悪化し、糖尿病の発症に関与していることを明らかにした。

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：マスターズスポーツメガ大会の開催による地方自治体の地域活性化に関する縦断的検証

研究資金：学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (一般)

研究概要：ワールドマスターズゲームズ関西の開催自治体に着目し、招致期からの開催準備が及ぼす地域活性化について、ホスト圏民と共に自治体の生涯スポーツ振興事業に及ぼす波及効果をモニタリング調査から縦断的に明らかにする。

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口隆晴・佐藤幸治・原田和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的つながりに関する縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)

研究概要：高齢期の感情調整機能が社会的つながりに及ぼす影響を縦断データを用いて検討する。また、高齢期の感情調整が社会的つながりの基盤である「他者への信頼」に及ぼす影響を生理的要因、心理的要因をふまえた上で心理実験により明らかにする。

## 2) 科研費による研究（分担者）

研究代表者：石黒 千晶

共同研究者：石原 暉

研究課題：学校・家庭教育環境が子どもの創造性発達に与える影響の横断・縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)

研究概要：子どもの創造性が学校や家庭環境の中でどのように発達するかを明らかにする。

研究代表者：紙上 敬太

共同研究者：石原 暉, 森田 憲輝

研究課題：体力と集中力の関係：Classroom Neuroscience の確立を目指して（研究代表者：紙上敬太）

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：子どもの体力と授業中の集中力の関係を調べる。

研究代表者：権藤 恭之 大阪大学、大学院人間科学研究科、教授

共同研究者：

石崎 達郎 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所), 東京都健康長寿医療センター研究所, 研究部長

石松 一真 滋慶医療科学大学, 医療管理学研究科, 教授

石岡 良子 大阪大学, 大学院人間科学研究科, 招へい研究員

西田 裕紀子 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター, 研究所 老年学・社会科学研究センター, 副部長

神出 計 大阪大学, 大学院医学系研究科, 教授

研究課題：加齢に対する信念の構造と加齢プロセスに与える影響の検証

研究資金：基盤研究(A)

研究概要：「加齢に対する信念」は、本研究を申請するにあたって新たに提案した概念である。信念は内在化された心的表象であり、価値観を形成する最小単位であり、行動の経験と表出に影響するとされる。本研究では「加齢に対する信念」は、サクセスルエイジングの達成／不達成を目標とした価値観を構成する要因と定義する。そしてその構成概念を明らかにするとともに、信念の形成に寄与する要因を明らかにすることを目的とする。

研究代表者：北村 智 東京経済大学、コミュニケーション学部、教授

共同研究者：研究分担者 森 玲奈 帝京大学、准教授

研究課題：パーソナルネットワークに着目したグレイ・デジタル・デバイドに関する実証的研究

研究資金：基盤研究(B)

研究概要：本研究の目的は、(1) 高齢者のパーソナルネットワークと ICT 利用の関係について因果推論を行い、高齢者内の Grey Digital Divide を実証的に検討し、(2) Grey Digital Divide の解消方法についての実践的含意を得ることである。本研究では定性的面接調査と 2 波の定量的パネル調査を実施することによって、この目的の達成を目指す。

研究代表者：山口 悅司

共同研究者：杉本 雅則、望月 俊男、坂本 美紀、増本 康平、木村 哲也、佐藤 幸治

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発

研究資金：挑戦的研究（萌芽）

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口 隆晴、佐藤 幸治、原田 和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的繋がりに関する縦断研究

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究代表者：古谷 真樹

共同研究者：近藤 徳彦、福田 博也、佐藤 幸治

研究課題：心理的ストレスによる不眠予測およびセルフモニタリングツールの開発とその効果の検証

研究資金：基盤研究 C

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：中村 匡秀、増本 康平、原田 和弘、平山 洋介、伊藤 真之、稻原 美苗、木村 哲也、佐藤 幸治、石原 暉、木伏 紅緒、竹内 真純、福沢 愛

研究課題：都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築

研究資金：JST 戰略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（RISTEX）

研究代表者：内山 愉太

共同研究者：喜屋武 享，高倉 実，佐藤 真行，丑丸 敦史，原田 和弘，香坂 玲

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究代表者：澤田 享（早稲田大学）

共同研究者：井上 茂（東京医科大学），岡 浩一朗（早稲田大学），小熊 祐子（慶應義塾大学），小野 玲（国立健康・栄養研究所），原田 和弘，宮地 元彦（早稲田大学）

研究課題：健康づくりのための身体活動・運動の実践に影響を及ぼす原因の解明と科学的根拠に基づく対策の推進のためのエビデンス創出

研究資金：厚生労働科学研究費・循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業

研究概要：身体活動推進政策を効果的に推進するための新たなエビデンスを創出し、国民の身体活動量を増加させることを目的とした研究を進めている。

研究代表者：原田悦子

研究分担者：増本康平・榎美知子・須藤智・松室美紀

研究課題：高齢者の新奇事項/事象の学習：感情・動機づけ、時間的展望、熟知度との関係

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(A)

研究概要：新奇事項事象の学習の加齢に伴う変化とその支援可能性を、学習を支える感情基盤・動機づけ、時間的展望の変化、学習内容に対する熟知性が学習過程にもたらす機序等を中心に明らかにし、認知モデルとして提案する。

研究代表者：稻垣成哲

研究分担者：増本康平・楠房子・小川義和・寺田努・江草遼平・石田弘明・岩崎誠司・鳥居深雪

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバシティーの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(A)

研究概要：本研究の目的は、ニューロダイバーシティ(ND)の立場から科学系博物館における発達障害(ASD, LD, ADHD等)のある来館者向けの展示学習保障ガイドラインの体系化とその展示手法の開発、さらには具体例としての実践モデルを提案することである。

研究代表者：山口悦司

共同研究者：杉本雅則・望月俊男・坂本美紀・増本康平・木村哲也・佐藤幸治

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発研究

資金：科学研究費補助金・挑戦的研究(萌芽)

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発。

研究代表者：衣笠智子

共同研究者：増本康平・安田公治・羽森 茂之・勇上和史

研究課題：新型コロナウイルス流行の寿命予測と貯蓄行動に対する影響

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：新型コロナウイルス流行で寿命や死亡率に関する意識がどう変化したか、また、その変化が貯蓄行動にどう影響したかを明らかにする。

### 3) 地方公共団体・神戸大学など

研究代表者：石原 暉

研究課題：生活習慣が認知機能に与える影響とその神経科学的・分子生物学的メカニズムの解明

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（B制度）

研究概要：塩基配列を変化させずに遺伝子発現を制御する後天的な仕組みの1つであるDNAメチル化に着目し、生活習慣が認知機能や脳の解剖学的・機能的特徴を後天的に修飾する分子生物学的メカニズムを調べる。

研究代表者：石原 暉

共同研究者：高岸治人、寿秋露、丹波夏希、橋本紳之亮

研究課題：運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRSハイパースキャニング研究—

研究資金：公益財団法人明治安田厚生事業団 第38回若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：運動・スポーツが子どもの社会性の発達に与える影響とその神経基盤を検討する。

研究代表者：石原 暉

共同研究者：高岸治人、松田哲也

研究課題：子どものライフスタイルと向社会性の関係

研究資金：文部科学省共同利用・共同研究拠点 玉川大学脳科学研究所「社会神経科学研究拠点」

研究概要：子どものライフスタイルと向社会性の縦断的関係を調べる。

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：勇上和史（経済学研究科 教授）、鈴木竜太（経営学研究科 教授）、久保雄一郎（経営学研究科 助教）

研究課題：高齢就労者とwell-being

研究資金：神戸大学国立大学改革・研究基盤強化推進補助金

研究概要：人材不足と高齢人口の増大から、高齢就労者の増加が見込まれている。しかし高齢就労者の実際の就労状況や、かれらのwell-beingに資するような働き方については、未経験の事態であるため研究はまだ少ない。本研究では、高齢就労者を支援するような会社のシステムが高齢就労者にどのような影響があるのかなどを検討し、高齢就労者のwell-beingをいかに実現するかについて検討する。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行制御メカニズムの解明と運動改善のためのバイオフィードバック法開発

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（B制度）

研究概要：歩行動作の制御を基軸として、筋間協調/心拍・運動リズム間の協調メカニズムの解明という基礎的研究と、運動改善に効果的なバイオフィードバック手法の開発という応用研究を相互的に進める。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行中の心拍・運動リズム間位相同期を促進するシステムの開発

研究資金：公益財団法人カインズデジタルイノベーション財団

研究概要：心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行動作の安定化に対する心拍・運動リズム間位相同期の貢献

研究資金：神戸大学 「令和5年度科研費」早期支援プログラム（インセンティブ付支援制度）・ステップアップ挑戦型

研究概要：心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

研究代表者：木伏紅緒

共同研究者：朱纓雨、壱井達也

研究課題：筋・運動学シナジーを用いたアスリートの移動運動能力評価

研究資金：公益財団法人ヒロセ財団

研究概要：着地、スケーティングの動作中の筋・運動学シナジーを初心者と熟練者の間で比較することで、この新たな評価方法の実用性を探る。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行中の心拍・運動リズム間位相同期を促進するバイオフィードバック法の開発

研究資金：公益財団法人鈴木謙三記念医科学応用研究財団

研究概要：心拍・運動リズム間位相同期を生じさせるバイオフィードバック方法を検討する。

研究代表者：寺田昌弘（京都大学）

共同研究者：相羽達弥（JAXA）、神崎素樹（京都大学）、石岡憲昭（JAXA 宇宙科学研究所）、山田深（杏林大学）、田辺弘子（名古屋大学）、木伏紅緒（神戸大学）

研究課題：「きぼう」利用（宇宙医学）テーマ「宇宙滞在における筋シナジー制御機構の解明」

研究概要：宇宙飛行士が宇宙空間に滞在する前後（飛行前、飛行直後、飛行半年、1年後）での、姿勢制御やロコモーション（歩行、障害物回避、ステップなど）の変化を筋シナジーの側面から解明する。

研究代表者：湯浅正洋

共同研究者：木伏紅緒

研究課題：しょうがエキスを用いた口腔内刺激による唾液分泌促進効果の検証

研究資金：2023 年度 人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」

研究概要：ショウガの辛味が唾液分泌量と心拍変動に与える影響を検証する。

研究代表者：原田 和弘

研究課題：運動実践に伴う充実度の日単位の蓄積が精神的健康に及ぼす影響

研究資金：神戸大学 「令和 5 年度科研費」早期支援プログラム（インセンティブ付支援制度）・ステップアップ挑戦型

研究概要：運動実践が精神的健康に及ぼす影響の機序を明らかにする研究を進めている。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：三古 展弘

研究課題：健康行動変容の個別最適化支援法の構築

研究資金：神戸大学 デジタルバイオ・ライフサイエンスリサーチパーク拠点間連携に向け研究概要：一人ひとりの多様性に合わせて個別最適化された健康行動変容の支援法を構築し、支援効果の検証と社会実装を目指す研究を進めている。

研究代表者：増本康平

共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・打田篤彦・近藤徳彦

研究課題：ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する研究

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

#### 4) 民間共同研究

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：動作計測・分析及びアドバイス

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社

研究概要：スポーツ用衣料による運動パフォーマンス向上を目指した技術開発を目的とし、計測・分析・評価の確認、アドバイスに基づいた製品改良を行う。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：動作計測・分析及びアドバイスと対外公表

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社

研究概要：スポーツ用衣料による運動パフォーマンス向上を目指した技術開発を目的とし、計測・分析・評価の確認、学会/論文等の発表を行う。

※コア・テクノロジー株式会社の 2 件について、別々の共同研究契約書を作成したのでひとまず 2

件挙げております（1件目の研究期間は2023年5月～2024年3月、2件目の研究期間は2024年1月～2025年9月）。適宜統合していただければと存じます。

研究代表者：佐藤 幸治

共同研究者：熊本 真知子、梅景 晃一

研究課題：亀岡産クーガ芋の栄養評価—温帯地方で栽培されるクーガ芋との比較—

研究概要：主に熱帯や温帯地方で栽培されているクーガ芋を京都府亀岡市でも栽培を行い、温帯地方で栽培されたクーガ芋との栄養評価の比較を行なった。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：太田 幸志

研究課題：運動を通じたつながりの多様性が高齢者のウェルビーイングに及ぼす影響

研究資金：戸部眞紀財団 研究助成

研究概要：運動を通じたどのような内容の社会的つながりが、高齢者のウェルビーイングに最も密接に影響しているのかを通じて明らかにする研究を進めている。

### 3. 論文

#### 1) 国際共著論文

- Aly, M., Ishihara, T., Torii, S., & Kamijo, K. (2023). Being underweight, academic performance and cognitive control in undergraduate women. *Archives of Women's Mental Health*, 1-10.
- Luo, X., Herold, F., Ludyga, S., Gerber, M., Kamijo, K., Pontifex, M. B., Hillman, C. H., Alderman, B. L., Muller, N. G., Kramer, A. F., Ishihara, T., Song, W., & Zou, L. (2023). Association of physical activity and fitness with executive function among preschoolers. *International Journal of Clinical and Health Psychology*, 23(4), 100400.

Lee S, Harada K, Bae S, Harada K, Makino K, Anan Y, Suzuki T, Shimada H. (2023). A non-pharmacological multidomain intervention of dual-task exercise and social activity affects the cognitive function in community-dwelling older adults with mild to moderate cognitive decline: A randomized controlled trial. *Frontiers in Aging Neuroscience*, 15: e1005410.

#### 2) Web of Science 収録誌掲載論文

- Ishihara, T., Hashimoto, S., Tamba, N., Hyodo, K., Matsuda, T., & Takagishi, H. (2024). The links between physical activity and prosocial behavior: an fNIRS hyperscanning study. *Cerebral Cortex*, 34(2), bhad509.

Kuroda, Y., Ishihara, T., & Kamijo, K. (2023). Balancing academics and athletics: School-level athletes' results are positively associated with their academic performance. *Trends in*

Neuroscience and Education, 33, 100210.

Kawamoto, M., Takagishi, H., Ishihara, T., Takagi, S., Kanai, R., Sugihara, G., Takahashi, H., & Matsuda, T. (2023). Hippocampal volume mediates the relationship of parental rejection in childhood with social cognition in healthy adults. *Scientific Reports*, 13(1), 19167.

Masumi Takeuchi & Keiko Katagiri (2024). Effects of Workplace Ageism on Negative Perception of Aging and Subjective Well-being of Older Adults According to Gender and Employment Status. *Geriatrics & Gerontology International*. doi.org/10.1111/ggi.14819

Kibushi, B., Maekaku, K., & Kimura, T. (2024). Reduced center of mass acceleration during regular walking with electromyography biofeedback. *Gait & posture*, 108, 335-340.

Hakariya, N., Kibushi, B., & Okada, J. (2023). Differences in muscle synergies between skilled and unskilled athletes in power clean exercise at various loads. *Journal of sports sciences*, 41(11), 1136-1145.

Kibushi B. (2023). Muscle coordination patterns in regulation of medial gastrocnemius activation during walking. *Human movement science*, 90, 103116.

Yokokawa T, Kido K, Sato K, Hayashi T, Fujita S. Altered expression of synaptic proteins and adhesion molecules in the hippocampus and cortex following the onset of diabetes in nonobese diabetic mice. *Physiological Reports*, 11(8): e15673, 2023.

Harada K, Masumoto K, Okada S. (2023). Social network and health behaviors among Japanese older adults: A three-wave longitudinal study. *Health Promotion International*, 38: daad013

Harada K, Masumoto K, Okada S. (2023). Does future time perspective moderate associations of instrumental and affective attitude with exercise behavior? A three-wave longitudinal survey among Japanese older adults. *The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences*, 78: 1843-1853

Harada K, Masumoto K, Okada S. (2024). Leisure-time management and subjective well-being among older adults: a three-wave longitudinal survey. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 117: e105263

Harada K, Izawa S, Nakamura-Taira N, Yoshikawa T, Akamatsu R, Ikeda H, Kubo T. (2024). Cross-sectional associations of weekly time, social context, and motivation of exercise with mental health among workers. *International Archives of Occupational and Environmental Health*,

Kinugasa, T., Masumoto, K., Yasuda, K., Yugami, K., & Hamori, S. (2023). Changes in subjective mortality expectations and savings during COVID-19: empirical analysis using questionnaire data in Japan. *Applied Economics*, 1-13. <https://doi.org/10.1080/00036846.2023.2244247>

Oriyama, K., Mukai, K., Harada, K., & Masumoto, K. (2024). Relationship Between Habitual Use and Degree of Emotion Regulation: Age Differences in Cognitive Reappraisal and Expressive Suppression. *Experimental Aging Research*, 1-14.

<https://doi.org/10.1080/0361073X.2024.2315917>

### 3) 査読付き論文

石原暢. (2023). 子どもの習慣的運動と脳構造・機能. *子どもと発育発達*, 21(1), 15-19.

高見和至 (2023). 日本語版自己報告式習慣指標(SRHI-J)の開発, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16-2, pp. 29-40.

高見和至 (2023). 運動習慣の心理的プロセスの探究—運動・喫煙・パチンコ他における習慣強度の構造—, *スポーツ心理学研究*, 50-2, pp. 62-75

乾順紀, 長ヶ原誠, 篠田大輔 (2023) 日本語版CSAPPA尺度作成に関する研究: わが国の小学生への動機づけ・自信評価尺度としての適用可能性. *生涯スポーツ学研究*. 20(1):11-21.

太田幸志, 原田和弘. (2023). 他者との運動実践と高齢者の運動継続との縦断的関連およびその心理的メカニズムの検証. *日本予防理学療法学会雑誌*, 3: 39-50

## 4. 著書

### 1) 分担執筆

秋元忍. 鶴木千加子, 「第7章 県民の参画協働による多彩な交流社会の創造 第4節 豊かなスポーツライフの創造」, 兵庫県史編纂委員会編, 『兵庫県150周年記念 兵庫県史～この50年の歩み 第3編 阪神・淡路大震災と創造的復興【平成7（1995）年～平成17（2005）年】』, 兵庫県, 2024年3月, 印刷中

秋元忍, 鶴木千加子, 「第6章 県民主役の地域づくりと多文化共生社会 第3節 スポーツ立県“ひょうご”を目指して」, 兵庫県史編纂委員会編, 『兵庫県150周年記念 兵庫県史～この50年の歩み 第4編 21世紀兵庫, 災後の時代【平成18（2006）年～平成30（2018）年】』, 兵庫県, 2024年3月, 印刷中

Benio Kibushi. (2023), Recent Advances in Alternative Medicine : Electromyography Biofeedback to Improve Dynamic Motion, Mordeniz, C. (Ed.). IntechOpen. 1-14

増本康平 (2024) 高齢期の発達科学 (担当箇所 : 第 2 章 高齢期の記憶), 新曜社

## 2) 総説・書評など

木伏紅緒 (2024) 身体運動における筋協調パターンのばらつき. 日本神経回路学会. 印刷中.

増本康平 記憶と幸福の幸せな関係とは? 毎日新聞医療プレミア 2023. 6

## 5. シンポジウム開催など

(片桐恵子)

神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 国際研究セミナー ‘Overview and future perspectives on digital skills of older people in Estonia

神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 第2回国際研究セミナー ‘Overview and future perspectives on digital skills of older people in Estonia ‘Can adult education and lifelong learning address loneliness and isolation in Japan and Ireland? ‘

神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 第3回国際研究セミナー ‘Dementia Caregiver Well-being: Cultural Issues and Definitional Problem’ ‘Enhancing the Well-being of Family Caregivers: Cross-country Comparative Studies’

神戸大学ウェルビーイング推進本部&ウェルビーイング先端研究センター‘神大みんなとウェルビーイングをはじめよう! : ウェルビーイング研究実践のためのワイガヤシンポジウム’

(木伏紅緒)

シンポジウムタイトル: 環境と調和するスキルの可能性を探る VOL. 2 運動・スポーツスキルの先端研究 【学術 Weeks2023】

開催日: 2024年1月26日

場所: 鶴甲第2キャンパス B202

演者等: 藤井慶輔 (名古屋大学・演者), 山縣桃子 (関西医科大学・演者), 木村哲也 (神戸大学・司会・コーディネーター), 木伏紅緒 (神戸大学・コーディネーター・演者), 野中哲士 (神戸大学・指定討論者), 清水大地 (神戸大学・指定討論者)

(佐藤幸治)

日本スポーツ栄養学会第9回大会 企画シンポジウム

「生活習慣病やその他疾患予防のための運動処方と栄養介入」

(増本康平)

増本康平, 老いへの適応と職場のウェルビーイング, 奈良経済産業協会経営者懇話会, 2023. 4. 16

増本康平, 老いへの適応とウェルビーイングの実現, 日本精神保健看護学会第33回学術集会・総会, 2023. 5. 14

## 6. 受賞

受賞者 : Kim Nahyun, 片桐恵子

優秀ポスター賞, 高齢者の SNS 利用行動と孤独感—自己存在の認識の効果—, 日本老年社会科学会

受賞者 : Kim Nahyun, 片桐恵子

2023 年 6 月第 33 回日本老年学総会合同ポスター（老年社会科学部門）優秀演題賞, 高齢者の SNS 利用行動と孤独感—自己存在の認識の効果—, 日本老年学会

受賞者 : Shota Hagio, Akihiko Ishihara, Masahiro Terada, Hiroko Tanabe, Benio Kibushi, Akira Higashibata, Shin Yamada, Satoshi Furukawa, Chiaki Mukai, Noriaki Ishioka, Motoki Kouzaki

受賞名 : JSB 学会賞

機関 : 日本バイオメカニクス学会

受賞理由 : Journal of neurophysiology に掲載された論文「Muscle synergies of multidirectional postural control in astronauts on Earth after a long-term stay in space」が優れていると認められたため。

受賞者 : 篠田大輔, 廣井 悠, 長ヶ原 誠

受賞名 : 令和 5 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞（理解増進部門）, スポーツを活用し災害に備える防災プログラムの普及啓発

機関 : 文部科学省

受賞者 : 原田和弘

受賞名 : 第 65 回日本老年社会科学会大会優秀ポスター賞

受賞理由 : 第 65 回日本老年社会科学会大会の一般発表において優秀な発表と認定されたため。

受賞者 : 原田和弘

受賞名 : 第 31 回日本健康教育学会学術大会学会長賞

受賞理由 : 第 31 回日本健康教育学会学術大会の一般発表において優秀な発表と認定されたため。

受賞者 : 原田和弘

受賞名 : 第 25 回日本行動医学会荒記記念賞

受賞理由 : International Journal of Behavioral Medicine 誌に掲載された論文が優秀なものと認定されたため。

### 行動系の総括と課題

新型コロナウイルス感染の影響も年度初期に見られた中ではあったが、国内外で活動的な研究活動を教員各自が展開し、本年度も研究資金獲得を伴う研究の進展とその成果は着実に挙げられている。国際共同研究もこれまでの継続に加え、新規研究が拡大しており、来年度以降はそれらの成果と発展が表れてくることが期待できる。今後は各研究分野における更なる研究の進展とともに、外部資金の獲

得にも注力しつつ、国際的な共同研究をさらに推進したい。課題としては、研究成果の発信や理論化により著書出版の増加や、各研究室の大学院生の研究活動への研究指導と支援による研究成果を本行動系より発信していくことが挙げられる。

## ●教育系

### (1)国際共同研究

本専攻研究者：山口悦司

研究代表：山口悦司

共同研究者（海外）：Clark A. Chinn (Rutgers University), Qiuyu Lin (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男（専修大学）、大浦弘樹（東京理科大学）

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築  
(課題番号 23H01021)

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

本専攻研究者：北野幸子（共同研究者）

研究代表者：榎原洋一（CRN 所長、お茶の水女子大学名誉教授）

共同研究者（海外）：Prof. Aminah binti Ayob (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Christine Chen (Association for Early Childhood Educators, Singapore), Prof. Sasilak Khayankij (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Poh Tin Tan (Tan Specialist Child and Family Clinic, Malaysia), Dean Dr. Sofia Hartati (State University of Jakarta, Indonesia), Fasli Jalal (Professor, State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Thelma Rabago Mingoa (De La Salle University, Philipine), Dr. Lee-Fong Wong (National Taipei University of Education, Taiwan), Dr. Felix Hung (National Taipei University of Education, Taiwan) Mazlina Che Mustafa (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Sirithida Chinsangtip (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Anita Chu (National Taipei University of Education, Taiwan), Sri Indah Pujiastuti (State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Jiaxiong Zhu (East China Normal University, China), Dr. Nianli Zhou (East China Normal University, China)

共同研究者（国内）：星三和子（十文字女子大学）、佐藤朝美（愛知淑徳大学）、深見俊崇（島根大学）

研究課題：子どもへのレジリエンスの育成を実践につなげるためのインタビュー調査

研究資金：Child Research Net Asia, ベネッセ教育研究所研究資金

研究概要：8か国を対象に、レジリエンスと社会情動的スキルという用語を保育者がどのように認識しているかを明らかにするためのインタビュー調査を実施した。また子どものレジリエンスや社会情動的スキルの育成に関する実践例を収集した。今後は、それらのデータを解析し、国際比較を行う予定である。

### (2)国内共同研究等

#### 科研（代表者）

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：目黒強（神戸大学）

研究課題：近代日本における通俗教育にみる課外読み物の選書に関する基盤的研究

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 21K00282）

研究概要：1910 年代から 1920 年代にかけての課外読み物の統制について検証を行い、成果を発表した。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：山下晃一（神戸大学）

研究課題：分権型教員人事の存立要件に関する日・米・英比較研究：教員集団への影響に着目して

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：本研究は、公立小学校を主たる対象に絞りながら、各々異なる分権化の度合い・質を持つ米国・英国・日本の現状を比較調査し、分権型の教員人事が教員集団へ与える影響に着目した上で、その存立要件の解明を目的とするものである。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀

研究代表者：山口悦司

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築  
(課題番号 23H01021)

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究 (B) (一般)

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，Erkki Tapio Lassila

研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発  
(課題番号 23K17592)

研究資金：2023～2025 年度・挑戦的研究 (萌芽)

研究概要：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発を行っている。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀，増本康平，木村哲也，佐藤幸治

研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発 (課題番号 20K20829)

研究資金：2020～2023 年度・挑戦的研究 (萌芽)

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：中谷奈津子

共同研究者：関川芳孝（大阪公立大学）・鶴宏史（武庫川女子大学）・木曾陽子（大阪公立大学）・吉田直哉（大阪公立大学）

研究課題：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援と実践理論の構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B) (課題番号 19H01651)

研究概要：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援の実際を明らかにし、実践理論を構築する。本研究は、1年間期間を延長している。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表者：中谷奈津子

共同研究者：鶴宏史（武庫川女子大学）・木曾陽子（大阪公立大学）・春木裕美（関西国際大学）

研究課題：保育所等における個別支援の充実を図る推進事業等に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（課題番号 23H00950）

研究概要：保育所等における特別な配慮を必要とする子どもや家庭に対する個別支援の推進事業等の実態を把握し、その効果や課題などを明らかにする。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子（神戸大学）

研究課題：位置測位システムを活用した保育者養成教育方法と教材の開発

研究資金：挑戦的研究（萌芽）（課題番号 23K17616）

研究概要：位置測位システムを活用して園における子どもと保育者の位置データを収集し、養成教育の教材として活用すべき内容の抽出を行った。それらを検討し、保育者養成教育における活用方法と、活用可能な教材の開発を試みている。

本専攻研究者：吉永潤

研究代表者：吉永潤

研究課題：社会参加の主体性と協働的問題解決能力を育成する未来創出型社会科授業の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）（研究課題 18K02664）

研究概要：社会科授業において扱うべき「事実」概念を拡張し「可能的事実」を含みこむことで学習者の独自判断や集団協議を授業内に生み出し、かつ過去と現在についての学習を未来に投企することができるようになる。そのための授業モデルを開発と試行、及び評価を行う。

本専攻研究者：稻原美苗、松岡廣路、津田英二

研究代表者：稻原美苗

研究課題：哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察

研究資金：基盤研究（B）（一般）（課題番号 19H01185）

研究概要：本研究は、哲学・倫理学、当事者研究、ジェンダー学、社会教育学、環境リスク学などの領域の知見をも取り入れ、対話実践を支援に繋げることを目的とする。各分野の知見を総合し、その成果を教育・医療・福祉の現場にフィードバックする。

本専攻研究者：川地亜弥子

2020年度科研費（2020～2023年度） 基盤研究（C）「英国の初等教育におけるオーラシー育成：教育目標・評価、指導の実際、環境デザイン」研究分担者：赤木和重、勅使河原君江、中谷奈津子。

本専攻研究者：木下孝司

研究代表者：木下孝司

研究課題：文化伝達に着眼した幼児期の「集団の育ち」に関する評価

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：幼児期の保育において、「集団の育ち」と言われるものを、文化進化論的観点から文化伝達に着眼して検討して、保育者の集団づくりを分析する研究。

代表者：ラッシラ、エルッキ・T

共同研究者：なし

研究課題：On educating the teachers of the gifted in Japan

研究機関：2022年08月31日 - 2024年03月31日

研究資金：科学研究費助成事業 研究活動スタート支援

研究概要：本研究は、国内と国外での才能教育や才能児へのニーズへの対応に関する学問的理論と一般的議論、または教師の考え方と実践にフォーカスすると共に、日本での才能に関する考え方の歴史的かつ文化的な構築プロセスを調査する。この多様な質的データを活かし、国際的な協力の中でも行われる革新的な研究の目標は、専門的能力を教師に身につけるための、日本文化社会と教育システムの特徴を配慮する育成法を開発するための土台を作ることである。

科研（分担者）

本専攻研究者：岡部恭幸

算数科における「合意形成を図る力」を育成する学習指導モデルの開発 (23K02341) (基盤研究C：代表者：下村岳人)

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文（筑波大学）

研究課題：校長のリーダーシップ発揮を促進する制度的・組織的条件の解明と日本の改革デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：本研究は、校長のリーダーシップ発揮の促進要因を、校長職をとりまく制度的・

組織的条件に焦点づけて実証的に解明し、とりわけ制度的・組織的条件の解明と整備=システムアプローチの観点から日本における改革デザインを提示することを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：元兼正浩（九州大学）

研究課題：学校経営コンサルティング型組織開発—リアリティを追究する教育実践研究の再構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：本研究は、学校経営コンサルテーション（対話型プロセスを重視した組織開発）とその実証を通じて、教職員自身の自己治癒力と研究者のコンサルテーション力を目指し、内発的な学校改革を支援する教育経営学研究の新たな可能性を提示する。

本専攻研究者：坂本美紀、山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法

（課題番号：22K18625）

研究資金：2022～2024 年度 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男（専修大学）

研究課題：矛盾する情報の評価・統合過程をメタ認知し変容する力を育む協調学習プログラムの開発（課題番号：23H01010）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：矛盾する情報の評価・統合過程をメタ認知し変容する力を育む協調学習プログラムの開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：稻原美苗

研究代表者：後藤玲子（帝京大学）

研究課題：ケイパビリティ毀損と人間の尊厳—福祉経済政策の倫理と哲学—

研究資金：学術変革研究領域（A）尊厳学の確立：尊厳概念に基づく社会統合の学際的 パラダイムの構築に向けて（課題番号 23H04855）

研究概要：本研究の目的は、ケイパビリティ理論・生命倫理学・現象学などの理論的知見と、精神・身体障害者・認知症患者の尊厳に関する調査を反照させることにより、より包括的な福祉経済政策を提言することにある。

本専攻研究者：稻原美苗

研究代表者：石田絵美子（兵庫医科大学）

研究課題：病院から地域への精神科看護実践の移行に伴う関係性と連携に関する現象学的研究

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 23K09943）

研究概要：本研究は、精神障害者への支援を病院から地域というつながりのあるケアシステムの中で捉えた上で、特に精神科看護実践の基盤となる「関係性」に注目しつつ多職種連携による精神科看護実践のあり方を明らかにすることを目的とする。

本専攻研究者： 稲原美苗

研究代表者： 村山留美子

研究課題：COVID-19 流行は市民のリスク観をどのように変えるのか？：合意形成の観点から

研究資金：基盤研究（B）（一般）（課題番号 21H00770）

研究概要：本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について、そのリスクに対する市民の認知とその構造を明らかにするとともに、その世界的流行が、日本社会全体の「リスク観」に与えた影響を明らかにすることである。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：宮本健市郎（関西学院大学）

研究課題：新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較史的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：新教育を主張した人物の思想、または新教育を実施した学校において、自然保護のための教育がどのような形で構想され、実施されたのかを確認し、それが人間中心（子ども中心）の教育を超える視点があつたかどうかを考察した。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：亀崎美沙子（十文字学園女子大学）

共同研究者：鶴宏史（武庫川女子大学）

研究課題：保育における倫理的意思決定モデルに関する基礎研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) （課題番号 21K02333）

研究概要：本研究では、国内外の倫理的ジレンマの収集・分析を行い、保育における倫理的意思決定モデルの構築を行う。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：川地亜弥子（神戸大学）

共同研究者：赤木和重（神戸大学）・勅使河原君江（神戸大学）

研究課題：英国の初等教育におけるオーラシー育成：教育目標・評価、指導の実際、環境デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) （課題番号 20K02516）

研究概要：英国の初等教育の場におけるオーラシー育成に関する目標と評価、教育実践、環境、評価について明らかにする。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：寺見陽子（神戸松蔭女子学院大学）

研究課題：家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（研究課題 20K02643）

研究概要：0～3歳児を中心とした家庭と園の連携に関するプログラムの国内外の実態調査を行った。

0～3歳児の保育実践の質評価に関する国際動向を検討するために文献調査を行い、その実態を明らかにした。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：藤掛絢子（ノートルダム清心女子大学）

研究課題：実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（課題番号 21K02418）

研究概要：保育領域「表現」の特に音楽表現に関して、往還型の養成教育の国内外の実践事例についてのデータを収集した。国内の養成教育における講義・演習と園での実習との往還的養成教育のプログラムとその評価方法の開発の実態を調査した。また実際に開発されたプログラムと評価方法についての考察を加えた。

本専攻研究者：川地亜弥子

代表植田健男、2020年度科研費（2020～2024年度）基盤研究(A) 「学習指導要領体制」の構造的変容に関する総合的研究。

本専攻研究者：川地亜弥子

代表浅野慎一，2021年度科研費（2021～2024年度）基盤研究(B)「戦後日本の夜間中学にみる公共圏の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から」。

#### 地方公共団体・神戸大学など

本専攻研究者：赤木和重，大田美佐子，岡崎香奈，川地亜弥子，清野未恵子，稻原美苗

研究代表者：津田英二

研究課題：地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

研究資金：文部科学省受託「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究、及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究である。

本専攻研究者：寺村ゆかの，津田英二

研究代表者：津田英二

研究課題：子育て支援拠点プログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市地域子育て支援拠点事業補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、子育てに関わる多様な人々との出会いや交流を通して、そこで出会った利用者らが互いの立場を理解し互いに学び合うこと、そしてそこから生まれる新たな価値観を共有するためのプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：津田英二，寺村ゆかの

研究代表者：津田英二

研究課題：子どもの居場所づくりプログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市子どもの居場所づくり補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、社会参加機会の少ない子どもたちを中心に、多様な人たちのエンパワメントの場として活用できるプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：掘越紀香（国立教育政策研究所 幼児教育研究センター 副センター長）

研究課題：幼小接続期における教育の質の基盤形成に関する研究

研究資金：国立教育政策研究所 プロジェクト研究

研究概要：幼小接続期の教育における幼児教育センターの役割・機能に関する研究（センター機能班）の所外研究分担者として、地域の幼児教育センター機能の実態について調査し、その機能と可能性について検討した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：岩橋道世（保育科学研究会）

研究課題：保育所等における未就園児の子どもの発達と支援・援助の在り方に関する研究

研究資金：こども家庭庁 2023年度日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

研究概要：保育所等における未就園児の子どもの発達と支援・援助の在り方に関する研究にかかり、園を対象に調査を行い、その実態と特徴、課題を明らかにした。

本専攻研究者：北野幸子

研究受託者：船井総研デジタル

研究課題：保育所等の第三者評価における保育実践の評価の在り方に関するモデル事業

研究資金：こども家庭庁 2023 年度 保育所等の第三者評価における保育実践の評価の在り方に関するモデル事業

研究概要：保育所等の第三者評価における保育実践の評価の在り方に関して、研究協力者として、保育実践のプロセスの質評価にかかる調査の検討と、実際にスケールを活用した評価の試行的実施とデータの提供を行った。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかる保育者の専門性に関する研究

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ、遠隔公開保育の方法の開発、実践事例の可視化と発信方法の開発等、保育の質の維持・向上にかかる保育者の専門性についての検討をおこなっている。本年度は特に 0-3 歳児の主体性について検討した。

本専攻研究者：川地亜弥子

2023 年度北野生涯教育振興会生涯教育研究助成金『中等後教育において「書くこと」を通じた知的障害者の新たな発達の可能性』研究分担者：津田英二、赤木和重

本専攻研究者：ラッシラ、エルッキ・タピオ

研究代表者：隅田学（愛媛大学）

研究課題：ノンフォーマルな特別科学教育が育成する異才とその教育資本

研究資金：2023—2026 年度 科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)

研究概要：我が国では、「特定分野に才能を持つ子供」への教育は、学校外のノンフォーマルな文脈において、科学教育分野を中心に先行的に進みつつある。本研究は、東京、兵庫、愛媛、香川、沖縄をサイトとし、JST グローバルサイエンスキャンパス、ジュニアドクター育成塾、APCG ユースサミット、愛媛大学 Kids Academia に参加する子ども達及びその関連リソースを対象に、アクターネットワーク理論を援用して調査、分析を行い、①日本型「異才」を具象化すると共に、②「アクター」環境要因を抽出し、③教育資本の index を独自に作成し、そのインパクトをモデル化し、④幼年期から青年期におけるその発達的ダイナミズムを探る。

本専攻研究者：ラッシラ、エルッキ・タピオ

研究代表者：大貫麻美（白百合女子大学）

研究課題：サスティナビリティ・コンピテンシーを培う幼児向け STEAM プログラムの開発と評価

研究資金：2022～2027 年度・基盤研究(B) ( 22H01067 )

研究概要：持続可能性のある社会の構築を能動的かつ協働的に実現していく力（サスティナビリティ・コンピテンシー）の涵養は現代の科学教育に強く期待される課題の一つである。本研究では生涯にわたる人間形成の基盤が構築される幼児期に着目し、幼児期に培われるべきサスティナビリティ・

コンピテンシーを明らかにする。また、こうした国際的な学術的知見をふまえつつ、日本の幼児教育内容との関係性を明瞭かつ平易な日本語で表した、日本の幼児教育実践現場で活用可能なサスティナビリティ・コンピテンシー評価規準を作成する。そして、その評価規準に呼応した系統性のあるSTEAM教育プログラムを開発する。

### (3) 産学官共同研究等

本専攻研究者：岡部恭幸

特別なニーズを持つ子どもへの算数教材開発、株式会社 cheriment, 2023/07/01–2024/06/30

### (3) 論文

#### 国際共著論文

Oura, H., Mochizuki, T., Chinn, C., & Yamaguchi, E. (2023. 10). Developing undergraduate students' competence in reasoning about bodies of evidence. Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2023, 1882–1883.

Yamaguchi, E., Chinn, C. A., Oura, H., & Mochizuki, T. (in press). Do undergraduates use the criterion of fit with multiple lines of evidence when evaluating conflicting scientific claims? Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024.

Chinn, C. A., Mochizuki, T., Lin, Q., Yamaguchi, E., & Oura, H. (in press). Resolving expert disagreement by evaluating misrepresentations. Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024.

Oura, H., Mochizuki, T., Chinn, C., Yamaguchi, E., & Lin, Q. (in press). The role of instruction in shaping reasoning about bodies of evidence: An experimental comparison. Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024.

Mochizuki, T., Chinn, C. A., Oura, H., & Yamaguchi, E. (in press). Recognizing cherry-picked data in scientific information: Epistemic challenge toward understanding comprehensive evidence. Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024.

Lassila, E.T., Hyry-Beihammer, E.K., Kızkapan, O., Rocena, A., & Sumida, M. (2023). Giftedness in inclusive classrooms: A cross-cultural examination of pre-service teachers' thinking in Finland, Austria, Turkey, the Philippines, and Japan. *Gifted Child Quarterly* 67 (4), 306–324.

Kettunen, A., Lassila, E.T., Lutovac, S. & Uitto, M. (2023). Becoming a safe adult for pupils: Emotions as part of first-year student teachers' narrative identities told with photographs. *European Journal of Teacher Education*. <https://doi.org/10.1080/02619768.2023.2211730>

## 査読付き論文

目黒強(2023)「『童話研究』における「童話批評」の生成」神戸大学大学院人間発達環境学研究科編『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第17巻第1号, pp. 23-32, 査読有り。

山下晃一 (2023) 「教育委員会論と教育行政=制度論 一宗像誠也・黒崎勲による教育委員会制度論の意義と継承ー」『教育制度学研究 (日本教育制度学会)』第30号, pp. 74-90, 査読有り。

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稻垣成哲 (2023. 6) 「小学校理科授業における「里山管理ゲーム」の活用と評価」『科学教育研究』第47巻, 第2号, 90-105.

田中達也・山口悦司 (2023. 7) 「アーギュメント自己評価能力の向上を支援するための教授方略の開発と評価」『理科教育学研究』第64巻, 第1号, 3-12.

口羽駿平・山口悦司・俣野源晃・坂本美紀 (2023. 12) 「アーギュメント構成能力の持続性の検討: 小学校の理科授業で育成された複数の証拠を利用するアーギュメント構成能力を事例として」日本科学教育学会『科学教育研究』第47巻, 第4号, 374-382.

俣野源晃・山口悦司 (2023. 12) 「アーギュメントにおける証拠の十分性に関する小学生の認識的理解の事例的検討」日本科学教育学会『科学教育研究』第47巻, 第4号, 392-400.

俣野源晃, 田淵知紗, 山口智史, 川地亜弥子, 渡邊隆信 (2023) 「小学校における通知表開発と評価に関する事例的検討: 「資質・能力型通知表」と「教科型通知表」の比較と通して」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 17(1), pp. 11-21

松岡広路「SDGs 運動に呼応する学習・組織論 : 当事者性学習論へのパラダイムシフトをめざして」日本社会教育学会年報編集委員会編『日本の社会教育 67号』pp. 62-74, 2023-10

猪原風希, 津田英二「特別支援学校において「人間として尊厳をもって生きていくための教育」とは何か」『基礎教育保障学研究』No. 7, 2023年9月, pp. 125-138 (査読あり)

稻原美苗 (2024) 「『ケアの倫理』と当事者性の重なりーある障害者の葛藤からケアと依存のつながりを考えるー」, 『倫理学年報』, 第73集, pp. 29-41.

吉村均, 鬼頭葉子, 稲原美苗 (2024) 「特定質問への回答」, 『倫理学年報』, 第73集, pp. 48-56.

中谷奈津子・木曾陽子・鶴宏史・吉田直哉・関川芳孝 (2024) 「保育所等における困難家庭の子どもに対する積極的支援ー「福祉としての保育」の再考」『日本家政学会誌』第75巻第1号, pp. 1-16, 査読あり

赤木和重, 川地亜弥子, 津田英二, 河南勝, 佐藤知子, 殿垣亮子, 柴田真砂代, 黒川陽司「知的障害青年の大学教育プログラムはなにをもたらしたか?—教育専門職養成大学における3年間の実践を通して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第16巻2号 pp. 87-95, 2023. 3.

手代木英明・ラッシラ, エルッキ T. ・鈴木誠 (2023) 日本とフィンランドの理科教科書比較研究-小学校生物領域における学びの構成と問い合わせの比較を通して-. 日本生物教育. 2023年64巻2号 p. 82-93.

### 査読無し論文

岡部恭幸 (2024) 「主体的・対話的な深い学び」の実現につながる算数・数学科のデジタル教科書の活用 学習情報研究296号 2024. 1月 公益財団法人 学習情報研究センター

山下晃一 (2023) 「教員の資質能力を管理する制度から“生きられた教員制度”へ」『日本教育制度学会紀要 創立30周年記念 特別号』 pp. 244-254, 招待論文, 査読なし。

山下晃一 (2023) 「学問としての教育行政学の方法・課題・展望 一研究主体の実存的困難に向かいながらー」『日本教育行政学会年報』第49号, pp. 284-287, 招待論文, 査読なし。

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・俣野源晃・瀧野哲 (2023. 6) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価:複数のステイクホルダーの意見に関する学習を支援するダイヤローグ型ビデオ教材に着目して」『日本科学教育学会研究会研究報告』第37巻, 第6号, 59-62.

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・村山留美子・俣野源晃・瀧野哲 (2023. 12) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの評価: リスク重視傾向の変化過程の検討」『日本科学教育学会研究会研究報告』第38巻, 第2号, 219-222.

吉田直哉・中谷奈津子・木曾陽子・鶴宏史・関川芳孝 (2024) 「子ども家庭支援を行う園のスタッフが有する「地域」観」『社会問題研究』第73巻, pp. 27-36, 査読なし

津田英二「インクルーシヴな社会に向かうリテラシーとは何か」『基礎教育保障学研究』No. 7, 2023年9月, pp. 101-110.

津田英二「障害者生涯学習支援政策の検証～政策支援の立場から～」『障がい者生涯学習支援研究』No. 7, 2023年3月, pp. 6-12.

稻原美苗 (2023) 「愛と親密性とマイノリティ」, 『臨床心理学－特集：カップルセラピーをはじめる！一もしカップルがあなたのもとを訪れたら？』, 第23巻, 第6号, 金剛出版, pp. 687-9.

稻原美苗 (2023) 「哲学する上でのセーフアースペース～イギリス留学経験から～」, 『フィルカルー

分析哲学と文化をつなぐ』, 第8巻, 第1号, 株式会社ミュー, pp. 142–160.

稻原美苗, 坂本美理, 竹内彩也花, 槙野沙央理 (2023) 「『女性』で『多様』な哲学者たちの往復書簡」, 『フィルカル—分析哲学と文化をつなぐ』, 第8巻, 第3号, 株式会社ミュー, pp. 160–90.

稻原美苗 (2024) 「対話の現象学～自分の経験と考えを自分で語ることの意義～」, 稲原美苗 (編) 『哲学対話と当事者性』, 科研費 (課題番号 19H01185) 研究成果報告書, pp. 1–18.

三井規裕, 稲原美苗 (2024) 「対話の場にある懸念を解消するファシリテーションの在り方の検討」, 稲原美苗 (編) 『哲学対話と当事者性』, 科研費 (課題番号 19H01185) 研究成果報告書, pp. 103–111.

北野幸子「誕生からの乳幼児のウェルビーイングを支える保育者の研修を考える」『発達』Vol. 174, pp. 73–79, ミネルヴァ書房

北野幸子 (2023) 「人間中心の社会 (Society5.0)における乳幼児のウェルビーイングを考える『保育の友』2023年4月号, pp. 8–13, 全国社会福祉協議会

北野幸子 (2023) 「乳幼児期からの人権と保育の質」『発達』Vol. 175, pp. 31–36, ミネルヴァ書房

北野幸子 (2023) 「運動・スポーツ, 遊びを通した子どもの育み～乳幼児のウェルビーイングと遊びを通じた育ちと学び～」『子どもと発育発達』21 (3), pp. 190–195, 日本発育発達学会編, 杏林書院

北野幸子, 國土将平, 辻弘美, 村山留美子, 佐野孝, 若林恵美, 清山莉奈, 松山聖奈 (2024) 「非認知的能力の育ちを捉え育む乳幼児教育・接続期教育の開発」『尼崎市学びと育ち研究所研究紀要』(令和5年度) 第6号, pp. 10–13, pp. 42–45.

北野幸子 (2024) 「保育専門職の明確化と社会的位置づけの強化にむけて」『認定こども園白書』印刷中

岩橋道世・平山猛・隈崎哲也・菊地義行・只野裕子・福澤紀子・永田久史・田和由里子・田口侑平・東口房正・桝沢幸苗・坂崎隆浩・齋藤奈緒美・矢藤誠慈郎・北野幸子 (2024) 「保育所等における未就園児の子どもの発達と支援・援助の在り方に関する研究」『保育科学研究』第13巻, 印刷中。

Shorb, P., Kenkliés, K. Yamasaki, Y. Sakuma, H. and Kawaji, A., ‘Review Seminar of Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan (I): Record of Speeches’ 『教育科学論集』第26号, pp. 53–63, 2023. 2.

Shorb, P., Kenkliés, K. Yamasaki, Y. Kuno, H. and Kawaji, A., ‘Review Seminar of Educational

Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan (II): Record of Discussion' 『教育科学論集』第 26 号, pp. 65–73, 2023. 2.

川地亜弥子「兵庫と教育者たち」『兵庫教育』第 867 号, p. 40, 2023. 5。

川地亜弥子「成長を感じられる学校」『兵庫教育』第 869 号, p. 40, 2023. 7。

川地亜弥子「文学を学級で読むということ」『兵庫教育』第 871 号, p. 40, 2023. 9。

川地亜弥子「子どもたちの見せ場」『兵庫教育』第 873 号, p. 40, 2023. 11。

川地亜弥子「学ぶ楽しみ発見」『兵庫教育』第 875 号, p. 40, 2024. 1。

川地亜弥子「防災と学校」『兵庫教育』第 877 号, p. 40, 2024. 3。

#### (4) 著書

##### 単著

目黒強(2023)『明治期における課外読み物としての〈児童文学〉の正統化と逸脱』(博士論文)

渡邊隆信 (2023)『森のような教師：日本とドイツの学窓から』共和国。

津田英二『生涯学習のインクルージョン：知的障害者がもたらす豊かな学び』明石書店, 2023 年 4 月, 全 240 頁.

##### 編著

稻原美苗, 川崎唯史, 中澤瞳, 宮原優 (編) (2023)『フェミニスト現象学—経験が響きあう場所へ』, ナカニシヤ出版.

稻原美苗 (編) (2024)『哲学対話と当事者性』, 科研費 (課題番号 19H01185) 研究成果報告書.

中谷奈津子編著 (2024)『保育所等における子ども家庭支援の展開－生活困難を支える園実践の質的分析－』晃洋書房。

北野幸子 (監修) (2023 春・秋号)『これからの幼児教育』ベネッセ総合教育研究所。

幼稚園・保育所の運営研究会 (渡邊秀則・北野幸子・草山充・佐藤暁子・大竹節子) 編 (2023)『幼稚園・保育所の運営トラブル解決事例集』第一法規。

編集委員会 (秋田喜代美・大方美香・大澤力・大日向雅美・大豆生田啓友・北野幸子・小林紀子・汐見稔幸・砂上史子・増田まゆみ・無藤隆・師岡章・矢藤誠慈郎) 編 (2023 年度月刊誌)『保育ナビ』

フレーベル館。

最新 保育士養成講座 総括編纂委員会（秋田喜代美・岩田力・柏女靈峰・北野幸子・山縣文治）編  
(2023) 全国社会福祉協議会。

### 分担執筆

渡邊隆信 (2023) 「生活と学校」, 「教育関係論」, 「教育哲学と教育改革」 教育哲学会編『教育哲学事典』 pp. 50–51, pp. 168–169, pp. 562–563。

稻原美苗 (2023) 「第4章：更年期の経験一心身の揺らぎのフェミニスト現象学」, 稲原美苗, 川崎唯史, 中澤瞳, 宮原優 (編)『フェミニスト現象学—経験が響きあう場所へ』, ナカニシヤ出版, pp. 69–86.

木下孝司 (2023) 発達保障とは何か：発達理解の基本を中心に 全障研出版部編 『発達保障入門：DVD ブック』 全障研出版部

### 総説・書評など

目黒強(2023)「地域見つめ旅する物語」『神戸新聞』2023年4月15日

目黒強(2024)「柿本真代『児童雑誌の誕生』(文学通信, 二〇二三年二月二八日刊)」日本児童文学学会編『児童文学研究』第56号, pp. 69–71.

松岡広路 (2023) 「〈ふくし〉を実質化する福祉教育・ボランティア学習とは」『ふくしと教育』 (36), pp. 62–67.

津田英二 (2024) 「実践に根ざした普遍的なテーマを扱う課題提起の本」(萩原広道・佐野泰之・杉谷和哉・須田智晴・谷川嘉浩・真鍋公希・三升寛人編著『〈京大発〉専門分野の越え方』ナカニシヤ出版, 2023年3月刊)『図書新聞』3627号, 2024年2月17日.

津田英二 (2023)「生涯学習の観点から見た特別支援教育」『兵庫教育』No. 874, 2023年12月, pp. 4–7.

稻原美苗 (2023) 「稻原美苗さんインタビュー（前編）：マイノリティ当事者としてさまざまな地域で育ってきて」, 『fox project』,  
一般社団法人こたえのない学校, (<https://www.foxpj.org/interview/3537/>) .

稻原美苗 (2023) 「稻原美苗さんインタビュー（後編）：だれも異常じやない。社会が決めた「普通」になれないだけ」, 『fox project』, 一般社団法人こたえのない学校,  
(<https://www.foxpj.org/interview/3548/>) .

稻原美苗 (2023) 「シリーズ：人権尊重のまちづくり① 「共依存」の中にいる子どもたちに気付いて」，『広報伊丹』，第 1503 号，第 3 面。

稻原美苗 (2023) 「シリーズ：人権尊重のまちづくり② 「普通」とは何でしょうか？」，『広報伊丹』，第 1505 号，第 2 面。

稻原美苗 (2023) 「シリーズ：人権尊重のまちづくり③ 『障がい』と『迷惑』と『申し訳ない』の関係性について」，第 1507 号，第 4 面。

北野幸子 (2023) 「保育人材の確保・育成・定着について～保育界が一体となって保育の魅力発信を～」『保育士会だより』，第 317 号，pp. 2-5，全国社会福祉協議会

北野幸子 (2023) 「こどもまんなか社会における私保連への期待」『保育通信』，第 818 号，p2. 全国私立保育連盟

勅使河原君江 (2023) 「子どもたちの『生きていることのあらわれ』としての絵画作品」『第 76 回全国児童養護施設長研究協議会兵庫大会』，p254. 全国児童養護施設協議会事務局

川地亜弥子編『ライティング（書くこと）の評価はどうあるべきか：「ループリック評価」の批判的検討』（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2022 年度学術 Week シンポジウム報告書）2023. 2。

川地亜弥子編『子どもの『生活』を支える教師の教育実践』（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2022 年度学術 Week シンポジウム報告書）2023. 3。

### (5) シンポジウム開催など

岡部恭幸 (2023) 「異校種間共同研究の意義と課題」2023 年度 数学教育学会夏季研究会（関西エリア）夏季研究会予稿集，シンポジウム「異校種間共同研究の在り方について」20-22 招待あり

日本教育制度学会第 30 回大会 (2023 年 11 月 12, 筑波大学)，課題別セッション（教員制度）「教員・教員制度をめぐる「地域」再考 —教員制度の社会基底としての地域—」。山下晃一（企画・コーディネータ・司会）

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室，保育総合研究会共催 乳幼児教育学セミナー7 「異次元の『こどもまんなか』社会を考える」(2023 年 8 月 24 日開催，於：神戸大学)，北野幸子（企画，登壇）。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科乳幼児教育学研究室主催 乳幼児教育セミナー8 「保育実践の省察と対話」(2023 年 8 月 27 日) 北野幸子（企画，登壇）。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室、神戸大学附属幼稚園、環太平洋乳幼児教育学会日本支部共催 乳幼児教育学セミナー9「保育実践の省察と対話」(2024年3月17日) 北野幸子 (企画)。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室、神戸大学附属幼稚園共催 乳幼児教育学セミナー10「乳幼児教育の実践を支えるICTの活用について考える」(2024年3月24日) 北野幸子 (企画, 登壇)

美術教育学会美術教育オンライン連続セミナー「西田秀雄がとりくんだ子供の美術鑑賞活動～第2次世界大戦時下の国民学校にて～」(2024年2月24日) 勅使河原君江 (招待あり)

兵庫県教育委員会事務局社会教育課開催 近畿ブロック共に学び、生きる共生社会コンファレンス「美術を楽しもう～対話を基本とした美術鑑賞を通して～」(2023年10月7日) 勅使河原君江 (招待あり)

第76回全国児童養護施設長研究協議会兵庫大会開催 第43回児童文化奨励絵画展(2023年11月6日～8日) 勅使河原君江 (審査委員長)

#### (6)受賞

該当なし。

#### (7)教育系の総括と課題

新型コロナウイルス感染による制限が撤廃され、国際的または全国規模の研究活動が幅広く実施されている。とくに本年度は、外部研究資金の獲得、国際共著論文執筆、および研究を集約し世に問う著書執筆の成果が顕著である。また、複数分野の研究科教員や指導学生と連携・共同した研究成果発表も多い。教育実践現場に寄与する研究成果の還元については、シンポジウム・セミナー等を多数実施することができた。今後さらなる国際共同研究、著作出版や国内学会を軸とした成果発表、および地域に根差した研究のバランスの取れた発展が期待される。

(人間発達専攻長 木下孝司)

#### 7.7.2. 人間環境学専攻

##### (1) 研究プロジェクト (専攻研究者が代表者で、研究費総額200万円以上)

研究代表者 (本専攻教員) : 青木茂樹

研究分担者 : 中野敏行 (名古屋大学), 連携研究者 : 高橋覚 (本専攻教員)

研究課題 : 気球搭載型エマルション望遠鏡によるGeV/sub-GeV宇宙ガンマ線の謎の解明

研究資金 : 科学研究費補助金・基盤 (A), 2023-2025年度, 総額 (直接経費) 3,590万円

研究概要 : 気球搭載型のエマルション望遠鏡を開発し、天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者 (本専攻教員) : 高橋覚

研究分担者：青木茂樹（本専攻教員）

研究課題：多段シフターによる時間分解原子核乾板検出器の実現と宇宙ガンマ線観測への展開

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A），2021-2023年度，総額（直接経費）3,270万円

研究概要：本来時間情報を持たない原子核乾板に多段シフターという手法で各飛跡に秒以下の精度で時間情報を付与することで、宇宙ガンマ線観測などへの展開を図る。

研究代表者（本専攻大学院学生）：小田美由紀

研究課題：パルサーとGRBの詳細観測を可能にする原子核乾板時刻付与機構の開発

研究資金：科学研究費補助金・特別研究員奨励費，2021-2023年度，総額（直接経費）220万円

研究概要：本来時間情報を持たない原子核乾板飛跡への時刻情報付与機構の時間分解能を高めることで、パルサーヤガムマ線バーストの観測への応用への可能性を開拓する。

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

研究課題：流速場と拡散ダイナミクスの相乗的な効果による拡散促進現象

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2020-2023年度，総額（直接経費）320万円

研究概要：攪拌における移流と拡散の協働現象に関して、一般的な定式化を試みる。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke (Technische Universität Dresden, Germany)

研究課題：Accessing complementary hortensia germplasms to enable floricultural genomics  
ゲノミクス情報を付与した日独アジサイ遺伝資源コレクションの統合化

研究資金：二国間交流事業共同研究，2023-2024年度，総額（直接経費）200万円

研究概要：ドイツと日本で観賞用植物として人気の高い園芸植物アジサイについて、形態とゲノミクス情報を包括する世界最大のデータベースをドイツ・ドレスデン工科大学との共同研究により構築し、原産地としてアジア、ヨーロッパ、北南米など広く世界をカバーしたアジサイの遺伝資源植物コレクションを作製する。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：源利文（本専攻教員），佐藤真行（本専攻教員），石井弘明（本学農学研究科）

研究課題：令和6年度里地里山の生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

研究資金：神戸市・受託研究，2023年度，総額（直接経費：600万円）

研究概要：神戸市の放棄された里地里山の管理導入による生物多様性再生の検証および市民への波及効果について調査を行う。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：小笠原道生（千葉大学）

研究課題：比較ゲノミクスと進化発生学から紐解く機械的生殖隔離の強化と種分化

研究資金：文部科学省・科学研究費補助金（基盤研究B）

研究概要：種の多様化を促進する交尾器形態の分化を、個体発生とその遺伝基盤の側面から明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：山中裕樹（龍谷大学）

研究課題：DNAメチル化をマーカーとする環境DNAエピジェネティクス

研究資金：科学研究費基金・挑戦的研究（萌芽），2022-2023年度，総額（直接経費）500万円

研究概要：環境DNA分析にDNAのメチル化に代表されるエピジェネティックな修飾状態の違いの分析を取り入れるための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：山中裕樹（龍谷大学），坂田雅之（北海道大学）

研究課題：環境DNA分析による種間交雑の検出

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2023-2025年度，総額（直接経費）1,490万円

研究概要：環境DNA分析によって魚類の交雑状況を把握するための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：テラヘルツおよび低波数ラマン分光法による高分子の高次構造解析と分子間相互作用の直接観察

研究資金：NEDOムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現／非可食バイオマスを原料とした海洋分解可能なマルチロック型バイオポリマーの研究開発，2020-2024年度，総額（直接経費）4,409万円

研究概要：テラヘルツおよび低波数領域のラマンスペクトルより高分子の海洋分解機構を解明する。

〈数理環境論〉

研究代表者（本専攻教員）：長坂耕作

研究課題：代数曲面の近似・変形・補間の各操作に適する数値・数式融合計算の開発と検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2019-2023年度，総額（直接経費）330万円

研究概要：代数的な性質を用いたCGやCAD等のために必要となる基盤的な計算アルゴリズムを開発し，その適用可能性を検証する。

〈生活環境論〉

研究代表者（本専攻教員）：内山榆太

共同研究者：喜屋武亨（琉球大学），高倉実（琉球大学），佐藤真行，丑丸敦史（本専攻教員），原田和弘（人間発達専攻教員），香坂玲（東京大学）

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2023-2026年度，総額（直接経費）1,430万円

**研究概要:**環境保全と健康の改善に資する政策や取組の促進に向けて日常生活において受給されている生態系サービスの評価と効果検証を行い、都市内や都市地域間での格差を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：内山愉太

共同研究者：佐藤真行，丑丸敦史，源利文（本専攻教員），Mario R. Delos Reyes, Mark Anthony M. Gamboa (University of the Philippines), Victorino Aquitania, Jose Bernardo B. Gochoco III (International Council for Local Environmental Initiatives), Sigit D. Arifwidodo, Orana Chandrasiri (Kasetsart University)

研究課題：Unraveling urban resilience using City Preparedness Index: Scientific evaluation method for developing policy and action networks

研究資金：Asia-Pacific Network for Global Change Research, Collaborative Regional Research Programme, 2023–2025 年度, 総額（直接経費）715 万円

研究概要：気候変動下における都市のレジリエンス向上向けた各都市の政策等の実施、準備状況の評価指標の構築と研究者及び政策立案者等のネットワーク形成を行う。

研究代表者（本専攻教員）：村山留美子

共同研究者：ESCOLAR Emerson Gaw（神戸大学）

研究課題：高次元のリスク認知構造の新たな表現に関する検討

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2023–2025 年度, 総額（直接経費）490 万円

研究概要：位相的データ解析手法に着眼し、リスク認知の構造を明らかにするための新たな方策の検討を目的とする

研究代表者（本専攻教員）：田畠智博

共同分担者：蔡佩宜（九州工業大学）

研究課題：近年のエネルギー価格高騰と家計の脆弱性に関する実証分析

研究資金：住友財団・環境研究助成, 2023–2024 年度, 総額（直接経費）220 万円

研究概要：近年の電気代の上昇度合いと社会的弱者の家計負担に与える影響の度合いとの関係性を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：田畠智博

共同分担者：蔡佩宜（九州工業大学）

研究課題：燃料貧困指標を用いたエネルギー価格高騰に対する家計脆弱性の分析と対策の提案

研究資金：神戸市・大学発アーバンイノベーション神戸(物価高騰等対策), 2023 年度, 総額（直接経費）316.6 万円

研究概要：近年のエネルギー価格高騰が、神戸市民の家計負担に及ぼした影響を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

共同研究者：阪上隆英（神戸大学）

研究課題：纖維製品の資源循環のための選別・分離技術の研究開発

研究資金:NEDO 先導研究プログラム エネルギー／環境新技術先導研究プログラム, 2023–2024 年度,  
総額（直接経費）4,290 万円

研究概要：纖維 to 繊維リサイクルによる資源循環システムを構築することを目的に複数の素材が混在している纖維から単一纖維へ分離する前処理技術の研究開発を行う。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

共同分担者：小泉智（茨城大学），兒玉隆之（京都橘大学），中西康雅（三重大学），山田由佳子（大阪教育大学），武内俊次（京都工芸纖維大学），金田理子（神戸大学附属中等教育学校）

研究課題：持続可能な材料（纖維・糸）とテキスタイル製品を直結させるための感性評価の体系化

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2022–2025 年度，総額（直接経費）1,350 万円

研究概要：纖維製品を使用する際に心地よいと感じる布を纖維・糸の特性から理論的に設計する評価システムを開発し、体系化することを目指す。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同分担者：丑丸敦史（本専攻教員），源利文（本専攻教員），内山愉太（本専攻教員）

研究課題：都市化と人口構造のもとでの生態系サービス評価と保全政策に関する学際的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2022–2025 年度，総額（直接経費）1,270 万円

研究概要：都市生態系の評価と保全に関する研究を行う。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：田畠智博（本専攻教員），村山留美子（本専攻教員）

研究課題：コロナ（COVID-19）感染症発生後の都市公園に対する意識・行動変化と課題からみる公園と街路樹空間を生かした新たな緑生都市への展開

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸，2022–2023 年度，総額（直接経費）250 万円

研究概要：コロナ禍での都市公園に対する利用者意識、行動変容について継続調査を行うことで公園への役割に加え、都市の緑地に対する課題を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：村山留美子

共同研究者：稻原美苗（本専攻教員），藤長愛一郎（大阪産業大学），内山巖雄（公益財団法人 ルイ・パストゥール医学研究センター）

研究課題：COVID-19 流行は市民のリスク観をどのように変えるのか？：合意形成の観点から

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2021–2023 年度，総額（直接経費）1,230 万円

研究概要：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行が、日本社会全体の「リスク観」に与えた影響を明らかにする

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：田畠智博（本専攻教員）

研究課題：植物利用の変遷および地域差異から探る持続的人文景観要素の解明と現代的地域性の担保

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2021-2023 年度，総額（直接経費） 320 万円

研究概要：祭祀植物から捉えた人文景観形成の要素とライフスタイルの変化時期やその程度などを総合して検証し，持続的人文景観要素の解明，現代的地域性の担保と展開を論考する。

研究代表者（本専攻教員）：湯浅正洋

研究課題：エネルギー代謝変動による妊娠期潜在性ビオチン欠乏症と胎児奇形の関連解明とその予防

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2021-2023 年度，総額（直接経費） 350 万円

研究概要：妊娠期における潜在性ビオチン欠乏症とエネルギー代謝変動・胎児奇形発症頻度との関連を明らかにし，妊娠期における潜在性ビオチン欠乏症の予防法の提案を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：福田博也

共同研究者：兵頭政光（高知大学），村田機械株式会社

研究課題：嚥下動作検出のためのウェアラブルセンサの開発

研究資金：産官学連携共同研究経費，2021-2023 年度，総額（直接経費） 300 万円

研究概要：介護施設での食事介助における嚥下動作モニタリングのためのウェアラブルセンサを開発する。

#### 〈社会環境論〉

研究代表者（本専攻教員）：阿部紀恵

研究課題：国際法における人権保障と環境保全との関係の再検討

研究資金：科学研究費基金・若手研究，2023-2026 年度，総額（直接経費） 360 万円

研究概要：人権保障と環境保全という国際法規範が実現するべき 2 つの価値が，どのような関係にあると理解され，いかにして関連する複数の法規範の立法（改正）・解釈・適用に反映されているのかを，その多元的構造に着目しつつ検証するとともに，そこで観察される人権保障と環境保全との調和と齟齬が生じるメカニズムを解明する。

研究代表者（本専攻教員）：井口克郎

共同研究者：浅野慎一（摂南大学），阿部紀恵（本専攻教員），岩佐卓也（専修大学），太田和宏（本専攻教員），岡田章宏（本学名誉教授），澤宗則（本専攻教員），橋本直人（本専攻教員），原将也（本専攻教員），加戸友佳子（摂南大学），洪シネ（本専攻教博士後期課程修了）

研究課題：国連「健康権」枠組みに基づく新型コロナウイルスへの各国対応の評価と理論的再構成。

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2021-2024 年度，総額（直接経費）： 320 万円

研究概要：新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行に対する各国の動向について，国際人権規約第 1 規約（社会権規約）12 条に規定される「健康権」（right to health）の枠組みから検討する。

研究代表者（本専攻教員）： 太田和宏

研究資金： 科学研究費補助金・基盤（C），2022-2025 年度，総額（直接経費） 310 万円

**研究概要：** フィリピンにおける民主主義の実態を事例として実態調査を踏まえながら、民主主義の原理そのものを再検討し、各社会に固有の社会編成と関連した民主主義制度や民主主義価値観が機能しているのではないかという問題を考察する。

**研究代表者（本専攻教員）：** 坂井晃介

**研究課題：** 自己言及的システム理論に基づく福祉国家の比較歴史社会学的研究

**研究資金：** 科学研究費補助金・若手研究、2022-2024年度、総額（直接経費）280万円

**研究概要：** 政治制度と他の諸制度の関係を踏まえた政策形成のメカニズムに関するシステム論的理論枠組みを精緻化し、それに基づいて学術的知見の政治的参照という観点から福祉国家形成を比較歴史社会学的に考察する。

**研究代表者（本専攻教員）：** 澤 宗則

**研究課題：** 南アジア系移民のエスニック戦略とトランサンショナルな領域化の比較考察

**研究資金：** 科学研究費補助金・基盤（C）、2020-2023年度、総額（直接経費）240万円

**研究概要：** 南アジア系移民のエスニック戦略とトランサンショナルな領域化のプロセスを比較することにより、南アジア系移民社会の特質を明らかにする。

**研究代表者（本専攻教員）：** 橋本直人

**研究課題：** テキスト計量による思想史研究の方法的革新—ウェーバーとドイツ社会科学を事例に

**研究資金：** 科学研究費補助金・基盤（C）、2023-2025年度、総額（直接経費）260万円

**研究概要：** ドイツ社会科学の古典であるマックス・ウェーバーと同時代の思想家・理論家を対象として、テキスト計量分析の導入による思想史・理論史研究の新たな研究技法を開発する。

**研究代表者（本専攻教員）：** 原 将也

**研究課題：** アフリカにおける多民族社会成立の解明—地方行政における伝統的権威の裁量に着目して

**研究資金：** 科学研究費補助金・若手研究、2019-2023年度、総額（直接経費）310万円

**研究概要：** 植民地期以降現在までのアフリカにおいて、間接統治のもと権力が強化された伝統的権威に着目し、多民族社会が成立する要因を実証的に解明する。

**研究代表者（本専攻教員）：** 原 将也

**研究課題：** 热帯作物キャッサバを通して考える地域社会におけるグローバル時代の食料主権

**研究資金：** 科学研究費補助金・若手研究、2023-2027年度、総額（直接経費）350万円

**研究概要：** グローバルな構造が前提となった現代において、地域住民が主体的に作物を選び、みずからの食を決定するという「食料主権」のあり方について、熱帯作物キャッサバの生産—消費を事例として実証的に探究していく。

## （2）国際共同研究

〈自然環境論〉

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

共同研究者： Krishna Kanti Dey (Indian Institute of Technology Gandhinagar)

研究課題：Activity Induced Diffusion Recovery in Crowded Colloidal Suspension"

研究資金：一般財源

研究概要：酵素反応下でコロイド粒子のブラウン運動を観察すると、コロイド同士の混雑による異常拡散が見られ、長時間挙動では通常の拡散に回復する。このような系で、溶媒中もしくはコロイドの表面上で酵素反応を起こすと、通常の拡散への回復が早くなることを明らかにした。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者： Stefan Wanke (Technische Universität Dresden, Germany)

研究課題：Accessing complementary hortensia germplasms to enable floricultural genomics

ゲノミクス情報を付与した日独アジサイ遺伝資源コレクションの統合化

研究資金：二国間交流事業共同研究、2023-2024 年度、総額（直接経費） 200 万円

研究概要：ドイツと日本で観賞用植物として人気の高い園芸植物アジサイについて、形態とゲノミクス情報を包括する世界最大のデータベースをドイツ・ドレスデン工科大学との共同研究により構築し、原産地としてアジア、ヨーロッパ、北南米など広く世界をカバーしたアジサイの遺伝資源植物コレクションを作製する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者： Astari Dwirant, Sri Widiyanti Rahayu Hilia (Department of Biology, Faculty of Mathematics and Natural Sciences, Universitas, Indonesia)

研究課題：Chromosomes Inner and outer structure study using high- resolution electron microscopy

高感度電子顕微鏡を用いた染色内部ならびに外部構造研究

研究資金：寄付金

研究概要：植物染色体の同調化の開発、遺伝子可視化法と併用して染色体構造について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者： Natalia Borowska-Zuchowska (Faculty of Natural Sciences, University of Silesia in Katowice, Poland)

研究課題：The structural and ultrastructural characterisation of the functional proteins in the plant nucleoli.

植物核小体の機能性タンパク質の構造および超微細構造解析

研究概要：電子顕微鏡を用いて植物の核小体特異的タンパク質の局在と構造について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者： Channarong Sartsanga (BIOTEC, Thailand) , Rinyaporn Phengchat (NRC-NANO, National Research Council, Canada)

研究課題 : Analysis of Chromosome Nanostructures Using Next-Generation Electron Microscopy  
次世代型電子顕微鏡を用いた染色体ナノ構造解析

研究概要 : 染色体を構成するクロマチン構造について、次世代型電子顕微鏡を用いて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者 : Andreas Houben, Bhanu Prakash Potlapalli (Leibniz Institute of Plant Genetics and Crop Plant Research, Germany)

研究課題 : Development of a CRISPR-FISH/EM method suitable for the detection of specific DNA sequences at high resolution by transmission electron microscopy.

透過型電子顕微鏡による特定DNA配列の高解像度検出に適したCRISPR-FISH/EM法の開発

研究概要 : 電子顕微鏡法(EM)によって構造的に保存されたクロマチンのDNAをイメージングするためのCRISPRイメージングツールセットを開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同研究者 : 金子 聰（代表 : 長崎大学）、佐藤 綾人（名古屋大学）、矢口貴志（千葉大学）、Ahmed Fahal (University of Khartoum, Sudan)

研究課題 : 早期・潜在性真菌腫診断に関する研究 : バイオマーカーの探索・POC診断と臨床疫学プラットフォームの開発

研究資金 : 医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業（アフリカにおける顧みられない熱帯病(NTDs)対策のための国際共同研究プログラム）

研究概要 : 顧みられない熱帯病のひとつであるマイセトーマの原因菌の自然界における分布を解明するとともに、簡易な診断法を開発し、疫学研究を行うためのプラットフォームを開発する。

〈数理環境論〉

研究代表者（本専攻教員）： ESCOLAR Emerson Gaw

共同研究者 : Woojin Kim (Korea Advanced Institute of Science & Technology)

研究課題 : 位相的データ解析におけるマルチパラメータ・パーシステンスの研究

研究資金 : 一般財源

研究概要 : 複数のパラメータを持つデータの位相的データ解析に向けて、様々な特微量を調べて理論整備を行なった。

〈生活環境論〉

研究代表者（本専攻教員）： 内山愉太

共同研究者 : 佐藤真行、丑丸敦史、源利文（本専攻教員），Mario R. Delos Reyes, Mark Anthony M. Gamboa (University of the Philippines), Victorino Aquitania, Jose Bernardo B. Gochoco III (International Council for Local Environmental Initiatives), Sigit D. Arifwidodo, Orana Chandrasiri (Kasetsart University)

研究課題 : Unraveling urban resilience using City Preparedness Index: Scientific evaluation

method for developing policy and action networks

研究資金 : Asia-Pacific Network for Global Change Research, Collaborative Regional Research Programme, 2023–2025 年度, 総額 (直接経費) 715 万円

研究概要 : 気候変動下における都市のレジリエンス向上向けた各都市の政策等の実施、準備状況の評価指標の構築と研究者及び政策立案者等のネットワーク形成を行う。

### (3) 教員の受賞

受賞者 : 蘆田弘樹

受賞名 : 神戸大学学長表彰 (財務貢献)

受賞対象 : 研究費獲得

受賞日 : 令和 5 年 10 月 19 日

受賞理由 : 教育活動を通して大学の発展に貢献した評価されたため。

受賞者 : 佐賀達矢

受賞名 : Best Oral Presentation Award

受賞対象 : Understanding Traditional Entomophagy: An Environmental Education Program for High School Students in Japan

受賞日 : 令和 5 年 7 月 20 日

受賞理由 : 第 10 回東アジア生態学連合国際会議において優秀な口頭発表を行ったと評価されたため。

受賞者 : ESCOLAR Emerson Gaw

受賞名 : 神戸大学全学共通教育ベストティーチャー賞

受賞対象 : 開講科目名称 : 線形代数 1

受賞日 : 令和 5 年 10 月 26 日

受賞理由 : 主に学部 1~2 年生の学生が学ぶ全学共通教育において、教育方法や内容が学生から高く評価されたため。

### (4)国際共著論文（海外との研究）

<自然環境論>

Abe K. et al. (T2K Collaboration) (2023) “Measurements of neutrino oscillation parameters from the T2K experiment using  $3.6 \times 10^{21}$  protons on target”, *Eur. Phys. J. C*, 83:782, <http://doi.org/10.1140/epjc/s10052-023-11819-x>

Roliński T, Kitahata H, Koyano Y, Górecki J (2024) Quantitative analysis of the complex time evolution of a camphor boat. *Appl. Sci.*, 14, 959, <https://doi.org/10.3390/app14030959>

Sartsanga C, Phengchat R, Fukui K, Wako T, Ohmido N (2024) Localization and quantitative distribution of a chromatin structural protein Topoisomerase II on plant chromosome using HVTEM and UHVTEM. *Micron* doi: 10.1016/j.micron.2024.103596.

Hilia SWR, Abinawanto, Dwiranti A, Bowolaksono A, Lestari R, Fadhilah, Kristanto AH, Ohmido N (2023) Ultrastructure of Javaen barb fish *Systomus orphoides* Valenciennes, 1842 spermatozoa (Cypriniformes: Cyprinidae) by electron microscopes. *Microsc Res Tech*, doi:10.1002/jemt.24341.

Ohmido N, Polosoro A (2023) Chromatin Immunostaining of Plant Nuclei. *Methods Mol Biol*. 2672:233–244. doi: 10.1007/978-1-0716-3226-0\_14.

Hashizume H, Taga S, Sakata MK, Hussein M, Siddig EE, Minamoto T, Fahal AH, Kaneko S (2023) Environmental detection of eumycetoma pathogens using multiplex real-time PCR for soil DNA in Sennar State, Sudan. *Trop. Med. Health* 51:71.

Smith ML, Loope KJ, Chuttong B, Dobelmann J, Makinson JC, Saga T, Petersen KH, Napp N (2023) Honey bees and social wasps reach convergent architectural solutions to nest-building problems. *PLoS Biology*, 21, e3002211. <https://doi.org/10.1371/journal.pbio.3002211>

#### <数理環境論>

Escolar E G, Hiraoka Y, Igami M, Ozcan Y (2023) Mapping firms' locations in technological space: A topological analysis of patent statistics. *Research Policy*, 52(8), 104821.

#### <生活環境論>

Islam I, Islam AHM S, Sato M (2022) “Nexus between Climatic Extremes and Household Expenditure in Rural Bangladesh: A Nationally Representative Panel Data Analysis”, *Asia-Pacific Journal of Regional Science*. <https://doi.org/10.1007/s41685-022-00266-3>

Kovács B, Uchiyama Y, Miyake Y, Quevedo JMD, Kohsaka R (2022). Capturing landscape values in peri-urban Satoyama forests: Diversity of visitors' perceptions and implications for future value assessments. *Trees, Forests and People*, 10, 100339.

<https://doi.org/10.1016/j.tfp.2022.100339>

Rifai H, Quevedo JMD, Lukman KM, Hernawan UE, Alifatri L0, Risandi J, . . . , Uchiyama Y, Kohsaka R (2023). Understanding community awareness of seagrass ecosystem services for their blue carbon conservation in marine protected areas: A case study of Karimunjawa National Park. *Ecological Research*, 38(4), 541–556. <https://doi.org/10.1111/1440-1703.12391>

Quevedo JMD, Uchiyama Y, Kohsaka R (2023). Progress of blue carbon research: 12 years of global trends based on content analysis of peer-reviewed and ‘gray literature’ documents. *Ocean & Coastal Management*, 236, 106495. <https://doi.org/10.1016/j.ocecoaman.2023.106495>

(5)著書

<分担執筆>

池 祐一, Emerson Gaw Esclar, 大林 一平, 鍛治 静雄 (2023) 「位相的データ解析から構造発見へ : パーシステントホモロジーを中心に (AI/データサイエンス ライブラリ "基礎から応用へ", 4)」, サイエンス社

蔡 佩宜, 田畠智博 (2023) 「日本における災害廃棄物の広域処理受け入れに関する課題—地域住民の意識調査から—」 北川秀樹(編)『東アジアの環境政策と課題』 日本評論社, 57-78

Uchiyama, Y., & Kohsaka, R. (2023). Development and Evolution of Urban Biodiversity Indicators and Assessment Tools. In Routledge Handbook of Urban Biodiversity (pp. 379–387). Routledge.

蔡佩宜, 篠橋一輝, 佐藤真行, 植田和弘 (2023), 「ダム事業の意思決定支援ツールとしての多基準分析」, 『ダムと環境の科学IV』, 京都大学学術出版会, pp. 179–186.

井口克郎 (2023) 「第9期介護保険制度改定案の問題点 —健康権に適った介護保障制度の追求を—」 『女性白書2023 戰争ではなく平和を—いのち・くらし・人権』 日本婦人団体連合会編, 103-106.

太田和宏 (2023) 「グローバル秩序の正当性」 (松下冽・山根健至編著) 『新自由主義の呪縛と深層暴力—グローバルな市民社会の構想に向けて』 ミネルヴァ書房.

(6) WoS 論文 (10%論文には、文頭に\*を付す)

<自然環境論>

\* Abe K. et al. (T2K Collaboration) (2023) Measurements of neutrino oscillation parameters from the T2K experiment using  $3.6 \times 10^{21}$  protons on target, *Eur. Phys. J. C*, 83:782, <http://doi.org/10.1140/epjc/s10052-023-11819-x>

Takahashi S. et al. (GRAINE collaboration) (2024) First Emulsion  $\gamma$ -Ray Telescope Imaging of the Vela Pulsar by the GRAINE 2018 Balloon-borne Experiment. *The Astrophysical Journal*, 967:47, <https://doi.org/10.3847/1538-4357/ad0973>

Kitahata H, Koyano Y (2023) Mathematical modeling for the synchronization of two interacting active rotors. *Phys. Rev. E*, 107, 064607, <https://doi.org/10.1103/PhysRevE.107.064607>

Shimada J, Takaoka Y, Ueda T, Tani A, Sugahara T, Tsunashima K, Yamada H, Hirai T (2023) Proton conduction in tetra-n-butylammonium bromide semiclathrate hydrate. *Solid State Ionics*, 393, 116188.

Shimada J, Tani A, Yamada T, Sugahara T, Hirai T, Okuchi T (2023) Quasi-elastic neutron scattering studies on fast dynamics of water molecules in tetra-n-butylammonium bromide semiclathrate hydrate. *Applied Physics Letters* 123, 044104.

Toyoda S, Inoue K, Yamaguchi I, Hoshi M, Hirota S, Oka T, Shimazaki T, Mizuno H, Tani A, Yasuda H, Gonzales CAB, Okutsu K, Takahashi A, Tanaka N, Todaka A (2023) Interlaboratory comparison of electron paramagnetic resonance tooth enamel dosimetry with investigations of the dose responses of the standard samples. *Radiation Protection Dosimetry* 199, 1557–1564.

Kobayashi R, Kojima H, Tani A (2023) Investigation of the provenance of Okinose sand using ESR signals of quartz in granite and granodiorite around Osaka Bay. *Radiation Protection Dosimetry* 199, 1639–1645.

Yokoyama Y., Isogai S, Kusuki K, Tani A, Nishido H (2023) Hydrogen transfer reactions via organic radicals in gamma-irradiated chibaite. *Radiation Protection Dosimetry* 199, 1646–1652.

Benzid K, Tani A (2024) Thermal behavior of E' point defects in gamma-irradiated natural quartz: Study of the Meyer–Neldel rule using electron spin resonance. *Journal of Luminescence* 265, 120218.

Sartsanga C, Phengchat R, Fukui K, Wako T, Ohmido N (2024) Localization and quantitative distribution of a chromatin structural protein Topoisomerase II on plant chromosome using HVTEM and UHVTEM. *Micron* doi: 10.1016/j.micron.2024.103596.

Hilia SWR, Abinawanto, Dwiranti A, Bowolaksono A, Lestari R, Fadhilah, Kristanto AH, Ohmido N (2023) Ultrastructure of Javaen barb fish *Systomus orphoides* Valenciennes, 1842 spermatozoa (Cypriniformes: Cyprinidae) by electron microscopes. *Microsc Res Tech*, doi:10.1002/jemt.24341.

Takata H, Masuda Y, Ohmido N (2023) CRISPR imaging reveals chromatin fluctuation at the centromere region related to cellular senescence. *Sci Rep*, 13, 14609, doi:10.1038/s41598-023-41770-6.

Ohmido N, Polosoro A. (2023) Chromatin Immunostaining of Plant Nuclei. *Methods Mol Biol.* 2672:233–244. doi: 10.1007/978-1-0716-3226-0\_14.

Ushimaru A, Seo N, Sakagami K, Funamoto (2023) Sexual dimorphism in dioecious species with complex, specialist pollinated flowers. *American Journal of Botany* 110:e16148.

<https://doi.org/10.1002/ajb2.16148>

Aoshima I, Nakao R, Minamoto T, Ushimaru A, Sato M (2023) Heterogenous preference for biodiversity in Japanese urban blue spaces based on people's nature experiences: analysis using eDNA and satisfaction data. *City and Environment Interactions* 18:100101.

Nakahama N, Kurata S, Ushimaru A (2023) Contribution of genetic analyses to semi-natural grassland biodiversity conservation in Japan. *Plant Species Biology* 38:158–170.  
<https://doi.org/10.1111/1442-1984.12424>

Nakata T, Ushimaru A (2024) Trait variation along an urban–rural gradient in Asian dayflower: the contribution of phenotypic plasticity and genetic divergence. *Plant Biology* 26:74–81.  
<https://doi.org/10.1111/plb.13595>

Watazu T, Hiraiwa MK, Inoue S, Mishima H, Ushimaru A, Hosaka T (2024 online) Dominance of non-wetland-dependent pollinators in a plant community in a small natural wetland in Shimane, Japan. *Journal of Plant Research* 137:191–201. <https://doi.org/10.1007/s10265-023-01518-9>

Hiraiwa MK, Ushimaru A (2024) Loss of functional diversity rather than species diversity of pollinators decreases community-wide trait matching and pollination function. *Functional Ecology* <https://doi.org/10.1111/1365-2435.14527>

Nakata T, Nakahama N, Ohmido N, Ushimaru A (2024) Habitat diversification associated with urban development has a little effect on genetic structure in the annual native plant *Commelina communis* in an East Asian megacity. *Ecology and Evolution* 14:e10975.  
<https://doi.org/10.1002/ece3.10975>

Wu L, Osugi T, Inagawa T, Okitsu J, Sakamoto S, Minamoto T (2024) Monitoring of multiple fish species by quantitative environmental DNA metabarcoding surveys over two summer seasons. *Mol. Ecol. Resour.* 24:e13875.

Hashizume H, Taga S, Sakata MK, Hussein M, Siddig EE, Minamoto T, Fahal AH, Kaneko S (2023) Environmental detection of eumycetoma pathogens using multiplex real-time PCR for soil DNA in Sennar State, Sudan. *Trop. Med. Health* 51:71.

Yano N, Minamoto T, Yamaguchi H, Goto T, Nishikata T (2023) Comparison of evolutionary relationships between *Branchiostoma floridae*, *Ciona intestinalis*, and *Homo sapiens* globins provide evidence of gene cooption and convergent evolution. *Inter. J. Mol. Sci.* 24:16009.

Takahara T, Doi H, Kosuge T, Nomura N, Maki N, Minamoto T, Watanabe K (2023) Effective environmental DNA collection for an endangered catfish species: testing for habitat and daily periodicity. *Ichthyol. Res.* 70:409–418.

Wu Q, Zhou J, Komoto T, Ishikawa T, Goto N, Sakata MK, Kitazawa D, Minamoto T (2023) Opposite

trends in environmental DNA distributions of two freshwater species under climate change.  
*Ecosphere* 14:e4651.

Miki T, Yamanaka H, Sogabe A, Omori K, Saito Y, Minamoto T, Uchi K, Honjo MN, Suzuki AA, Kohmatsu Y, Kawabata Z (2023) Spatial epidemiology model can explain the seasonal dynamics of infectious disease *Cyprinid herpesvirus 3* (CyHV-3) by thermoregulation behavior of the host, common carp (*Cyprinus carpio*). *Theor. Ecol.* 16:195–208.

Doi H, Matsuoka S, Matsuzaki SS, Nagano M, Sato H, Yamanaka H, Matsuhashi S, Yamamoto S, Minamoto T, Araki H, Ikeda K, Kato A, Kamei K, Maki N, Mitsuzuka T, Takahara T, Toki K, Ueda N, Watanabe T, Yamazoe K, Miya M (2023) Species traits and ecosystem characteristics affect species detection by eDNA metabarcoding in lake fish communities. *Freshw. Biol.* 68:1346–1358.

Mori K, Imamura A, Hirayama I, Minamoto T (2023) Detection of *Echinococcus multilocularis* in repurposed environmental DNA samples from river water. *PeerJ* 11: e15431.

Souma R, Katano I, Doi H, Takahara T, Minamoto T (2023) Comparing environmental DNA with whole pond survey to estimate the total biomass of fish species in ponds. *Freshw. Biol.* 68:727–736.

Hidese R, Ohbayashi R, Kato Y, Matsuda M, Tanaka K, Imamura S, Ashida H, Kondo A, Hasunuma T (2023) ppGpp accumulation reduces the expression of the global nitrogen homeostasis-modulating NtcA regulon by affecting 2-oxoglutarate levels. *Communications biology* 2023, 6, 1285, doi: 10.1038/s42003-023-05632-1.

Koto Y, Hidese R, Matsuda M, Ohbayashi R, Ashida H, Kondo A, Hasunuma T (2024) Glycogen deficiency enhances carbon partitioning into glutamate for an alternative extracellular metabolic sink in cyanobacteria. *Communications biology* 2024, 7, 233,  
<https://doi.org/10.1038/s42003-024-05929-9>

Smith ML, Loope KJ, Chuttong B, Dobelmann J, Makinson JC, Saga T, Petersen KH, Napp N (2023) Honey bees and social wasps reach convergent architectural solutions to nest-building problems. *PLoS Biology*, 21, e3002211. <https://doi.org/10.1371/journal.pbio.3002211>

Saga T, Kanai M, Shimada M, and Okada Y (2024) Adaptive significance of early reproduction in *Vespa shidai* social wasps, *Insectes Sociaux*

Kaizuka M, Sato H, Ozaki Y, Sato H (2024) Visualization of Recrystallization Induced by Ultraviolet Degradation of a Polypropylene Film by Raman Imaging, *Applied Spectroscopy*  
<https://doi.org/10.1177/00037028241235>

Ueno N, Sato H (2024) Visualization of isothermal crystallization and phase separation in poly[(R)-3-hydroxybutyrate]/poly(L-lactic acid) by low-frequency Raman imaging, *Spectrochimica Acta Part A: Molecular and Biomolecular Spectroscopy*, 312, 124052  
<https://doi.org/10.1016/j.saa.2024.124052>

Yamauchi A, Tanaka K, Fuki M, Fujiwara S, Kimizuka N, Ryu T, Saigo M, Onda K, Kusumoto R, Ueno N, Sato H, Kobori Y, Miyata K, Yanai N (2024) Room-temperature quantum coherence of entangled multiexcitons in a metal-organic framework”, *Science Advances*, 10, eadi3147. DOI: 10.1126/sciadv.adi3147

Sharma T, Kashihara S, Yamasaki Y, Ozaki Y, Takahashi I, Sato H (2023) Combined X-ray Reflectivity and Infrared Study of the Effect of Hydrogen Bonding of the OH Group on the Relaxation Behavior in Ultrathin Polyvinylphenol Films on SiO<sub>2</sub>, *J. Phys. Chem. B* 127, 7602–7614. <https://doi.org/10.1021/acs.jpcb.3c01491>

#### <数理環境論>

Nagasaka K (2023) SLRA Interpolation for Approximate GCD of Several Multivariate Polynomials. Proceedings of the 2023 International Symposium on Symbolic and Algebraic Computation, ISSAC 2023, 470–479. <https://doi.org/10.1145/3597066.3597116>

Escolar E G, Hiraoka Y, Igami M, Ozcan Y (2023) Mapping firms’ locations in technological space: A topological analysis of patent statistics. *Research Policy*, 52(8), 104821.

Asashiba H, Escolar E G, Nakashima K, Yoshiwaki M (2023) Approximation by interval-decomposables and interval resolutions of persistence modules. *Journal of Pure and Applied Algebra*, 227(10), 107397.

#### <生活環境論>

Iimuro M, Tabata T (2024) Relationship between the Demand for Food Delivery and Takeaway Services and the Associated Plastic Packaging Waste during the COVID-19 Pandemic. *Journal of Material Cycles and Waste Management* 26:591–601.

Junnan Z, Tabata T (2024) Research trends and future direction for utilization of woody biomass in Japan. *Applied Sciences*.

Suzuki Y, Uchiyama Y, Tachibana S, Miwa K, Kohsaka R (2024) Analysis of forest environment transfer tax and prefectural policies: typology of prefectural support to municipalities in the initial phase from 2019 to 2021 in Japan. *Journal of Forest Research*, 1–14.

<https://doi.org/10.1080/13416979.2024.2314551>

Rifai H, Quevedo JM., Lukman KM, Hernawan UE, Alifatr, LO, Risandi J, ... Uchiyama Y, Kohsaka, R (2023) Understanding community awareness of seagrass ecosystem services for their blue carbon conservation in marine protected areas: A case study of Karimunjawa National Park. *Ecological Research*, 38(4), 541–556. <https://doi.org/10.1111/1440-1703.12391>

Quevedo JM., Uchiyama ., Kohsak, R (2023) Progress of blue carbon research: 12 years of global trends based on content analysis of peer-reviewed and ‘gray literature’ documents. *Ocean & Coastal Management*, 236, 106495. <https://doi.org/10.1016/j.ocecoaman.2023.106495>

Ye X, Sato M (2023) “Impact of increased subway station density on air quality in the Yangtze River Delta”, *Environmental Research Infrastructure and Sustainability*, 3(3), 035002. <https://doi.org/10.1007/s42495-023-00110-2>

Sato M, Minamoto T, Ushimaru A (2023) An interdisciplinary approach to environmental conservation policy: A case of Satoyama re-development in the peri-urban area, *International Journal of Economic Policy Studies*, 17(2), pp. 403–419. 10.1007/s42495-023-00110-2  
<https://doi.org/10.1007/s42495-023-00110-2>

Sato M (2023) Valuation of Urban Ecosystem Services: toward sustainable cities, *Business and Technology Innovation Journal*, 3(1), pp. 19–26.

[https://doi.org/10.29680/BTIJ.202306\\_3\(1\).0002](https://doi.org/10.29680/BTIJ.202306_3(1).0002)

Kume S, Sato M (2023) Psychological Variability and Environmental Behavior: Evidence from Cases of Global Warming and Waste Problem, *Journal of Environmental Information Science* 2022(2), pp. 13–22. [https://doi.org/10.11492/ceispapersen.2022.2\\_13](https://doi.org/10.11492/ceispapersen.2022.2_13)

Aoshima I, Nakao R, Minamoto T, Ushimaru A, Sato M (2023) Heterogeneous preference for biodiversity in Japanese urban blue spaces based on people’s nature experiences: Analysis using eDNA and satisfaction data, *City and Environment Interactions*, 18, 100101.

<https://doi.org/10.1016/j.cacint.2023.100101>

<社会環境論>

Sakai K (2023) Advice as a form of structural coupling: intersystem organizations and scientific communication in the Japanese response to COVID-19. *Systemic Practice and Action Research: Online First*. <https://doi.org/10.1007/s11213-023-09649-9>

(7)その他論文

〈自然環境論〉

北野勝久, 井川聰, 中島陽一, 谷篤史 (2023) 「プラズマ処理水中に生成された過硝酸による殺菌」, 『静電気学会誌』, 47, 215–220.

Sato M, Minamoto T and Ushimaru A (2023) An interdisciplinary approach to environmental conservation policy: a case of Satoyama re-development in the peri-urban area. *International Journal of Economic Policy Studies* 17:403–419. <https://doi.org/10.1007/s42495-023-00110-2>

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・俣野源晃・瀧野哲(2023) : 科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの開発, 日本科学教育学会研究会研究報告, 37, 5, 75–78.

Yamanaka H, Doi H, Araki A, Uchii K, Minamoto T (2024) The eDNA Society International Meeting 2023, “Moving from knowledge into practice” . *Environ. DNA* 5:1191–1195.

赤塚真依子, 飯村浩太郎, 高山百合子, 源利文 (2023) 藻場を対象とした環境 DNA の分布傾向と採水範囲の検討方法について. 土木学会論文集 79:23–27158.

佐賀達矢(2023) 「解説 働き蜂は五・七角形の育房を作つて建築上の問題を解決する」, 『養蜂産業振興会報』, 10: 20–23 .

〈数理環境論〉

長坂耕作 (2024) 「Jupyter Notebook を用いた数学教材におけるデザインの改善」, 『城西大学数学科数学教育紀要』, 5: 13–23.

Asashiba H, Esclar E G, Nakashima K, Yoshiwaki M (2023) On approximation of 2d persistence modules by interval-decomposables. *Journal of Computational Algebra*, 6, 100007.

〈生活環境論〉

内山愉太 (2024). ビッグデータと市民科学の可能性と課題: 都市への権利と自然への権利の同時的保障に向けて, 日本知財学会誌, 20(3), 96–98.

田畠智博 (2024) おうちに眠っている家財を減らすという災害対策の実践を!, 循環とくらし. 12

田畠智博 (2023) 災害廃棄物の発生と処理に備える, いんだすと. 431:2–7

田畠智博, 李樂欣 (2023) 平時における住民向けの災害廃棄物の広報: 展望と課題, 環境浄化技術. 22:33–39

藤本千尋, 田畠智博 (2023) 高齢者のフレイル予防を考慮したウォーカブルなまちづくりのあり方の考察, 都市計画報告集, 22:8-11

金田優希, 田畠智博 (2023) 利用者の意識や買物行動からみた買物弱者対策としての移動販売事業の展開に関する考察, 都市計画報告集, 22:1-7

吉田堯史, 大野朋子(2023) 「都市の街路樹景観における緑の量と質が歩行者に与える快適性に関する研究」, 『都市計画論文集』, 58 (3) : 774-779 .

小林徹哉, 前中久行, 大野朋子(2023) 「公園緑地における非在来樹種の実生発生及び管理作業との関係神戸市立森林植物園の例」, 『日本緑化工学会誌』, 49 (1) : 75-80 .

Sato, M., Kinoshita, S., Ida, T. (2023) "Subjective Risk Valuation and Behavioral Change: Evidence from COVID-19 in the U.K. and Japan," Kyoto University Graduate School Discussion Paper Series No. E-22-011.

佐藤真行, 木下信, 依田高典 (2023)「日本と英国における COVID-19 に対する主観的リスク評価と行動変容」, 京都大学大学院経済学研究科ディスカッションペーパーシリーズ, No. J-22-002.

#### ＜社会環境論＞

阿部紀恵 (2023) 「国際環境法の諸原則の一般的妥当の法理一人権条約による包摂が示す現代的展開一（三）」『法学論叢』191巻6号（査読付き）

阿部紀恵 (2023) 「国際環境法の諸原則の一般的妥当の法理一人権条約による包摂が示す現代的展開一（四）』『法学論叢』193巻1号（査読付き）

井口克郎 (2023) 「社会福祉基礎構造改革・介護保険制度と介護施設の労働問題－人手不足の作出・助長から先端技術導入・科学的介護、介護労働の解体へー」『大原社会問題研究所雑誌』No. 776, 法政大学大原社会問題研究所, 1-20.

井口克郎 (2023)「2024年介護保険制度改定と近年の介護政策の動向－介護DXおよび『科学的介護』、ゆたかなくらしかパノプティコンかー」『月刊ゆたかなくらし』No. 497, 全国老人福祉問題研究会編 , 時潮社, 4-9.

坂井晃介 (2023) 「原発避難による世帯分離がもたらした家族の困難—「双葉地方の住民を対象とした災害復興実態調査」(2011) 自由回答データの計量テキスト分析」『社会と調査』第31号.

坂井晃介 (2023) 「森宜人著『失業を埋めもどすードイツ社会都市・社会国家の模索』」『大原社会問題研究所雑誌』第783号.

澤 宗則 (2024) 「在日バングラデシュ人の集住地形成—「リトルダッカ」東京都北区東十条・十条を事例に—」『移民研究』第 20 号.

橋本直人 (2023) 「コロナと極右と陰謀論——新型コロナ・パンデミックにおけるドイツの状況をめぐって」, 『唯物論と現代』, 68: 12–28.

原 将也 (2024) 「ザンビアの地方行政におけるチーフの役割に関する検討」, 『地理学評論』, 97(1): 35–49.

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

## 8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

### 8.1. 産官学共同プロジェクト

(1) 障害児通所支援事業所における発達障害児の感情調整支援プログラム の開発と効果検証

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学）, デコボコベース株式会社

研究課題：障害児通所支援事業所における発達障害児の感情調整支援プログラム の開発と効果検証

研究資金：产学共同研究（代表：山根隆宏）

研究概要：発達障害児の感情調整支援を目的とした発達支援プログラムを実施し、その効果検証と、効果に関わる要因について解明する。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(2) 大学における障害のある人の超短時間雇用の有効性の検討—インクルーシブシティ KOBE を目指して—

研究分者：内山愉太（神戸大学）

連携担当者：麻田美紀（しごとサポート東部）、青木剛（しごとサポート西部）、石倉賢（神戸市障害福祉局）

研究資金：令和 4 年度大学発アーバンイノベーション神戸（若手研究者の研究活動経費助成制度）（代表：山本健太）

研究概要：神戸市内における障害のある人を対象に週に 1 回 1 時間だけ研究室で雇用し月額収入や活動量、精神的健康について検討する。また、学生や附属学校園とも連携し多様な雇用スタイルの創出の第一歩を生み出す。

(人間発達専攻 山本健太)

(3) 労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる Well-being Monitor に関する研究

株式会社テアラクソンとの共同研究として、インタビュー調査をおこない大型商業施設の労働者を対象にモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being について探求した。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(4) 兵庫県立学校養護教諭研究会淡路支部の構成員である養護教諭を対象に「兵庫県養護教諭研究大会発表にむけて」研究計画を作成するための支援を行った。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(5) 特定健診実践者育成研修 兵庫県で特定保健指導に関わる保健師、管理栄養士などを対象に、兵庫県の協力による「健康ビッグデータを活用した県民の健康づくり事業」で開発した教材やロールプレイなどのワークを活用しながら行動変容に関わる実践的な研修を行った。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(6) 大阪府手話言語条例に基づき、大阪府の委託事業としてNPOこめっこ（特別非営利活動法人手話言語獲得習得研究機構）が実施する乳幼児期手話言語獲得習得支援事業「こめっこ」のスーパーバイザーとして、活動のプランニングを支援し、スタッフ研修を担当してきた。この活動は、2023年度の博報堂教育財団博報賞を受賞した。

(人間発達専攻 河崎佳子)

#### (7) 兵庫県音楽療法士会との共同研究

概要：兵庫県音楽療法士会所属の音楽療法士複数名と臨床に関するスーパーヴィジョンを行い、様々な現場（発達障害支援センター、高齢者施設、障害者作業施設など）における音楽の臨床的活用法と、施設との連携などについて検討した。

(人間発達専攻 岡崎香奈)

#### (8) 神戸発掘映画祭 2023・大学連携企画<神戸大学>

連携担当者：神戸映画資料館

主催：神戸映像アーカイブ実行委員会

協力：国立映画アーカイブ、ジョージ・イーストマン博物館、神戸映画資料館、NPO法人映画保存協会、NPO法人プラネット映画保存ネットワーク、神戸芸術工科大学

後援：神戸市

助成：芸術文化振興基金、神戸市芸術文化活動助成

研究概要：サイレント期のアニメーション6作品へのサウンド制作を行い、神戸発掘映画祭 2023・大学連携企画「サイレントアニメーション×現代のサウンド：時を超えた饗宴」（2023年10月21日、於：神戸映画資料館）にて上映を行った。また、同映画祭「外国無声映画 女優レジェンド」プログラムにて上映された映画『愚者ありき』（1914）の音楽制作も行った。

(人間発達専攻 余田有希子)

(9) BGMのグルーヴ感と歩行パラメータの関係および音楽グルーヴの健康行動への利用可能性の検討  
共同研究者：松本茂雄、森角香奈子、檍尾一郎、高橋紗恵子（ともに株式会社USEN コンテンツプロデュース統括部）

研究資金：株式会社USEN 共同研究費

研究概要：ウォーキング時に聴取する音楽の持つ特性が各種歩行パラメータに与える影響について、行動実験により検討する。特に、歩行速度を速くしやすい曲想と遅くしやすい曲想があるという先行研究の追試と、その結果が「グルーヴ」と呼ばれる性質と関連するかについて検討する。

(人間発達専攻 岡野真裕)

(10) 運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRS ハイパースキャニング研究—

共同研究者：高岸治人、寿秋露、丹波夏希、橋本紳之亮

研究資金：公益財団法人明治安田厚生事業団 第38回若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：運動・スポーツが子どもの社会性の発達に与える影響とその神経基盤を検討する。

(人間発達専攻 石原暢)

(11) 歩行中の心拍・運動リズム間位相同期を促進するシステムの開発

研究資金：公益財団法人カインズデジタルイノベーション財団

研究概要：心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

(人間発達専攻 木伏紅緒)

(12) ウエルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する研究

共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・近藤徳彦

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

(人間発達専攻 増本康平)

(13) 着圧ソックス・パンツ・サポートー等の商品開発

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社、河村繊維株式会社

研究概要：着圧ソックス・パンツ・サポートー等の効果を筋活動の側面から評価する。

(人間発達専攻 木伏紅緒)

(14) ジオスゲニンを含有するトゲドコロ芋の最適加工条件の検討

共同研究者：京都グレインシステム株式会社

研究概要：トゲドコロ芋の商品化に向けて現在、最適な粉末化加工を行っていただき、企業（食品・製薬等）に販売促進を行っている最中である。

(人間発達専攻 佐藤幸治)

(15) 遊歩道へのアクセスが都市在住高齢者の健康変化へ及ぼす影響

共同研究者：増本康平

研究資金：公益財団法人大林財団・研究助成

研究概要：遊歩道へのアクセスが良好であることは、高齢者の健康変化に望ましい影響を及ぼしているのかを明らかにする。

(人間発達専攻 原田和弘)

(16) 地域コミュニティを対象とした e スポーツの展開

共同研究者：岡田修一・近藤徳彦・原田和弘・石原暢

研究資金：西日本電信電話株式会社

研究概要：地域コミュニティの住民を対象とし e スポーツ体験がコミュニケーション活性や気分に及ぼす影響を明らかにする。

(人間発達専攻 増本康平)

(17) 高大連携による高等学校「総合的な探究の時間」授業開発と試行（兵庫県立神戸鈴蘭台高校との共同研究）

本専攻研究者：吉永潤

研究期間：2023 年 4 月～2024 年 2 月

研究概要：学際的・発展的な「総合的な探求の時間」授業開発のため高校教員と大学教員が共同で 1 年間にわたり授業開発・実施を行い、大学院生による授業評価（修士論文として集約）を行った。

(人間発達専攻 吉永潤)

(18) 地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

本専攻研究者：津田英二

共同研究者：赤木和重、川地亜弥子、岡崎香奈、勅使河原君江、稻原美苗、山本健太、高見泰興、関典子、松岡広路、加戸友佳子、黒川陽司、竹川幸介、黒崎幸子、倉智綾美、藤田雅子、多田千景

研究資金：文部科学省「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」（代表：津田英二）

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究、及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究であり、文部科学省からの受託研究として、兵庫県教育委員会と協働連携して実施している。

(人間発達専攻 津田英二)

(19) 子供のためのワークショップ『びじゅつかん大作戦』

勅使河原君江「子供のためのワークショップ『びじゅつかん大作戦』」を神戸市立小磯記念美術館と連携して年間 5 回開催した。趣旨：美術館で開催される展覧会ごとの特徴に合わせて、子供のための美術館教育普及活動を美術館教育普及担当者と協働的に企画立案し、学生もスタッフとして関わり、美術鑑賞と表現活動を連携させた教育実践に取り組んだ。

(人間発達専攻 勅使河原君江)

(20) 美術鑑賞と制作体験セッション

勅使河原君江「美術鑑賞と制作体験セッション」神戸大学ジュニアドクター塾「神戸みらい博士育成道場」。2023 年 10 月 21 日。趣旨：STEAM 教育の ART のセッションとして、尼崎市総合文化センター

と連携して小学校高学年から中学生の受講者と、白髪一雄記念室にて美術鑑賞による観察力の育成と絵画制作による思考の表現体験に取り組む教育実践に取り組んだ。

(人間発達専攻 勅使河原君江)

(21) 共同研究先：積水化学工業株式会社との共同研究

研究課題：高分子材料の構造物性評価に関する研究

内容：テラヘルツ分光法およびラマン分光法を用いて、高分子材料の物性特性に関して、特に構造と物性の相関に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(22) 共同研究先：中国四国地方環境事務所からの受託研究

研究課題：アユモドキ分布状況調査

内容：岡山県内に生息する天然記念物のアユモドキの保全のため、県内の河川において環境DNA調査を実施し、アユモドキの分布域について調べた。

(人間環境学専攻 源利文)

(23) 共同研究先：神戸市からの受託研究

研究課題：里地里山生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

内容：神戸市内の環境省指定自然共生サイトを中心とした里地里山の生物多様性モニタリング、生態系サービスに関する調査などを行った。

(人間環境学専攻 丑丸敦史、内山愉太、佐藤真行、源利文)

(24) 共同研究先：スカイワークスフィルターソリューションズジャパン株式会社との共同研究

基板材料の評価に関する研究

加工プロセスを経た基板材料の評価技術としてSTEMを用い、基板内での面内ダメージの分布の把握に取り組んだ。

(人間環境学専攻 谷篤史)

(25) 共同主催先： Studio Phonesとの共同開催

セミナー名称：Kobe Studio Seminar

内容：Studio Phonesと数理情報環境論が中心となって産学連携で実施する少人数と分野横断などをコンセプトとするセミナー活動である。2023年度は、オンラインにて2回、学外にて1回、学内にて6回のワークショップやセミナーを実施した。

(人間環境学専攻 長坂耕作)

(26) 共同研究先：ダイキン工業株式会社との共同研究

研究課題：撥水剤の実用耐久性評価

内容：繊維の力学特性に関する装置・手法を用いた撥水剤処理生地への力学負荷試験を行い、撥水性に与える要因について調査・研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(27) 共同研究先：株式会社 colourloop との共同研究

研究課題：廃棄繊維を使用した再生糸及び生地の物理特性の評価及び数値化

内容：廃棄繊維を使用した再生糸及び生地の物理特性と表面特性を測定し、風合い評価及び風合いの客観評価に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(28) 共同研究先：Bird fab studio 株式会社との共同研究

研究課題：AI 生地検索システムの最適な教師データ研究

内容：生地の力学特性・表面特性などの物理データを測定し、それらのデータとパリコレクションなどの衣料写真から得た感性的なデータを抽出し、これらを AI 学習させるために最適な教師データの在り方について研究する。

(人間環境学専攻 井上真理)

(29) 委託研究先：岡山県産業振興財団「Go Tech 事業」からの受託研究

研究課題：布地の『肌触りと耐久性』評価装置、評価方法の開発

内容：ニット素材を含む布地の力学特性を正確に計測可能なシステムを構築することを目的として、主にデータの集積を行う。また、ヒューマンインターフェースとしての繊維製品の心地よさを標準化、デジタル化するために、データベースの構築を行う。

(人間環境学専攻 井上真理)

(30) 委託研究先：NEDO 「先導研究プログラム／エネルギー・環境新技術先導研究プログラム」からの受託研究

研究課題：繊維製品の資源循環のための選別・分離技術の研究開発

内容：回収繊維製品の高品位な繊維製品への水平リサイクルによる資源循環システムを構築することを目的として、繊維 to 繊維リサイクルに係る技術開発を行う。

(人間環境学専攻 井上真理)

(31) 共同研究先：村田機械株式会社、高知大学との共同研究

研究課題：導電糸を用いたニットセンサによる人間計測に関する研究開発

内容：スマートテキスタイルとしてのニットセンサの機械-電気特性を理論的・実験的に明らかにし、主に、人間計測における「嚙下センサ」の開発に取り組んだ。現在、製品化に向けての最終段階に入っている。

(人間環境学専攻 福田博也)

(32) 共同研究先：小泉製麻株式会社との共同研究

研究課題：プラスチック容器の環境負荷計算に関する研究

内容：ライフサイクルアセスメント(LCA)手法を用いて、プラスチック容器など包装容器に関する環境負荷の計算と比較に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 田畠智博)

(33) 共同研究先：株式会社ゆめみらいとの共同研究

研究課題：食品廃棄物の栄養機能性・嗜好性評価と新規有効利用法の提案

内容：兵庫県内の食品加工工場で生じる廃棄部位の乾燥パウダーを調製し、その栄養機能性、嗜好性などを調べ、食品としての特性評価や乾燥パウダー製造方法の設計を行った。また、この食品廃棄部位の乾燥パウダーについて、加工食品としての利用法の開発に取り組んだ。

(人間環境学専攻 湯浅正洋)

(34) 共同研究先：農事組合法人アグリファーム

研究課題：日本におけるキャッサバ栽培技術に関する研究

内容：2020年より農事組合法人アグリファーム（群馬県邑楽郡邑楽町）と高崎経済大学、摂南大学と連携し、日本における熱帯作物キャッサバの栽培実践の定量的な把握に取り組んでいる。日本でのキャッサバ栽培の先例はほとんどなく、現在の実践を把握して分析することで、日本におけるキャッサバの栽培技術の確立につながることが期待できる。

(人間環境学専攻 原将也)

## 8.2. 地域連携プロジェクト

本専攻研究者：赤木和重、大田美佐子、岡崎香奈、川地亜弥子、清野未恵子、稻原美苗

研究代表者：津田英二

研究課題：地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

研究資金：文部科学省受託「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究、及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究である。

本専攻研究者：寺村ゆかの、津田英二

研究代表者：津田英二

研究課題：子育て支援拠点プログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市地域子育て支援拠点事業補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、子育てに関わる多様な人々との出会いや交流を通して、そこで出会った利用者らが互いの立場を理解し互いに学び合うこと、そしてそこから生まれる新たな価値観を共有するためのプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：津田英二、寺村ゆかの

研究代表者：津田英二

研究課題：子どもの居場所づくりプログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市子どもの居場所づくり補助金」

**研究概要：**2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、社会参加機会の少ない子どもたちを中心に、多様な人たちのエンパワメントの場として活用できるプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかる保育者の専門性に関する研究

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ、遠隔公開保育の方法の開発、実践事例の可視化と発信方法の開発等、保育の質の維持・向上にかかる保育者の専門性についての検討をおこなっている。本年度は特に0-3歳児の主体性について検討した。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：源利文（本専攻教員）、佐藤真行（本専攻教員）、石井弘明（本学農学研究科）

研究課題：令和6年度里地里山の生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

研究資金：神戸市・受託研究、2023年度、総額（直接経費：600万円）

研究概要：神戸市の放棄された里地里山の管理導入による生物多様性再生の検証および市民への波及効果について調査を行う。

## 9. 社会的活動・震災復興支援

### 9.1. 災害地への支援活動

東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011（平成23）年3月11日に津波によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市への復興支援を続けて、13年になる。コロナウィルスの感染リスクを避けるため、昨年度同様、今年度も、オンライン・電話・手紙を活用した住民との交流が主な活動となったが、2023年7月、9月、11月には、小規模で赤崎を訪問し、再開された地域行事や赤崎復興市（2012年より始まり、2年にわたり中断されていた復興マーケット）の運営支援を行った。また、2024年3月7日～12日にかけて、ESDプラットフォームWILL（ヒューマン・コミュニティ創成センター支援組織）のメンバー19名で、岩手県大船渡市赤崎町を訪問することができた。3月11日の慰靈式典の準備・運営補助をはじめ、災害公営住宅・高台移転団地への友愛訪問のほか、今後の復興支援計画についても地域住民とともに協議することができた。

現在、大船渡市では、防災集団移転、災害公営住宅移転、防潮堤建設が終わり、復興道路も完成した。ハードの整備はほぼ終わった。教育・福祉・医療の仕組みも徐々に正常に戻りつつある。しかし、コロナ禍での自粛の影響は大きい。津波によって失われた人・町の活力は、いまだ回復していない。むしろ、漸減的な活力の低下が見て取れる。公民館活動の減少、地域自治会の弱体化、婦人会などの地縁組織の解体、人口減少を引き金とする学校の統廃合など、あまりいい話はない。

しかし、発災以来継続して支援を続けるボランティアプログラム（現在の名称は、ESD プラットフォーム WILL 大船渡支援プロジェクト）は、単に現地の活動支援というだけではなく、被災地の子供と高齢者の交流、近接地域間の関係創成などの観点で大きな意味を見出している。まちづくり・まちおこしに不可欠なヒューマンリソース（社会関係資本）の充実に貢献しているといえよう。

来年度は、令和 6 年能登半島地震の支援活動とセットになってプロジェクトが拡大されることになる。地域の活性化に資する活動を、地域住民が主体的に進められるべく、応援をしていきたいと考えている。

また、このボランティアプログラムは、経済的には、本学ヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよび都市安全研究センターの運営基金及び神戸大学基金によって支えられているが、他学の志を同じくする研究者仲間や ESD プラットフォーム WILL 会員に支えられて具体化を見ている。この場を借りて感謝する次第である。

(人間発達専攻 松岡広路)

## 10. 附属施設

### 10.1. 発達支援インスティテュート

#### 10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は近藤徳彦発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長、伊藤俊樹心理教育相談室長、源利文サイエンスショップ室長、北野幸子教育連携推進室長、長ヶ原誠アクティブエイジング研究センター長及び佐藤春実先副研究科長で構成される。また、春名正基事務部長、豊嶋江梨子総務係長も出席した。

令和 5 年度も本委員会を毎月 1 回程度のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、新型コロナウイルス感染症の影響が続く中での各センター・室の取り組み方法に関して情報共有を継続的に行った。また、発達支援インスティテュートを研究科内の附属施設として令和 6 年度から運営することになった。

なお、本委員会での主な検討事項は以下のとおりである。

検討事項	
第 1 回（5 月 26 日）	1. 部局内センターについて
第 2 回（7 月 14 日）	1. 部局内センターについて 2. 健康長寿に関する生涯ウェルビーイング推進研究拠点作りの構想について
第 3 回（7 月 28 日）	1. 部局内センターについて
第 4 回（9 月 22 日）	1. 部局内センターについて
第 5 回（10 月 27 日）	1. （その他）発達支援インスティテュートの評価報告書及び年次報告書について
第 6 回（11 月 24 日）	1. 部局内センターについて
第 7 回（12 月 22 日）	1. 部局内センターについて 2. （その他）評価及び予算にかかる学内ヒアリングについて
第 8 回（1 月 26 日）	1. 部局内センターについて

	2. (その他)・学内ヒアリングについての報告 ・次期スーパーグローバルの申請について
第9回（2月6日）	1. 部局内センターについて
第10回（2月27日）	1. 部局内センターについて 2. 発達支援インスティテュート内規の改正について

(発達支援インスティテュート長 近藤徳彦)

### 10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第Ⅰ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、夏季の休室期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、多岐にわたっている。また、平成30年度より本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて、国家資格である公認心理師の養成が始まり、心理教育相談室はその実習の一部を引き受けている。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等270時間以上）の一端を担う役割をしている。なお、心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の相談室長をはじめ、副相談室長、ほか2名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員6名（臨床心理学コース担当、臨床心理士、公認心理師）、博士後期課題課程こころ系講座院生2名、前期課程臨床心理学コース院生24名（M1：12名、M2：12名）、事務補佐員1名である。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程1年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後1時～2時45分、火曜日～金曜日の午後1時～6時（いずれも祝日は除く）である（年末年始、夏季のお盆期間は閉室）。毎年30件弱の新規相談申込があり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。

年間相談件数は、平成22年度以降おおむね800から1000件程度で推移していたが、昨年度ま

での3年間は、コロナの影響により、相談件数が減少していた。しかし、今年度からコロナの影響は低下し、従来の相談件数に近づいてきている。引き続き、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な活動をしている。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。平成22年度より心理教育相談室は、年1回『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』を発刊しており、院生たちに心理臨床の実践研究をまとめる場を提供している。今年度第14号は、事例研究論文3篇、相談室活動報告、相談員・研修生活活動報告から構成される。なお、掲載された3篇の事例研究論文の題目は以下の通りである。博士課程前期課程2年岩間 桃子「相反する気持ちの中で葛藤状態にある30代女性との面接」、博士課程前期課程2年勝間田 冬華「何もない未来への恐怖と死について語る10代男性との面接」、博士課程前期課程2年川崎 凜「Mo.からの愛情が欠乏している40代女性との面接」

また、平成28年度から、発達支援インスティテュートHCセンターとの共同で「サテライト施設のびやかスペース・あーち」において、一般の子育て中の保護者を対象とした「心理教育相談室子育て支援セミナー」を開催しているが、今年度はコロナの影響のため開催を取りやめた。

(心理教育相談室長 伊藤俊樹)

#### 10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

##### (1) ジェンダー・コミュニティ支援部門

2023年度はコロナ禍以前のように対面での行事が増え、本部門も新しい一步を踏み出した。2022年2月下旬に勃発したロシアによるウクライナへの軍事侵攻に加えて、2023年10月にイスラエルによるパレスチナ自治区ガザへの攻撃が始まり、それらは未だに続いている。このことから分かるように、国際的に分断や格差の問題が深刻化している。異なる課題をもち、異なる立場にいる人々が共生できるコミュニティのあり方を考え直す必要性が出てきた。他者と自己に向き合い、共に考えようとする一つの試みが「哲学対話」の実践である。本部門は、一人一人が日常生活の中で抱えている問題を共に考える探究のコミュニティ（哲学カフェ）を創成する試みをしてきた。それらの課題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場から捉え直そうとする臨床哲学的な対話実践を行った。男女間の格差やセクシャリティに関する差異、障害の有無、世代間や文化間などの違いを踏まえて「生きづらさ」の経験についてゆっくりじっくり考え続けている。2023年度にジェンダー・コミュニティ支援部門が実践した4つの活動について報告する。

###### 1. 「神戸大学附属中等教育学校でのセクシュアリティ教育の指導助言」

2023年9月4日に、神戸大学附属中等教育学校で、「多様な性ってなんだろう？～互いの違いを受け止めあえる社会を目指して～」という演題で研修が開催された。本研修は、認定特定非営利活動法人ReBit教育事業部から講師をお招きし、中学校3年生の道徳の授業で実施し、3クラス124名が受講した。本研修を企画した中川雅道氏（神戸大学附属中等教育学校・教諭）から依頼を受け、生徒たちに対してセクシュアリティ教育をする場合の配慮や伝え方に関する指導助言を行った。研修前後に受講生の語りに耳を傾け、多様な性やジェンダーについて共に考えることができた。中川氏とは、哲

学対話や p4c (philosophy for children／子どものための哲学) の実践研究を共にしてきたので、今後もジェンダー・コミュニティ支援部門の中で、セクシュアリティ教育やジェンダー教育に対話実践を使っていきたいと考えている。

## 2. 映画『僕とオトウト』上映会&哲学対話+監督と哲学者たちによるトークセッション

2023 年 11 月 3 日、東京都江東区にある嘉悦学園かえつ有明中・高等学校のホールでドキュメンタリー映画『僕とオトウト』の上映会と哲学対話、そして高木佑透氏（映画監督）、河野哲也氏（立教大学教授）と共にトークセッションを開催した。当日は 21 名の参加者が集った。本イベントは、一般社団法人こたえのない学校インクルーシブ部門 FOX プロジェクトが主催し、本部門の専任研究員である稻原は協力者として関わった。障害者と健常者の当事者性、障害者のセクシュアリティの課題、ケアの担い手の問題など、ジェンダー問題とは切っても切れないテーマについて対話を実践した。なお、一般社団法人こたえのない学校の代表理事である藤原さと氏とは、このイベントを通して知り合うことができ、2024 年度も対話や探究の活動と一緒に実践してことが予定されている。

## 3. “差別”を考える哲学対話～相模原事件をきっかけに～

2023 年 12 月 13 日の午後 7 時から 2 時間程度、兵庫県尼崎市東園田のシェアスペース hinata にて差別を考える哲学対話を開催した。立命館大学生存学研究センターの河合翔氏と共同企画・運営し、30 名ほどの参加者が集った。本部門が主催した。このイベントではこだわったことがある。事前に相模原障害者殺傷事件を題材にした映画『月』（監督：石井裕也、2023 年公開作品）を鑑賞した人を中心に参加者を限定した。なぜならこの映画の鑑賞後、心の中にもやもやが長らく続き、誰かと話したくなった方が沢山いると感じたからだ。『月』は、重度障者施設で働く登場人物とそこでの出来事を通して、社会が隠蔽する闇や問題を描いている。障害者の問題を炙り出した作品だと思われがちだが、実際にはジェンダーや性の問題も描かれており、本作品は観る者全てに深刻な衝撃を与え、視聴者の価値観を揺さぶり、問題提起を行っている。哲学対話の参加者たちは、脈々と浮かんでくる感情について対話を通して分かち合い、差別とはどういったものか一緒に考えた。

## 4. 子どもの社会的場所における日常の記録上映会とシンポジウム・対話会

2024 年 3 月 24 日、兵庫県尼崎市にある一般社団法人 OFFICE ひと房の葡萄が運営している子どものための第 3 の居場所「ぐれいぶハウス」にて、支援者や関係者を集めてクローズドなシンポジウムが開催された。本部門の稻原がシンポジウムの登壇者としてジェンダー規範と子どもの問題の関係性について語った。ぐれいぶハウスは、学校でも、塾でもない「子どものための第 3 の居場所」として常設している施設である。子どもたちが、誰かと話したい、勉強を教えてほしい、リラックスして過ごしたいなど、そこに来る理由は多様であり、気軽に立ち寄ることができる「みんなの場所」を設定している。家庭で十分にケアされていない子どもたちが年々増えており、DV（ドメスティック・バイオレンス）の問題が明るみに出ているケースもあるようだ。今回のシンポジウムの登壇者は、稻原以外に 5 名いる。一般社団法人 OFFICE ひと房の葡萄代表理事の赤井郁夫氏、p4c（子どものための哲学）を実践している神戸大学附属中等教育学校教諭の中川雅道氏、哲学カフェを企画・運営しているカフェフィロ代表の山本和則氏、そして愛知県立豊川工科高等学校教諭の山方元氏、この記録映画を撮つ

た早稲田大学大学院生の森ほのか氏がそれぞれの立場から子どもの社会的居場所の意義について語り合った。

(担当 稲原美苗)

## (2)社会教育・サービスラーニング支援部門

2017年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）の組織変更によって、新たに「社会教育・サービスラーニング支援部門」が創設され、7年になる。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそもつ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスラーニング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問い合わせる実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、HCセンターの他の部門のキーワードでもある、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、が総合化されたフィールドがターゲットとなる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環的様態を探求することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD（持続可能な開発のための教育）」およびSDGs運動をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。SDGs運動の萌芽期に合って「ESDがいかに立ち現れるか」を問い合わせてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。具体的には、以下の5つの実践フィールド研究を実施している。

### 1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE兵庫-神戸：「ESD推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシブ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などのHCセンターの他の部門及び発達支援インスティチュート「サイエンスショップ」と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネートの在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明することをねらいとする。

本年度は、コロナで停滞したRCE兵庫-神戸の運営委員会の組織化を改めて図ることが主であった。阪神間のNPO・市民団体・ボランティア団体のメンバーに連絡をとり、改めてESD推進の

組織づくりを行った。

## 2. ESD プラットフォーム WILL 支援事業

HC センターが主催・支援する高校生・大学・若手社会人を中心とする ESD 関連事業の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を、参加者自らが主体となって実験的・研究的に推進する事業である。「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」が所管する「大船渡 ESD プロジェクト」、「障害共生支援部門」の「あーち」関連事業、「自然共生地域支援部門」の農村レジリエンスプログラム、あるいは、「国際開発支援部門」の PEPUP の活動、さらには、RCE 兵庫・神戸の各団体の SD 関連活動をネットワーク化し、だれでも、気軽に ESD に触れられるとともに、そのなかで、自己・社会変容の契機を得る空間の実践方法とその理論を、参加者と研究者などの関係者が協力して探求しようとするアクションリサーチである。

ESD が立ち現れる、すなわち、持続可能性をめぐる学習が生まれることが期待される本事業で、これまでに発見されてきた学習理論「当事者性学習論」は、現在、関係学会でその有効性・妥当性が検討・協議されている。

## 2. ESD フォーマル教育推進事業（フォーマル教育×ノンフォーマル教育）

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして 2006 年に設立された ESD サブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチである。

第 1 学年に配当される「ESD 基礎」「ESD ボランティア論」は、上記のノンフォーマルな ESD 事業との連動の中でデザインされている。ESD が立ち現れるサービスラーニングの在り方、および、その教育が ESD を推進する実践者育成に及ぼす効果を、比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。他の部門の教員とともに、ESD 総合コーディネータの協力の元、学習者の学びのプロセスをデータ化し実践モデルの再構築を進めている。

## 3. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・尼崎市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策に ESD を位置づける活動を行ってきた。あるいは、兵庫県嬉野台生涯教育センター生涯大学やいなみ野学園（高齢者大学校）のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行ってきた。今年度は、特に、神戸市職員研修所と協同して、SDGs 学習プログラムを開発・運営した。

## 4. 研究・学会活動

部門研究員の協力を得て、日本社会教育学会、日本福祉教育・ボランティア学習学会などでの学会活動の推進・支援を試みてきた。学会員等の定期的な公開研究会（月 1 回）をはじめ、両学会の理事・課題別研究の世話人・幹事を務める協力研究員が増えてきた。また、研究発表や学会誌投稿も積極的に行われ、2023 年度実績は、研究発表：6 本、投稿論文（査読付き）2 本である。

以上の 5 つの活動を通して、ESD としての教育の形成過程の研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座から ESD とは何かを探究する研究を行ってきた。

（担当 松岡広路）

### （3）インクルーシヴ社会支援部門

A. 2005 年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。火曜日から土曜日まで開館し、隔月で連絡協議会を開催して多方面の機関と連携しながら運営を行った。

「よる・あーち」は、2006 年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、2016 年秋から開始した「のびやかスペースあーち」の基幹プログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の 4 つの活動を柱とする複合的な場づくりである。毎週金曜日の夜に実施し、住民や学生が集う。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援を核心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。新型コロナ感染拡大防止のために時間短縮と人数制限を課してきた影響で、小中学生の参加が激減しそのまま回復していない。青年層の参加は増加の一途を辿っている。

B. 文部科学省受託により、知的障害者に大学教育を開く実践研究を行った。10 月～2 月に特別の課程として週 3 日の授業を展開し、知的障害者 13 名を受講生として受け入れた。その成果に基づき報告書『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』を編集・刊行した。また、同じ文部科学省受託により、兵庫県全域で障害者の生涯学習推進のための情報収集や整理・発信、ネットワーク形成を行った。また、博物館等の公共の学習施設に多様な障害者の調査隊を派遣して、障害者の学びに貢献する機能強化を図るミュージアム・インクルージョン・プロジェクトを実施した。10 月 7 日には、文部科学省、兵庫県教育委員会との共催で、近畿ブロック「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施し、本部機能を担った。

C. 学内の交流ルームに 2008 年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり、障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。9 月には、附属特別支援学校の美術の授業を題材としたギャラリー展示「層なり」を、博物館学芸員課程の学内実習として実施した。

D. 障害児の放課後保障の観点から 2008 年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

E. 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として、新聞編集支援を継続的に実施した。ほぼ毎月 1 回の編集活動を支援し、2 月に第 26 号「フレンド新聞」を発行した。

(担当 津田英二)

#### (4) ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

① 健康あーち：子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を行った。

【目的】乳幼児、児童の保護者を対象とし、食生活を中心に健康について話し合いを行い、話し合いの中から課題を見つけたり、悩みの解決方法を考えたりしながら、子どもとその保護者の心身の健康の維持増進を目指すことを目的として事業を展開した。

【場所】神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち

神戸大学大学院人間発達環境学研究科実習觀察園

【開催日とテーマ】 下記のテーマで全 6 回の健康あーちを開催した。

回	開催日	テーマ	大人	子ども	スタッフ	合計
1	4月15日	オリエンテーション	3	2	2	
2	6月17日	心の健康 認知行動療法 中止				
3	7月15日	心の健康 呼吸法	8	4	5	
4	8月26日	親子クッキング ピザづくり	4	5	2	
5	10月16日	お芋ほり	3	5	2	
6	11月11日	冬野菜	4	6	1	
7	3月2日	まとめ	4	4	3	
合計			26	26	15	67

プログラムは、企画会議で保護者およびスタッフと話し合い前年度の振り返りを経て作成、実施した。

今年度は、心の健康に注目したセッションを計画実施した。ヨーガ療法の専門家、友廣麻央氏を招き、心理療法として取り入れられているヨーガ療法を通じて、呼吸法の基礎について体験的に学んだ。また食育の一環として、野菜作りと親子クッキングを行い、体験を通じた実践的な学びを行った。野菜作りでは2回の実習観察園での活動を計画し、お芋ほりや冬野菜などに親しんだ。またLINEによる交流もひきつづき活発化しており、実習観察園での取り組み後には、それぞれの感想を述べたり、実習観察園で収穫したものを各家庭で実際に調理したものについて、写真でアップしたりと情報交換が活発に行われた。親子クッキングでのピザづくりは、黒田久恵氏（甲子園大学）から専門的な支援を得ながら実施した。参加者は、それぞれの創造性を膨らませオリジナリティあふれるピザが作成された。

まとめの回では、今年度の行事を振り返り、次年度の事業について検討を行った。

## ② 健康の専門職を対象とした事業

保健師や管理栄養士など健康の専門職と連携し、健康の専門職を対象として行動変容に関する事業を実施した。

一つ目は、特定健診・保健指導者向け研修プログラムを開発し、兵庫県特定健診実践者育成研修で特定保健指導に関わる保健師、管理栄養士などを対象に行動変容に関する実践的な研修を行った。

また、糖尿病重症化予防のための保健指導者養成のための教材を開発した。プリシード・プロシードモデルに基づき、糖尿病重症化予防のための保健指導を計画立案するための教材を開発し、小島亜未氏（福井県立大学）と看護師養成課程に所属する学生52名を対象に教材を活用したプログラムを実施した。

## ③ 労働者の well-being

労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being monitor に関する研究として、株式会社テアラクソンとの共同研究を行った。インタビュー調査を行ない大型商業施設の労働者

を対象にモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being について探求した。

#### ④ 国際的な事業

心の健康のための国際プログラムの開発をめざした研究活動:心の支援にあたる支援者を対象とした心の健康に関する国際調査を行うために、オーストリアに研究拠点を築き、海外での研究を進めている。2023 年度は、遠隔により合計 7 回のワークショップを行った。野上慶子氏（独立行政法人日本学術振興会 特別研究員）が研究プロジェクトに加わり、国際学会での発表、国際共著の執筆等の準備をはじめ、2024 年度の事業展開に向けて準備を進めることができた。

(担当 加藤佳子)

#### (5)社会保障・ソーシャルアクション支援部門

##### ◇東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援

2012 年 11 月以後、継続的に、学生・院生及び教職員が赤崎地区公民館（2012 年 5 月 1 日に、本研究科と連携協定と締結）に赴き、支援活動をしてきた。本年も、学生・教員、これまで活動に携わってきた OB・OG らが現地を訪問し、復興支援や慰霊のつどいの運営などの活動を行った。

##### ◇石川県能登半島地震への対応

2007 年 3 月の石川県能登半島地震被災者の居住保障をめぐる問題について、支援等を行った。また、2023 年 5 月および 24 年 1 月の石川県能登半島地震について、人々の生活の復興の視点から調査研究や支援の取り組みを開始した。

##### ◇社会保障裁判等における市民支援

2013 年の国による生活保護基準引き下げの違憲性を問う「新生存権裁判・いのちのとりで全国裁判アクション」について、人々の人権保障に寄与するための支援を行った。

(担当 井口克郎)

#### 10.1.4. のびやかスペースあーち

##### 1. 沿革

のびやかスペースあーち（以下「あーち」）は、本研究科・ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの附属サテライト施設である。「あーち」は、開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となるべく、地域住民に対して多様なサービスやプログラム等を提供してきた。また、本研究科を中心とした教員・院生・学生の実践的研究の場（研究フィールド）、授業・実習やボランティア活動の場としても機能してきた。

- ・ 2005（平成 17）年 9 月 神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署 2 階）において運営開始
- ・ 2007（平成 19）年 4 月 地域子育て支援拠点事業者として神戸市より補助金を受ける（現在に至る）
- ・ 2007（平成 19）年度 「ユニバーサルまちづくり賞」（兵庫県より）
- ・ 2009（平成 21）年度 「市民福祉奨励賞<児童福祉>」（神戸市より）
- ・ 2010（平成 22）年度 「学長表彰」（神戸大学より）
- ・ 2015（平成 27）年度 「ひょうご子育て応援賞」（兵庫県より）

- ・2016（平成28）年10月 神戸市補助金事業「子どもの居場所づくり事業」を開始（現在に至る）
 

※2017年4月からの全面移転に先行して灘区民ホールにて実施
- ・2017（平成29）年4月 灘区民ホール（3階）に全面移転する（現在に至る）

## 2. 取り組みの概要

「あーち」の中核事業は、神戸市からの補助金を活用して運営されている「A. 地域子育て支援拠点事業」と「B. 子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）」である。なお、「子ども食堂」は「灘区連合婦人会」との協働事業である。

### A. 地域子育て支援拠点事業

本事業は、地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を通して、子育ての孤立感や負担感などの低減・解消を図るなど、地域の子育て家庭を支える国事業（第2種社会福祉事業）である。補助金交付が始まった2007年度には全国約4,400箇所、2022年度には全国7,970箇所において実施されている。「あーち」では、補助金交付の条件である基本4事業（① 交流の場の提供・交流促進 ② 子育てに関する相談・援助 ③ 地域の子育て関連情報提供 ④ 子育て・子育て支援に関する講習等）を週5日（1日当たり6時間）実施している。

### B. 子どもの居場所づくり事業

本事業の背景には「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003年成立）」があり、貧困対策のうちの一つとして位置づく国事業である。各地域の実情に応じた多様な取り組みが可能だが、全国的には「子ども食堂」「学習支援」が主流である。「あーち」では、それまでの「居場所づくり」実践を発展させる形で「子どもの居場所づくり事業」を取り込み「よる・あーち」と命名し、週1回（金曜日17:00～20:00）実施している。地域の未就学児・小学生・中学生・高校生や青年、保護者、市民ボランティア、大学生・院生（他大学含む）が参加する。子ども・青年たちは学習支援を受けたり（講師は市民ボランティア・大学生らが担当）、ボランティア・保護者と夕食を共にしたり（調理は「灘区連合婦人会」の登録会員約50名がシフト制で担当）、遊びのプログラムを楽しんだりしている。

## 3. 2023年度の取り組みの概要

### 【新型コロナウイルス感染拡大の影響と対策】

本年度中に（2023年5月8日付）、新型コロナウイルスの感染症が「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」における「5類感染症」に変更された。その結果、外出の自粛要請及び就業制限、陽性者登録や健康観察などがなくなったため、「あーち」もこれ以降は次のような対応をした。

- ・利用時間・利用者数・利用方法（予約制）の制限やプログラムの一部休止・プログラム内での制限を段階的に緩和
- ・毎日の館内換気・清掃の徹底、毎日2回のおもちゃ・備品の消毒の徹底を継続
- ・スタッフの健康管理・手洗い・消毒・マスク着用の継続
- ・利用者への「健康おたずね票」の廃止
- ・利用者へのマスク着用の協力の呼びかけ、手洗い・消毒の依頼の徹底を継続

## 【2023 年度における主な利用・運営状況】

### <年間利用者数>

コロナ禍における多様な制約は、本年度に入ってからは上述のように緩和された。その影響で、「あーち」の年間利用者数（表 1 参照）は、昨年度の利用者数に比して回復傾向にあり、2024 年 2 月末現在で、8,127 人（延べ）である。内訳は子ども 3,708 人・おとな 4,419 人であり、年間の利用者数を開館日数の 218 日で割ると 1 日平均約 37 人（昨年度は 30 人）となる。

### <プログラム開催状況>

本年度のプログラム開催状況を集計（2 月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は 176 回、大学の正規教育プログラム（GSP 等）の実施回数（延べ数）は 40 回である。

### <学部生・院生による研究利用>

学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用した実績については、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの教員のゼミ生に限っても、これまで、卒業論文 9 編・修士論文 14 編・博士論文 3 編が提出されている。

### <授業・実習の場としての活用>

2012 年度より園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の 4 年次生（経験値統合実習）、3 年次生（育成連携支援実習）を継続的に受け入れているが、本年度は 4 年次生の実習のみを受け入れた。また「トライやるウィーク」の活動の場として、灘区・東灘区の公立中学校の生徒 7 名を受け入れた。

### <運営に必要な会議等>

- ・「あーち 連絡協議会（隔月に 1 回開催）」

本会議は、大学の「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する。本年度は市民ボランティア、灘区連合婦人会、灘区地域協働課、教員・スタッフなどが参加した。

- ・「あーち通信編集会議（毎月 1 回開催）」

プログラム予定表、学生やスタッフによる絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するための会議である。この通信は、利用者への配布だけでなく、灘区役所、灘区社会福祉協議会、灘区内各児童館、連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。また、「あーち」のホームページ上で順次掲載されている。なお、2024 年 3 月号が 223 号となる。

表 1 年間および月別利用者数：延べ数（2023 年 4 月～2024 年 2 月）

2023 年度		ふらっと		こらぼ+ゅーす		Zoom/実習観察園		一日の利用者数		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4	20	246	262	37	111	0	0	283	373	656
5	19	227	236	38	95	0	0	265	331	596
6	21	233	243	43	133	0	0	276	376	652
7	21	183	182	36	105	0	0	219	287	506
8	18	168	161	21	62	0	0	189	223	412

9	21	246	248	50	120	0	0	296	368	664
10	21	287	287	30	117	5	3	322	407	729
11	20	291	280	24	88	6	4	321	372	693
12	19	416	394	60	147	0	0	476	541	1,017
1	18	466	443	36	92	0	0	502	535	1,037
2	20	489	479	70	127	0	0	559	606	1,165
合計	218	3,252	3,215	445	1,197	11	7	3,708	4,419	8,127

#### 4. 2023年度の取り組みの詳細（教員・職員が中心に進めている主な活動を中心に）

##### 【ドロップイン・サービス（地域子育て支援拠点事業）】

地域子育て支援拠点事業を神戸市からの補助金を受けて引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることができる場である。本年度は5月以降「ランチタイム」を復活させ、午後の利用時間を30分延長した。また12月からは利用予約を全面撤廃し、コロナ禍以前の「自由に利用できるドロップイン」に戻した。これに伴い利用者数はそれまでの約1.5倍に増加した。

##### 【子育て相談事業（地域子育て支援拠点事業）】

上記ドロップインの場に、助産師・保健師・保育士などの資格を持つ相談員を配置し、保護者からの相談に応じた。灘区の地域協働課から派遣されている地域活動支援コーディネーター（月2回）も子育て相談に応じた。相談内容として多かったものは、子どもの生活に関する相談、発育・発達に関する相談、離乳食・幼児食に関する相談、育児不安に関する相談、地域資源に関する相談であった（※この相談内容に関する分類・集計結果は別途神戸市に毎年報告している）。

##### 【よる・あーち】

学習支援、子ども食堂、居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムであり、毎週1回、夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが大勢集まり、相互に学び合う場を形成している。本年度も時間短縮は継続しているが人数制限は設けなかった。その結果、院生・学部生、そして子どもや青年、保護者、市民ボランティアらは相互交流をより深めることができた。

##### <学習支援（「子どもの居場所づくり事業）>

神戸市からの補助金を受け、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。学習面や社会性などに困難さを抱える児童・生徒・青年が参加している。支援者は学生を中心に構成され、学習支援を契機とした支援者の学びにも焦点を置いた取り組みをおこなった。卒業生や地域住民、保護者も支援に加わり、参加型研究のフィールドにもなっている。

##### <子ども食堂（子どもの居場所づくり事業）>

神戸市からの補助金を受け、灘区連合婦人会と連携して実施している。「よる・あーち」プログラムの一環として位置づく。本年度も感染予防の観点から弁当の持ち帰りを基本としたが、テーブルの位置などに配慮しながら段階的に食堂形式も復活させたところ、毎回、主に子どもや青年（5～6名）の参加者があった。

##### <居場所づくり>

「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践

である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し、さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通してエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。

#### 【健康あーち（食育等のプログラム）】

子育て中の親子の健康に関する疑問や悩みに対応しながら、食生活や子育ての方法を考えるセミナーと交流会である。参加者である親たちが主体となり運営できるよう、教員や学生らが支援している。本年度は、対面で6回実施（うち2回は大学の実習観察園での活動）した。また、キッチンを活用した「親子クッキング」も1回開催された。

#### 【灘区役所家庭支援課や公立保育所等との情報交換】

奇数月に開催される「子育て連絡会」に「あーち」の職員が出席、灘区家庭支援課、やはた桜保育所（地域子育て支援担当）、灘区社会福祉協議会、おやこふらっとひろば灘との情報交換をおこなった。

#### 【地域の医療機関との協働実践】

長年、近隣の産婦人科の医師や助産師が日常的に「あーち」の広報を行うことで、生まれてまもない乳児がいる家庭の利用促進を図っている。また昨年度同様、他市で歯科医院を開業している歯学博士が、「だいじなお口のはなし」というテーマで「あーち通信」の連載コラムを担当した。

### 5. 2023年度に実施したプログラムの概要

本年度に実施したプログラムを以下に掲載する。また、プログラムの回数やプログラムにかかわったボランティアの人数を表2に示す。表2には、大学の授業・実習などもプログラムとして掲載しているが、毎日提供されているドロップイン・サービスおよび諸会議は掲載していない。なお、「よる・あーち」の利用者数（子ども・おとな・保護者）は表1に、「よる・あーち」にかかわった一般ボランティア・学生ボランティアおよびスタッフの人数は表2に含まれているが、改めて別途、表3にそれらの内訳をより詳細に示す。

#### 【子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム】

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）週5日
- ・ふらっとで遊ぼう！：職員（保育士）が親子遊び（ショートプログラム）を提供 月2回
- ・ベビーマッサージ：元利用者である母親がリーダーとなって実施 講座と交流プログラム 月2回
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが壊れたおもちゃなどを修理する 月1回
- ・リフレッシュ YOGA：「あーち」利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム 月1回
- ・あらかると音楽あそび：手づくり紙芝居や絵本に音をつけて、一緒に音楽遊びを楽しむ 月1回
- ・おはなしの国：ストーリングテラーによる絵本の読み聞かせ 月1回
- ・プラレール広場<新規プログラム>：広いスペースで自由に電車遊び等ができる場 月2回

#### 【発達障害等のある子どもの保護者を対象にしたプログラム】

- ・パパママほっと：おもに自閉症の子どもを持つ保護者のための、語らいと情報交換の場 月1回

- ・月イチ with<新規プログラム>：参加者それぞれの困りごと悩みごとについて語り合う場 月 1 回

表2 プログラム数およびボランティア数：延べ数（2023年4月～2024年2月）

2023 月	開館 日数	プログラム数				スタッフ・ボランティア数			学生 合計	
		一般 のプ ログ ラム	大学の 授業お よび実 習等	プログ ラム 総数	プログ ラム数 1 日平均	スタッフ（含むプログラ マリーダー）数および一般 ボランティア数				
						スタッフ	一般	合計		
4	20	16	4	20	1.00	54	18	72	28	
5	19	15	3	18	0.95	42	27	69	32	
6	21	19	5	24	1.14	60	30	90	51	
7	21	18	4	22	1.05	69	20	89	49	
8	18	11	3	14	0.78	51	6	57	19	
9	21	18	5	23	1.13	69	21	90	35	
10	21	17	4	21	1.00	64	8	72	34	
11	20	16	3	19	0.95	49	15	64	20	
12	19	17	3	20	1.05	57	15	72	35	
1	18	12	3	15	0.83	38	21	59	18	
2	20	17	3	20	1.00	51	16	67	24	
合計	218	176	40	216	0.99	604	197	801	345	

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア数：延べ数（2023年4月～2024年2月）

2023 年	利用者							ボランティア				スタッフ			合計 (人)
	内訳	未 就 学	小 学 生	中 学 生	高 校 生	保 護 者	お と な	小計	一 般	学 部 生	院 生/ 研 究 生	小 計	教 職 員	灘 区 婦 人 会	
合計	46	131	108	53	247	660	1,245	93	273	59	425	157	167	324	1,994

## 6. 2023年度の見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献を果たす手段、また、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。受け入れた機関・組織別に以下に整理する（個人の見学者に関しては省略）。

### 【「よる・あーち」見学・視察者】

文部科学省 2 名 韓国平生教育学会 4 名 日本社会教育学会 2 名 瀬戸市社会福祉協議会 1 名  
三田市社会福祉協議会 6 名 三田すくすく子育て 3 名 他 個人多数

#### 【その他の見学・視察者】

瀬戸保健福祉課 保健師 4 名 甲南幼稚園教諭 2 名 原田中学校教員 1 名・生徒 1 名 住吉中学校  
教員 1 名・生徒 4 名 他中学校生徒 6 名 園田学園女子大学 教員 1 名・学生 2 名 神戸大学大学  
院教員 1 名・院生 6 名 子育て支援員研修受講生 1 名

#### 7. 2023 年度の連携・協力先

「あーち」の運営にあたって、本年度に連携・協力を得た組織や団体名を、その内容とともに以下の表 4 に整理する（個人の協力者に関しては省略）。

表 4 連携・協力関係にある組織・団体等とその内容

組織・団体名等	連携・協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市子ども家庭支援部こども青少年課	運営協力
瀬戸こども家庭支援課	運営協力／情報交換
瀬戸民ホール	運営協力／情報交換
瀬戸地域協働課	地域活動支援コーディネーターの派遣・なだ桜まつり協力
瀬戸消防署	消防訓練（区民ホールでの訓練に参加）
やはた桜保育所（地域子育て支援担当）	情報交換
瀬戸地域コーディネーター（助産師）	ふらっと相談員
瀬戸社会福祉協議会	ボランティアコーディネート／情報交換
瀬戸区内児童館（10か所）	情報交換
おやこふらっとひろば瀬戸	情報交換
瀬戸連合婦人会	情報交換
社会福祉法人たんぽぽ	「よる・あーち（子ども食堂）」の調理担当
学童保育つむぎ	博物館実習
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
はしもと産婦人科	居場所づくり
おもちゃ病院（地域の有志）	広報協力／情報交換
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	「おもちゃ病院」の実施 「なだぼつとらっく」運営

（のびやかスペースあーち運営委員会委員長 相澤直樹）

#### 10.1.5. サイエンスショップ

##### 1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の科学に関わる活動への支援等を行うことを目的とする。(a)については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展への市民の関与・参画（オープンサイエンス）を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

令和5年度は、研究科専任教員（室長、副室長、ほか2名）と、学術研究員2名（非常勤職員）、事務補佐員4名（非常勤職員）の体制で運営された（学術研究員および事務補佐員については、次項に記すグローバルサイエンスキャンパス事業に係る業務担当者を含む）。

## 2. 令和5年度の主な取組

### (1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

サイエンスショップは、神戸大学を実施機関、兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学を共同機関として4大学の連携で実施する、高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラムの事務局として事業運営の中核的役割を担っている。この教育プログラムは、国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス（GSC）」の企画として同機構の支援を受けて実施されている。平成29年度から令和2年度の4年間、「根源を問い合わせ革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for innovative scientists in the future）としてJSTの支援（第Ⅰ期）を受けた後、令和3-6年度の4年間もGSCとして採択され（第Ⅱ期）、「“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for young scientists to go beyond the boundaries）として実施している（企画の実施責任者を神戸大学学長、実施主担当者をサイエンスショップ副室長が務めている）。プログラムの略称は、第Ⅰ期、第Ⅱ期を通じて「ROOT プログラム」としている。

第Ⅱ期において、神戸大学では大学教育推進機構等が主体となり、人間発達環境学研究科を含む全学の幅広い部局・組織の参画のもとで企画が進められている。その企画立案、実施等について審議するために、大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置されている。また、地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために、兵庫県および周辺府県等の教育委員会や、兵庫県下の先端的研究機関（高輝度光科学研究センター、理化学研究所計算科学研究機構、同生命機能科学研究センター、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立大学西はりま天文台）や、公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し、実施機関である神戸大学、共同機関を含めてGSCひょうご神戸コンソーシアムが形成されている。

このプログラムでは、毎年、科学技術分野で優れた潜在的資質や高い意欲をもつ受講生を募集し、50名程度を選抜して受け入れる。大学教員による講義・実習、先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て、受講生が研究課題提案を策定し、評価を受けて選抜された20名程度が、約1年間、大学等において研究を行なう「実践ステージ」に取り組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して、科学英語、海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される。

令和5年は、5月から6月にかけて第7期基礎ステージ生の募集を行い、100名の応募者（所属学

校所在地：兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、滋賀県、徳島県、岡山県、鳥取県、香川県、三重県、静岡県、東京都、沖縄県）から 64 名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。令和 6 年 1 月には、その中から実践ステージ受講生候補者 22 名が選抜され、令和 6 年度の研究活動に向け、大学教員の指導・助言のもとで研究計画の具体化などを進めた。

また、令和 4 年度に基礎ステージ生から選抜された第 6 期実践ステージ生 22 名が研究に取り組んだほか、令和 3 年度に選抜された第 5 期実践ステージ生 7 名が、引き続き成果の取りまとめ・発表を含む研究活動を進めた。令和 5 年度は、新型コロナウィルス感染症による制約がほぼ解消したことも背景として、受講生の研究活動が順調に進み、多くの研究成果発表が行われた（国際学会での発表 2 件、その他の学会や研究会等での研究発表 41 件、論文 1 件（英文）等）。また、これらを通じて、以下の受賞があった。このように、優れた科学技術人材の発掘・育成の形ある成果が見られた。

- The 10th EAFES (East Asian Federation of Ecological Societies) International Congress : Best poster presentation award
- 第6回環境DNA学会九州大会：ポスター賞
- 日本金属学会 第174回講演大会 高校生・高専学生ポスターセッション：優秀賞
- 第65回日本植物生理学会年会「高校生生物研究発表会」：研究者審査委員賞および奨励賞
- 令和6年度日本水産学会春季大会高校生ポスター発表：優秀賞
- 第67回日本学生科学賞：兵庫県知事賞
- 第21回高校生・高専生科学技術チャレンジ（JSEC2023）：朝日学生新聞社賞
- 2023年度第6回キャタピラーSTEM賞：最優秀賞
- STEAM JAPAN AWARD 2024 : SILVER賞
- 第9回高校生国際シンポジウム：スライド部門優良賞（2件）
- 第28回 京都サイエンスコンテスト：理科学研究会会长賞

なお、神戸大学ではROOTプログラムの実績・成果も踏まえて、令和4年10月に「高大接続卓越グローバル人材育成センター」が設置され、同プログラムを含む高校生を対象とした取組、入学者の特別選抜、入学後の教育を一貫して体系的に推進する取組が進められており、サイエンスショップのメンバーも同センターの取組に参画している。

## (2) 地域社会における科学コミュニケーションおよび市民の科学活動支援

以下のような取組を行った。

- サイエンスショップが主催する「サイエンスカフェ神戸」を、以下のテーマで開催した（詳細は年次報告書資料編に記載）。
  - (a) 「環境 DNA で解き明かす水の中の生物多様性」（令和 5 年 9 月、共催：KOBE 文教区、アーバンデザインセンター神戸（UDC078），会場：KOBE 文教区（ミント神戸内）
  - (b) 「花と昆虫の関係からみる山の景色～どんな花があるところにどんな昆虫がいる？～」（令和 6 年 1 月、会場：ロッコウビーバースネスト）
  - (c) 「スズメバチを食べる。スズメバチが食べる」（令和 6 年 3 月、会場：ロッコウビーバースネスト）

このうち、(a)は、博士前期課程の授業「サイエンスコミュニケーション演習」の一環として、大学院生が中心となり企画・実施した。

- ・市民による科学コミュニケーション活動への支援として、伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ開催に協力した(12回：サイエンスカフェ開催支援のリストについては年次報告書資料編に記載)。
- ・平成19年度以降実施している、市民が科学者とともにIPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change：気候変動に関する政府間パネル)の報告書を読み解く会「市民のための、IPCCレポートを根掘り葉掘り読む会」を14回開催した(第3期、第15-28回)。
- ・兵庫県西部の佐用川でオオサンショウウオの保全・調査活動に取り組む「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の活動に、参加・協力を行った(令和5年9月)。
- ・令和5年12月に、JST RISTEXの「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」の一環として進められる研究開発プロジェクト「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築」(代表：片桐恵子教授)との連携により、グリーンヒルズ六甲集会所において、高齢者等を対象とした対話型AI利用に関する講座を2回実施した。

### (3) 科学教育への支援

グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムについては、項目(1)に記したが、それ以外の取組について以下に記載する。

- ・兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会 2023」を神戸大学百年記念館六甲ホールにおいて開催した(令和5年11月)。兵庫県、大阪府、岡山県、鳥取県、徳島県の高等学校18校から生徒197名、教員29名、本学関係者13名を含む255名の参加者があり、活発な発表、交流が行われた。口頭発表20件、ポスター発表40件の発表があり(オンラインの発表・参加も受け入れた)、優れた研究に対して、サイエンスショップより優秀賞を授与した。
- ・サイエンスショップが窓口となり、神戸大学共催として、兵庫「咲いテク(Science & Technology, Sci-Tech)」運営指導委員会主催の高校生の科学研究発表・交流会“9-th Science Conference in Hyogo”(英語による発表、令和5年7月、神戸大学百年記念館六甲ホール)および「第16回サイエンスフェア in 兵庫」(日本語による発表、令和6年1月、神戸大学統合研究拠点および兵庫県立大学、甲南大学のキャンパス、理化学研究所計算科学研究センター)が開催された。
- ・兵庫県淡路県民局主催、認定NPO法人ソーシャルデザインセンター淡路共催によるイベント「描こう！語ろう！始めよう！高校生の未来フォーラム」の開催に協力した(令和6年2月、南あわじ市広田地区公民館)。

この他、サイエンスショップに関わる教員は、様々な形で高等学校の科学教育活動への支援も行っている。

### (4) 学部・大学院教育

本年度も、国際人間科学部のグローバルスタディーズプログラム(GSP)の国内フィールドとして

学生を受け入れた（新規1名、および令和4年度からの継続2名）。学生は、フィールドワークとして、「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の活動への参加・協力、市民グループが開催するサイエンスカフェ等の科学コミュニケーションイベント、高校生の科学研究発表会等、サイエンスショップが関わる諸活動に参加した。

また、項目(2)に記したように、大学院人間発達環境学研究科の授業「サイエンスコミュニケーション演習」の一環として、大学院生の企画・運営によるサイエンスカフェを開催した。

このように、サイエンスショップは、大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

表 神戸大学サイエンスショップ 令和5年度の主な取組

科学コミュニケーション・市民の科学活動支援
<ul style="list-style-type: none"><li>・サイエンスカフェ開催（3件）</li><li>・サイエンスカフェ開催支援（12件）</li><li>・市民と研究者が協力して気候変動に関するIPCCレポートを精読する会「市民のための、IPCCレポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（14回）他</li></ul>
地域の科学教育支援
<ul style="list-style-type: none"><li>・グローバルサイエンスキャンパスROOTプログラムの運営</li><li>・兵庫「咲いテク」事業推進委員会主催 “Science Conference in Hyogo” および「サイエンスフェア in 兵庫」開催協力 他</li></ul>
大学教育・学生の活動
<ul style="list-style-type: none"><li>・国際人間科学部グローバルスタディズプログラム国内フィールド「『市民の科学』プログラム：サイエンスショップ」提供</li><li>・大学院人間発達環境学研究科「サイエンスコミュニケーション演習」へのフィールド提供 他</li></ul>
研究会等の主催
<ul style="list-style-type: none"><li>・「高校生・私の科学研究発表会2023／兵庫県生物学会2023研究発表会」開催（主催：神戸大学サイエンスショップ、兵庫県生物学会）</li></ul>

（サイエンスショップ室長 源利文、副室長 伊藤真之）

#### 10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門、研究開発部門、拠点形成部門において、それぞれ以下の活動を行った。

##### 1. 教育連携部門

教育連携部門では、各所と協力し、研修の提供や、学術指導による連携を実施した。また、研修開発にかかる共同研究を実施した。以下対象ごとに報告する。

## (1) 神戸市教育委員会

神戸市教育委員会と共同して、神戸市立の、幼稚園・保育所・小学校及び私立の幼稚園・保育園・こども園等の教員・保育士を対象に、幼小接続期教育をテーマにして「つばめセミナー」(研修講座)を開催した。開催方法は、対面による集合型と、オンライン型のハイブリッドによった。加えて、今年度は、神戸市による保育士等のキャリアアップ研修の「幼児教育」の科目として位置づけられ、市から証明書も発行された。セミナーの実施内容は以下の通りである。

### 【令和5年度 つばめセミナー実施内容（全6回）】

回	月日	講師名	内容（キャリアアップ研修項目番号）
1	8/23(水)	田中孝尚 附属幼副園長	幼児期の学びと児童期の学びをつなぐ架け橋期の教育 (幼保小の架け橋プログラム) の充実に向けて (①⑤)
2	9/8(金)	北野 幸子 教授	乳幼児教育の遊びを通しての学びについて考える 一小学校教育を見通しながら (①⑤)
3	10/16(月)	渡邊 隆信 教授	接続期にふさわしい遊びを通しての学び —道徳性の育ちを中心として— (②⑤)
4	11/15(水)	松本法尊 附属幼教諭	子どもの姿に基づいた指導計画、記録および評価 (④⑤)
5	12/20(水)	岡部 恒幸 教授	発達を踏まえた資質能力の育ちと学び —数理認識の育ちの幼小接続— (③⑤)
6	1/24(水)	目黒 強 准教授	接続期における絵本を通じた言語感覚の育成 (③⑤)

また、参加者はのべ、432人であった。各回の参加者の内訳は、以下のとおりである。

### 【令和5年度 参加者内訳】※集→集合型 オ→オンライン型 キ→キャリアアップ研修（集合型に含む）

回	月日	参加 人数	合 計	参加者校種内訳								市教委・こども 家庭局等
				学校	市立 幼	市立 保	私立 幼	私立 保	私認 こ	小規 模		
1	8/23 (水)	集 64 キ 35 オ 11	75	集 2 オ 3	集 9 オ 3	集 8 オ 2	集 0 オ 0	集 4 キ 4 オ 0	集 31 キ 29 オ 2	集 2 キ 2 オ 0	集 8 オ 1	
2	9/8 (金)	集 65 キ 35 オ 18	83	集 2 オ 3	集 9 オ 10	集 8 オ 3	集 0 オ 0	集 4 キ 4 オ 0	集 30 キ 29 オ 1	集 2 キ 2 オ 0	集 10 オ 1	
3	10/16 (月)	集 58 キ 36 オ 15	73	集 0 オ 1	集 3 オ 11	集 6 オ 2	集 0 オ 0	集 4 キ 4 オ 0	集 30 キ 30 オ 1	集 2 キ 2 オ 0	集 12 オ 1	
4	11/15 (水)	集 51 キ 32 オ 14	65	集 0 オ 1	集 2 オ 10	集 6 オ 1	集 0 オ 0	集 3 キ 3 オ 0	集 27 キ 27 オ 1	集 2 キ 2 オ 0	集 11 オ 1	
5	12/20 (水)	集 55 キ 35 オ 11	66	集 1 オ 0	集 3 オ 8	集 5 オ 1	集 0 オ 0	集 3 キ 3 オ 0	集 30 キ 30 オ 1	集 2 キ 2 オ 0	集 11 オ 1	

6	1/24 (水)	集 51 キ 30 オ 19	70	集 1 オ 4	集 3 オ 10	集 7 オ 4	集 0 オ 0	集 4 キ 0 オ 0	集 24 キ 24 オ 0	集 2 キ 2 オ 0	集 10 オ 1
---	-------------	----------------------	----	------------	-------------	------------	------------	-------------------	---------------------	-------------------	-------------

## (2) 舞鶴市

学術指導契約をむすび、「乳幼児教育の質の向上と保育者研修・育成」について、研修の実施と、同市の研修や実践研究への助言指導、公開保育への参加、フォーラムの企画登壇等を行った。また、同市の乳幼児教育センターの運営について共同参画した。舞鶴市乳幼児教育ビジョンの第三次改訂に参画した。3月9日乳幼児教育フォーラムの基調講演とシンポジウムにおいて登壇し、市の乳幼児教育の取組の報告と展望を、市長と、教育長、教育委員、園・小学校関係者と行った。

## (3) 白藤学園

学術指導契約をむすび、同法人の乳幼児教育推進体制の強化にかかる助言指導を行った。遠隔による会議や、提供資料の分析等を行った。公開保育を含む研修開発に参画した。

## (4) ベネッセ教育総合研究所

学術指導契約をむすび、同研究所が日本全国のすべての保育施設に無料配布している機関冊子「これからの中年教育」についての監修を行った。

## (5) 兵庫県教育委員会但馬教育事務所

産官学連携本部を通じて、学術相談契約をのもと、教育連携を行った。幼児教育と小学校教育の架け橋の在り方等について、専門知識の提供を行った。

## (6) 西宮市

産官学連携本部を通じて、学術相談契約をのもと、教育連携を行った。同市公立園のこども園化について、市長や、教育長、教育委員会関係者に専門知識の提供や助言指導をおこなった。公立園の保育者を対象に講演を行うなどの連携を図った。

## (7) 明石市

産官学連携本部を通じて、学術相談契約をのもと、教育連携を行った。

## (8) 尼崎市

産官学連携本部を通じて、学術相談契約をのもと、教育連携を行った。

## (9) 姫路日ノ本短期大学

産官学連携本部を通じて、学術相談契約をのもと、教育連携を行った。

## (10) 堺市

産官学連携本部を通じて、学術指導契約ののもと、「学びに向かう力の土台を育む~遊びこむ経験を重

ねる中で~」とかかわる、研究支援を行った。公開保育の実施と講話をを行い、教育連携を行った。

(11) 全国福祉サービス第三者評価調査者連絡会

学術指導契約をむすび、厚生労働省、子ども子育て支援推進調査研究事業にかかる学術指導を行った。研究成果の発信等を行った。

(12) 株市会社ナガセ

産官学連携本部を通じて、学術指導契約をむすび、東進ハイスクールによる「夢」・「志」について高校生が本気で考える機会を作ることを目的としたオンラインイベント『大学学部研究会』への協力、出講、映像の提供を行った。

(13) 姫路市私立こども支援機構

産官学連携本部を通じて、学術指導契約をむすび、これから乳幼児教育の在り方について、助言指導を行った。

## 2. 研究開発部門

研究開発部門では、高度教員養成プログラムを実施するとともに、6回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は5名であった。その他、研究開発を以下の各所と行った。

(1) 神戸市こども家庭局

2018年から継続している神戸市こども家庭局との共同研究の契約を継続し、研修開発研究を行った。神戸市内の9区の、各5園から5名計45名のプロジェクト会議メンバー及び神戸市こども家庭局と神戸市教育委員会のメンバーとともに、プロジェクト会議を年二回(5月17日、12月19日)、本学大会議室にて開催した。のべ参加人数は約100名であった。また神戸市全体会を3月6日に神戸市総合教育センターで開催した。参加者は約250名であった。

(2) その他科研等

1) 国際共同研究

①研究代表：山口悦司

共同研究者(海外) : Clark A. Chinn (Rutgers University), Qiuyu Lin (Rutgers University)

共同研究者: 望月俊男(専修大学), 大浦弘樹(東京理科大学)

研究課題: 科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築  
(課題番号 23H01021)

研究資金: 2023~2026年度・基盤研究(B)(一般)

研究概要: 科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

②本専攻研究者: 北野幸子(共同研究者)

研究代表者：榎原洋一（CRN所長、お茶の水女子大学名誉教授）

共同研究者（海外）：Prof. Aminah binti Ayob (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Christine Chen (Association for Early Childhood Educators, Singapore), Prof. Sasilak Khayankij (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Poh Tin Tan (Tan Specialist Child and Family Clinic, Malaysia), Dean Dr. Sofia Hartati (State University of Jakarta, Indonesia), Fasli Jalal (Professor, State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Thelma Rabago Mingoa (De La Salle University, Philipine), Dr. Lee-Fong Wong (National Taipei University of Education, Taiwan), Dr. Felix Hung (National Taipei University of Education, Taiwan) Mazlina Che Mustafa (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Sirithida Chinsangthip (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Anita Chu (National Taipei University of Education, Taiwan), Sri Indah Pujiastuti (State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Jiaxiong Zhu (East China Normal University, China), Dr. Nianli Zhou (East China Normal University, China)

共同研究者（国内）：星三和子（十文字女子大学），佐藤朝美（愛知淑徳大学），深見俊崇（島根大学）

研究課題：子どもへのレジリエンスの育成を実践につなげるためのインタビュー調査

研究資金：Child Research Net Asia, ベネッセ教育研究所研究資金

研究概要：8か国を対象に、レジリエンスと社会情動的スキルという用語を保育者がどのように認識しているかを明らかにするためのインタビュー調査を実施した。また子どものレジリエンスや社会情動的スキルの育成に関する実践例を収集した。今後は、それらのデータを解析し、国際比較を行う予定である。

## 2) 国内共同研究等

①研究代表者：山口悦司

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築  
(課題番号 23H01021)

研究資金：2023～2026年度・基盤研究(B) (一般)

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，Erkki Tapio Lassila

研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発  
(課題番号 23K17592)

研究資金：2023～2025年度・挑戦的研究(萌芽)

研究概要：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発を行っている。

②研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発 (課題

番号 20K20829)

研究資金：2020～2023 年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

③研究代表者：北野幸子（神戸大学）

研究課題：位置測位システムを活用した保育者養成教育方法と教材の開発

研究資金：挑戦的研究（萌芽）（課題番号 23K17616）

研究概要：位置測位システムを活用して園における子どもと保育者の位置データを収集し、養成教育の教材として活用すべき内容の抽出を行った。それらを検討し、保育者養成教育における活用方法と、活用可能な教材の開発を試みている。

④研究代表者：岡部恭幸

特別なニーズを持つ子どもへの算数教材開発、株式会社 cheriment, 2023/07/01-2024/06/30

### 3. 抱点形成部門

抱点形成部門では、国内外の抱点形成を目指して、本学の産官学連携本部を通じて、教育連携推進室とChild Research Net Asia／ベネッセ教育研究所との研究助言指導契約のもと、新型コロナウイルスが全世界で猛威を奮い、子どもたちのウェル・ビーイングに大きな影響を及ぼしている中で、具体的にどのような課題があるのかを探り、その課題解決のためにどのような方策があるのかについて検討するアジア8か国際比較研究を行った。

国内については、附属幼稚園と連携して神戸市こども家庭局との共同研究等を行った。附属学校と連携したプロジェクト研究としては、附属小学校、附属幼稚園における、歴史的資料のデータベースの作成を継続して行った。財務的には、現在多くの科研等の採択を獲得してきているが、今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた申請及び申請の準備をする予定である。令和元年度における教育連携推進室関係の連携を基礎とする主要な研究活動実績は以下の通りである。

### 4. その他

その他、本年度連携推進室の主催・共催により企画・運営したシンポジウム等は以下のとおりである。

(1) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室、保育総合研究会共催乳幼児教育学セミナー7

日時：2023年8月24日

テーマ：「異次元の『こどもまんなか』社会を考える」

(2) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科乳幼児教育学研究室主催 乳幼児教育セミナー8

日時：2023年8月27日

テーマ：「保育実践の省察と対話」

(3) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室、神戸大学附属幼稚園乳幼児教育学セミナー9

日時：2024年3月17日

テーマ：「保育実践の省察と対話」

(4) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室、神戸大学附属幼稚園共催 乳幼児教育学セミナー10

日時：2024年3月24日

テーマ：「乳幼児教育の実践を支えるICTの活用について考える」

(教育連携推進室長 北野幸子)

#### 10.1.7. アクティブラーニング研究センター

##### 1. 運営体制

運営委員

教員：長ヶ原 誠（センター長）、増本康平（副センター長）、原田和弘（副センター長）、近藤徳彦、片桐恵子、井上真理、田畠智博、近江戸伸子、木村哲也、岡崎香奈、石原 暢、木伏紅緒、佐藤幸治

##### 2. 研究プロジェクトの推進

###### (1) プロジェクト内容：メンバーと内容

令和5年度は以下の12件の研究プロジェクトが実施された。

「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブラーニングを目指して」

メンバー：原田和弘、増本康平、岡田修一、近藤徳彦、長ヶ原 誠、片桐恵子、学外研究者

期間：2010年度～2025年度

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に、多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた、安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし、大学をコミュニティの中心に位置付け、このサロンを通して、住民同士のネットワークを形成するとともに、サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し、住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

「サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト」

メンバー：片桐恵子、学外研究者2名

期間：2015年度～2025年度

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である、団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し、サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

### 「生涯学習・多世代交流プロジェクト」

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名，海外研究者1名，大学院生1名

期間：2018年度～2025年度

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし，学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をライフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて，その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する。

### 「高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト」

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

期間：2015年度～2030年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

### 「関西ワールドマスターズゲームズ2027 レガシー創造支援研究」

メンバー：長ヶ原 誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

期間：2015年度～2027年度

内容：2022年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

### 「活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト」

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017年度～2025年度

内容：高齢者において，活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには，どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また，その知見に基づき，活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

### 「アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策」

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

期間：2017年度～2023年度

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が，健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうかに注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを，経年的に，かつ，正確に測定し，アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

### 「社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立」

メンバー：増本康平，原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究者，神戸市，企業

期間：2022年～2024年

内容：良い社会的なつながりは、健康増進、認知症罹患率の低下、幸福感の向上など個人にとって良い影響をもたらすだけでなく、地域の安心・安全や災害時の孤立者の減少等、地域コミュニティの問題を解決する上でも重要である。しかしながら、社会的つながりを客観的に測定可能な指標は極めて限られている。本プロジェクトでは、スマートフォンを用いたコミュニケーション量の計測と、調査データによって収集可能な人とのつながりのデータから数理モデルによって社会的つながりを推定する二つの手法の開発と社会実装を目的とする。

「エンド・オブ・ライフにおける感情調整の機序と役割」

メンバー：増本康平，佐藤幸治，原田和弘，学外研究者

期間：2019年度～2024年度

内容：身体、認知機能が低下し自立した生活が困難となっても、社会的つながりを維持し、幸せな生活をおくるために重要な機能として、近年、感情調整が注目されている。本研究では、感情調整機能の加齢による変化について遺伝的、心理的、文化的側面から検討する。

「高齢者のソーシャルサポート接受とICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較」

メンバー：片桐恵子，竹内真澄，学外研究者1名

期間：2021年度～2025年度

内容：コロナ禍での活動や人との交流の制限は高齢者的心身に大きなストレスを与えている。しかしコロナ禍において従来のようなソーシャル・サポートを得ることは難しい。ICTを活用したソーシャル・サポートが代替として想定されるが、その現状や有効性は明らかではない。デジタル化が進み、日本に似た家族規範を持つ韓国と香港において、高齢者のICTの利用と効果について精査し、日本のICT活用に有効な施策について提言する。

「習慣的運動が子どもの社会性に与える影響：実行機能とオキシトシンの役割に着目して」

メンバー：石原暢（代表者）

期間：2021年度～2024年度

内容：過去20年に渡る電子メディアの急速な普及は、子どもの運動不足を引き起こすだけでなく、対面での交流機会を減少させ、社会性の発達に悪影響を及ぼしていることが危惧されている。加えて、日本の子どもの社会性は世界的に見て低い水準であることが報告されており、子どもの社会性の発達支援に資する研究は、日本が率先して行うべき課題である。習慣的運動は社会性とポジティブに関わることが示唆されているものの、その因果の方向と生理学的メカニズムは不明である。そこで本研究は、縦断的研究デザインを用い、習慣的運動が子どもの社会性に与える影響を、実行機能と唾液オキシトシンの役割に着目して明らかにする。

「幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明」

メンバー：石原暢（代表者）

期間：2021 年度～2023 年度

内容：幼少期の習慣的運動は認知機能の発達を促し、その効果は中高齢期にまで継続されることが示唆されている。しかし、その基盤となる神経機構と個人差は検討されておらず、どのような場合に幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能の維持・増進に貢献するのかは未解明である。本研究では、子どもを対象とした 2 年間の前向き縦断研究と中高齢者を対象とした後ろ向き横断研究により、幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能を維持・増進させる背景にある脳の構造・機能的変化およびその個人差を明らかにする。

### 3. 地域貢献活動によるアクションリサーチ

【2023 年度春 健康体操教室】：延べ 155 名

【2023 年度春 園芸教室】：延べ 81 名

【2023 年度春 いきいきウォーキング】：延べ 126 名

【2023 年度秋 健康体操教室】：延べ 146 名

【2023 年度秋 園芸教室】：延べ 117 名

【2023 年度秋 いきいきウォーキング】：延べ 128 名

以上の地域貢献活動によるプロジェクトを通じたアクションリサーチの結果は、国際学術雑誌に採択されており、現在も投稿中である。住民のネットワークの拡充や well-being の向上に役立っていることを科学的エビデンスに基づき示したものとして評価されている。

(センター長 長ヶ原誠)

## 10.2. 実習観察園の運営利用状況

### ○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図 1 の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

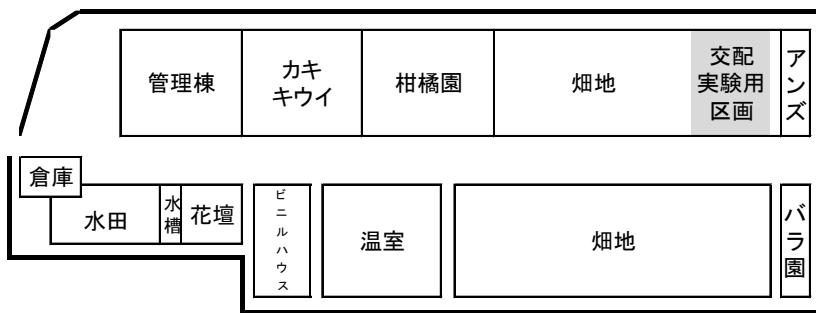


図 1 施設・作付概要

### ○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表 1 および表 2 に示した通りである。

表1 作付面積 (m<sup>2</sup>)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	全体

表2 作付植物

種類	植物
	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
野菜	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
マメ・穀類	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
果樹	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ ユズ、キンカン、カキ（富有、サエフジ）、ブドウ スモモ、キウイ、ウメ
	ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
花卉	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ マツバボタン、スペリヒュ、ヒマワリ、アサガオ ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ その他

表3 授業と研修の利用数

授業名	年				
	2019	2020	2021	2022	2023
児童環境指導法	0	0	0	0	0
保育内容研究（環境）	23	23	16	11	16
植物環境学実験実習	0	0	0	0	0
園芸教室	54	0	30	54	60
鶴甲幼稚園	66	0	0	0	60
計	143	23	46	65	136

春夏期 北

	ソラマメ	園芸教室	園芸教室	園芸教室	保育内容環境	保育内容環境	ジャガイモ→ネギ	ジャガイモ→ネギ					
--	------	------	------	------	--------	--------	----------	----------	--	--	--	--	--

自然環境論コース  
実験用ビニール

イチゴ	イチゴ	イチゴ	トマト	ピーマン	ナス	キュウリ、ゴーヤ	トウモロコシ→ショウガ	サツマイモ	サツマイモ	サツマイモ	園芸教室	園芸教室	園芸教室
-----	-----	-----	-----	------	----	----------	-------------	-------	-------	-------	------	------	------

秋冬期 北

		園芸教室	園芸教室	園芸教室				サジトイガモイモ					
--	--	------	------	------	--	--	--	----------	--	--	--	--	--

自然環境論コース  
実験用ビニール

タマネギ	タマネギ	タマネギ	ソラマメ	イチゴ	イチゴ								
------	------	------	------	-----	-----	--	--	--	--	--	--	--	--

図2 2023年度畑地作付配置図

○教育活動

「保育内容研究(環境)」(履修生 16名)において、植物栽培に関するここと、すなわち、畝立て、土

作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などを行っている。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定した授業をおこなった。タケ、ササの来歴、利用法について講義、能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。鶴甲幼稚園児（60名）が学生とともに田植え、稻刈りを行った。

## ○研究活動

人間発達環境学研究科の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本実習園を活用している。

### 1) 非在来樹種の埋土種子発芽実験

人間発達環境学研究科博士後期課程学生の研究として実習観察園ガラス室にて埋土種子発芽の追跡調査を行った。ヒサカキ・ヤブツバキ・ヒイラギなどの常緑広葉樹は、発芽直後では葉が小さく見分けは難しいため、確実な樹種同定を目的として継続調査を実施した。その結果、調査開始から3年目（2023年）の発芽個体の1種はヒサカキであることが確認された。これ以上の発芽個体の樹種確認は難しいと判断し、12月に本調査を終了し、成果として以下を報告した。

・小林 徹哉・前中久行・大野朋子：森林植物園における非在来樹種の実生発生状況および管理作業との関係、緑化工学会誌、49巻（2023）1号、p. 75-80

利用者：大野朋子、大学院生1名

### 2) ツユクサの栽培実験

人間発達研究科のD3の「博士論文研究」の研究（指導教員：丑丸敦史）として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツユクサを対象にした研究を行なった。里山および都市部の水田に生育するツユクサ集団から種子を採取し、発芽させた実生を温室内のポットに植え付け（4-5月）、結実期（10月中旬）まで温室内での生長および開花の調査を行った。この研究では研究補助として、国際人間科学部の学生数名の協力があった。昨年度から行なっている本研究の成果の一部は、Ecology and Evolution誌において「Habitat diversification associated with urban development has a little effect on genetic structure in the annual native plant *Commelina communis* in an East Asian megacity」というタイトルで発表した。

利用者：丑丸敦史、大学院生1名、協力学部学生1名

### 3) スミレとその変種の栽培実験

人間発達研究科のM1の「卒業論文研究」の研究（指導教員：丑丸敦史）として、国内で採取したスミレと海岸型変種アナマスミレとアツバスミレの植物体の栽培を温室脇で行い、葉形質を観察した。またこれらの栽培植物から遺伝解析をおこなうための葉をサンプルし、現在、MIG-seq解析のためのSNP検出を行なっている。

利用者：丑丸敦史、学部生1名、協力大学院生1名

### 4) アジサイ属の栽培実験

神戸市立森林植物園との共同研究としてアジサイ 29 種について、挿し木実験を行った。修士研究の「アジサイ属における比較リピートームと細胞遺伝学に関する研究」ため DNA 採集ならびにゲノムサイズ測定用の植物体をガラス温室内で育成した。

利用者：近江戸伸子，大学院生 1 名

### 5) ツユクサ属植物の栽培実験

関西ならびに関東の里山および都市部の水田でサンプリングした温室内で栽培したツユクサならびにケツユクサを対象にした修士研究の「ツユクサの属における都市化と多倍体化」研究を行なった。ケツユクサ植物体について気孔サイズ測定実験を行った。

利用者：近江戸伸子，大学院生 1 名

## ○他機関の利用

以下の 2 つについて取り組んだ。

1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 連続講座 2023 「園芸教室」の開催

2) 健康あーち HC センター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その上で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。当実習観察園で 2014 年から開催してきた園芸教室はその一環の活動である。

小学生から 80 歳代までの多世代が参加し、参加者（春 30 名、秋 30 名）がグループに分かれ、以下の実施日にそれぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ（図 3、4）。

春の園芸教室 5 月 13 日、6 月 10 日、7 月 8 日

秋の園芸教室 9 月 9 日、10 月 14 日、11 月 11 日、12 月 9 日



図3 2023年6月10日開催  
野菜栽培管理



図4 2023年12月9日開催  
玄関前のハボタンとパンジー花壇への定植

## 2) 健康あーち HCセンター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

HCセンター、ヘルスプロモーション・健康行動支援部門の活動の一環として、健康あーちに参加している地域の子ども（6名）とその保護者（4名）を中心に、野菜の育て方について学び、収穫体験などを行った。子どもや保護者との交流を行いながら、食体験を深めた。本学教員の加藤佳子と勅使河原君江（2名）が活動の引率を行った。

10月14日 サツマイモの収穫

11月11日 秋野菜とキウイの収穫

来年度は地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業ならびに研究で、利活用を図る予定である。

（実習観察園運営委員長 近江戸伸子）